
My Sisters

✱きる✱

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Sisters

【Nコード】

N6229P

【作者名】

まきるま

【あらすじ】

「お届け物です。可愛がつてあげてくださいね。」高校生活が始まって約1ヶ月、平凡な毎日を過ごしていた高校生ヒロキに突然大きなお届け物……。送り主は不明、送って来た先も全て不明、そんでもって中身は……『姉妹』。ずいぶん立派な悪戯じゃないの？俺は好奇心でお届け物の封を開けた。

そこの待ちうけていたのは……3人の女の子達だった。しかし、彼女達はヒトでは無い、別の生き物だという……。

平凡だった俺の日常は、突如非日常的ストーリーに変わるのだった。

プロローグ（前書き）

この物語は、自分が別サイトで書いていたものを大幅にアレンジというか、改良というか……。

特に登場人物とか変わりないですが、もし前の作品をご覧になっている方がもしあれば、生暖かい目でご覧になってくれたら嬉しいですよ。

つまり何が言いたいかというと、旧 Mysister 作者 **まきー** ル **まきる** まは同一人物です。
そいでは新生マイシスすと

ブログ

四季の島。

本島から少し離れた所にある、割と大きな島だ。

一応日本で、島だからといって決してド田舎って訳ではない。

大きなマンションもあれば、駅だって、大型デパートだってある。

……しかし、これといった歴史もなくただただ平凡な島だ。

その平凡な島に15年住んでる俺は、川越 ヒロキ 15歳。

10歳の頃親が離婚し、2人目の母と2つ下の妹が出来た。

人生で大きな事といえばこれぐらいで、それからは平凡な毎日を送り、大きなこともする事なく平凡に歳を取り、平凡な成績で『四季の学園』附属学校を卒業し、四季の学園高等部に入学する。

高校になってもほとんど中学の生活と変わることなく、学ランを着て、附属校舎の正面僅か10メートル先の校舎に行って勉強して飯を食って帰ってくる平凡な毎日。

変わったことといえば、両親が海外出張して義妹と二人暮らしが始まったくらいか……。

しかし期待していた展開なんて起こりはしない！漫画や小説ならこんな美味しい展開、妹とラブラブになったり危ない関係になったりとかするんだろうが、現実はこちら「兄貴、お茶」「兄貴、ごはーん」「兄貴、洗濯しといてね」なんて、毎日のように2つ下の義妹に扱き使われる日々だ。

もっとうこう、兄として慕ってくれたり、少しは料理してくれるものではないか？妹というものは……。

まあでもそんなことは別に普通っちゃあ普通なことなんだろう。

本当に、俺はただの平凡な高校生だった。

そう……ゴールデンウィークが終わるその日までは……。

姉妹がやってきた!?

5月上旬。

「行つてきまーす」と俺

「いてきまー」と妹

約1週間ものゴールデンウィークが明け、午前七時三十分……妹
の^{かなえ}叶と家を出る。

この季節の朝はまだ肌寒く、しかしぽかぽかと暖かい中途半端な
この時期……若干寝不足な俺は大きく欠伸を浮かべて、背を伸ばし
た。

「あーあ、また学校か……めんどくさ」

のろのろと気だるそうに歩きながら叶が呟く。

「めんどくさいのは俺だって同じだ。しかし中坊のお前は最低高校
に行くためにはつべこべ言わず登校せにやいかんだ。中学生はま
だ楽なほうだと思うぞ。何を思ったか俺は、高等部情報科に進んで
しまい、ポケットコンピュータだかなんだか配布され、あまり詳し
くないパソコンの勉強をするためにわざわざ歩いて30分の学校へ
向かってるんだぞ。何も考えずにこの化を選んで俺は今凄く後悔し
ている……」

言いたい事を全部行つて、学ランを肩に引つ掛ける。

「あーもうそれ4月から何万回も聞いたよ」

目を半開きにして、更に気だるそうに背中を丸めて言った。

「そんなに言つてない」と呟き、ちらほら見かける学生達を追い抜
いてただただ学園へ足を運ぶ。

それにしても欠伸が止まらない。やはり3日以上不規則な生活を
しているとあつという間にリズムが狂うものだ。朝起きる前の十分

がどれほど辛かったか。少しずつ戻していかないと、遅刻が増えて留年の原因になりかねん。義務教育に比べたら、やはり高校はめんどくさいモンだな。これが3年間あると思うと目眩がしてくる……。まあ大袈裟に言ってるようだが、ただ単に生活リズムを正しくすれば済む話なんだけどな。

「そついえば兄貴、学食代頂戴ね？ ゴールデンウィーク予想以上に消費が出来たから」

妹が可愛い顔をして兄にカツアゲしてきやがった。

「はあ？ あほか。なんで俺が自分の小遣いを妹の学食代に回さねばいかんのだ」

「お父さん達が『困ったら助け合え』って言ってたでしょー！」

なんて奴だ……。

俺は溜め息を吐きながらカバンから財布を取り出した。

「細かいのがないなあ。久々に学食一緒に食うか？」

「え……」

叶は凄く嫌そうな顔をして少し距離を取った。

「もう知らん。飢えろ。この一日飢えている」

距離を取った妹を睨み付け、財布を仕舞って早歩きでつかつかと歩いた。

「ちよつとー！ 冗談だって。一緒に一緒に食べようよ」

「飢えている」

全く、性格さえよければ本当に可愛い妹なんだがな……。

出るとこ出て、引っ込んでるところは引っ込んでスタイルはいい。頭も割りといい方だし、帰宅部だが運動だって2つ上の俺以上に出来る。いや、俺が運動神経悪いんじゃないぞ？ 叶がぶっ飛んで

いるんだ。

まあ学校では大分ネコ被ってるけどな。たまに見かけるのだが、いつもニコニコ微笑んで、家ではぐーたらなのに風紀委員なんて輝かしい肩書きを持ってやがる。

「もー！ アホ兄貴！ 飯代くらいケチんなー！」

「うるせえ！ お前はその飯代がねえんだろーが！」

朝っぱらから学校に続く並木道で、人目を気にせず兄妹睨み合う。小生意気な中二め……！ 本当に飢えたいか！

「はあ……カツ井より高いのは奢らんからな」

しかし、兄としてはほっとけないって言うか、放っておいたら誰かに奢って貰いそうで同じ川越家としてどうだろうと。

「あははっ。ありがと兄貴っ」

叶は俺の前に小走りで立ち塞がって、セミロングのストレートを靡かせてニカッと笑った。

その表情に少し照れながら、「おう」と一言だけ呟いて再び学校へ向かって歩き始めた。

姉妹がやってきた！？（２）

三十分のウォーキングを終了し、我が母校『四季の学園』に到着。しかしここからも大変で、とにかく学園が馬鹿みたいに広い！正門から入って約１００メートル先の高等部校舎に入ってその後、５階の教室へ向かわなければいけない。

どこの馬鹿がこんな広い学校を作ったんだとつくづく思うね。確かに部活も生徒の数も多いが、ここまで広くする必要はないと思うのだが……。

「はぁ……」

大きく溜め息を吐き、正門を潜ってだらだらと１人で前に進む。風紀委員の妹は正門前に止まり、俺みたいにだらしない生徒を片っ端から注意する仕事に入った。学校の原則通り、ワイシャツをズボンに入れてなかったり、髪を染めていたりしている生徒を注意。ピアスやアクセサリー等をつけてる生徒の不要物を没収。

全く嫌な仕事してる。といっても俺がほとんど該当しているからなのだが。

「兄貴ーっ！シャツしっかり入れろー！」と後ろから妹。うるさい黙れ。これが俺のトレードマークだ。

心の中でそう呟き、妹の注意を見事なスルースキルで回避してせつせと高等部校舎へ足を運んだ。

正門と校舎の調度真ん中辺り、後ろから素早く地を蹴る音と砂が擦れる音が耳に入る。

「これは……」

本能が危険と察知し、体半分が後ろを向いた。

「おにいー！！」

「ふんごおっ!？」

振り向いた瞬間、ちっこいツインテールの物体が飛び跳ねて俺の顎に直撃した……。

頭が上に上がり、へたり転んだ。何やら脳が揺れているのか……立ち上がれない。こんな事をする奴なんて1人しかいない。俺は顎を押さえて突撃してきた物体を見上げた。

「あははっ。だいじょぶ？」

見上げた物体は、身長140センチ程で高等部のセーラー服を身にまとい、小学生のようなあどけない笑顔をしている少女。

「アホかお前は!顎に強打が当たると脳が揺れて立てなくなるんだぞ!」

「あははは……。ごめんごめん」

少女は苦笑を浮かべながら俺を無理やり引つ張り上げて立たせた。

この突撃してきた少女は俺の幼馴染、はなみさみさと英湊、15歳。親同士の

関係から、5歳からの付き合いだ。正直まだ小学生と同じくらいの大きさとあどけなさを持っている。本人はそれがコンプレックスらしいが、俺は全然……むしろこのままでいて欲しいくらい可愛い幼馴染だ。

「まったく毎朝毎朝突撃してきやがって。そのうち死ぬ」

「おにいが後ろ向かなかったらそのままおんぶ体勢になれてたのに」

「なるほど……って!なんでおんぶせにやらんのだ」

叶と同様、よくわからん性格の幼馴染だ。

俺と湊はそのまま高等部校舎へ向かい歩き始めた。

「おにいにはゴールデンウィークどこ行った？」

「世界の平和を守るために剣と盾を持って魔王と大魔王を倒しに行った」

「それゲームの話でしょ？」

「まあ特にどこにもいかなかった。湊は？」

「バイトとかバイトとかバイト……」

「なんて充実感のない」

「ずっとゲームばっかのおにいよりマシだよ！私だっておにいと遊びたかったのにシフトが何か変わっててさ」

「ははは……」

因みに、何故同い年の湊が俺を「おにい」と呼ぶか。それは、5年前の親の再婚で叶が来て、叶が「おにいちゃん」なんて呼ぶもんだから湊も何故か「おにい」と呼び始め、同い年にも拘らず俺が年上みたいな感じになっている。昔は「ヒロちゃん」だったのに、今じゃたまに変な目で見られる。

しかし、高校生になってもまだ俺と遊びたいか、幼馴染よ。

俺は若干意識して恋人でもないのに2人きりで遊ぶのはよくないとか思いがちなんだが……。

「はあ、今日も頑張ろうか」

歩きながら背中をグツと伸ばし、大きく息を吐いた。

「とかいって、ほとんど寝てるんでしょ？」

「……まあね」

午前八時過ぎ、ようやく学校へ着いた。

姉妹がやってきた！？（3）

情報技術科一年B組

教室に入り一番左後ろの窓側の席へ座る。

座りながら窓を開け、朝っぱらから短パンなんか履いて元気に校庭を走り回る女子陸上部員を見る。

別にいやらしい気持ちなんてこれっぽちもないぞ。関心の意味をこめて見てる訳であって、本当にいやらしい気持ちなんてだな。

って俺は心の中で何を否定をしているんだ。

「おにい〜？」

「な、なんだよ」

真横に座る湊がジトつとした眼差しを向けてくる……。

「なーんか陸上部の子ずつと見てるけど〜？」

くそう、何でこいつは色々突っかかってくる。大体男ならコレくらい見るっつの！家で妹に開放されたかと思えば、次はベタベタ引っ付いてくる幼馴染……。全く、平凡だが休む時間なんてものはないのかね？

苦笑いでその場をごまかし、頬杖をついて極力窓に目を向けないようにした。

「ん？ あれ？」

そしてふと湊の席の横を見ると、ゴールデンウィークまでなかった5つの机とイスがあった。何故教室に入っただけで気が付かなかったんだ？

「なあ、湊の横に席なんてあったか？」

「ふえっ？ なかったはずだけど」

俺が指差すと、湊は自分の後ろを見て固まった。お前も気付いていなかったのね。

5つも席があるって事は、このクラスに5人転校生が来るってこ

とか？

転校生なんて珍しい。この島に引っ越してくる奴なんて本当に少ないのに5人もか。女の子希望！スタイルよくて可愛い系の……。

……何故か叶が出てきた。

そこまで女に飢えているのか俺は。確かに叶は可愛いが……性格がガツ！

俺は首を振って頭を軽く叩いた。

「ま、もし転校生が来ても賑やかになっただけじゃないの」「んにゅう……私とおにいの空間が」

意味のわからない擬音を言っただけ、ものすごく嫌そうな顔をして机にぐったりと倒れた。しかしその姿が小学生の中学年くらいにしか見えない。やはり湊は完全に幼児体形なんだろうか。

てか、俺と湊の空間ってなんだよ。なんか変な意味で取ると俺と湊が付き合ってるみたいな取り方しか出来ん。

キンコン

午前八時二十五分。ホームルーム開始五分前の予鈴のチャイムが響いた。

「ほら、転校生来るだけで落ち込むなよ。別に対して何にも変わらんさ。ただクラスの人数が増えて横が少しくなるだけだよ」

イスに座ったまま湊の横まで移動して、ポンポンと背中を叩いた。「そうだよ……あはは。あ、おにい、今日帰りに家寄っていい？」

「ん？ まあいいけど、茶くらいしか出さんぞ？」

「全然OKっ！ 久々におにいの家行きたかったからさ」

さつきとは打って変わって、無邪気な笑顔を向けて親指を立てた。それにしても、湊は俺が男ということに意識していないのだろうか？いつ俺が狼化してくるか分からない盛の時期だっていうのに……。

まあこんな口リ娘にはあんまり興味は無いがなっ！

「何かおにまた変なコト考えてない？」

また鋭い勘が働いたのか、あるいは俺の心が読めるのか……。湊はまたジトつとした眼差しを向けてきた。

「へ、変なコトって何だよ」

「えっちいコト？」

本当に鋭いぞ幼馴染……。本当に心を読んでるんじゃないか？馬鹿なことを考えながら、俺はベッドの下に隠し持っているところ本をを浮かべながら湊の目を見つめた。

沈黙が2人の間に過ぎる……。

「いやん……おにいったら……」

顔を真っ赤にして、俺から目を逸らした。こいつまさか本当に……。

「そんなにキスがしたいなら言ってくれば、」

「フン、5年早いわ」

やはりそんな馬鹿なことが無かった。俺は鼻で高らかに笑い、唇を尖らせて向けてくる湊にデコピンをかました。

「んにゅう……痛い……」

やはり、平凡な俺の周りには平凡な奴しかいないんだな……。

「おーっす。ホームルーム始めんぞ」

チャイムより少し早めに担任が入ってきた。さて、今日も長い一日が始まる……。

姉妹がやってきた！？（４）

結局、転校生は来なかった。ただ単に席が置かれているだけだったんだろうか？

そして午前十一時半の四時限目。

空腹も若干ピークな時間だ。しかし空腹も睡魔には勝てず、担任の授業の声もただの睡眠効果のある音波を放っているにしか聞こえない。

2進数がどうか10進数がどうか……。

その授業と、暖かい日差しと涼しい風のコンボが更に眠気を誘う。頑張れ俺。これさえ乗り切れば昼飯の暖かいこの学園の名物、ハンバーグ丼が待っている！

「じゃあこの2進数の和を……今4秒だから川越、解いてみる」
俺が解くのか……。2進数が何だめんどくせえ。ここは寝た振りでも。

「おにい！ 当てられてるよ！」

「うるせえ！ 答えはハンバーグ丼だろうがッ！」

机を叩き、俺は叫んだ。

少し話し声が聞こえてた教室は一瞬で静まり、数秒後、笑いの海に飲まれた。

その瞬間、俺の目が覚める……。

「ハッ！ ハンバーグ！？」

俺は寝ぼけながら言ったことを思い出して大人しく席に着いた。そして自分でも分かるくらい赤面している。

馬鹿だ。俺は本当に馬鹿だ……。

「えっと……答えは1011です」

俺をフォローしてくれるかのように、湊が問題の答えを言った。

先生は「正解」とだけ言って、笑いを抑えながら大きく頷いて黒

板に答えを書いた。

周りの奴らが爆笑しながら俺を見る。前の奴も斜め前の奴も全員だ。なんて恥ずかしい事をしてしまった。街中で叫ぶくらい恥ずかしい……。

「はあ。もう、おにいしっかりしてよね」

まるで自分のことかのように湊も真っ赤に赤面した。そして呆れている。

「すまん。完全に寝ぼけていた……」

机に額と掌をつけて湊に謝った。

やはり、寝不足がここになって再び出てきやがった。

よし、もう寝ないぞ。あと一時間くらい起きていられるだろう。授業に集中すればいい話じゃないか。ペンを握れ！ノートを取れ！消しゴムを持て！耳をかつぽじって先生の話を聞くんだ！

それを繰り返すことによって一分が十秒くらいで進む気がするはずだ。

「それで、さっきの1001を10進数に直す計算式は……」

。

「え？ ちょっとおにい……」

「大丈夫、全然眠たいから……全然大丈夫」

気がつくと、湊の溜め息を最後に、俺はまた浅い眠りについていった。

十二時二十分のチャイムで調度目が覚めた。

「ふわあ！ 気持ちのいい睡眠タイムだった」

大きな欠伸を浮かべて、最後の授業の挨拶だけ参加した。

今から約一時間の昼休みに入り、多くの生徒は学食へ向かうためカバンを持ってぞろぞろと教室を出て行く。

そうだ、俺も叶と待ち合わせしてるんだっただな。さっさと行かないとうるさいか。

「本当におにいは……。ノートしっかり取ったから後でちゃんと写しててね？」

俺が席を立った後、湊は手のかかる子供を見るお母さんの様な笑みで、ノートを俺の机に入れた。

「いつもありがとうな」

「しっかり勉強しなさい。テストで赤点取って、夏休み補習になっても知らないよ？ またおにいと遊ぶ時間がなくなっちゃうよ」

「テスト前は一夜漬けするから大丈夫だよ。いざとなればカンニングペーパーがだな」

「そんなの作る暇あれば勉強しなさい！」

はいはい……。

ちびっ子ながら少し怖い表情を浮かべる湊に対し、俺は首だけで返事した。これ以上余計な事言ったら今日家に来たときに勉強させられそうだからもう何も言わん。

「おにいは今日も学食？」

鞆から小さな弁当箱を取り出し、机にちょこんと座って尋ねてきた。

「ああ。叶と一緒に」

机の横に掛けていた鞆を持って答える。

「じゃあ私もお弁当だけどついて行こうかなっ」

弁当を鞆に仕舞い、ぴょんと席から立ち上がった。

「ん。んじゃさっさと行こうか」

約30センチも差がある子と横並びに教室を出た。

もうほとんど廊下には生徒がいない。つまりほとんどの生徒がもう学食へ向かったということか……。券売機もいっぱいだろうな。ハンバーグ丼……せめてハンバーグカレーでも売り切れてなければ昼は救われる！

しかし、急がない。

「そういえば、あんまり気にしなかったんだけど湊って弁当自分で作ってるのか？」

「ふえっ？そうだけど、あんまり時間無いから簡単なの詰めてるだけだよ」

それでも、本当に自分で弁当作るなんて偉いと思う。叶なんか料理の「り」の字も知らないからな。見習って欲しいもんだ。願わくば毎日弁当作って欲しいね。学食へ行く手間が省けるし。

「おにいのも明日から作ってこようか？」

5階の階段を下りながら、湊はニコツと微笑んで訊いてきた。

「お！マジッスか？」

「大マジっすよ。おにいが食べてくれるならしつかり作ってくるしね」

助かるが、しかし湊に迷惑掛るんだろうな。たまにハンバーグ丼も食べたいし……。

「じゃあ、とりあえず明日頼むよ。湊の料理美味しいし、楽しみにしてるよ」

犬を撫でるように、わしゃわしゃと湊の頭を撫でた。

「あはは、なんか照れるね……」

何で弁当作るだけなのに赤面してるんだこの幼馴染は。

「まあちよつち急ごうか。叶に怒られそうだし」

「あはは……。そだね」

湊は期待はずれしたような苦笑を浮かべて、俺のペースで小走り

でついで来た。

姉妹がやってきた！？（5）

「おっそい兄貴！待ちくたびれたわよ！」

学食に着くと、案の定券売機には行列、叶の激怒。

「これでも少しは急いだほうなんだ。勘弁してくれ」

「すぐ来ると思って券売機に並んでたのに、兄貴が来ないから先頭になってすっごく気まずかったのよ！」

そんな事言われても、高等部校舎、それに5階から学食が一番遠いんだよ。

文句は心の中で留めて、俺は叶の食べたいものを訊いて券売機に並び、2人に席を取ってもらう様に頼んだ。

俺のハンバーグ丼と叶のカツ丼。どちらもこの学園の人気メニューだ。多分売り切れてるだろう……。その時は適当に買うけどな。

しかしまあ、この行列を一気に進めたらなあ。なんか魅了して、目の前の奴全員に譲って貰えるような力が欲しいね。

生憎、平凡な俺にはそんな魅了できるものなんてひとつも無いけどな。てか男だしな。

まあそんな漫画やアニメみたいな事なんて起こる訳ないか……。何を考えてるんだ俺は。

さて、俺の番が来たようだが……。

ハンバーグ丼は売り切れ。カツ丼は食券を一枚買った途端に売り切れ。他を見ると、素うどんも、おにぎりまでも何にも売り切れて売ってない……。

くそ何故だ！何で今日に限って全て売り切れなんだ！一番不人気のグリーンカレーですら残っていないなんて嫌がらせにしか感じられん。この時間だと購買のパンも何も残ってないだろうし……。な

んで日だ。

「チッ！」

大きく舌打ちをして何の罪も無い券売機を睨み付け、カツ丼の食券を握り締めて調理場まで五歩で移動し、食券受付けのおばちゃんに渡した。

学食でこんなイライラするとは思わなかった。まさか食券戦争が始まっていたとはな！完全に終戦してしまっているが。本当にカツ丼買えたのが奇跡だよ。

「川越君なんでそんなにイライラしてるんだい？」と、気さくなおばちゃんが言った。

「いや、これ妹のカツ丼なんだけどさ、俺の買おうとしたら今日に限って何もかも売り切れてるし。ゲロマズのグリーンカレーですらトレーを回収する棚にもたれて、学食で働くおばちゃんに愚痴る。」

「そんな日もあるよ。ほら、カツ丼」

まるで準備していたかのように、一瞬でカツ丼がプラスチックのトレーに乗って出てきた。

「ありがと。妹がこれを美味しく頂きます」

「ははは、明日はもっと早くきなよ」

明日は湊の弁当があるから来れないけどね。今度こそはハンバーグ丼を頂かせてもらうさ。

両手でカツ丼の乗ったトレーを持ち、少し離れたところの丸テーブルを占領している叶と湊の所へ向かった。

「ほら、カツ丼お待たせ」

叶と湊の間にどつかと座り、叶にカツ丼を渡した。

「さんきゅーっ！」

「あれ？ おにいは？」

湊はそう訊いてきて、叶は即行割り箸を綺麗に割りふんわり卵が

絡んだクリーミーなトンカツを口に頬張った。

「お前のカツ丼を買ったとたん全て売り切れた」

「あんな残念だったね。兄貴の分も食材に感謝して美味しく頂きます！」

俺が買ってやったんだから少しくらい分けてもバチは当たらんだろう……。まあ分けてくれるとは思わんがな。本来ならそのカツ丼は俺が食っていたかもしれないのに、本当に今日はツイてない。

「あはは。おにい、私のお弁当少ないけど半分コしようよ？」

湊が小さい弁当を開けて、中を見せながら言った。

「おお！ すまん。本当に感謝する……」

テーブルに掌をつけて上半身だけで土下座した。

ん？でも箸一膳しかないよな。どうするんだ？

「はい、卵焼きだよ。あーん！」

なん……だと？なんでこうなる。

「これが嫌なら分けてあげないよ？」

湊はニンマリ嫌な笑みを浮かべ、卵焼きを突きつけてくる。

一瞬でも信用した俺が馬鹿だった。小悪魔めが……。しかし背に

腹は変えられぬ。プライドより食欲を取る！

俺は少し震えながら卵焼きにかぶりついた。

周りの目が痛い。視線が痛いくらい刺さってる。ものすごい刺さってる。

でも、たかが卵焼きだが物凄く美味い。空腹だからとかそんなこと関係なく純粹に美味しい。親が出張に行ってから、こんな美味しいもの食べたのは初めてかもしれない。

「どうおにい？ 美味しい？」

「美味い。本当に美味いぞこれ！ 冷めてるのにジューシーでふんわりしてる」

「あ、あはは。べた褒めだなあ。何か照れちゃうよ」

さっきの小悪魔面は消え、照れ笑いした顔をして自分も卵焼きを食べた。

「ほらおにい、まだまだあるから……」
「ん」

さっきと同じように、湊が少しかじったようなウィンナーをつまんで俺の口元まで運んで来た。

「ちよつ、 あああ兄貴！ 私のカツ丼もあげるよ？」

食べようとした瞬間、叶がカツ丼の食べかけのカツを箸で摘んで突きつけてきた。何だこの状況凄く気まずいんだが。

「別にお前1人で食っていいよ」

「いや！ 食べて！ いいから食べなさいよ！」

いったい何をそんなに焦っているんだ妹は……。

「命令かよ全く。なんだよ急に」

俺は叶のほうに体を向けた。

そして、湊のようにカツを口元まで持ってきた。しかし……。

「ちよつと待った！ おにいには私のお弁当食べるの！」

また食べる瞬間に止められる。

「ちよ、なんだよお前ら。ゆっくり食わせて欲しいんだから、」

「湊さん幼馴染だからって兄貴とベタベタしすぎ！」

「私はこうしておいと十五年もやってきたの！」

な、何か喧嘩が始まってる？ しかもどっちを食べさせるかとかそういう問題で。

「兄貴！」

「おにい！」

「どっちのを食べるの!？」

2人は凄い形相で睨み合いながら、カツとウィンナーを向けてくる。てかここに来て俺に振るのかよ！ いや、そんな事言われたって俺はどっちでも全然いいんだけど、なんか片方選んだら凄く気まずくなりそうな空気なんですッ！

よって……逃亡。

逃げた俺に物凄い怒ってる2人を無視し、俺は猛ダッシュで学食から飛び出した。

俺の昼休みは、結局卵焼き1つ食べただけで幕を閉じた。

姉妹がやってきた！？（6）

「はぁ……畜生、腹減った……畜生」

まだ三十分以上ある昼休みを立ち入り禁止の屋上で過ごす。大の字に寝転びながら大きく溜め息を吐いた。そして出る言葉は「畜生」と「腹減った」のみ。

物凄く空腹だったのに、卵焼き1つしか食べられなかったんだ。あのアホな義妹と幼馴染が意味の分からない事で喧嘩した所為だ。

本当にアホばかりだ。俺がウィンナー食おうがカツを食べようがどうでもいいだろう。そしてなぜ両方食べかけのものを渡した。

「はぁ……」

また溜め息を吐き、目を細めて空を見上げる。

小さい頃、食べ物の形をした雲が本物の食べ物になる絵本を読んだことがある。そんな非現実的な馬鹿なことがあるわけない、そもそも雲が食べ物に見えるわけがない。なんて夢の無いことを言っていた頃があった。しかし今、空腹が絶頂に達した所為か全ての雲が食べ物に見えてきた。

末期なのかね。あちこちに広がる積雲が菓子パンやシュークリームに見える。飛行機雲はソーセージか……すごく、大きいです。

あの雲を全部食べ物にする力があれば、今俺は凄く幸せになれるぞ。

手を伸ばし、両手で1000メートル先にある雲を握った。

勿論掴めるわけ無く、馬鹿なことをしている自分に気付き、失笑し、恥ずかしくなる。

空腹とはここまで人をおかしくするものなんだろうか。

「はぁ……腹減った」

また同じ事を呟いて、上半身だけを起こした。

こんな所においても仕方ないかな。大人しく教室に戻って昼寝でもしよう。空腹時は余計なエネルギーを使わない、これが一番だ。

教室に戻ると、すでに湊が自分の席に戻っていた。

何か今会ったのは凄く気まずいな……。せっかくご好意で頂いてた弁当を途中で放棄したしな。……もっとも、俺はあんまり悪くないと思うんだが。

俺は、何も言わず後ろから教室に入り、六歩程度で自分の席に付いた。

「おにい……」俺に気付いた湊が少し悲しそうな声で呟いた。

「ん。どした？」

いつもと変わらぬ反応で湊に体を向けた。

「さつきはごめんね？　なんだか変に叶ちゃんと張り合って、結局おにいのお昼抜きにして……」

「全くだ。おかげで雲が幻覚で食べ物に見えるまでいったわ」

「んにゅう……」

冗談のつもりだったんだが、湊は悲しそうな顔を更に気の毒なくらい悲しい顔に変えた。仕方ないな……。全くこの幼馴染は。

「だから明日の弁当凄く楽しみにしてるから、いいの作っていてくれよ？　卵焼きとウィンナー入れて、なるべく野菜抜きでな」

湊の机に座り、落ち込んでいるツインテールの幼馴染をまた犬みたいに撫でた。

「おにい……」

湊は少し驚いた顔をして、すぐにいつものあどけなくて明るい笑顔に切り替えた。

「お前は笑ってるほうが可愛いんだし、そんな暗い顔すんな。別に一食抜いたぐらいで死ぬわけじゃない」

「あはは。ありがと、おにい。野菜抜きの注文は聞けないけどとび

つきり力入れてお弁当作ってくるよ!」

くそう、そこは通してくれないのか。

「しかし、何であんな事で張り合ってたんだ? 別にどっち先に食べようが関係ないだろうに」

自分の席に戻りながらそう言っつて、一番気になっていたことを訊いた。

「えゝ? わからないの?」

ジトつとした目を向けてきて、訊き返してきた。

「全く分からん」。俺がそう一言言つと、湊は溜め息を吐いて、悪戯っ子みたいな笑みを浮かべながらこう言つた。

「鈍感なおにいには、一生分かりませんよーだ」

「フン、そうですかい」

求めていない答えが返ってきたことに鼻で笑つて、窓側に体を向けて校庭を見下ろした。

腹減つたなあ……。

姉妹がやってきた！？（7）

午後三時二十分。学校終了のチャイムが響いた。

担任がするホームルームも終わり、今日の授業は終了。空腹との長い激闘の末、やっと長い一日が終わったわけだ。帰ったら即効インスタントラーメンでも作ろう。

「んじゃ湊、俺んち行くか」

学ランを肩に引っ掛け、席を立った。

「うんっ！ ひっさしぶりだな」

「昼休み叶と喧嘩したけど大丈夫なのか？」

「一応お互い謝ったから大丈夫。……多分」

どれだけ深刻なしょうもない喧嘩してるんだお前らは。

「まあ、叶ももうガキじゃないんだからきつと許してくれてるよ」

「あはは。そうだよな」

湊は苦笑を浮かべて席を立った。

「しかしまだウジウジ言ってたら、兄貴の俺が身をもって肅清してやるさ」

「おにいが言うとなんでもいやらしく聞こえるなあ。妹に変な事したらダメだよ？」

「何で俺が変態キャラで定着してるんだよ。仮にもし俺が変態さんだったとしても、人として妹に手を出すことは、」

台詞の途中に、ポケットに入っていた携帯電話がバイブレーションと共に、メロディが鳴り響いた。

自然と携帯を取り出し、背面ディスプレイを見た。相手は噂をすれば何とやら、叶からの着信だった。

「……はあ。またパシリか？」

俺は溜め息を吐いて電話に出た。

『あ、兄貴ー？』

「どうした。カツ丼奢ったんだから何も買ってこんぞ」

『違う違う。なんか兄貴宛に荷物届いてるんだけど』

「荷物？ 覚え無いな……。誰から？」

『いや、最後まで聞きなさいよ。アホなの？』

何だこいつは。嫌味を言いにもわざわざ電話してきたのか？

『なんかね、相当貴重な物で兄貴に直接渡さないといけないんだって。待つてゐるらしいから急いで帰ってきて』

「お前がサインしてもらうことは出来ないのか？」

『いやだから、兄貴だけだって。馬鹿なの？』

アホから馬鹿に昇進したようだ。しかしこの妹淒くむかつく。いちいち一言多いんだよ！お前より賢いわ！

「わかった。んじゃ切るぞ」

『んー』

糸が切れるような音がして、約一分の通話が終わった。

「叶ちゃん？ なんて？」

「なんか、俺宛に荷物が来てるらしいから急いで帰ってこいだって」
携帯をポケットに入れて、また溜め息を吐いた。

「今日は何か災難続きだ。宅配物もなんか怪しいし、ドッキリみたいなオチとかありそうだぜ……。俺だけが受け取れないってどういうことだ」

「あ、あはは……。んじゃ急いでいこっかつ！」

「うむ。悪いな」

そのまま俺達は教室を出て、込み合う廊下の真ん中を突っ切って歩いた。

姉妹がやってきた！？（８）

歩いて三十分の道を、走っては歩きを繰り返していると十五分程で到着した。

全く本当にいい迷惑だ。俺がいらないなら明日にでもきやがれっただ。

そんな事を思いながら家の前を見ると、引越したトラックみたいなロングアルミバントラックが停まっている。どうやらあれが俺宛の荷物を積んでるみたいだ。

「大きいトラックだね。いつたいなにが届いたのかな？ 缶詰一年分とか？」

「そんな無駄な懸賞に応募した覚えは無い」

俺はトラックの右側に回り、運転席をノックした。

「ん？ ふわゝあ。あ、川越ヒロキ様ですね？」

運転席から腰くらいまである長髪の女の人が出てきた。しかしこの配達人、完全に寝てたな……よだれの跡がついている。

「そうですけど。俺宛に荷物が来てるって聞いたんで……」

「はい。今すぐ出しますので、少しお待ちを！」

配達人はビシッと敬礼して、荷台へ走った。

そして不慣れな手付きで後ろのドアを開け、サイドゲートを動かした。

「なにかな、なにかなゝっ」

「何で湊がワクワクしてんだよ」

「だってこれだけ大きいと何か期待しちゃうよ」

ニコニコ笑いながらそわそわして、ピョンピョン跳ねながらトラックを覗いた。

もし、届いたものがくだらん物ならこいつにあげようかな。何かなにをあげても目を輝かせて喜びそうだ。

「よいしょつと……！ ふんぬつ！！」

配達人の気張る声が聞こえる。そんなに重いものなのか？
気になって、俺も覗き込んでみた。

「んな！？ なんだこれ！」

トラックの中には高さ2メートル、横幅1・5メートルくらいの
化け物のように大きいダンボールだった。

「前退いてくださいー！ お届け物でーす」

奥から押してる配達人の声が聞こえた。

俺は湊の手を引いて大きく後ろに下がった。下がった途端に荷物が
少し鈍い音をして地面に落ちる……。

しかしもうすぐ丁寧に出来ないのか？ なんのためのサイドゲート
だよ。

「横にサインするところあるんで、お願いしますー」

「は、はあ……」

息を切らしてる配達人の指示に従い、胸ポケットからボールペン
を取り出して伝票に荒い文字で名字を書いた。

「それでは予想以上にあなたが遅かったので行きますね！ それで
は、可愛がつてあげてくださいねー」

「悪かったな。遅くて」

配達人は伝票の上の部分剥がし、そそくさとトラックに乗って
狭い住宅街の中を飛ばしていった。

「ご苦労様でーす！」

湊は猛スピードで離れていくトラックに手を振って、何だと聞か
んばかりに俺を見上げた。

「ったく、失礼な上になんて物を家の前に置いてくかな……。こん
なの家に入らんぞ」

自分より大きなダンボールを見上げ、小さく溜め息を吐く。

「ねえおにい！ なんなのなんなの？」

「うるさいなお前は」

小学生低学年みたいなしつこい湊の頭を軽くはたき、伝票をみた。何々……。宛先は俺の家で俺の名前。送り主は不明、送って来た場所も不明？なにこれ怖い。

それで、荷物の中身は……ん？

「どうしたの？」

「いや、ちとな。ほら、お前も見えてくれ」

一瞬目を疑った。いや、きつと見間違えた。腹が減りすぎてどうかしてるんだ。

目を擦って、5センチくらいまで近付いてもう一度見た。

配達物の種類……『姉妹』。

2人揃って沈黙。いったいどんな反応すればいいんだ。

「なあ湊、姉妹ってなにかな？ 食えんのかな？」

「ん、んにゅう……私に聞かないでよ」

これは悪戯って取っていいものなのか？『姉妹』、たった2文字でこんなにも悩まされるなんて思いもしなかった。

「湊、俺の部屋にカッターあるから取って来てくれ。テーブルの上にある」

「いいけど別に……。なんでテーブルの上にく？」

「昨日袋とじ開けてそのまま、ゲフンゲフン……使ったからに決まってるだろ。言わせんな恥ずかしい」

「あははっ。んじやとつてくるね」

湊はニヤニヤ笑いながら、スキップして俺の家に入っていった。

「しかし、ずいぶん立派な悪戯じゃないの？」

こんな手の込んだ悪戯をするなんて世の中も進化したな。

しかし、こんな馬鹿みたいにダンボールよく作れたもんだ。記念に欲しいくらいだね、いらんけど。

ガチャッ。

「ん？」

「兄貴、荷物受け取ったんだって、ってなんじゃこりゃあ!？」
玄関から飛び出してきたのは湊ではなく叶だった。わざわざ見に来るなんて難儀な奴だな。そしてナイスリアクション！

「ビックリした。何このでかいダンボールは……」

横に来た叶の質問に、俺は「さあ？」と体で表現した。

「凄いな。潰したいな。潰したら気持ちいいだろうな」

荷物の中を確認したら思う存分潰しやがれ。もちろん外でな。

「ねえねえ中身は何？」

「これを見るよ」

俺は伝票を指差した。

「『姉妹』……？ なに？ 悪戯？」

「そうだろうな。送り主も全部不明だし」

「ふーん。でももし本当に姉妹なんて入ってたらどうする？」

叶は無邪気な笑顔で訊いてきた。

「実際にそんなこと想像してみる。俺はおぞましいモノしか出てこないね」

「た、確かに……」

ガチャツ。

叶が来てすぐに湊も戻ってきた。

「おにい、持って来たよ」

「さんきゅ」

叶と反対側に周り、何を考えたのか刃をカチカチ出しながらカッターを俺に渡した。

「さて、開けるか」

テープでガチガチに固められた下の角に刃を浅く指した。

「ワクワクするなあ。早く早く！」と、湊。

「ちょっと兄貴やつばやめない……？　本当に中におぞましいモノが入ってたら……」と、両肩を抱く叶。

しかし叶には悪いが俺は開けるぞ。俺は好奇心旺盛なんだ。
「開けるぞ」

そう一言言つて、ゆっくりカッターを上に向けていった。

頑丈なテープに苦戦して、数十分が過ぎた……。

あたりはもう夕暮れ、空は綺麗な茜色に染まっている。そして俺の腹は空腹から腹痛に進化した。本当に今日はなんて日だ。食べ物
の神様に嫌われたのか？

「あー！　腕いてえ！」

叫びながら、カッターで上を目指す。

とりあえず一カ所切れば、後は力ずくでも何でもなる！

「おにいてもう少しいっ！」

「き、緊張でどうかしそう……」

のんきなこと言いやがって、やってる俺にしかわからない苦労だぞ。

「ふんっ！」

もうすぐまで来たところで、腕に力を集中して、切り貫いた。

「おおー！」

湊が歓声を上げ、拍手した。

これだけでも少しは価値はあったもんか。いや、無いな。空腹で
思考がどうかしてる。

「さて、こつからだな……」

カッターをポケットに入れ、携帯の背面ライトを付けた。

ダンボールの隙間に腕を入れ、背面ディスプレイで中を照らして

覗き込んだ。

「暗いな……。こんなでかいダンボールじゃ無理ないか」
足元を照らして、全身をダンボールに入れた。

「おにい、中身は？」

「待つてろ。今確認する、」

携帯で前を照らした瞬間、俺の心臓は一瞬高鳴り、思いがけないモノを見た。

姉妹がやってきた！？（９）

俺は息を飲んだ。

目の前に３人の女の子が寄り添って座り、小さな寝息を立てて眠っていたのだ……。

「ん……眩しい……」

真ん中に座っている女の子が目を覚ました。

「ご、ごめん」

なんで謝ってるんだ俺は。いや、確かに照らしたけども。

「君は？」

「蓮華」

釣り目の女の子は一言だけそう言っ、赤色に輝く瞳で俺を見た。なんて綺麗な瞳なんだ……。彼女の瞳に吸い込まれそうだ。

「それ、眩しいんだけど」

「あ。ご、ごめん」

「謝ってばかりね」

「はは……。そうだな」

俺は慌てて携帯を仕舞った。照らさなくてもうつすら見える。目が慣れてきたのだろう。

つてあれ？俺緊張してる？

「ここはどこなの？」

蓮華という名の少女は、釣り目の無表情なまま、左右にいる２人を起こさないように立ち上がった。

身長は１６０センチくらいかな？歳は多分俺と同じくらいか……。

「ここは四季の島。そして俺の家の前だ」

「四季の島？ そう、じゃあ貴方が川越 ヒロキね」

「えっ？ 名前言ったけ？」

「いいえ。でもあなたのことは知ってる」

蓮華は少し微笑んで、俺に一步で歩み寄った。

「えっ！？ いや、その……え？」

何でこの子は近付いてるんだ？ いや、てゆうか近い！ 距離30センチ未満！ 収まれ鼓動！ なんて初対面のダンボールに入ってた女の子にときめいてるんだ俺は！

「あなたが、生まれ変わり」

「え？」

蓮華はぼつんと呟き、更に近付いてきた。そしてとうとう胸が体に触れた。

焦りと照れ、その他もろもろで体中が熱くなり、汗が噴出す。なんでこうなる

何も分らないまま、蓮華の唇を迫ってきた。

抵抗すればいい、それだけなんだが……こんな美味しい展開、男なら拒否する奴なんていない！

「失礼。ちよつと味見させてもらうわ」

「俺でよければどうぞ、思う存分、」

……世の中、こんな甘い展開なんて許されるわけなんて無かった。蓮華の唇は俺の首の頸動脈に触れていた。そして、何かが深く突き刺さる……。

「いだだだだだ！」

あまりの痛さに彼女を押し退けた。

「ちよ！ なにするのよ！」

口元に血を垂らせながら彼女がキツと睨みつける。

「俺のセリフだ！ いきなり人の首になにしゃがる！」

「ヴァンパイアなんだから血くらい吸うわよ！」

何を言ってるんだこいつは……。ヴァンパイア？ アホなのか、もしかして危ない人か？

命の危険を感じた俺は大急ぎでダンボールから飛び出した。

「うわっ！ おにい？」

ダンボールの近くにいた湊がビクリして俺を見た。

「兄貴……誰かと喋ってたみたいけど」

「お前ら離れる！ 中の奴なんか普通じゃない！」

血が溢れて痛む首を押さえながらダンボールから離れた。

今まで感じたことのない痛みだった。噛まれたとかそんなんじゃない。説明しろといわれたら、太い何かが刺さり、体の中のなにかが吸い上げられるような感じだった。

「ふぬ……！ ちょっと逃げんな！ 止血しないとあんた死ぬわよ！？」

ダンボールの間から蓮華が一生懸命出てきた。

「お前がやってて何を言うか」

しかし本当に目眩がしてきた。血が止まらない。

「兄貴、あの人が中に？」

俺は黙って頷き、片膝をついた。

本当にやばくなってきた。目眩と空腹とその他もろ……。くそう、死ぬ前にハンバーグ丼が食べたかった。なんて人生のエンディングなんだ。

「首を見せなさい」

「やだね」

「本当に死ぬわよ！ さっさとしなさい！」

目の前まで近付いてきた蓮華が、強引に俺の手を首から離し、真っ赤な瞳で俺を睨みつけた。

力まで入らなくなったか……。こんな所で訳もわからず俺は死ぬのか。

「失礼」

そう言って、蓮華はまた俺の首に何かを刺した

「いだだだだ！ ってあれ？」

一瞬痛みを感じたが、すぐに収まった。しかし吸い上げられてる

感じは収まらない。

「んっ……ちゅ」

「もしかして、本当にヴァンパイア？」

「ん。だから言ったじゃないの」

首から離れて、口元を手の甲でぬぐった。

さっきの痛みも消え、目眩も治まっていた。空腹以外はなんともなくなつたようだ。

「ホラ、これが証拠」

蓮華は口を開けて上を向いた。

確かに鋭い牙のような八重歯が2本生えている……。

「後ヴァンパイア一族の証の紅の瞳と、これ！」

バサツと何かが開く音と共に、蓮華の後ろから真っ黒な翼が出てきた。

「どう？」

どや顔をして、俺と妹と幼馴染を見た。

「……とりあえず、家上がろうか」

姉妹がやってきた！？（10）

俺は湊を歸し、ダンボールに入っていた3人の女の子達を家に入れた。

流石にまだ信用していない。だから、少し距離を取ってリビングのソファに座らせた。

「とりあえず、どこから来たかとか、目的とか色々教えてくれ。」
向かいのソファに座るヴァンパイア。腕と足を組んで、ずいぶん立派な態度をした蓮華に尋ねる。

「私はこの世界とはまた違う世界から来てね、とある事情であんたの家に来たの。とりあえず自己紹介ね。私は蓮華。まあこの世界、そしてこの国に合わせた偽名だけだね。『ヴァンパイア』」

偽名で自己紹介、その上ここに来た詳しい理由を教えない……。現状がどんどん悪化していくんだが。

「2人とも順番に自己紹介して」

蓮華がそう言うと、蓮華の右に背の高い女の子……。いや、女性とというのが相応しいか。とにかく、3人の中で一番大きい人が立ち上がって一礼した。

立ち上がってる所を見ると本当にでかいな……。180センチくらいありそうだ。

「私は琴美……。『ライカンスロープ』」

ピクリとも動かない、ぞっとするような無表情で琴美言った。

「兄貴、ライカンスロープってなに？」

「お、俺に聞くなよ」

妖怪や怪物なんて非現実的なもの信じたことも一度も無い。だからそんなライカンなんてならなんてもの知るわけない。

しかし……。

「なんか狼みたいな耳が生えてるし、狼女って奴じゃないか？」

「ご名答。なかなか察しいいわね。彼女は月を見たら豹変するライカンスロープっていう狼女よ」

蓮華は拍手しながら、詳しく琴美を説明した。

こんな事思いたくないが、本物の狼女なんだろう。人間と同じような耳が無く、白銀の尾、黄色い瞳、そして地毛にしか見えない綺麗な長い銀髪……。そしてけしからん豊満な胸！童顔！

「何……？」

「いや、なんでもないッス」

「いかんいかん。初対面の方をいやらしい目で見るなんて。」

「ふんっ！」

「痛っ！」

叶が無言で俺の太ももを抓って、横目で睨んできた。

何で常に俺を見ている。確かに悪いことしたけどお前に何故怒られる。

「次は音羽ね！」

3人で一番小さい子、音羽と名乗った少女がソファに立った。

「名前は音羽！男を魅了する『エンプーサ』なのっ！」

セミロングのリボン。小さな羽根に、絵に描いたような悪魔の尻尾、そしてちっちゃい二本の角。

しかし男を魅了するといったな？こんな小学生みたいなガキに何ができる。まあ確かに可愛いっちゃ可愛いんだが、こいつに魅了されるとしたらとんだロリコンか何かだろう。

「信用してないー？」

「ああ。少なくとも俺は魅了させられないと思うね」

質問に即答し、苦笑を浮かべた。

「ちよっと兄貴！こんなちっちゃい子なんだから少しはノリってものがあるでしょ？」

「そんな事言われてもだなあ」

「音羽はおにいちやんくらい簡単に魅了出来るよ!」
何を馬鹿なことを言ってるんだか。

「ま、こんなもんかしら」

「待て。色々待て! 何でここに来たとか言うべきじゃないかい?」

「何よ? さっき言ったじゃない。とある事情でって」

不思議そうな顔でそう言った。それはそちらの顔だろう?

「んでさ、蓮華さん達はここに来て何をするの?」と妹が控えめに質問した。

「居候……かしらね?」

おい、聞いとらんぞそんな事。

「そういう事は最初に言えよ……」

「ごめん、でも私達の目的を達成させるにはあんたしかいないの。
今は言えないけど、いつか必ず説明するから……」

何かいきなりシリアスになったぞ。そして空気が少し重くなった。

「あ、兄貴どうするの?」

どうする、そう聞かれたら答えに困るな……。『俺にしか出来ない』事。それが何か気になる。しかし海外にいる親に許可なしでそういうのは出来ないし、正直断つたらかわいそうというか……ああ!
!もうとりあえずバレなきゃいい!

「とりあえず、条件がいくつかある」

「出来る限りなら承知するわ」

そんなこと言える立場ですかい……。

「ひとつ、俺の家事を文句言わず手伝う。ふたつ、極力外には出ない。みつつ、血を吸うな」

俺は3人の前に立ち、指を三本突き出して言った。

蓮華は顎に手を当てて悩みだした。

まあ、コレくらいは守って貰わないとな。血を吸われる感覚は気

持ち悪いに越したことはなかったし。

「ひとつ目以外却下。理由はこれね」

3人は巨大ダンボールに入ってた、私物が入っていると思われるダンボールを開いた。

そしてなにやら服の様なものを取り出して俺に見せた。

「四季の学園高等部の制服だな？　それがどうしたんだ？」

「私達、明日からあんたと同じ学校の同じクラスに転校するのよ」

「……はあ！？」

いきなりの急展開に一瞬言葉を失いかけた。うちの学校に化け物が転校してくる、それも俺のクラスに……。

なるほど、あの5つの開いてた席のうちの3つ蓮華達の席だったのか。

「……まあ分かった。それでだ、何で血を吸わないのは不可なんだ？」

「そりゃあんたの血が……うへへえ」

ヴァンパイアは、うつとりした顔で両頬を押さえながら体をクネクネさせた。

やめる、なんか怖い

「って！　な、何言わせんのよ！」

知らんがな。

「よし、百歩譲って了解してやるよ。その代わり、家事は全力で手伝ってもらうからな。後、何かあればすぐに出て行ってもらう」

「ふん、望むところよ！　それと、ありがとう」と自己中『ヴァンパイア』蓮華。

「頑張り……ます」と無口な『ライカンスロープ』琴美。

「よろしくね、おにいちゃん！」とロリ娘『エンプーサ』音羽。

俺は家事の地獄から解放された！！

とりあえず、これから少し騒がしくなりそうだ。

しかし、ここから俺の人生は大きく狂いだしていた。
。

非日常の開始

うちに『人で無い者』が来て特に変わったことは無く数時間が過ぎた。

3人は最初のうちは条件をしっかりと守り、俺の家事を手伝ってくれた。

妹にも見習って欲しいね。居候が増えたつてのにソファーに寝そべりながらテレビを見て笑ってやがる。

「琴美、これ乾燥機に入れて行ってくれる？」

「わかった……」

洗った皿を泡の付いた指で指して琴美に指示する。

琴美が一番文句言わず素直に、そして確実に働いてくれる。文句言わないっていうより、ただ無口なだけだが。

それに比べて、蓮華と音羽は少し手伝っただけで叶の仲間入りだ。やっぱり条件が甘かったかね……。

「はあ、結局いつもとあんまり変わらん」

「……役に立ててない？」

「いや、琴美はしっかりやってくれてるよ。しかしあのヴァンパイアとエンブーサだ、洗濯物干して少し飯の手伝いしてるくらいじゃねえか」

キツチンの向こうに見える2人を睨む。

「前の世界でも2人はあんな感じだった……」

「それで琴美が面倒見てたのか」

「こくと1回小さく頷いた。」

やはり3人の中で一番年上のお姉さんの存在なんだろうな。えらい、えらいぞ琴美。

「お前達が来た世界ってどんななんだ？」

「……ごめん」

教えられないって意味でとっていいのか？

やっぱり蓮華達はまだまだ謎だらけだな。目的も何かも分からんし、何で俺じゃないといけないのかも分からんし。

まあ蓮華がいつか教えるって言ってたし、それまではただの居候って位置で家事でもさせようか。

「琴美、家事を最後まで付き合ってくれたご褒美。なにかおやつか飲み物いるか？」

さつきと同じように、無表情のまま頷いた。

「冷蔵庫とか、戸棚にお菓子とか入れてるから勝手に取っていいよ」さらに頷くと、琴美は真っ先に真後ろにある冷蔵庫を開け、チルドの引き出しから何かを出した。

「……これ」

「こ、琴美さん？」

なんとそれは、俺と叶の明日の晩飯の100g900円もした黒毛和牛のステーキ肉だった。

そうかこの人は狼だったな……。

「な、生のまま食べるのか？」

頷く。

少し驚いた。しかし、どうせ明日から蓮華達が居るから2人だけでステーキなんて食べれないだろう。

それなら今日来てからずっと手伝ってくれた琴美にあげてもいいかな。

「仕方ない。貸してくれ」

琴美からステーキ肉を取り、パックを開けた。

すると、琴美の尻あたりから生えてる尻尾がパタパタと音がしてきた。

無表情でも、やはり体は正直なんだな。可愛いもんだ、微笑ましい。

「どうせなら切ったほうがいいだろ？ 食べやすいだろうしさ」洗ったばかりの包丁を乾燥機から出し、生のステーキを2枚、適

当に四等分にカットした。

その切ってる肉を、俺より少し上の角度から見る琴美が瞳を大きくして見つめてる……。少し怖い。

「ほら」

カットした肉を小皿に盛り、琴美に渡した。

「ありがとう……」

一言呟き、琴美は生のステーキ肉をひとつ摘んで口に入れた。
なんか見たらゾツとするな……。こんな可愛い女の子が生肉を食うとは。

何度が囁むと、音を立てて飲み込んだ。

「上手いか？」

琴美は無表情のまま、目をきらきら輝かせて頷いた。

「はは、それはよかった」

尻尾もずつと振ってるし、そんなに嬉しいのかな。あげてよかった。しかし食べてるものがアレならもつと可愛いのに……。もったいない。

「ねえ、何笑ってるの？」

リビングから、流し台のまん前から叶が覗き込んできた。

「これこれ」

俺は幸せそうに生肉を頬張る琴美を指差した。

「ちよ！ 兄貴なんてもの食べさせてんのよ！」

「えっ？」

叶は大慌てでキッチンに乗り込んできた。

「琴美さん大丈夫？」

「……美味しい」

そんな事を聞いているんじゃないぞ。

「ほら、琴美狼だし」

「はあ……。びっくりさせないでよう！ 生肉食べてる人なんて

初めてみてビックリしたじゃない」

それは納得だ。

「でも、やっぱり私達と違うんだね……。ちょっと怖い」

「……」

叶の言葉を聞いて、琴美の手が止まる。

その差別するような言葉に少し頭が来た。

「おい、そんなこと言うもんじゃないだろ！」

「だ、だってさ……蓮華さんは兄貴の血を吸ってたし」

「確かに違うけど、実際俺達にそこまで害を与えていない。ちゃんと家事も手伝ってくれたし、叶より働いてくれる」

「……」

叶はそのまま黙って立ち去った。

階段の音が聞こえたところから、自分の部屋に戻ったのだろう。

「……ヒロキ」

「大丈夫だよ。俺はちつとも怖くない。むしろ可愛いわ」

生肉を持つ琴美の方を軽く叩き、自分なりに励ました。しかし、それ以上なんとも言えない。

叶が言ってた事もそりゃ一理ある。しかし何も本人の目の前で言うことじゃない……。無表情だけどきつと傷ついてるはずだ。

「俺は差別なんかしない。お前がライカンスロープだろうがなんだろうが、俺にはただの女の子にしか見えないんだし」

尻尾と耳はまあアレだが。

「……ありがとう」

琴美はそう言って、また生肉を口に入れた。

しかしそう言ったものの、尻尾が動いてない。ショックだったんだろうな。

「食べ終わったら流し台に入れててくれ。あんま気にすんなよ」

俺は苦笑を浮かべ、自分より高い琴美の頭を撫でてキッチンを出た。

非日常の開始(2)

午前0時。

叶は結局あれから部屋を出てこなかった。

少し言い過ぎたかと後悔しつつ、蓮華達を親の寝室に案内し、俺は自分の部屋のベッドにつく。

ゴールドデンウィークで生活のリズムが崩れたと思ったが、案外一日でなんとかなりそうだ。

今日は色々あつて疲れたから……。あご強打、食券戦争、妹バースト幼馴染、吸血、蓮華達が居候。

本当に運の悪い一日だったが、蓮華達の登場以外平凡な一日だった。

でも日が昇れば、次の日から居候が増えただけでいつも通りの毎日が俺を待っている。

布団を被り、携帯型音楽プレイヤーにイヤホンを挿し込んで耳に挿した。

これで後十分もあれば熟睡出来るだろう。

「ねえ、起きなさい」

おかしいな。雑音が聞こえてきたぞ。

「起きなさいよ！」

「ふござっ！」

雑音が聞こえ、その次に肌触りのいい重みのあるものが俺の顔面に乗った。

……この声は蓮華か。

「次で起きないと両足が乗るわよ」

「分かった、分かったからそのニーソを履いた足を下ろしてくれ」

蓮華は素直に足を下ろして、ベッドの端に座った。

「なんだよ……」

上半身の起こしてイヤホンを取った。

「暇」

一言そう言って暗闇に光る紅色の瞳で俺を見つめる。

「はぁ？」

「暇なのよ。遊んで」

「ふざけんな、シャレにならんぞ。琴美と音羽に頼め。そして俺を寝かせろ」

欠伸を浮かべ、蓮華が乗っかる布団を強引に引っぱった。

「無理無理。あの子達もう眠ったのよ？ 同じ悪魔族として夜寝るなんて恥ずかしいわ。特に琴美よ、あの子ライカンスロープだっていうのに、こんな月が真上にある時間に眠るなんて、」

「ストップ！ その話いつ終わる？」

「もう少し」

「いや、まあそんな事はいいんだ。どうしたら寝てくれる？ 俺に出来る事ならしてやる」

話を強制的に止めて交渉に出た。

「だからさ、遊んでよ」

ニヤツと微笑み、体を寄せてくる……。交渉失敗。

「もう知らん、部屋に戻れ。俺は寝る！」

「ふむ」

布団を被って、蓮華に背を向けイヤホンを挿した。

もう何も言ってこない？ 案外聞き分けいい奴なのか？

……何故か布団がモゾモゾしている。

「なら私もここで寝ちゃうよ？」

クスクス笑いながら言った。

「ハン、俺はそんな手には乗らんぞ。誘惑されようと俺は眠れる」
音楽プレイヤーの音量を耳が痛いくらい大きくし、無心になった。
しかし俺の考えを、遥かに超えていることを蓮華はやってのけた。
太股から首筋までゆっくり弄りだした。

やばい、誘惑に負けそうだ……！

俺はイヤホンを強引に取り、蓮華のほうに体を向けて覆いかぶさった。

「そんなに遊んで欲しいか」

顔の距離15センチ、俺の黒い瞳と蓮華の紅い瞳が向き合う。

「うん」

「なら遊んでやる、俺の体を弄ってベッドに入ってきたんだ、俺もそれに合うように遊んでやろう！　しかし後悔するなよ。お前が誘ったんだからな！」

「うんうん！」

蓮華は頷きながらニコニコ笑う。

こいつどういう意味か分かってないのか？

「……ごめん、今のなし」

冷静になると凄く恥ずかしいことをしていた。

紅潮する自分の顔を叩き、ベッドから飛び降りた。

「ヘタレ」

「お前ももう少しくらい抵抗しろよ！　俺がいい人じゃなければお前は今頃な……」

「ふふっ、自分でいい人とか言う？」

ほっとけ。少なくとも悪くは無い。

蓮華もベッドから降り、俺の横に立った。

「目が冴えたぜ全く。どうしてくれる」

「じゃあ散歩でも行こうよ？　ふらっと遊んで帰ってくればきっと眠くなるわよ」

夜中の散歩か……なんだか楽しそうじゃないか。

「そうするか。着替えるから外に出る」

「寝たら血を吸い尽くすからね」

蓮華は俺を脅してニヤリと笑い部屋を出て行った。

おお、怖い怖い。

ジャンパーを羽織って、こっそり2人で外に出た。

五月でもまだ外は寒い。身震いをしてポケットに手をつ込んだ。
「ねえ、どこ行こうか？」

腕を組んで、今までどこに仕舞ってたか分からない翼を大きく広げて尋ねてきた。

「あんまり大きい声出すな。何時だと思ってるんだ」

「ヴァンパイアにとっちゃこの時間なんてまだまだ早いわよ」

お前を基準にするんじゃないやねえ。

とにかくここにいっても仕方ないわけで、俺は通学路とは反対の方向を歩き出した。

この時間だと、電気の消えている家がほとんどだ。車も全然通ってないな。なんだか新鮮な気分だ。

「四季のが丘って島全体観回せる所があるんだ。そこ行くぞ」

「うん。まあこの辺全く知らないしあんたに任せる」

蓮華は少し羽ばたいて、俺より少し高い位置を飛んだ。

「凄いな、やっぱり飛べるんだ」

「ふふっ。当たり前よ。本気出せば百キロの速さで飛べるわ！」

調子に乗り出したのか、俺の真上をグルグル回りだした。

しかし百キロなんて嘘くさい数字だ。

「未だに蓮華達の存在が信じられないな」

「えっ？」

「いや、なんていうか……小さい頃とかそんな魔法使いとかそんな夢とか全く持たない奴だったからさ、15歳の今になって、お前みたいなヴァンパイアなんて者がいきなり現れても信じられんよ。まあでも目の前で血を吸われたり飛ばれたりしたら信じるしかないし……。不思議な感じだ」

そういうと、蓮華は「なにそれ」と一言だけ言ってケラケラ笑いだした。

「俺にもわからん」

俺も釣られて笑った。

「もつと信じさせてあげようか？」

「何をする気だ？」

蓮華はニヤツと笑い俺の脇に手を入れて、羽ばたいた。

大体やりたいことは分かった。だがこれは流石に無理だろう。

「飛べるわけ無いだろ」

「そうでもないわよ」

「お前のその細腕のどこに力があるんだ、」

小馬鹿にした途端、俺の体が浮き上がった。

非日常の開始(3)

視界がどんどん高くなる。

一瞬何が起きたか分からなかった。しかし今理解した。俺は今四季の島で一番高い場所にいる。

「どうよっ？」

上を見ると蓮華がどや顔で俺を見ている。

どうって聞かれても答えに困る。

ただ、街灯でほんの少しライトアップされたような島全体が見えて、本島と繋がる端が光って綺麗なだけ。後地に足が着いてないから怖い、そして寒い。風がキツイ。

「人間じゃこんな事出来ないでしょ？ 凄いな？」

「す……凄いな。頼むから離すなよ？ 絶対に離すなよ！？」

「そこまで言われたらネタフリにしか……」
「待て待て待て待て！ こんな300メートルくらいの高さから落ちたら人間は死ぬんだよ！」

寒さと恐怖でガタガタ震えてきた。上着を着ても空はこんなに寒いなんて思いもしなかった。ていうかこういう形で空に行くなんて思いもしなかったね。

でも本当に落ちる心配はなさそうだ。

「このままどこまで飛んでいけるんだ？」

「その気になればこの日本って所の本島までいけるわよ」

ただ凄いとしか言い表せない。蓮華が居れば世界一周とか出来そうだな……密入国だけだ。

「蓮華、もう寒いからあっちにある丘まで飛んでくれ」

「はいはい」

蓮華は俺を抱えたまま結構なスピードで四季のが丘まで飛んだ。

四季のが丘。

四季の島で一番高い場所。ハイキングコースだったり、公園だったり、デートスポットだったり色んな人が来る場所だ。流石にこの時間はいないが。

上空から数分後、やっと地に足を着くことが出来た。

「あー、寒い」

手を擦り合わせて頂上の崖っぷちに近い柵にも垂れた。

「ふふん。でも風が気持ちよかったでしょ？」

「まあ確かに……。初めての感覚だった」

「でも人間て不便な生き物ね。飛べないし食べ物食べないと生きていけないなんて」

蓮華はそう言って、俺のまん前に着陸した。

「ヴァンパイアは血を吸うだけでいいのか？」

「うん。それだけで喉も潤うし空腹も満たされるの。ただし人間の血だけね」

「お前俺と会うまで他の奴の血吸ってたのか？」

「そんなわけ無いでしょ。トマトジュースに琴美の血混ぜて飲んだ」

「なんだか恐ろしいものを連想させた。」

「おいおい……」

「でも今はあんたがいるから問題ないわ」
にこつと笑って、俺の首元に近付いてくる……。

「アホか。もう吸わせんぞ！」

近付いてくる頭にチョップで応戦した。

「いたたた……。アホはどっちよ！ 私の栄養源よ？」

お前の栄養摂取で俺が危険になったらダメだろう。

「学校でDMでも探して吸え！」

「嫌だ。あんたの美味しいし」

再び近付く。

「好き嫌い言ってんじゃねえ。俺のことも考えろ」
再び応戦。

「肉食べて血を増やせばいいでしょ！」

再び近付く。無限ループって怖くね？

「トマトジュースに俺の血を少し混ぜるだけじゃダメなのか？」

「それじゃ物足りない。お嬢様風格の私が貧乏みたいじゃない」

お前のどこにそんな風格があるか問い詰めたい。小一時間問い詰めたい！

「あんたが血をくれないと……私死ぬのに……」

蓮華は悲しそうな顔をしてまた近付いてきた。

でも俺の血をやらないと蓮華は……。

「失礼」

心配していると、夕方と同じ場所に牙が刺さった。

「んなつ！　そういう作戦かコルア！」

「ふふん」

このまま抵抗したらまた血が出るんだろうな。抵抗出来ないなら仕方ないが、この血を吸われる感覚は本当に気持ち悪い。早く終われ！

「ヒロキ」

「なんだよ」

数秒後、血を吸い終えた蓮華が血を吸う体勢から動かず囁いた。

「誰かがこつちを見てる。静かに喋って」

は？一瞬何言ってるんだと思った。だが、冷静になると、確かにどこかから視線を感じる。誰かが俺達を見ているんだろうか……でもこんな夜中に人なんか来るか？

「別に気にすること無いんじゃないか？」

「これは人間の視線じゃない」

「人間じゃないって……お前みたいな悪魔族って奴か？」

「そっいうんでもない。何……この感覚？ 殺気が出ているのに、悪い気配じゃない……」

何を言ってるかさっぱりだ。

でも、なにやら蓮華が焦っている……？

非日常の開始（４）

蓮華に抱きつかれたまま数分が過ぎた。

視線はまだ消えない。いったい誰がこっちを見てるって言うんだ？様子を窺ってるのか？もしかして俺と蓮華のこの続きを期待してるのか？もしそうならそんな事は天地がひっくり返っても起こらないから安心して帰れ。

「なあ蓮華、飛んで逃げられないか？」

「あんたを持ち上げて逃げて追いかけられたら対処出来ないわよ」
蓮華の額から汗が落ちた。

そんなに気温は暑くないと思うんだが……むしろ少し寒いくらいだ。それだけ恐ろしい気配なのだろうか？

しかしいつまでもこうしている訳にもいかない、早くなんとかしないと。冷静に考える。

「ヴァンパイアってくらいだし、暗いところでも目はいいんだろ？」

「まあね。でもこの状況でどう見ろって言うのよ？」

いいアイデアが浮かんだ。のかもしれない。

「ちよつとごめん」

俺は作戦を言わず、ほとんど密着状態の蓮華を抱きしめた。

「ばつ、馬鹿！こ、こここんな状況でなにしてんのよ！」

小さい声で怒鳴り、俺の肩を爪を立てて強く握った。

「自然に回るんだよ。そしたら向こう側が見れるだろ？それでこっちを見る奴を見つけたら、逃げれる奴か逃げれない奴か判断すればいい」

抱きしめたまま、自然な感じで１８０度回った。

「う、うん……」

不服そうな声をだし、肩を握るのをやめた。

「見えるか？」

「ちよつと待って……見える。林の中にいる」

蓮華はほんの少し背伸びをして、向こう側を見て囁いた。

やっぱり俺の後ろにいたのか。なんだか背を向けていると凄く怖い。蓮華もさっき俺と同じ状況だったのか……。

「……天界族」

「は？」

また意味の分からない種族が出てきたぞ。今度はなに？天使でも出てくるのか？

「ちっ……もう作戦がばれたの？」

「お前達が俺の家に来た理由か……。こうなった以上、分かるように説明してもらうぞ」

「はあ……こんなに早く話すことになるなんて、伏せて！」
「なっ！」

説明の途中、蓮華が耳元で叫んで俺を引っ張ってしゃがんだ。その瞬間だった。

バンッ。

ドラマで聞いたような銃声が響き、コロンと柵から何か目の前に転がってきた。

「これは……？」

転がってきた物を拾って、明るいところに当てた。

「銀の銃弾」

「じゅ、銃弾？俺達に向けて打ってきたのか！？」

「違うわ。狙いは私よ。銀の銃弾は私の弱点だからね」

蓮華はそう言って立ち上がり、

「出てきなさい！」

そう叫んで、どこからともなく大きな真っ赤な鎌を取り出し、大きく羽を広げた。

俺はビクリして声も出ずにへたり転んだ。

なんだこの急展開は？蓮華がなんかヴァンパイアじゃなくて死神

みたいな鎌持つてるし……。それにこの銃弾は？蓮華の弱点なら蓮華を殺そうとしたのか？ああ、もう何がなんだか分からん！出てくる奴によっちゃ俺の頭もおかしくなるぞ。

「よく避けたわ。回ったのは正解」

ガサガサと草が擦れる音の中から、真っ白の服、真っ白なロングコート、真っ白な長い髪、真っ白な翼を持った碧眼の女の子が銃を向けて出てきた。

「フン！ これくらい余裕よ。もう少し早く撃つべきだったわね！」

おい、俺の手柄だぞ。何自分で回ったみたいなこと言ってるんだ。でも、次は外さない。この引き金を引いた瞬間、貴方の額に銀の銃弾が突き刺さる」

白髪の少女は眉間にしわを寄せ、弾をリロードして銃口を蓮華に向けた。

「見えてて当たると思う？ あんたのそのぺったんこの体を引き裂いてあげるわ！」

蓮華は大鎌を少女に向けてニヤリと笑った。

「少し大きいだけでいきがらない事ね。あなたも差ほど変わらないわ。そして殺します」

「言ったわね……。そんなに死にたいのかしらね？」

お前ら何争ってるんだ。今お前らは胸の罵り合いというしょうもない理由なんかで殺し合いを始めようとしてるんだぞ。

っていうか、これは止めないとどちらかが死ぬんじゃないか？

そう思った瞬間、俺は即座に立ち上がって2人の間に入っていた。

「ストップ！ 止まれ！ とりあえず武器を下ろせ2人共！」

「私は貴方を守るために来たの。邪魔しないで」

白髪の少女は肘を曲げて銃口を上に向けた。

「理由も知らずに守られてもな……。とにかく蓮華もその鎌下ろせ

！」

「フン」

とりあえず落ち着いて話そうか。

ベンチに2人を座らせ間に俺が入る。そして武器も預かった。

2人は物凄い殺気で、俺を挟んで凄くピリピリした空間を作ってる……。

気まずいけど俺が離れたら殺し合いしそうだし、どうにか止めないと。

「とりあえず君は？」

俺は白髪の女の子の名前を訊いた。

「天界から貴方を守るために来ました、綾那です。もちろん偽名ですが」

綾那あやなと名乗る少女は、控えめな微笑みを浮かべた。

てゆうか何でお前ら偽名なんだよ。日本に合わせた名前じゃなくて本名を名乗れ本名を。それと苗字！

「んで、綾那が俺を守る理由が蓮華が家にいる理由なんだな？」

2人は同時に頷いた。

「なら、これ以上のことが起こったからには話してもらっ。いいな？」

「はぁ……。わかったわよ」

蓮華は溜め息をつき、渋々語りだした。

「私……いや、私と琴美と音羽はね、最後の種族なの」

「最後の種族？ 悪魔のつてことか？」

「ううん。そうじゃなくて、私はこの世で最後のヴァンパイア。琴美は最後のライカンスロープ。音羽は最後のエンプーサ」

なるほど、理解した。

「それで私達がここに来た理由……。それはあなたと一緒にヴァンパイア、ライカンスロープ、エンプーサを増やすこと」

「ふむ……。なるほどねえ、俺と一緒に　、ん？　それってつまり」

俺は嫌な予感を脳裏に浮かべながら蓮華と綾那を交互に見た。

「そういうこと」

2人は声を揃えて言った。

焦りで汗が滝のように噴出してきた。そういうことってつまりアレなんだよな？　そうか……。アレなのか……。

「馬鹿か！」

俺は天に向かって大きく叫んだ。

「なんでそういうことを最初に言わない！」

「い、言えるわけ無いでしょ恥ずかしいのに！　あんな妹さんもない前で！」

「だからってこっそり教えるとかあるだろう！　馬鹿なのかお前は！」

お互い睨み合って文句と言いつつ顔を吐き出した。

「それでそれを阻止するのが私、天使兵の役目。魔界で最強と恐れられるヴァンパイア、強者のライカンスロープやエンブーサの増殖をね」

話に割って入ってきて、綾那は自分の目的を言った。

「ま、私はもう居候している以上目的は一手前だけだね」

「そんな事はさせない。私は貴方達を常に監視しているもの」

「ちよつと待った！　分からないところがある。どうして俺なんだ？」

2人に掌を向けて尋ねる。

「あんたは、魔界と天界を作った者の生まれ変わり。らしい」

「らしいってなんだよ……」

「とにかく、あんたは普通の人間じゃないのよ！　だからあんたとなら悪魔と人間のハーフが出来るんじゃないかって魔界の王妃に言われてここに来たのよ。ダンボールで」

とにかく、目的は俺じゃないとダメなのね。それも理解した。

「でもそう簡単に言われても、俺だって初対面の子とだな……」

「じゃあ仲良くなればいいのね？」

蓮華は立ち上がり、顔を近づけて訊いた。

「いやいやそういう事じゃ、」

「なるほど。貴方の助言で阻止する方法が増えた。私が仲良くなつてそういう行為をさせなければいいのね」

負けじと綾那も立ち上がる。

おい、話を聞け。

「それじゃ、人間という生物がどのような方法で恋に落とすか勉強してこないと」

綾那は翼を広げ、羽を落としながら宙に上がった。

「いや、だから俺は健全な高校生であつて、」

「それ返して貰える？」

銀の銃を指差した。

「あ、すまん。違う、そうじゃない！ 人の話を聞け！」

「では」

人の話も聞かず、綾那は物凄いスピードで下に下りながら前に飛んでいった。

「あの天界の生物いつか殺す……！」

蓮華は胸の前で拳を握り締めて呟いた。

「帰ろつか？ なんか私も眠くなってきた」

「ひとつ言わせる。俺はお前とそんな行為はするつもりはない。健全で愉快な高校生活を3年過ごすつもりであつて、」

「はいはい」

俺の脇に腕を入れ、蓮華も翼を広げた。

この悪魔もさっきの天使も人の話を聞きやしない……。俺がそういう偉い立場の生まれ変わりなら、少しくらい話を聞いてくれたっていいんじゃないか？

それとも焦っているのか……。

「行くわよー」

もう勝手にしろ。俺は悪魔や天使になんか恋しないからな！

非日常の開始(5)

次の日。

寝たのは夜中の三時。変に寝つけても、一定の時間で起きては寝て、起きては寝てを繰り返しているともう六時半になっていた。

結局寝不足になった。いきなり蓮華達の種族の救世主になれって言われたり、魔界と天界を創った偉い奴の生まれ変わりなんて言われたら眠れない。

救世主、つまり俺の子供を……という意味であつて、それも蓮華、琴美、音羽、3人の。

想像しただけで気が狂いそうだ。それに親と国からのお許しがない。

「はぁ……考えていても仕方ない。飯でも作るか」

重い頭を叩き、寝巻きのジャージをベッドに脱ぎ捨てた。

クローゼットから制服を取り出し、ズボンを履いてワイシャツの袖に腕を通した。

そして鞆と学ランを持って部屋を出て一階のリビングへ向かった。

「おはよう……」

リビングに入ると、すぐ横のキッチンにセーラー服姿の琴美が立っていた。

「おはよう。何してるんだ？」

「朝ごはん……」

琴美は尻尾を少し振りながら、皿に盛っているいびつな形の米の塊を米粒だらけの指で差した。

「へえ、おにぎりか」

琴美は頷き、炊飯器からご飯を取り出して転がすように握り始め

た。

その頑張ってる姿が非常に可愛くて、微笑ましくて、思わず笑みがこぼれた。

「変……かな？」

「いや、ここに来て日が浅いのには偉いなあと思って思っただけ。どれ、俺も手伝おうじゃまいか」

俺は鞆と学ランを丸めてソファに投げた。

「……うん」

再び頷き、尻尾をパタパタと大きく振り出した。

しかし琴美は見てると飽きないな。感情がすぐにわかる。

俺はニヤニヤしながら琴美の横に立って鍋に水を入れて火にかけた。

「お湯……？」

「うん。即席味噌汁」

「みそしる……」

やはり、魔界とこの世界の食べ物や飲み物は違うんだな。おにぎりも勘が何かで作ったんだろう。魔界で何を食べてたか気になる。

「おはよーっ！」

「おはよ。あ、私ご飯ヒロキでいいわよ」

俺に続き、制服姿の音羽と蓮華が起きてきた。

「おはようさん。分かってる。でも勘違いされるようなことを言うな」

「ふひひ、冗談冗談」

朝なのに元気なヴァンパイアだ。昼に弱いつて設定はないんだろ
うか？

「ヒロキ……出来た」

琴美はいびつなおにぎりの山を掌を上に向けて差し出してきた。

「うん、上出来上出来。テーブルに運んどいて」

深く頷き、尻尾を振りながらおにぎりを運んで、そそくさと小走

りで戻ってきた。

「出来た……」

キラキラ輝く黄色い目で、何かを期待しながら見つめてくる……。

「そ、そうか。偉いな」

「……」

この期待の目はなんだ。何を求めているんだ？

「ご褒美は……？」

「へ？」

思わぬ一言に変な声が出た。

こいつ本当に犬じゃないか……。何かすればご褒美みたいな、犬の賤けみたいなのが執着してやがる！狼の本能なのか？

「これでいいか」

俺は耳の間に手を入れて、わしわしと撫でた。

琴美はすばやく二回頷いて、ご機嫌な尻尾と共にキッチンを出て行った。

よく分かんやつだ。

「ふわぁゝあ。みんなおはよー……」

そして、朝食の準備が完了と共にスカーフをちゃんと結ばずだらしのない格好の叶が欠伸を浮かべながら出てきた。

学校では見られない風紀委員とは思えない格好をしている。こいつを学校で好きになった奴がこの姿を見たらどう思うだろう。想像しただけで笑えてくるね。

「うわっ！ 蓮華さんもみんな制服可愛い。高等部の制服か」

「ふふん。そうでしょ？ まあ3人の中なら私が一番かな」

案外普通に話せてるじゃないか。なんか吹っ切れたって感じだな。

「あ、琴美さん昨日はごめんね？ あんな酷いこと言っちゃって……」

「大丈夫……気にしてない」

謝らせようと思ったけど全然問題ないようだ。さすが我が妹。血は繋がってなくとも俺に似たいいい性格をしているじゃないか。

「それじゃ、いただきます」

新しい3人の居候達と初めての朝食。俺は早速琴美が握ったいびつなおにぎりを取った。

それが心配なのか、前に座る琴美はそわそわしながら俺を見つめる……。

恐る恐るかじると、口いっぱいには調度いい塩加減と米独特の甘味が広がった。単純に美味しい。

「うん。美味しいよ」

「……」

褒めると、琴美の色白の透き通る肌が淡いピンク色に染まった。しかし無表情。

でもやはりこの3人は顔立ちがいい。無表情でも凄く可愛い。性格に少し問題があるが……。

「兄貴、なに見詰め合ってるのよ」

「べ、別に見詰め合ってるなんか無い！俺は感想を言っただけだ！」

「ふーん。みんな気をつけてね」。ドスケベの兄貴ならいつ琴美さん達襲うか分かったもんじゃないからね」

「うるさい黙れ」

叶は「フン」と鼻で笑って味噌汁とおにぎりを交互に食べ始めた。

「はははは……」

蓮華と音羽は苦笑を浮かべて不自然なトーンで笑い出した。

お前らの目的がそうだもんね。笑うしかない。

とにかく、いつもの食卓と比べ、凄く明るくなった。こんなに喜ばしいことは無い。

非日常の開始(6)

朝食を食べて、少しゆっくりしてから学校に向かう。

「行ってきたーす」と俺。

「いってきたー」と妹。

「行ってきます」とヴァンパイア。

「……」何も言わないライカンスロープ。

「行ってきたーすっ！」とエンプーサ。

五人で家を出て鍵をかけた。

そしてロールプレイングゲームみたいに、縦に女の子4人を引き連れて歩く。一々振り向く男連中を見ると気持ちがいい。

まあ訳アリでモテてるわけでは無いんだが、こう両手どころか全身に花束を持って歩くとこんなに気持ちいいなんて。

「おにーいちゃんっ」

パタパタと羽ばたいて、太股で俺の頭を挟んだ。つまり肩車だ。

「どうしたちびっ子。振り落とすぞ」

身長は140センチくらいだが、予想以上に軽かった為動じずにそのまま歩く。

「もう疲れた……」

「どうせ普段から飛んでるからだろう。自分の足で歩け」

「飛ぶなって言ったのおにーいちゃんだよ？」

お前さっき飛んで俺の肩に来ただろう。肩車して欲しいだけだが！

でも何故か悪い気はしない。むしろ、さらさらで柔らかい肌が肌が耳と頬に当たって気持ちいい。周りの目は凄く気になるが、音羽の高等部制服を見て判断していただきたい。

ロリコンと思われるであろうこの状況だが、音羽は16歳だ。むしろ俺より少し年上な訳で決してロリコンな訳ではない。そして別

に好きでもない！

……それでも周りの目が槍のごとく突き刺さる。

「ロリコン」

ゴミを見る目で横に出た妹がニヤケ面を浮かべて言った。

「うるさいよ。お前もうちに来たばかりはおんぶしてやっただろうが」

「あ、あれは小さいからでしょうが！　今の兄貴がちっさい子肩車してたらロリコンにしか見えない！」

それもそうだが……。

「別に気にしない。もう色々吹っ切れた」

それに、音羽が飛んでたらもつと変な目で見られるだろうし。既に羽は出ているが。

「でも学校って大変ね。朝は眠くて仕方ないわ」

蓮華が上品に欠伸を浮かべて呟いた。

「慣れるしかない……」

「うつさい」

琴美の言うことに蓮華は少し棘のある言い方で返した。

そういえば何で蓮華がこうも偉そうなんだろうか？　やはり性格の問題だろうか。

「思ったんだけどさ、蓮華は太陽とか大丈夫なのか？　ヴァンパイアって太陽に弱いイメージがあるんだけど」

足を止め、天を指差して訊いた。

「まあ本来の力より少し弱くなるけど、全然問題ないわ。大体太陽に弱いってのは人間が勝手に作り出した妄想の一つなのよ。銀の銃弾は本当に弱点だけだね」

蓮華は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、手を広げて余裕のポーズを見せた。

「へえ〜。じゃあニンニクとかも大丈夫なんだ？」

少しビクリしながら叶が言った。

その瞬間、蓮華は笑顔で顔を引きつらせた。そしてどんどん苦虫

を噛み潰したような凄い顔をした。

なるほど。弱点か。

「そ、想像しただけでも鳥肌が立つわ……！ あんな臭いだけの食べ物はどこがいいのよ！」

「はは、んじや料理作るときニンニクは使わんよ」

やっぱり古典的な弱点はあるんだな。

俺は苦笑を浮かべたまま前に向き直す……すると。

「いい情報を聞いたわ」

目の前に、白い翼を生やしたうちの高等部のセーラー服を着た少女が腕を組んで立ちふさがっていた。

「ごきげんよう。晴天ね」

「おい、なんでお前が制服着て、」

「綾那……いや、天使！」

俺のセリフの途中に、悪魔達が天使の前に立った。

おいおい、また喧嘩始める気か？

「兄貴、あの人は？」

叶の質問に「あいつ等の同類」と適当に答え、悪魔と天使の間に立った。

「とりあえずガン付け合いはやめろ。綾那、なんでお前がその服着てるんだ？」

「なんでって、貴方の学校に入学するからに決まってるじゃない。護衛のためにね」

空き席の4つ目の席はお前のか……っ！

「この3人がいつ発情してあなたを襲うか分からないもの。学校でも個人的に監視するわ」

「発情？ とことん失礼な奴ねあんた！ ペチャパイ！」

「ペ、ペチャ……？ 下等生物のあなた達に失礼なんて、冗談も休み休みいいなさい」

「何をーっ！」

なんて低レベルな喧嘩をするんだ。

「琴美、蓮華を押さえてくれ。音羽も降りて押さえて」

2人は溜め息を吐いて頷き、蓮華をなだめ始めた。

「さ、行きましよう。あのヴァンパイアと話したら遅刻するわ」

少しイラついた顔をして、綾那は俺の腕にしがみついた。

「な、なんだこの腕は？」

「恋愛バイブル第一章。気になる彼には積極的に」

答えになってないぞ。こいつ本当に天使なのか？

蓮華達の暴言、昨日だつていきなり発砲してきたし、話だつて聞かない！まあ確かに天使みたいに可愛らしい外見で白い神秘的な翼、うっとりするような優しい声。

だが俺はこいつが天使なんて到底思えないね。

「さあ、飛ぶわよ」

「またかよ……。よく飛ぶ日だ」

綾那は大きく羽ばたき、電柱より高い場所まで一瞬で上がった。

「おい、下ろせ。歩いていくから……ん？」

「ちよつと待ちなさいよ！」

物凄い気配が足元からすると思えば、琴美と音羽を振り払った蓮華が物凄い殺気と共に飛んできた。

「ひいっ！ て、撤回する！ 早く行け！」

「了解」

殺気満々の蓮華に追われる中、俺は下を見た。
そこには、物悲しそうに俺を見る叶がいた。

非日常の開始(7)

朝の肌寒い空を旅して、校舎前に着陸。

「あー、寒……。いつもの倍以上に早く来れた。ありがとな」
冷たくなった手を擦ってお辞儀する。

「問題ないわ。しかし……この注目はなにかしら？」

腕を組んで、周りを睨み付けるように見回して俺に問う。

そりゃ空から来て翼が生えた奴がいたら誰でも注目するわ。もし俺があいつらの立場なら腰を抜かしてビクビクするね。

「気にするな。そのうち嫌でも普通の光景になるよ」

綾那の目のまでて手を振り、空を見上げる。

そして、数秒後に蓮華が華麗に上から降りてきた。しかし華麗なものも数秒。蓮華は膝に手について絶え絶えの息を漏らした。

「ハア……。ふう……。やっと追いついたわ……。！」

「あら？ 魔界最強のヴァンパイアとあるうものがこれくらいで息を上げるなんて。私はヒロキを連れていても余裕だったわよ？」

「夜なら勝ててたわ！ 天使兵如きが偉そうにするんじゃないわよ！」

「ごときですって……？」

「そうよ。天使兵って一番下っ端なんでしょ？ ふふん、それなのに粹がって私を挑発するなんて、夜道襲ってくださいって行ってるもんよ」

「ならそう出来ないように今ここで貴方を殺してあげましょうか？ 粹がってるたかが天使兵の私の手で」

2人額を当てるぐらい近付き、更に睨み合う……。

お前らどれだけ喧嘩好きなんだ。わざとか？ わざと俺の前で喧嘩してるのか？

盛大な溜め息を吐き、ふと周りを見る

「なんだあの2人？ 翼生えてるぞ」

「不審者……？」

おいおい、天使とヴァンパイアの喧嘩でギャラリーまで出てくる始末。これは早く対処しないと、俺も巻き添えになりかねん。

「お前ら。そこまでにしとけ」

2人の頭を掴んで、腕いっぱいまで突き放した。

「……まあいいわ。私はどこにいけないのかしら？」

綾那は少し不服そうな顔をして、俺と蓮華に背を向けた。

「とりあえず転校生なら職員室に連れて行けばいいのかな……」

「そう。ならそこへ案内しなさい」

「言われんでもする。お前ら2人を野放しにしてたら死人が出るわ」俺は2人の腕を引いて、群れるギャラリーのど真ん中を歩いて目の前の昇降口へ歩いた。

そして十数歩で自分の靴箱の前に着いた。

「これは？」

「靴入れるところ。」

蓮華の質問に一言で説明して、せっせと上履きに履き替えた。

「私はどうすればいいの？」

「どうなんだろう。土足厳禁だし、とりあえず浮いとけばいいんじゃないか？」

冗談でそういうと、2人は靴を脱いで、羽も使わずにフワツと10センチ程浮いた。

なんて奴らだ。重力無視するな。そして重力お前もだ、仕事しろ！しかしそんなことにももう心の中でしか突っ込まない。一々突っ込んでたら喉が潰れる。

「便利だなお前らは。俺も翼が欲しいね」

苦笑を浮かべて言う、2人はクスツと笑った。

今このシーンだけを見ると2人とも大人しくて可愛いのに、陰悪なムードで台無しにする……。これは悪魔とか天使とかの問題じゃなくて性格の問題なんだろうな。お互い負けず嫌いというかなんというか。

「さ、その職員室にいきましょ」

「あんたが仕切ってんじゃないわよ」

「ストップ！ それなら俺が仕切る！ 行くぞ」

全く油断も隙もない……。

「うわゝ！ ねえ、あの棒で玉打つ奴何？ 何やってんのあれ！」

「野球だよ。この世界のスポーツの1つだ」

「一々驚かないでくれる？ 同類と思われたくないわ」

蓮華達が見るものは全て初めてなのだろうか、廊下から見える物全てに反応し、目を輝かせて訊いてくる。

俺もそんな奴を見るのは新鮮で、説明していて気分がいい。特にルールも知らないが。

「あれはこの生徒なの？」

「うん。部活つてのに入ってるんだ」

「へえゝ。楽しそうねゝ。部活かゝいいなゝ」

何か入ればいい、と言いたい……蓮華達はヒトでない。だから部活は力の問題とかで無理だと思うんだな。本人に言うことは出来ないが……。

そういうところも俺がカバーしてやらんとな。

そんな事を考えていると、朝から生徒や先生が出入りして忙しそうな高等部の職員室前に着いた。

「ここまで来ればいいだろ？」

「ええ、ありがとう。また教室で会いましょ」

綾那は控えめな笑みを浮かべ、控えめに手を振った。

こいつら本当に情報科に来るのか……嫌だなあ。

「蓮華、いや、綾那もだ」

「なに？」

2人は声を揃えてこっちに向いた。

「心配だから行っておく。これからの学園生活のためにも喧嘩はするなよ？ 琴美と音羽にも伝えとけ」

腕を組んで忠告する。

「それは……このアホ天使次第」

「あ、アホ……？ 下等な悪魔が、」

「待て待て、それだよ。お互い挑発するな！」

2人の頭にチョップをお見舞いして指差した。

「高校には退学つてのがあるんだ。お前らの目的がそんなに重要なら、わかってるよな？」

渋々頷き、お互い横目で睨み合った。

先が心配だ……。

「書類とか色々あるだろ？ 後は適当に職員室でやれ。じゃあ俺は行くから」

「さんきゅ。また後で」

背を向けながら適当に手を振って、教室へ向かうために来た道を戻った。

非日常の開始（８）

蓮華と綾那を送ったのは何分前だったか、いつもより早く学園に着いてしまった俺は特にする事もないので窓際で目を半開きにして、太陽の日差しの暖かな毛布と風の子守唄を聞いてウトウトとまどろみと本眠の間を彷徨っていた。

寝不足の時、睡眠の中でこれが一番気持ちいいと思う。しかしこのまどろみと本眠の間から強制的に目覚めへ引っぱり出す者が現れる。

「おにいーっ！」

「ふんぐおー！」

俺の至福の一時は音を立てて崩れた。幼馴染の手によつて。

「おはよう湊……。お、お前のお陰で脇腹が元気になった」
しがみ付いて来る湊を離し、脇腹を抑えてうずくまった。

「あはは。おにい、お弁当作ってきたよっ」

突進のことには一切詫びを入れず、満面の笑みを向けて大きめの一段弁当箱を俺に突き出した。

「おお！ 本当に作ってくれたのか！」

「私は約束は絶対守るからねっ。但しおにい絡みの時だけ」

「つまり、ほとんど守らないってことだな」

「……あれ？」

幼馴染の天然ボケが出るとは思わなかった。

「そうそう！ アレからどうなったの？」

話を流すかのように次の話題。俺が湊を返してからのことを訊いて来た。

「お前になら話していいかな。あいつ等、人間じゃない」

窓の外を見ながら言った。

「ふうん……。でも、昨日のあの紅い目の女の子みたら薄々分かってたよ。おにいの血飲んでたもん」

そう言って湊はゆっくり席について、イスだけ引っ張って俺の真横に来た。

「それと、あいつはヴァンパイア。他の2人は狼女とヒトを魅了する悪魔」

「な、なんかおにいの家が凄いことになってるね」

「全くだ。その上俺の家に住み着くわ、転校してくるなんて言い出すわ、天使を名乗る奴は出てくるわで散々な一日だったわ」

「あはは。でも楽しそうじゃんっ」

案外驚くと思ったけど、そうでもないようだ。

「でもその悪魔ちゃん達？　なんでおにいの家に？」

「ぐっ！」

言えない。絶対にこれだけは言えない！

「ぐ？　おにい、何隠してるの？」

俺の素の反応に何を察したのか、凄くジトツとした目で俺を見ってくる。

「な、何も隠してない！　俺も何も聞いて・・・ナインダヨ」

手を高速で横に振り、全力で否定し、誤魔化した。

この幼馴染本当に鋭い。なんだこの鋭さは！どこで身につけた！俺は焦りながら片手で顔を隠しながら出来るだけ目を合わせないように努力した。

目を合わせたり、これ以上喋ったらボロが出そうだ……。

「あはは。まあいいけどね。おにいが隠し事するのはしゅっちゅうだもんね」

「しゅっちゅうってなんだよ。んで続きだが、そのお前の横の五つの席に4人今日来る」

「まあ話聞いた限り理解したよ。おにいが認めて家に住んでるってことはいいヒト達なんですよ？」

「ヒトではないがな。性格以外はちと問題あるけど、そこ除けばみんないい奴だよ」

そう言つと、湊は俺の顔を覗き込んで、ニコツと笑った。

「おにいが楽しそうに話すなんて珍しいこともあるね。槍でも降ってくるかな？」

「た、楽しくなんかねえよ！」

失礼なことを言いまくった幼馴染は席に戻って、ノートを開きだした。

勉強の復習でもするのだろうか。全く、相も変わらず何もかも力ンペキな幼馴染だ。

「おにい、私達いつまでもこうして喋れる関係でいられるかな？」

いきなり何を聞いて来るんだと思った。でも湊の表情を見ると、横から見ても分かるくらい物悲しい顔をしていた。叶と同じだ。

「当たり前だ。幼馴染なんだし」

「あはは……。そうだよな。ごめん変な事聞いて」

「お、おう？」

八時三十分。

ホームルームの時間がやってきた。そう、つまり蓮華と琴美と音羽、綾那が来る時間だ。

今の俺の心情は……。心配でしかない。

事情はまあ言い出したら沢山ある。まず、蓮華と音羽と綾那の翼、琴美の耳と尾。これは問題だと思う。まず質問攻めに会っただろうし、ヒトじゃないって事が一発でバレる。

そして知能。あいつらがどれだけ勉強出来てどれだけ理解できるか。高等部には退学がある、その事を考えると頭が痛くなるね。あいつらが頭がいいならいいが……。

最後に、俺の家に住んでることが分かったとして、その目的。蓮華達は黙ってるだろうが、綾那が言いそうだ。

くそう、心配しすぎて貧乏揺すりが止まらない。手汗が滲む。

「お、おにいうるさい」

「す、すすすまん」

動揺しすぎと言わんばかりに湊が苦笑を浮かべる。

落ち着けと思うほど鼓動が早くなる。

「遅れてすまん。ホームルーム始める前に転校生紹介」

教室に一步入った途端に担任の話が始まった。

そして、テレビで大物ゲストを呼んだかのようにドアの横に立ち、

拍手で蓮華達を迎えた。

キュッキュツと上履きを擦る音が複数聞こえ、4人の少女達が教壇に上がった。

ざわめく生徒達。理由は明白、さっき説明した俺の心配事のひとつだ。

「この人達は悪魔と天使だ。信じがたいが飛んでるんだから信じるしかないよな？」

ロマンに溢れた中年の先生が楽しそうに話を進める。

今更だが、こんな得体の知れない者をよく学園側が許可したもんだな。

「そういえば川越が今日飛んできたよな」

「え？ あいつの知り合い？」

うるさい黙れ。お前等には関係ない。

「まあ静かに！ 静かにしろ！ 自己紹介を頼む」

この中で明らかに一番うるさい先生が蓮華に掌を上に向けて差し出した。

さて、なんて自己紹介するつもりだ……？

非日常の開始(9)

ざわめく教室。一番左手にいる偉そうに腕を組んでる蓮華が一步前に出る。

頼むから余計なことを言うな。俺はそれだけを願って手を合わせた。

「先生も言った通り、私から横の小さいのまで人間じゃありません。魔界から来た悪魔です」

蓮華がそう言うのと、琴美と音羽は小さく頭を下げた。

「そして私は川越蓮華。ヴァンパイアです。でも、あるヒトの血しか吸いません。楽しい学園生活を送るつもりなので、普通の人間として接してください。よろしくお願いします」

ツンとして、少し笑みを浮かべながら自己紹介を終えた。あるヒトとは俺のことだろうな。

しかしあいつが敬語を使えるとは思わなかった。

自己紹介が終わると盛大な拍手があり、「可愛い」「カッコイイ」などの声が男女問わず聞こえてきた。確かに可愛いが、性格は腐ってるぞ。騙されるな！

「ん……？」

ってちよつと待て！自然すぎて思わず流すところだった。今「川越」って言わなかったか？いや、気のせいだよな？

蓮華が一步下がり、琴美が一步前に出て一礼し、口をゆっくり開く。

「私は琴美……苗字は川越……。お話は得意じゃない狼……。でもヒトは食べない……。よろしく」

琴美は尾を立て、無表情のまま自己紹介した。

尾を立ててるところから考えると、緊張してるみたいだな。相変わらず可愛い要素があるじゃないか。

っとまた流されそうになった！

あいつら川越って言ってるじゃないか！

お前ら偽名使うくらいなんだから苗字も考えてきやがれ！

「ん？」

俺の睨む視線に気付いたのか、蓮華が睨み返してきた。

おお、怖い怖い。

大きく溜め息をついて、常に160センチくらいを浮いている音羽に目線を向けた。

「川越 音羽です！エンプーサっていう悪魔なのっ。これからよろしくお願いします！」

一礼の変わりにぐるんと宙返しし、ニコツとあどけない笑顔を向けた。

しかし絶対小学生にしか見えないからか、周りが更にざわめきだした。ただ1人、幼馴染を除いて。

「おにい、私音羽っちと仲良くなれそうな気がするよ！」

「そうかい」

それならいつそのことお前の家に住まわせて欲しいね。今のところはなにも起こしてないけど、そのうちなにかしでかすに決まっている。

そして最後に天使綾那の番。正直、一番心配だ。

職員室前で蓮華達の目的を言うなと釘を刺すべきだったか……。

いや、いざとなれば俺が恥を覚悟して止めればいい！

俺は合わせていた手を握って、唾を飲んだ。

「私は天界から来た天使兵。でゆらん、げふんげふん……。か、

川越 綾那です。よろしく」

お前もかよ！

出かけた本名をごまかすかのように、すばやく俺の苗字を使いやがった！

「待ちなさい、なんであんたも川越なのよ！」

それに反応した蓮華が眉間にしわを寄せて前に出た。

「お、おだまりなさい。ヒロキの約束を忘れたの？」

「くっ……！とことん気に入らないわ！　なんで川越なのか聞いてんのよ！」

俺が一番聞きたいわ。

「はぁ……」

「おにい、止めたほうがいいんじゃない？」

「わかってるよ」

席を立ち、手を二回叩いた。

「なに！」

2人は俺を睨みつけるようにこちらを向いた。それに少し驚きながら言っちゃった。

「やめとけ。先生、こいつら席につかしてください」

「そ、そうだな。ほら、後ろの5つの席に自由に座ってくれ。出来れば詰めてな」

蓮華と綾那はまた喧嘩を途中で止められ、お互い不服そうな顔をして後ろへやって来た。

そして湊から右へ、自己紹介した順番に席についた。

「それじゃ、新しい一年B組で初めのホームルーム始めるぞー」

担任はやつと教壇に立って、出席簿を開いた。

「蓮華っち、これからよろしくね」

湊がさっそく蓮華に話しかけた。

「えっと……ヒロキの幼馴染だったわよね？」

「うんっ！湊って言うんだ」

「こちらこそよろしく。湊でいい？」

「全然OK！」

波長が合ってるなあ。まあ湊が絡みやすい性格なんだろうけど。
「川越」

先生の出席確認に挙手で答え、盛大な溜め息を吐いた。

「ヒロキも、これからよろしくね」

「ああ。ほどほどに」

五月上旬の火曜日。俺の学園に悪魔と天使がやって来た。

四季の学園創立者祭

蓮華達に来て、何事もなくもう二週間が過ぎた。

五月中旬、日本の気温はどんどん上昇して蒸し暑くなるばかり。

その気温二七度の四時限目。急遽、英語の時間がホームルームに変わったと知らされて俺達は担任の到着を待っていた。

「あっちいゝ。全く人間界はどうかしてるわ……あーもう！ イライラする！」

窓を全開して、干されてる布団のごとく教室から身を乗り出して蓮華が叫ぶ。

「お前がそうしてるから風も入ってこないから余計に暑い。降りろ。席に着け」

更に俺がぼやくと、湊から綾那まで全員大きく頷いた。

しかし、今日だけ異常に暑い。温度計を見ると、室内気温三十度手前。本当に五月かと疑わざるおえないような気温だ。その上クーラーも稼動しないこの教室、イライラするのもわからんでもない。ただ、お前以上に俺達がイライラしている。

「本当に暑いゝ。先生なにしてんのかなあ」

「あの中年教師、後五分しても来なかったら眉間を打ち抜いてあげるわ」

音羽と綾那がぼつんと呟いた。

「そんな事いうな。余計に暑く感じる。そして不吉なことも言うな」
久々の暑さ到来に、どう対処すればいいのやら。とにかくみんな胸倉を掴んで仰いでいる。

「もう……我慢出来ない……」

「琴美？」

フラッと席から立ち、せえせえと息をしながら、窓にぶら下がる蓮華に近付く。

「退いて……」

琴美は何を思っただのか、そう囁くように言って蓮華を窓から突き落とした。

「ぎゃああああああああ！」

「わああああああああ！」

俺と湊、そしてクラス中が大声を出して叫んだ。

「馬鹿か！ 何してるんだお前は！ 何故殺した！」

肩を揺らしながら、ぼけつとしてる琴美に問い詰めた。

「大丈夫……翼……あるから」

「へっ？」

窓の外を指差すと、窓にぶら下がった形のまま蓮華が羽ばたいて浮いてきた。

ああなるほどね。クラス中のみんながそう思っただろう。

でもヒヤッとしたせい、体中が少し涼しくなった。これも計算尽くだったのか？

「涼しい……」

こいつらに限ってそんなわけないか。

「すまんすまん。遅れたー」

その出来事の後すぐに汗まみれの担任が苦笑を浮かべ、手ぶらで教室に入ってきた。

一体どこでなにをしていやがった。俺達をこんな人口蒸し器に入ればなしで。

「急遽ホームルームにしたのは訳があつてな。創立五十周年を急に祝おうとか学園長が言い出して、創立者祭を行うことになったんだ」

担任は溢れ出る汗を肩で拭きながら、黒板に書き殴ったような字で「創立者祭」とでかでかと書いた。

「創立者祭って？」

俺の一つ前の窓の外から顔を出して、蓮華が担任に訊いた。

もはや俺は何も突っ込まんぞ。

「そうだな、文化祭と同じものと思ってもらっていい」

蓮華の異常な場所にも動じず、担任は答えた。

文化祭か……。そう聞くとやはり楽しくなってくるのが学生の性だ。

「創立者祭は六月一日だけだが、二週間ある。それで今からうちの出し物を決める為にこの時間を設けたのだ」

服の中に頭を突っ込んで汗を拭きながら、この時間の説明を終えた。

てかどれだけ汗掻いてるんだよ。

そして静かだった教室は、「文化祭」というワードを聞いてざわめきだした。

「文化祭だつて！ 叶ちゃんの所も何か出し物とかするのかな？」

その中でもテンションがピークになつてる湊がバシバシと俺を叩いて聞いてきた。

「さあね……。なんか最近あいつおかしくて、ロクに話してない」

「えっ？ それは何故に？」

「いや、知らんけど俺を避けてるみたいなさ。調度蓮華達が転校して来た辺りか」

「ふーん」と湊は考えるように言つて大人しくなった。

事情を聞いた所、特に悪いことしたわけでもないのに何か俺が悪い子としたみたいになつてるんだな、これが。

そんな事を話していると、クラス委員長が前に出て出し物の提案を集めたした。

ここは大人しく手を上げずに、誰かが提案したものに任せよう。

もちろん多数決でも手は上げん。

十五分後。

色んな提案が集まり、黒板にビッシリあつた提案をまとめていくと、最終的に七つほどにまとまった。

だんご屋、メイド喫茶、焼きそば、演劇、漫才、模擬店、悪魔喫茶……。

悪魔喫茶。とても重要ポイントだと思うので二回言った。誰だこんなアホみたいな提案をした奴は。

俺はジトツとした目をクラスの男子共に向けた。

明らかに蓮華達を使おうとしてる。

とりあえず、面白そうなものを多数決で決めて、そこからどんな内容にするかを決めるようだ。

「あんたどれにするのよ」

まだ窓にいるヴァンパイアが顔だけ出して聞いてきた。

「手は上げないつもりだった。が、悪魔喫茶には絶対上げん」

それだけ言っと、多数決が始まった。

その結果がこれだ。

だんご屋……二票。

その他……0。

そして、悪魔喫茶に「正」の字が沢山書かれている。

全く……何かがゆがんでいる！

四季の学園創立者祭(2)

ふざけた出し物が決まりそのまま四時限目終了した。

俺達御一向は一足早く学食に来て、窓際の丸テーブルを囲んだ。

俺は湊の弁当を、琴美と音羽と綾那は食券を買い、蓮華は俺の血を……。

因みに湊は叶と飯食べるとかどうとかで、付いて来なかった。珍しいこともあるもんだ。

そして重要な「悪魔喫茶」の内容はこうだった。

蓮華、琴美、音羽を中心にみんな悪魔っぽい格好をして普通の喫茶店をする。それだけ。

しかしそれは、蓮華達が悪魔ということが、最悪この島全体に広まることになる。最悪本島にも知れ渡る。

なんだか改めて考えると胸糞悪いね。

「しかしまあ、ふざけてやがるよな。何が悪魔喫茶だ」

ガツガツと湊の弁当にがつつきながら呟いた。

「いつまで言ってるのよ。決まったもんは仕方ないでしょ？」

テーブルにもたれて、リズムカルにパンパン叩く蓮華が言った。

「んでもお前らが見せ物になるんだぞ？ 今から講義しても間に合うんだぞ？」

「音羽全然気にしないよつ。だってお祭り事だし、みんな悪魔の格好してくれるみたいだしっ！」

「私も……楽しそうだし……大丈夫」

悪魔達は全員一致で問題ないと言い切った。

「私は反対ね。私はどちらかと言うと天使喫茶にして欲しかったわ」
学食の具無しおにぎりにぎりに噛り付いて、綾那だけ手を上げて反対した。

そついう問題じゃあないんだけどなあ。

俺は一口サイズの唐揚げを飲み込んで、

「とにかく、俺はお前らが見せ物になるのは嫌なんだよ。島の外から人も来るかもしれないのに……。あんまり知られたくない」

そういうと、悪魔3人は鳩が豆鉄砲を食らったような、きょとんとした顔を俺に向けた。

「あれ〜？ ヒロキ君もしかして私達を独り占めに〜？」

白々しいニタニタした笑みを近づけてきて尋ねてきた。

「そ、そんなわけないだろうがっ！　うちにマスコミとかそんなアホみたいな奴が来たら怖いから言ってるんだよ！　勘違いすんな！」

「全面拒否……怪しい」

どんどん赤面してくる顔を隠しながら四角に固まったご飯を流し込むように頬張った。

顔が下がってたのか、思い切りからかわれた。しかしどうしてあんなに必死になって否定したんだか。別にそうでもないのに逆に変に思われても仕方ない。

「あんたがそんな独占欲持ってくれたら私達の目的ももうすぐって事なのかもね」

「そんなわけないじゃない。前面否定ってことはそれだけあなた達の拒絶を意味してるのよ」

どうしてそういう解釈になる。拒絶しているわけでもない。

「フン、まあ決まったもんは仕方ない。あんまし乗り気ではないが盛大な鼻笑いをして、半分くらいになった弁当にまたがつついた。『そういえば、あなたの妹さん最近見ないわね』

おにぎりをやっと一個平らげた綾那が、横目でこちらを見ながら言った。

「お前も言うか」

「一応、気になって。あなたとは仲よさそうだったもの」

俺と叶が仲いいだと？ 冗談じゃない。誰があんな自己中妹なんかと。俺は周りからそんな目で見られていたのか。

「んー、確かに最近家でも喋ってないわね」

「音羽が話しかけてもあんまり聞いてくれないしね〜」

蓮華と音羽がうーんと悩み、俺に目を向ける。

「な、なんで俺何だよ。俺はなんもしてない！」

「誰もあんたの所為だなんて言ってないわよ」

「どいつもこいつも、俺が妹と仲良くなきゃそんなに心配することか？」

そう言って、残りのおかずを口に掻きこんで弁当を布で包んだ。

やばい、俺の一言で空気が重くなった。カムバックさっきの空気！
「話変わるけど……」

モグモグとハンバーグ丼を食べながら、救世主琴美が控えめに手を上げて言った。

「ヒロキの……衣装どうする？」

「衣装？」

コクンと頷き、ハンバーグを頬張った。

「ああ、そうだったわね。悪魔喫茶の衣装よ。琴美が手芸部と協力して作るらしいの。あんたもよ、綾那」

「何故私も？ 私は天使なのよ？」

蓮華はまたニタニタ笑みを浮かべ、ピクピクと顔を引きつる綾那に肩を回した。

「っていつか琴美にそんなスキルがあつたとは初耳だ。魔界でも万能なお姉さんだったんだな。」

「んまあ俺はなんでもいいよ」

適当にそう答えると、蓮華はジトツとした目をして近付き、

「なんでもいいならトイレットペーパーぐるぐる巻きにしてミイラ男にするわよ」

「い、いやそれは嫌だ……」

「でしょ？ だから自分で決めなさい。今決めなさい！ メジャーな悪魔とか人間界でも有名でしょ？」

自分で決めるといわれても、俺はそんな悪魔とかに詳しくはない。ヴァンパイアとか狼男とか、フランケンシュタインくらいか。これくらいしか浮かばないね。

「おにいちゃん音羽と一緒にエンプーサにしようよっ！」

「ほう。エンプーサは男も居るのか？　ってそりや当たり前か。んじゃそれにするかな」

蓮華にそう言うと、更に顔を近づけて来てこう言った。

「エンプーサの男は男でも、ほぼ音羽みたいに可愛い系の男しか居ないの。あんたには無理！」

決めろといったくせに拒否しやがる。どうなってやがる。

「じゃあ……ライカンスロープ」

「ヒロキに耳と尾は似合わないからダメ」

溜め息を吐いて、ライカンスロープも却下する。

俺が溜め息吐きたいわ。何ならいいんだこいつは。ヴァンパイアとでも言う気か？

「じゃあお前は何かいいと思うんだよ」

その言葉を待ってたと言わんばかりに、満面の笑みを浮かべて、
「そうね、ヴァンパイアとか、ヴァンパイアとか、ヴァンパイアとか！」

本当に言いやがったこいつは！

「お前、俺をヴァンパイアにしたいだけだろ」

「気のせいよ。まああんたはヴァンパイアで決定ね。それで次はあんた」

何故か俺の許可を得ずにヴァンパイアに決められ、次の被害者が指名された。

「わ、私は天使よ？　悪魔の格好するなんてこの清らかな真っ白の心に黒い斑点がつくわ」

眉間にしわを寄せて蓮華を睨んだ。

確かに綾那が悪魔の格好するのはなあ……。ちと可哀想というかなんと言うか。

「堕天使とかよくない？」

プチッ。

蓮華がそう気軽に言うと、糸が切れたような音がし、綾那が立ち上がった……。

「あなた……それは私に対しての侮辱ととっていいのかしら？」

ドンと強くテーブルを叩き、蓮華を今までにない鋭い目つきで睨みつけ、回りの注目を集めた。

おいおい、ここまで来て問題を起こすつもりか？

「なに？ やる気？」

挑発するようにニヤリと笑い、蓮華も立ち上がった。

ここからまた口論が始まるんだろうなあ。これはまたいつでも止めれる準備を、

「失礼するわ……」

ギリツと歯を食いしばり、綾那は宙に浮いて食堂を出て行った。

「へっ？」

気の抜けたような声が俺と蓮華から漏れた。

いつもこのパターンだと、この次に綾那の毒舌で続くと思ったんだが……。どうしたんだ？

「フン、何よあいつ……」

蓮華もいつもの口論が続くと思っていたのか、腑に落ちない表情を浮かべて座った。

四季の学園創立者祭(3)

綾那が食堂を飛び出してすぐ追いかけた。しかし、やはり翼があるのとないのとの違いか、学園中どこを探しても見つからない。

あるいはもう学校から出たか。

いつもとは違うあの態度、蓮華に堕天使なんて言われて相当ショックだったのかね……。

俺は二段抜かしで階段をどんどん上がり、五階をさらに上がり、立ち入り禁止と書かれた看板をひよいと跨いで薄暗い屋上前の扉前に立った。

もう昼休みの時間も終わる……。ここにも居なかったらもう諦めて戻るか。

軽く上がった息を数回深呼吸して元に戻し、ドアノブを握って捻る。

ゆっくりドアを押すと、目を細めてしまっほどの強風が襲い、視界の中にフェンスにもたれている白い翼を広げた天使が写った。

「はぁ。ここに居たか」

安堵の息を漏らし、小走りで綾那の元へ近付いた。

「……どうなさったの？」

そう言って少し睨むかのように、横目で俺を見た。

「ど、どうしたもこうしたもあるか。お前を探してここまで来たんだろ。もうすぐ昼休み終わるんだからさっさと帰るぞ」

俺の言葉に綾那は少し溜め息をついて、

「今はなんだかそんな気分じゃない」

くるんと周り、フェンスの網目に指を一本ずつ入れて握り締めてなにやら思いつめたような表情をして校庭を見下ろした。

なんだろう、自殺をしている奴を目の当たりにしてるようだ……。

キンコーン、

昼休み終了のベルが響いた。

これでもう五時限目の授業の遅刻は確定だ。

「本当に、お前らは散々俺を引っ張り回すな」

もう遅刻してもいいやなんて思いながら、大きく溜め息を吐いてフェンスにもたれかかった。

「それならさつさと教室に戻れば良いじゃない。別に誰も頼んでないわよ」

少し棘のある言葉に動じず言い返す。

「うるさい。そんな顔してる友達が目の前に居るのに戻れるほど白状じゃないわい」

「フン……」

綾那は再びフェンスに背を向けて、腰を下ろした。

「何でいきなり怒ったりなんかしたんだ？」

同じように腰を下ろして、同じ目線の高さで理由を訊いた。

「あなたには関係ない……」

「ふんむ」

もつともな事だ。これは少し長期戦になるかな。

「それでも、友達じゃないか。少しくらい悩み話位してくれてもいいんだぞ？ 蓮華絡みなら俺が何とか言ってやる事だって出来るしさ」

「友達友達って、私はあなたを守る者でしかないのよ？」

「そんな変わらんよ」

「勝手ね……」

思いつめた表情から、少しムツとした表情をして俺を見た。

しかしそのまま何も話さない……。息をしているかもどうか分からないくらい静止して俺を見続ける。

「……」

「……」

目を合わせたままお互いに沈黙が走る。しかし俺が何を言っても

言いそうにないし、とにかく待つしかない。

それから二分程過ぎ、綾那が観念して水を向ける。

「わかった。話すわ」

溜め息混じりに呟いて、上を見上げ、語りだす。

「私が墮天使と呼ばれて怒った理由、それは墮天使って言葉は天界で一番の侮辱の言葉なの」

「なるほど。怒るはずだ」

蓮華は知らなかったんだろうけど……。

「墮天使というのは神に反逆したり、悪魔に殺されたり、汚らわしい行為をしたりするとなるもの」

「汚らわしい行為？」

「貴方みたいなのが夜な夜な読む物に似てる行為よ」

なるほど、理解した。しかしそれは俺に対しての侮辱ではないのか？

「それでね、私は平気で暴言言うし、性格はこんなだし、天界の他の天使達にも墮天使なんて言われたりしたわ。悔しいけど、自分でもそう思うしね」

「……」

「それで、アホ悪魔にあんなこと言われて……ちょっと思い出して

、

下唇を噛んで言葉を止めた。

「ごめんなさい。こんなしょうもないことで貴方に心配をかけて……」

……

綾那はごまかすように、目尻に涙の粒を乗せて苦笑を浮かべた。

驚いた。いつも強気で蓮華に色々言われても勇ましいくらいに反論してた綾那にこんな一面があるだなんて。普通に人間の女の子みたいじゃないか。

「どこの世界にもいじめなんてものはあるんだな。天界が聞いて呆れるわ」

「そうね……」

さり気なく涙を拭って、クスリと笑った。

「そうだな、言いたいことが二つ」

俺は立ち上がって、ビシッと二本指を立てた。

「ええ、どうぞ」

「蓮華は悪意がなかったんは分かって欲しいんだ。あいつもなんだか心配してたような素振りしてたし、お前と少しでも仲良くなれるように衣装の事も訊いてきたんだろっし」

「蓮華が……？」

俺が大きく頷くと、綾那はまた少し思いつめた顔を浮かべた。

「それと、お前は確かに言葉遣いとか悪い。ちよつと血の氣が多い
というか……」

「悪かったわね」

「でも、淒く可愛いじゃないか」

「えっ？」

「真っ白い髪、翼、綺麗な青い眼。顔立ちだっていいしさ。俺はそんな天使が1人くらい居てもいいと思うぞ。ギャップ萌えて奴だ」
ビシッと指を差して言うと、少し驚いている綾那の顔がどんどん緩んでいく。

「ふふっ。面白いこと言うわね」

そして、口元に手を当てて控えめにクスクスと笑い出した。

「正直に言っただが……。まあ笑うくらいまで元氣になってくれたととろっ」

俺もケラケラ笑いながら、また綾那の横に座った。

「次そんな事いう奴が居たら俺の鉄拳をお見舞いしてやんよ」

「ありがとう。でも、人間ごときにやられるほど天使は弱くないわよ」

スクスクッと笑いながらそう言った。

どうやら大分元氣になってくれたみたいだ。生まれ持ったこのアホな性格がこんな所で役立つなんて思わなかった。

「さて、どうする？」

携帯の背面ディスプレイの時計を見せて尋ねる。

「そうね……この時間はサボりましょ。ここは涼しいし、誰も来ないでしょ?」

「天使とは思えない言い分だな」

「ギャップ萌え、でしょ?」

控えめに微笑み、俺の手に手を重ねた。

「そうだな。ギャップ萌えだ」

アホらしい会話に、またお互いケラケラと笑い出した。

四季の学園創立者祭(4)

五時限目真つ最中、学園の奴らは黙々と勉強している中、すっかり元に戻った綾那と俺は涼しい屋上でとにかくだべっていた。というよりだべるしか選択肢はなかった。

大きな声出して暴れたりしてて、先生に見つかったら特別指導になりかねんからな。こうして喋ってるしかないのだ。

「そっいえば」

ふと思いつき、ピツと綾那を指差した。

「なにかしら？」

クイツと眉を少し上に上げて、首を五度ほど曲げた。

「綾那がここに居る理由はさ、蓮華達が俺の……んまあ、それを阻止するんだろ？」

何を照れてるんだか、曖昧な感じでそう訊くと、綾那は小さく頷いた。

「それはどうすれば成功なんだ？ やっぱり蓮華を殺したりとか……」

「そういうことね。でも、貴方に全くその気がなければ自然と大丈夫だと思っただけ。流石に悪魔でも逆レイプなんて真似はしないでしょうし」

予想外の答えに思わず噴出して、身震いをしてしまった。

初めてこんな言葉を使う奴に会った。

「ま、まあそれは置いといて。……目的が終わったらどうするんだ？」

尋ねると、綾那は上を見ながら、

「そりゃ天界に帰るかしら」

「やっぱりそくだよ……。蓮華達ももし目的が達成したら魔界に帰るのかね」

そう言っつて釣られて空を見上げると、飛行機が音を立てて雲を作

り出していた。

特に変わらない、メンバーが増えただけぐらいの二週間だったが、消えたらどうなるんだろう。つい考え込んでしまった。そりゃ帰るわな、アホか俺は。

綾那は急に俺の顔を窺った。そしてクスリと笑みを浮かべて、「寂しいの？」

そんなシリアスな顔をしていたのだろうか。俺は右手で顔を引っ叩いて言った。

「ん、んなこたない。ただ、少し静かになるんだろうなって思っただけだ。ちよつと前の平凡な生活じゃ満足出来ないだろうし」

そう言つと綾那は腹を抱えて更にクスクスと笑った。

「正直に言えば良いじゃない。あなたみたいなのを、ツンデレって言つんでしょ？」

「馬鹿か！ 誰がツンデレだ！ 俺がいつデレた！」

頭をガシツと驚掴みにして、指の間から睨みつけた。

「恋愛バイブル第五章、貴方のそういう素振りをするのはツンデレ。そう書いてあつたわ」

五本指を立てて、からかつてる様なニヤリとした笑みを向けた。

「ち、違うね。ただ単純に、お前らが目的達成して元の世界戻つたら寂しいだけだな、」

「はい、認めた」

ハッ！

くそう。完全の奴のペースに乗せられた！

「……まあ、忘れてくれ」

綾那を驚掴みから解放し、大きく溜め息をついて顔を抱えた。

「でも考えてみなさい。貴方が蓮華達にその気を起こさなければ、蓮華達はずっと貴方の家に住み着く、私もそれを止める為に貴方の傍に居る。そうでしょ？」

優しい笑みを浮かべて、ポンポンと肩を叩いた。

「そうだけどさ、いつまでもいつまでも拒み続けたら蓮華達も呆れ

てくるんじゃない？」

「そんなこと知らないわよ」

放棄しやがったな。

「適度に相手してあげればいいんじゃない？ 避妊すればいい話じゃない」

「馬鹿か！ よくも堂々と人前でそんな事が言えるな」

やはり天使とは思えない発言をしはるではないか。でも、綾那なりに俺の望んでいることを叶えようとして一つの案を出してくれたのだろうが……。やはりヘタレの俺にはそんなこと出来るわけがない。

「はあ……。まあいつになるか分からないし、その時考えればいいか」

グツと背筋を伸ばして、ポケットから携帯を取り出して時間を確認する。時間はまだ少しある。だが話のネタも尽きてきたし、これ以上なにをしろというんだ。

「あ、私も訊きたいことがあるわ」

ポンと手を叩き、立ちあがった。

「どしたんだい？」

訊き返すと、くると軽く横に一回転した。

「私はなんの悪魔の格好にすればいいかしら？」

「結局するんだな」

「ええ。クラスの出し物は決定したし、蓮華の質問に堕天使以外で答えないといけないから」

再び訊かれるなんて思いもなかった。だから俺はそういうのに詳しくないんだよ！

「俺に訊くな。蓮華だってもうあんなこと言わないさ。だからあいつと衣装部に全部任せれば良いよ」

顔の前で手を振って答える。

「それでいいかしらね……」

湊は少し心配する表情を浮かべて言った。

「ああ。それで、」

そうか……。馬鹿か俺は、蓮華は言わなくても他の生徒が知らずに言ってしまうかもしれないのか。何て浅はかな考えだったんだ。

「いや、スマン。今の無し。ちゃんと考える！」

「気にしないでいいわよ。どうせ蓮華以外の人が言うとも思っただんでしょ？」

鋭いな。全くその通りでございます……。

俺は少し反省しつつ、アホな自分に溜め息をついて謝った。

「……でも、貴方はこんな私を天使として褒めてくれた。たかがお遊びなんだし、この際墮天使にでもなんでもなつてあげるわ」

ワンテンポ遅れてそう言い、俺の前に際どい角度で屈んでニコツと笑った。

「そ、そうか？ でも無理すんなよ？」

綾那は大きく頷いて、

「1人でも、ありのままの私を天使として見てくれている人が居るなら、墮天使なんて言われても全然なんともないわ」

笑顔のままそう言って、フワツと翼を広げて俺を包むように覆った。

四季の学園創立者祭(5)

五時限目終了のチャイムと共に、ダッシュで屋上前から急いで階段降り、立ち入り禁止看板を跨いで五階へ戻ってきた。

「よし、見つからなかったな」

少し早く脈打つ胸を押さえ、小さくガッツポーズをした。

それを見て綾那は、半開きの目で俺を見ながら、

「そんなにコソコソするものなの？」

「当たり前だ。立ち入り禁止の看板あるだろ」

看板を親指で差して、この階の真ん中辺りにある情報化B組へ向かって歩き出した。

そうか、綾那は空から行けるのか。便利な奴め、俺がどれだけ頑張って屋上に来たか！

「なんだか不服そうね」

「うるさい。さっさと戻るぞ」

廊下に出てる生徒を避けながら、少し歩くペースを上げて教室の後ろ出入り口の前で止まった。

そして出来るだけ自然に、空気より自然に鼻歌を歌いながら、軽く力を入れて教室のドアをスライドさせた

カラカラ

ドアが半分開いたのと共に、ほぼクラス全員がこちらを向いた。

「川越だ」

「どこ行ってたんだ？」

おう……何てバッドタイミングなんだ。

がやがやと騒ぎ出すクラス。それを更に際立てるように綾那が俺の横からひよこつと顔を出した。

「早く入りなさい。邪魔よ」

「お、おう」

綾那に押されて、ナイフのごとく突き刺さる視線を浴びながら自分の席についた。

休み時間じゃないのか？もしかして授業が延びたのか？

俺は恐る恐る前を見た。

しかし前には蓮華が立っていて、黒板にでかでかと汚い字で「悪魔&天使喫茶」と書かれていた。

「何やってたのよあんた達！新しい出し物の会議始まつてるのよ」
「チョークを握り締め、そのチョークで俺をビシツと差した。」

「す、すまん。だが全く展開が理解できないのだが……」

こめかみを押さえて、黒板に書かれた意味を理解しようと頑張った。

しかし、それを理解する前に音羽が、

「蓮華ちゃんかね、いいんちょにお願いして、綾那ちゃんの為に悪魔喫茶から、悪魔&天使喫茶に変えようって言ったの」

「お、音羽！それ内緒って今さっき言ったでしょーが！」

ニコニコ説明する音羽の額に、赤面した蓮華が投げたチョークが物凄いスピードで当たって砕けた。

「あいたたた……。ううゝおにいちちゃん」

「……それまたどうして？」

涙を滲ませる音羽を軽くスルーし、蓮華に訊く。

「こ、このアホ天使に似合う衣装が無いから、天使のままで悪魔喫茶に参加させるのはあれだし？　こういう形にしてあげたんじゃない」

腕を組んで、フンと鼻で笑って言った。

やっぱり蓮華も相当気にしていたみたいだな。悪魔のクセに優しいところあるじゃないか。

ニヤニヤ笑いそうな所を抑えて、綾那に目を向けた。

「だってさ、堕天使にならずに済みそうだぞ」

「なによ」

綾那は白い肌を朱色に淡く染めながら、ムツと俺を睨んだ。

「まあ悪いのは蓮華だけど、礼くらい言ってもいいんじゃないかい？」

そう言うのと、綾那は不服そうな顔で蓮華を横目で見て、大きく溜め息を一度吐き、

「……ありがとう」

一言だけそう言っで、再び視線を俺に戻した。

俺は頷いて、流れるように蓮華を見た。

「……フン！　じゃあ続きするわよ！　悪魔と天使喫茶なんだけど衣装が　、」

蓮華は新しいチヨークを握り、新しいクラスの出し物の内容をテキパキと纏め始めた。

お互い素直じゃないな。しかし、そこが面白かったりする。いつの日か悪魔達と天使が笑い合ってるシーンが目に浮かぶね。

抑えてたニヤニヤを見られないように俯いて解放した。いいことをしたもんだ。ちょっとおせっかいだったかもしれないが……。

「そのニヤニヤして気持ち悪いの、あんたは悪魔だからね」

「う、うるさい！　さっさと進めやがれ！」

六時限目、創立者祭に向けて準備が始まった。

四季の学園創立者祭（6）

ヴァンパイアと天使の友情を見たのはもう一時間ほど前だったか、六時限目を終えて悪魔3人と帰路に就く。

「今日も」色々と大変だった。

自分の意思だが喧嘩を解決させる為に努力したし、変な出し物の手伝いさせられるしで。

後者は少しの間続くかもしれないが……。

しかし何かが引つかかる。何かが足りないというかなんというか。「どうしたのよ、アホみたいな顔して」

「アホとはなんだ。いや、ちと今日は色々とかかな……何かが足りないというか」

そう言つと、蓮華はパチンと指を鳴らして俺のあごの前に指を向けた。

「湊よ。あの子も昼休み急に消えたのよ。全くあんたといい幼馴染といい、あんたの周りにはロクな人間が居ないのね」

悪魔が何を言うか。だが確かに昼休みから湊の姿を見ていない。叶と一緒にだった筈だが、何か問題でもあったかな？

弁当箱も返してない。洗って明日返えさないとな。

そんな事を決意し、俺達は学園と家の調度真ん中辺りにある並木道に入る。

「んで、あんたさ」

並木道に入った途端、蓮華の足が止まった。

「どうした」

「五時限目、綾那と何を話してたのよ」

それだけ訊くと、スタスタと俺の前に出て立ち止まった。

「何を話したかって聞かれても、蓮華にキレた理由とか色々……人生相談って奴か」

少し違う気もするが同じようなもんだろ。

蓮華はあからさまに疑うような反応をして、周りを少しキョロキョロして言った。

「天使は居ないみたいね。なんか、あいつずっとボーっとしておかしかつたのよ、さっきの時間ね」

「そうか？ 俺から見たらいつもと変わらないようだったけど」

「なんかしたんじゃないでしょうね？」

「俺がそんなことする人間に見えるのかお前は」

3人は大きく頷いた。蓮華だけでいいのに何でお前たちまで頷いた？俺がそんな奴ならお前らの目的は三日でなんとかなるわ！

「と、とにかく！ 俺は何もしてないし、綾那も別に普通だった！ 蓮華を押し退けて前に進んだ。」

「まあ私にとっちゃ、天使が大人しくなってくれば目的はサクサクいけるから問題ないんだけどね」

「あのなあ……、前も言ったけど俺はお前らの目的に應える訳にはいかんのだよ。たとえ世界が違ってても俺の遺伝子がどんどん広まるって思うとゾツとするわ。お前は俺を落とすといったが、俺は間違ってもそんな目的を持つ奴になんか好きになるわけない！」

裏切られたような表情をして、悲しげな目で俺を見る。

「ちよつとそれ…… どういうこと！？」

後ろから叶の怒鳴り声が響いた。

「いや、だから俺は蓮華達の、ん？」

顔が固まり、ロボットのようなゆっくりした動きで上半身を回した。

俺達の数メートル後ろ、そこには鞆を抱き抱えて哀しい瞳で睨む叶の姿だった。

「兄貴の遺伝子って何？ 蓮華さんたちは何で家に来たの？」

スタスタと結構なスピードで俺達に近付いてくる

やばい、何か言い訳を考えると。叶がなっとくするような説得力のある言い訳を考えるんだ！

俺の頭は叶が近付いてくる三秒以内に色々なことを思いついた。

えっと、実は俺と同じ遺伝子を持ったクローンを作る為に蓮華達は魔界から派遣された研究員で、俺の生活や知能などを調べに来た……。

馬鹿か！そんな言い訳が通じるわけがないだろうが！

しかし本当のことなんて妹に言えるか？俺の子供を作る為に蓮華が家にいるなんて言ったら完全に親父に報告される！

俺は蓮華に目を向けて助けを求めた。

だが蓮華もどうにかしろと言わんばかりの助けの目を向けている。

「ねえ、兄貴教えてよ」

一步の距離まで近付き、問い詰めてくる。

「えっと……それはだな」

ええい！もうどうにでもなれ！バレなきゃいい！

「お前が好きだ！」

叶の肩を掴んで叫んだ。

俺達を含む、周り下校生徒達の空気がエベレスト山頂のごとくマイナス三十五度ぐらいに凍りついた。

「……は、ははははははあぁ！？」

しかし目の前の妹は真夏のサハラ砂漠のごとく五十度ぐらいにまで温度を上げていた。

「お前が五年前から好きだったんだ！」

「な、何言ってるのよこのクソ変態愚兄！」

小さな平手が勢いよく俺の左頬から口直撃し、頭が跳ね上がり、そのまま尻餅について倒れた。

「本当にアホなの！？ 時と場合とムードってのがあってしょうがない！」

赤面した顔で大きく怒鳴って全力疾走で並木道を走って行った……。

そして数秒後、周りが常温になると通り行く学園の生徒達は俺を凄く痛々しい目で見ては通り過ぎていった。

「ナイス……ファイト」

琴美が小さく拍手しながら呟いた。

「ありがとう。しかしなにか大事なものを失った気がする」
頬を摩りながら立ち上がった。

しかし、ここまで来るともう隠し通せないな……早く何らかの対策をしないと。

四季の学園創立者祭(7)

これほど家に帰りたくないなんてあったらどうか。俺は家の門前で溜め息を吐いて足を止めた。

叶に変な疑いをかけられた以上、さっさと言いつけを考えて話さないと親父に連絡入るのは時間の問題だ。

「早く入らないと……衣装の準備出来ない……」

琴美がボソツと呟いた。

「なら叶が納得する理由を考えてくれよ」

更に溜め息を吐いて、ドアノブを握った。

……鍵が掛ってる。叶の奴帰ってるくせに閉めやがったな。

学ランのポケットに手をつ突っ込んで、家の鍵しか付いてないキーケースを取り出した。

「音羽が叶ちゃんを魅了して、質問させないようにしようか?」

「根本的に解決方法が間違ってる」

人の事言えないが、音羽が女を魅了するとなるとなんだかいやらしくなる。いや、それはそれでいいんだが……もうめんどくさい。

鍵穴に鍵を突っ込み、右に九十度回して鍵を開けた。

「どうすんのよ。叶のことだしどうせまた聞いてくるわよ?」

「どうするもなにも、とりあえずは話してみるさ」

呟くように答えて、ドアノブを捻りドアを引いた、が、十五センチほど開いて止まった。

「おおっ!?!」

チエーンが掛っている。そこまですますか妹よ……!」

「あいつ……どこまで質問を追求してくるつもりだ?」

諦めて一度ドアを閉めた。

ここまですると俺の方が怒りたくなるわ。だがこれは本当に叶を納得させないと入れてもらえそうにないということか……。

「はぁ……、どこまでツイてない日だ。最近こんなのばかりだぞ」

反対のポケットから携帯を出し、叶に電話をかけた。

（おかけになった電話は、電波の届かない場所か、電源が入っていない可能性があります）

更に大きく、今日最大の溜め息を吐いた。

こうなったら大人しく投降するしかないのか、俺は頭を抑えて考えた。

すると、それを見ていたライカンスロープが動いた。

「……退いて」

相変わらず無表情の琴美が俺を軽く押し退けて、ドアの前に立ってドアをチェーンが伸びる範囲まで開いた。

「これくらいの鉄なら斬れる……」

チェーンを数秒見ると、そう呟いて一旦ドアを閉めた。

そして俺の許可をもらうのを待っているのか、体ごと俺に向けて、黄色い瞳で見つめる。

「そんなの斬って直せるのか？」

「夜なら可能……」

コクンと頷き、再び黄色い瞳で見つめてくる。

「よし、なら斬っていいぞ」

数秒考えてピツとドアを指を差すと、琴美は再び頷いて尻尾を大きく振り出した。

「蓮華……ドア抑えてて」

「はいはい」

琴美にそう頼まれた蓮華は肩を竦めてドアを開いた。

俺は自然に三歩後ろに下がって琴美の様子を見る。一体何が始まるんだ？

琴美は左腕をし字型に曲げて、目の前に拳を握り締めた手を持ってきた。そして目を瞑って一気に手を開く。

するとなにが起こったのか、数秒前の琴美の腕ではなかった。

指先から肘まで真っ白な毛で覆われ、人差し指から薬指までナイフのような銀色の刃に変わっていた。そして、ピンク色の肉球。そ

の腕の姿はまるで猫……いや、狼だ。

なんだあれ、かつこいいのに可愛いじゃないか。

「あれが琴美ちゃんの武器だよ」。蓮華ちゃんの鎌のようにね」

親切にも音羽が説明してくれた。

「な、なるほど。あれでざっくり斬るわけね……」

もう慣れたのか、色々吹っ切れたのかももうあんまり驚かなかった。手を獣化させた琴美は指を一本立てて、チェーンの真ん中辺りに振り下ろす。

するとドアを引っ張っていたチェーンは豆腐を切るほど容易く、綺麗に切れて二つに分かれた。

「斬れた……」

さっきまでフリフリしていた尻尾は顔の変わりに「どや？」と言わんばかりに逆立っていた。

しかしそれも一瞬で、そしてもしもじしながら頭を差し出すと、

また逆立っていた尻尾を振り出しす……。

「よくやった。直しとけよ」

苦笑を浮かべながら耳の間を撫でると、琴美はこくこくと四回頷いた。

「んじゃ、ただいまー」

ドアを押さえていた蓮華と見ていただだけの音羽が先に家に入った。

「しかしお前らは便利だな。鉄もあっさり斬るなんて」

「夜なら……オリハルコンだって斬れる……」

オリ……なんて？まあ深く訊かないでおこう。魔界の常識は俺には理解できないからな。

「さて、あんまり叶に余計な事いうなよ？ さっきのごまかしは道端だったから成功したもんだし、もう通用しないだろうから。それと、チェーンちゃんと直しとけよ」

コクンと頷くと、琴美も家に入ってしまった。

さて、俺も新しい言い訳考えないと……。

溜め息を吐きながらこっそり家に入り、まっすぐ階段の方へ歩い

て自分の部屋へ向かった。

しかし、

「兄貴」

また背後から叶の一言。その一言に今までにないくらいビクツと肩を竦めて後ろを向いた。

「何にも怒らないからさ……教えてよ？」

「関係ないだろ。お前に話す必要はない」

棘のある言い方をすると、弱い表情をしていた叶は眉間にしわを寄せてキツと睨みつけた。

「関係なくない！ 兄妹でしょ！？ それに私だってここに住んでる者として居候の目的を知る権利くらいあるわよ！」

その顔と大声に圧倒されて、俺はまた肩を竦めて負けを確信した。これ以上の抵抗は無用……無用というか抵抗しても時間の無駄というか……。

「わかった。話すよ」

「お願い……」

先ほどの訂正しよう。俺はさっきのより更に盛大な溜め息を吐き、妹に全て話す決意をした。

四季の学園創立者祭（8）

妹を自分の部屋に入れ、テーブルを挟んで向かい合わせに座った。気まずい。決意したというものの、やっぱり事実はいき辛いわけ……。

とりあえずテレビをつけよう。出来るだけ場を和ませるんだ。体を伸ばしてテレビをつけると、リモコンを握ってる叶が俺をジトツとした目で見ながら電源ボタンを押してテレビを消した……。テレビがダメなら音楽だ！リモコンさえこちらにあれば消せまい！俺は携帯音楽プレイヤーを大型プレイヤーに挿し込み、音楽を流した。

しかし、その数秒後音楽が止まる……。

叶を見ると、コンセントを持って更にジト目で俺を見て、

「兄貴、話す気あるの？」

「あ、ありますとも！」

下手なことはしない方がいい。どうやらこの行為で立腹なようです……。

「蓮華がここに来た理由だったか……」

叶は一回頷く。

「絶対に怒らないのと、最後まで俺の話聞いて欲しいのと、親父達には言わないって約束してくれるか？」

「場合にもよる」

その言葉で更に喋ることをためらう。今から言うことは確実にアウトだ……。

「はぁ……」

溜め息を吐いて数秒後、渋々と語り始めた。

「蓮華、琴美、音羽はな、魔界 いや、蓮華達の世界で最後の種族らしいんだ。例えば蓮華は最後のヴァンパイアって事だ」

「なるほどね……それで兄貴に何の関係があるの？」

「俺はな、悪魔達の世界と天使達の世界を作った人間、らしいんだな」

それを言った途端、叶はポカンとした表情を浮かべて首をかしげ、転がってケラケラを笑い出した。

「はははっ！ 兄貴がそんな偉い人の生まれ変わりなわけないじゃない！ 真顔でそんなの言わないでよ……あり得ないあり得ない！」

確かに自分でもあり得ないと思ったさ。だがそこまで否定して笑われると何やら苛立ちを覚えるんだが。

「ふふふっ……ごめんごめん。んでそれがどうしたの？」

笑いを堪えながら起き上がり、目尻の涙を拭った。

「それで、その偉い奴の生まれ変わりの俺なら、限りなく悪魔に近い悪魔と人間のハーフが出来るんじゃないかってことで……蓮華達がここに居るわけで……」

ボソボソ呟くようにそう言うと、叶の笑いの衝動が治まった。

「それってつまり……」

「そういう事だ」

なんだろう？この前もこれとよく似た展開があったような……デジャヴかな？

「あ、兄貴の子供が出来るって事！？」

ガラスの机を両手で叩き、乗り出して俺を睨んだ。

「いや、だから話を最後まで聞け。それは蓮華達の目的であって、俺はそんなつもりはないんだ！」

両掌を叶に向けて、とりあえず大人しくさせて言った。

しかし、それも踏まえて更に怒鳴る、

「それを分かってて家に置いてる兄貴はなんなの！？ 蓮華さん達とやっぱり……！」

「そ、それは違う！ 俺はその目的を拒み続けて……その」

確かに考えたことなかった。俺はなんで蓮華達の目的を知って拒んでるのに蓮華達をこの家に置いてるんだ？

「分からないよ兄貴の考えてる事！ 蓮華さん達が来るまでは普通

に兄貴と喋って兄貴と一緒にご飯食べれてたのに、今じゃずっと蓮華さん達が周りに居るから喋るのもまともに出来ないじゃん……」

そう言って、真っ黒で切なそうな瞳を俺に向けて言う、

「ごめん……怒鳴ったりして。約束通りお父さん達には言わないから……」

そのまま立ち上がって俺の部屋のドアの前に立つ。そして、チラッと俺を見て部屋を出て行った。

「……はあ」

溜め息を吐いて音楽プレイヤーの電源を押した。だが何も再生されない……。あいつコンセント抜きっぱなしにしていきやがったな。それが俺の怒りの沸点に達した。

「ああもう！ 全くなんて日だ！」

制服のままベッドに飛び込み、布団を被った。

色々考えることが出来て頭が痛い。

叶の変な態度、なんで俺が蓮華達の居候を許したのか。

自分のことすら何も分からない。

何で俺は蓮華達を居候させてるんだ？別に特別な感情があるわけでもない。ただ家事を手伝ってくれるからとかそういうのでもない。何で俺は、

いかんいかん、無限ループに入るところだった。

ああもう知らん、わからん！考えるのめんどくさい！寝る！

俺は怒りと悩みを抱えて、寝ると頭に命令し続け……数分後、浅い眠りについた。

四季の学園創立者祭（9）

目を覚ましたら午後十一時を過ぎていた。

こんなに目覚めの悪い仮眠は初めてだ……小一時間程寝るつもりだったが七時間ほどの昼寝になってしまった。

時間だけを確認すると溜め息を吐いて再びベッドに横になった。

「あ……洗濯してないや。弁当も洗って返さないと……」

起きることすら面倒だったのに。琴美も言わないとやってくれな
いし、やっぱり起きて自分でしないとイケないな。

後頭部を掻きながら起き上がって、鞆から湊の弁当箱を取り
出して、制服姿のまま部屋を出た。

明かりのついていない薄暗い廊下を歩き、階段を一段一段ゆっく
り降りる。

階段を下りてすぐにリビングへは行かずに、バスルーム前の洗濯
籠を取りに行った。

「あれ？ 無いぞ？」

首を傾げて数秒考える。やはり琴美がやってくれたのだろうか、
俺は小走りでリビングへ向かった。

すると目の前には目を疑うものしかなかった……。

「あら、やっと起きたの？」

「おにいちゃん寝すぎ」

目の前には洗濯物を干す蓮華、キッチンを見ると洗い物をする音
羽。

目を擦って再度確認した。しかし同じものしか見えない。

「お前ら……熱でも出たのか？」

口元を片手で押さえて訊いた。

すると、蓮華はジトつとした目で、

「失礼ね。あんたが寝てるからしてやってるんでしょーが。礼を言
いなさいよ礼を！」

「おにいちゃんそれかして」

「す、すまん。お前等が進んで家事をしてくれるだなんて思いもしなかったから……」

音羽に弁当箱を取り上げられ、ベランダの窓の前にソファに座った。

おかしい、俺が家事をしてなくて蓮華と音羽が家事をしているだと……？

「そ、そういえば琴美は？」

「琴美はもうチェーン直して寝たわよ」

どうやら俺は別の次元に迷い込んでしまったのか、あるいは夢を見ているのだろうか……。

「あんたそんなに私達がこういうのしてるの珍しい？」

「うむ」

「即答かい……」

蓮華は苦笑を浮かべて、洗濯物が無くなった籠を部屋に入れた。

「あんたが言った条件、たまには守らないとね」

「毎日守ってくれていいぞ」

「フン、するわけ無いでしょ？」

少し見直したのにその言葉で台無しだ。嘘でもいいから分かったって言いやがれ！

「でも、私達よりあんたが家事もしないで寝るなんて珍しいわね」

「まあちよつとね。気にせんでいい」

自分の事を蓮華に言っても仕方ない。自分で何で蓮華達を居候させてるか答えを出さないと。

「あー、終わった終わった。洗濯って思った以上に時間掛るのね」洗濯を終え、ふわつと家の中に入り、首を左右に曲げてポキポキとを蓮華の関節包が衝撃波を鳴らした。

「俺の苦労が分かったか。お前等が来るまでは毎日全部1人でやってたんだぞ」

「はいはい。そういえば……ねえ、あんたご飯まだでしょ？」

「ま、まあ寝てたからまだに決まってるだろ」

質問に答えると、蓮華は二へつと始めてみる笑みを浮かべて小さくスキップしながらキッチンへ入った。

「私があんたの晩御飯作ってあげる！ 私もあんたが寝ててまだだからお腹空いたし、一緒にごはんしようよ？」

二へ面はニヤケ面に変わり、何故か俺の脳に危険を伝えた。

しかし、晩飯食べてないし空腹なのは事実だ。ここは素直に頼もうか……？

「頼む。簡単なのでいいからな？」

「はいはい、私に任っせないさい！」

そしてニヤケ面はニコツと満面の笑みに変わり、洗い物をしている音羽の後ろでなにやら冷蔵庫から取り出し、リズムカルに包丁で何かを切り出した。

よく見ると蓮華は活き活きした顔で料理を作っている。あんな顔も出来るのか。いつもツンツンした表情と人をイラつかせる表情しかないからちょっと新鮮だ。

数分後、フライパンの上でこんがりとバターが溶ける香ばしい匂いが蓮華の楽しそうな鼻歌が部屋中広がる……これは案外期待できるかもしれない。

「うつ……音羽ちょっと……もう寝る」

「お、おやすみ？」

蓮華の横で様子を見てた音羽が、頭を押さえながらよろめきながら宙を飛んでリビングを出て行った……。

何かあったのだろうか？

俺の脳が再び危険を察知し、逃げろと命令している。だが、食欲が勝っている！

「もう少して出来るから待っててね」

それに逃げたらあの楽しそうな蓮華がどんな顔をするか……最悪、あの大鎌で殺されるかもしれない。

とりあえずもう出来そうだし、テーブルの方へ行っところ。

ソファからテーブルの方のイスへ移動する。しかしキッチンに近付くにつれ、バターの香ばしい匂いは生ゴミのような臭いへ変化していった……。

「れ、蓮華何を作ってるんだ？」

「んとね、この世界で言うおかゆっていう食べ物かしら？」

「お、おかゆ？」

なんでおかゆが生臭い臭いしてるんだ？もしかしてまた魔界流か……？

「よしっ！ 出来たわ！」

蓮華はパチンと指を鳴らして小さな鍋を持ってキッチンから出てきた。

俺の期待は心配でしなくなり、そしてどんどん気持ち悪くなつて吐き気までしてきやがった……。

「これね、私達の世界にいる魚を使って作る料理なんだけど、無かったからマグロって魚の切り身を使って作ったのよ。まあ私は血があれば生活できるから食べたこと無いけどね」

やっぱり魔界の料理かい！

そんなもの人間に食わせるな！

俺の前に鍋がドンと蓋付きで置かれた……。

「さあ召し上げ！ 私の人生初料理！」

「じ、人生初料理！？ お前そんなものを人に食わせるなんて……味見はしたんだろうな？」

訊くと、蓮華はニコニコ笑いながら、

「私は食べるの慣れてないから、味見なんてするわけないじゃない」「何だよ！」

「い、いいから食べなさいよ！」

蓮華は俺をムツとした顔で睨み、一気に蓋を開けた。

生臭い臭いが部屋中に広まった……。

鍋の中は、紫色の液体が半分くらいあり、その中に煮えて白くな

ったマグロの切り身、雑に切った葱、変色した卵らしきものと、紫色の米……。

そうだな、一言で言うならグロテスクだ。

これをどう食えと？

音羽が逃げたのもこの理由か。せめて俺に教えてから逃げてくれよ！こんなの食べたら絶対食中毒以前に死んでしまつかもしれんじやないか！

「はい！」

強引にスプーンを渡され、更に睨みつける……。

食っても死ぬかもしれないけど食わなくても殺されるかもしれない……！

そうだ！納豆も臭いしグロいけど美味しいじゃないか！きっとこれだって案外食えるのかもしれない……。

震える右手を左手で押さえて、さらさらの液体の中から米を掬い上げた。

「た、食べ物にこんな勇氣がいるもんとはな……」

「な、なによ！」

俺は震えながら三回深呼吸して一気に口に入れた。

「……」

「……」

甘い、辛い、苦い、渋い、酸っぱい、しょっぱい……。

色んな味が口の中に広がった。

しかしそれは胃が受け付けるわけが無かった。

「れ、蓮華……ビニール……おえっ……！」

「キヤアアアア！」

四季の学園創立者祭（10）

気がつけば日付は変わっていて、時計の長い針と短い針は十二を差していた。

そして殺人ヴァンパイアコックのおかげで散々な目に遭った俺は、リビングの網戸を全開にしてソファで頂垂れていた。

あれから約三十分、何があったかというところ、もうとても公開出来るものではなく……。強いて言うなら食材が無駄になってゴミが増えたとも言おうか。

「はい、水」

氷が二つと水が並々入ったコップを突きつけられる。

「ありがとう。……そして謝れ」

冷たい水を一気に飲み、細い目で蓮華を睨んだ。

その一言に蓮華は鼻で笑い、何も言わず俺の横に腰をかけた。

なんて態度だ。最悪死んでたかもしれない毒物を食わされたのに一言くらい謝って貰っても罰は当たらんぞ！

心の中でそう叫び、謝れと念じるがこの悪魔は反省する素振りを一ミリも見せない。

「もう少ししたら私もご飯にするから」

何故かツンとした腑に落ちないような顔をして言う。

「お前はこの状態の俺からまだ血を絞り取るのか！ 悪魔か！」

「悪魔よ！ 私に飢え死ねっていうの？」

「こっちのセリフだよ……。勝手にしやがれ」

ワイシャツのボタンを鳩尾辺りまで外し、今日始めての溜め息を吐いた。

お互いに沈黙が走る。なんだろうコレ凄く気まずい……。

「飲まないのか？」

「飲むわよ」

お互い一言の会話でまた沈黙が走る。

蓮華はジリジリ俺に近付いてきて、そのまま流れるように俺を跨いで座り、ゆっくり首に噛み付いた。

そしていつになっても慣れない吸血感が俺を襲う……。

しかし料理は例外として、何で俺はこんな目に遭ってまで蓮華達を置いてるんだか。

蓮華の左肩を見ながら思う。

確か二週間前もこんな感じに四季のが丘で血吸われてたっけな……
…立ってたけど。

そこから俺の人生が狂いだしたんだ。天使の綾那が現れて、俺が偉い奴の生まれ変わりだと色々あって、あいつ等が転校生として学園に来て二週間後の今に至ると。

あれ？今何だか答えが見つかりそうだったんだが……。
見つける、さっき出かけた答えを見つけるんだ俺の脳！

「ふう、もうおなかいっぱい……」

なんとも悪いタイミングで蓮華の牙が抜ける。そしてうつとりした顔でぐでつと俺にもたれかかってきて、肩に柔らかい感触が当たった。

すると答えを見る前に煩惱が働く……。

「……はあ」

我ながら自分の頭にがっかりした。目の前まで、目の前まで答えが来ていたのに、蓮華のこのけしからんボディが俺の煩惱に仕事をさせるから！

「な、なに泣いてんのよ気持ち悪い」

少々驚きながら蓮華が俺の顔を覗き込んだ。

「いやあ、俺も男なんだなあ。お前みたいな平凡な体で煩惱が働くとは」

「なっ……！ うるさい変態！」

「お、お前それぐらいで変態って言ったらお前がここに居る理由はなんだよ」

そう言つと、蓮華はわなわなと震えながら顔を赤面させて、

「し、神聖なる生命の神秘……？」

「……」

沈黙。

くそう、また気まづくなつた！

ていうか悪魔が神聖とか神秘って言葉使ってんじゃねえ！

心の中で盛大に突っ込み、蓮華から目を逸らした。

「と、とにかく！ 私の胸に当たったぐらいでそんなに反応しないですよ！」

「悪かつたな。どうせ彼女いない歴十五年だよ」

蓮華を立たせて、立ち上がって背を向けながらワイシャツのボタンを留める。

そして網戸を開けていたことを思い出した。あんな大声で話してたんだ。完全に近所迷惑だ……。

ボタンを留め終え、二歩歩いて窓を閉めて鍵をかけた。

「あんたさ、あんだだけ寝てて寝れるの？」

ソファの真ん中に勢いよく座って、足組みしながら訊いた。

「どうかねえ。多分眠れん」

「ふむふむ。じゃあ、」

答えると数回頷いて蓮華はふわりと浮き上がった。そしてそのままソファの目の前のテレビ台の真ん中にある家庭用ゲーム機の電源を入れた。

「あんたが眠くなるまで付き合うわよ」

コントローラーを二つ取り出し、ニカツと夜なのに眩しい笑顔を見た。

「お前朝弱いだろ？ 大丈夫か？」

そんな事言いながらも自然に顔が緩みだし、ソファに座ってコントローラーを受け取った。

「うるさいわね。私がゲームしたいから言ってるの。付き合ってるんだから心配なんてしないで礼くらい言いなさい？」

ニヤニヤ笑いながら再び横にドスツと座って、膝を抱えながらコ

ントローラを握った。

「可愛くないな。しかしありがとう、サンドバックにしてやる」

「上等よ！ 夜の覇者ヴァンパイアに適う者ならやってみなさい！」

蓮華の好意に応え、俺達はコントローラを握って夜通し深夜デ
ンションで格闘ゲームに没頭した。

……学校ではどうなることやら。

四季の学園創立者祭（11）

コントローラーを握りっぱなしで何時間経ったか、気がついたら太陽が昇っていた……。

「……朝だなあ」

「そうね……」

お互いの電池は切れかけている。もう本当にアホとしか言えない状況だ。

テレビ画面をずっと見ていた目は翳み、集中し続けた頭は中に鉛が入ったように重い。気を抜いたら一瞬で寝てしまいそうだ。

「なんでこんな馬鹿みたいなことしたんだろ……」

蓮華はソファに寝そべり、腕で目を隠してフヘへと壊れたように笑い出した。

「言いだしつpegが何を言うか。乗った俺もだが凄く今後悔している。寝とけばこんな思いはしなかった……」

残り充電一の携帯をポケットから取り出し、背面ディスプレイを見る。

AM 5:59

ドットで出来てる数字を眺めてそのまま形を変えずに横に倒れた。

「あんた何回勝ったつけ？」

「知らん。とにかくお前には三回しか負けなかった」

「そっか……。それだけ勝ちや十分ね」

「夜通しやっててだからな。夜通しやってて俺の集中力がうまい具合に切れたただだからな」

「勝ち勝ちよ」

他愛のない会話をしているうちにどんどん日が上がり、隣の家屋根から顔を出した。

そして俺の部屋の目覚まし時計のベルが午前六時の合図を響かせている。

「眠いわね」

「そうだな。もう二時間ほど前から」

「……」

「おい、蓮華さん？」

「すう……」

とうとう蓮華は力尽きた。惜しい人を失くした……。

今寝ると完全に遅刻になってしまう。弁当箱返さないといけないから学校をサボるわけにもいかない……危ない、寝かけた。

大きな欠伸を浮かべ、ゲームのコントローラーでハードの電源を切って、立ち上がって背伸びをした。

そして昨日の毒おかゆのにおいが広がった……。

そういえば昨日風呂に入っていない。だから服に生臭い臭いが染み付いてるのか。それなら今のうちに入らないと……だが朝食も作らないといけない。それに叶達も起こさないといけないし。後目覚ましも止めに行かないとご近所に迷惑だ。

五秒間の間にこれだけの考えが浮かんだ。さすが自称主夫、寝不足でも頭の回転は怠らないっ！

なんて馬鹿なことを考えてる自分が恥ずかしくなる……。

睡魔に負けて眠ってしまった蓮華からコントローラーを取り、自分のコントローラーと一緒にテーブルに置き、ソファの引き出しの中に入ってるタオルケットを蓮華に被せてリビングを出た。

そのまま階段の方へ向かうと、尻尾を左右に振ってご機嫌そうな制服姿の琴美が欠伸を浮かべながら降りてきた。

「おはよう琴美。早いな」

「おはよう……」

二段高い位置で琴美は相変わらずの無表情で腰を折って挨拶した。
「ヒロキ……臭い」

「ははは、分かってる。蓮華の料理のせいだ。でもあんまりはつきり言われたら傷つくな」

笑いながら琴美を横切って階段を上がった。

「チエーン直した……よ？」

「お、そういえば蓮華が言ってたな。ご苦労っ」

「うん……。朝ごはん作る……」

それだけ言って尻尾を更に早く振って階段を降り、リビングへ行った。

朝から元気な狼だ。眠れたものは羨ましいね。俺が激しく馬鹿なだけだ。

階段を上がりきり、朝でも薄暗い廊下を歩いて自分の部屋に入る。そして今家の中で一番元気であろうベルを鳴らしまくる目覚まし時計に三步で近付いて少し強めのチョップで静めた。

クローゼットから洗濯したワイシャツ、ベッドの横に脱ぎ捨てた皺だらけの学ランと鞆を持って部屋を出た。

そのまま叶の部屋に向かおうとしたが、足が止まる……。

昨日喧嘩みたいな感じで終わった話の後、どんな顔して起こしに行けばいい？

行く勇気が出ず、自分で起きてくれるか。そう考えて階段を降りた。

「はぁ……風呂入るか」

何だかスカツとしない朝だ。寝不足と色々もややして頭が痛い。階段を降りた後まっすぐバスルーム前に向かい、ビニールのカーテンを閉めて衣類を全て脱いで洗濯機に投げ込んでバスルームへ入った。

冷たいシャワーを浴び、制服に着替えてリビングへ向かった。約三十分かけてあの生ゴミのような臭いが取れた……。さすが魔

界流、苦勞させやがる。

風呂に入っても醒めない眠気を我慢して、リビングに入っすぐキッチンへ入った。

「おかえり……」

キッチンには尻尾をフリフリと振りながらトースターにパンを突っ込み、目玉焼きとベーコンを焼く琴美の姿。

最近お料理のバリエーションが豊かになって、無表情だが尻尾を見る限り楽しそうだ。昨日の蓮華達の働きといい、そろそろ俺の主夫称号が危うい……か？

「今日はパン？」

コクンと一回頷き、

「それと……ベーコンエッグ」

キリッ！とした眼差しで言った。

俺の出る幕はなさそうだ。焼きあがったパンにマーガリンを塗る簡単なお仕事しか出来なさそうだ。

しかし自称主夫の俺からして、いびつなおにぎりを作っていた琴美が若干だが成長し続けている琴美をみていると自分のように凄く嬉しい。飼い犬が芸を覚えたような感じだ。

もう狼じゃなくて犬でよくないかい琴美さん。

「卵は……ひっくり返すもの？」

「いやいや、蓋をして中火にしなさい」

琴美は頷いて、コンロと目線を合わせて中火に変えた。

「もう朝ごはんの当番は琴美でいいかな」

笑い混じりにそういうと、琴美は尻尾を逆立てて俺の手を握った。

「……一緒に……作りたい」

「そ、そうか？ ごめん」

長身と黄色い瞳に圧倒されて何故か謝った……。これだけ簡単なもの出来るなら朝は出来るだけ琴美に任せたいのだが、本人からの反対が出た。

二週間経つが、まだイマイチよく分からん所があるな。

四季の学園創立者祭（１２）

時計の長針が九を差す頃、ダイニングテーブルには四つのベーコンエッグ、パンが四枚並んでいる。

しかし、数分前からこの朝食の用意は済んでいるのだが、叶が降りてこない為進まない……。

「音羽もうお腹空いたぁ……」

「全く……何やってんだあいつは。遅刻する気か？」
「……」

目の前の食事に取りつけない。食べてもいいのだがなんだかそれは叶に悪いというか、変な執念が俺にまとわり付いていた。

だが遅い叶が悪いわけであって……。くそう、蛇の生殺しだ。

「先食べていいぞ。叶起こしてくる」

オールしてだるい体をのそりのそりと動かして立ち上がる。

そのまま変わらずゆったりしたペースで、何度も欠伸を浮かべながら再び叶の部屋を目指す……。

しかし、何故オールした日に限って起きて来ない。めんどくさい、息をするのもめんどくさい！そうだ、息を止めればいい……殺す気か！馬鹿か！

寝不足でいらちになり、思考回路がおかしくなっている……。

馬鹿なことを考えながら階段を上がり、薄暗い廊下を歩いて叶の部屋の前に立つ。

部屋からは物音ひとつ聞こえない。どうやらまだ起きていないようだ。

「はぁ……」

大きく溜め息を吐き、自分の頭の位置、中指でドアを三回ノックした。

起こすときならいつもドアを開けるのだが、何故か体が拒む。やっぱりまだ気まずいんだな。

「おーい、起きろよー」

部屋の前で更にノックしながら大きな一声。しかし何秒待っても返事は返ってない、物音ひとつ聞こえない。

「おーい！」

ポリウムを少し上げて更にノック。しかし先ほどと同じ……。

ただでさえいらちが来るというのに……！

俺はドアノブを捻り、大きく息を吐いてゆっくりドアを開けて顔だけ部屋に入れる。

薄いピンク一式の壁に床、家具。ベッドの上にも部屋の彼方此方にもある大きなぬいぐるみ、そして埃ひとつ被っていないよく掃除されているパソコン。

女の子らしいっちゃ女の子らしいメルヘンな部屋のベッドの上に妹の姿があった。

どうやらまだ寝てるみたいだ。

「おーい、起きろよー……」

ポリウムを一回目より小さく高く一声。しかし呼吸をしてるほどの動きしか見せない。

本当に体を揺すってまで起こさないといけませんか……。

鼻でフンと小さく溜め息を吐き、ふわふわのカーペットを歩いて妹が寝息をたてるベッドへ大股二歩で近付いた。

「叶、起き」

最後まで言い切る事無く、叶が寝返りを打ってこちらに体を向け、

「兄貴……」

寝言なのか、寝ぼけているのか分からないが、叶の一言に激しく肩を竦めた。

「……んんう」

どうやら寝ているみたいだ。ビックリさせるな。

しかし何だか寝苦しそうな顔をしている。それに顔も赤いし汗も……。

おかしいと思った俺はすぐさま右手で自分の額を、髪を上げて左

手を叶の額に当てて数秒静止する。

「ん……？」

額に手を当てたのに気付いたのか叶がゆっくり目を半分まで開けた。そしてすぐに目を大きくパチツと開き、俺の手を弾いて起き上がって布団で身を守りだした。

「ちよっ！ ひひひひ、人の部屋で何してんのよ！？」

「う、うるさい！ お前が何階起こしても起きないからこうして起こしに来てやったんだろうが！」

布団で肩まで身を守る叶にまた手を当てる。

「せ、セクハラ じゃない？」

俺の顔を見て大人しくなる。状況に気付いたのか、布団を降ろして目を閉じた。

「ふむ、熱あるな」

手を当てながら言うと、叶は身震いしながら鼻をズルツと鳴らし、「そうなんだ……。でも今日風紀委員の当番だから、」

「アホか。結構熱いし休め」

俺の言うことを無視して、フラフラと立ち上がる。そしてそのまま数歩歩き……。膝をガクツと崩した。

「言わんこつちやない、俺は溜め息を吐きながら叶を少し倒した。」

「な、何すんのよ！ 離せ……！」

いつになく反抗的な態度で俺をボコボコ殴る。俺はたまに入るクリティカルヒットにも動じず、足と背中を持ってベッドに運んだ。

「寝てる。学校に電話するから」

ポケットから携帯電話を取り出し、何故か短縮ダイヤルに入っている学園の附属職員室へ連絡をする。

『はいもしもし、四季の学園ですが』

呼び出し音が鳴って三秒、若い女の人の声が聞こえた。

「あ、どうもお世話になってます二年 お前何組だ？」

受話器から離れ、叶に指差して訊いた。

叶は口パクで「エー」と示す。

「二年A組の川越 叶の兄ですが」

『はい、どのようなご用件でしょうか?』

「妹の方がですね、熱出したみたいなんで休ませます」

『えー、はい、伝えておきます』

なにやらメモのような音が聞こえて、そう返ってきた。

「はい」

『はい』

およそ十秒ほどのやり取り、妹はこれで欠席となった。

そしてそのまま携帯を切りポケットへ戻さず、何故か短縮に入っている高等部職員室へかけた。

『はいもしもし、四季の学園です』

さっきとは変わって野太い中年の声……担任だ。

「すみま……げふんげふん! 高等部情報化の川越 ヒロキの方ですが……」

一瞬頬を引きつらせ、首を押さえながら大袈裟に咳き込んで言った。

『ああ、川越か。どうした』

「今日ちよつと熱が四十度出たので休みます……ゲフンゲフン」
人差し指を口の前に出し、ニヤリと笑いながら叶にアイコンタクトを送った。

『そうか。他の川越も頑張ってるんだからお前もそれくらい頑張れよ。まあ分かった、ヴァンパイアの方にでも連絡事伝えるよ』

「はい」

『はい』

およそ十秒……。これで俺もサボりになった。

「あ、ありがとう……。でもなんで兄貴も?」

決して目を合わせることはなく尋ねてきた。

「今日は学校行く気しない! だからお前の看病でもしてやるさ」
そう応えて、パソコンの前のイスに座って腕を組んで荒い鼻息を漏らした。

「まあ朝ごはんだけあるからさ、パンくらい食えるだろ？」

叶は目をあわずにコクンと一回頷いた。

「よし、んじゃ今から持ってくるから寝とけ」

イスの背もたれで反動をつけ、だるい体をきびきび動かして部屋を出た。

四季の学園創立者祭（13）

階段を急いで降り、急いでキッチンへ向かう。

「……どうしたの？」

目の前でパンをちまちまとかじる琴美が訊く。

「叶のご飯を上を持っていくんだよ」

一言だけで答え、戸棚の中に入れてあるプラスチックのトレーを取り出してテーブルへ急ぐ。

「ねえねえ、叶ちゃんどうしたの？」

頬にたくさんパンくずをつけたエンプーサが訊いてきた。

「熱出したみたいだから、今日は休ませる。それで上に持っていくのさ」

首を縦に振る二人を左右に、テキパキとトレーの上に2人分のパンとベーコンエッグ、コップに牛乳を入れて置いた。

「あ、それと叶の面倒見るから今日俺も学校休む、」

「なんですってえっ!？」

言い切る前に、後ろのソファの方から思わず竦み上がる様な声が俺の耳をつんざいた。

恐る恐る後ろを見ると、翼を広げて凄惨な形相で睨みつける、さっきまで死んでいた蓮華の姿……。

こいつはもう言い訳を言っても通じないだろうな。

「あんた寝不足で学校休みたいだけでしょうが！ その上私の食事だつて言うのに……！」

「待て、怒るのは分かるがその拳を下ろせ。落ち着いてまともに話も出来ん」

両掌と苦笑を蓮華に向けて怒りを静める。しかし蓮華は睨みつけたまま俺の一步手前まで近付いてきた。

「私の納得できる言い訳を考えなさい！」

腕を組んで仁王立ちして俺を上目遣いで睨む。

言い訳も何も、昨日のあの気まずい喧嘩の和解と言いますかなんと言いますか。とにかくこの2人きりの空間を大事にしないと仲直り出来る機会がなくなる気がするわけであって……。

「待って……」

困ってる俺を見て琴美がイスを引いて立ち上がった。

「何よ。あんたこいつをサボらせる気？」

琴美は俺の横に立って首を横に振った。

「……本当にちゃんとした理由がある。でも兄妹の事だから……2人にしてあげて欲しい」

ボソボソつとなんとか聞き取れるボリュームで言い、腰を折って頭を下げた。

俺は少し驚いて琴美を見ると、

「ライカンスロープ……耳と目と鼻はいい」

そう言って両耳を摘みながらぴこぴこ前後に動かした。

「ありがとう、琴美。まあそう言うわけでして」

「琴美が嘔吐くわけないし……はあ、もう分かったわよ」

蓮華は凄く不満そうな顔を浮かべて溜め息を吐いた。とりあえず分かって貰えたようだ。

しかし琴美は耳がいいのか。いい事何だが、何かと俺も聞かれたくないことはある。少し警戒しよう……。

「もし答えが出たら……教えて欲しい……私達をここに置いている理由」

「ああ、もちろん」

素早く一回頷いて親指を立てた。

「何コソコソしてんのよ？」

「なんでもないよ。とりあえず連絡事項とかしつかり頼む。創立者祭とかの情報とかさ。それと、血は今ここで沢山吸っていけ」

ワイシャツをいつものところまでボタンを外し、左首を差し出した。

「フン、今回だけだよ？ 私だって寝不足な上に朝弱いのに……あ

む」

ブツブツ呟きながら、俺の首に噛み付いた。

徹夜でゲームする前にも味わった相変わらず慣れない吸血。だがこれももう日常になってきた。だが一生慣れる事ないんじゃないかと思う。

「あ、琴美と音羽は俺の財布持って行っでいいから自分で食券買ってくれ。俺が居ないからって変なことはするなよ」

「はい！」

注意すると音羽だけいい返事が返っていた。琴美もきつと頷いてくれたはず。

それじゃ叶に早いところ朝食を持って、

「……蓮華さん？ ちと吸いすぎじゃないかい？」

「んんっ……うるひゃい」

確かに沢山吸っていけとは言ったがもう結構吸っていないかい？
いつもなら結構早めに終わるんだが……こんなに吸われて人間は大丈夫なのか？

不安になってきた頃、蓮華の吸血が終わった。

「ふうー。おなかいっぱい……」

うつとり面を見せ付けてきてそのままぐったりもたれて来た。

「これだけ吸えばいいだろ」

「まあね。じゃあ着替えて学校行くわ」

俺から離れて、体をグツと伸ばしてリビングを出て行った。

さあ、今度こそ持って行こう。

四季の学園創立者祭（14）

思わぬ時間が掛ったが、朝食を持って再び妹の部屋へ入る。

「ほら、持ってきてやったぞ」

少し冷めたパンにベーコンエッグ、そして牛乳を小さいテーブルに置いた。

「何で二つあるの？ まさかここで食べる気？」

ゆつくりとベッドから足を下ろして、ジト目で俺を見る。

「そりゃ俺は今日お前の看病のために休んでるからな。お前が食べ終わるのを見届けて薬を飲ませないといけん」

「そんな理由で私の部屋に居座らないでよ……。移っちゃうよ？」

叶は少ししんどそうに溜め息を吐き、すんとベッドから滑り降りた。

「移ったらもう一日休めるからそれはそれでいいさ。創立者祭の準備も手伝わずに済む」

「兄貴って性格悪いね……」

ジト目を更に細めて牛乳を両手で持って飲んだ。

性格悪いだなんて今更だ。しかし急に決まった創立者祭も悪いんだ。ただでさえだらける時期だというのに。

しかし、叶の態度があまりいいように見えない。まだ怒っているのだろうか……？

「まあアレだ、飯食って薬飲んで寝ろ」

パンをかじりながらビシッと指差して、牛乳で流し込んだ。

「言われなくてもするし……。てか本当に食べるんだ」

「理由は言った」

沈黙。

ちよつと話せて頼られたからといって調子に乗りすぎたか……昨日俺の部屋での気まずい空気が蘇ってくる。

いかんいかん、何か話さないとこの物凄い重い空気に押しつぶさ

れそうだ。

「そ、そういえば昨日湊と昼休み居たんだろ？」

「ああ、まあね。兄貴と何かあったんじゃないかって心配してたみたい」

「あのお節介め……」

それにしても何故早退したんだか。

「んで、お前はなんて答えたんだ？」

「……兄貴が生きていく上で必要のない情報」

顔を逸らして、器用にフォークでベーコンエッグを切って口に入れた。

てか可愛くねえ！小学生みたいな言い訳しやがって、こっちは会話を弾ませるのに精一杯だっていうのに終わらせやがった。

「美味しいか？」

「何よさつきから……こっちはしんどいの。大人しく食べさせてくれない？ それとさっさと食べて出て行ってよ……。薬もいらないから」

叶は溜め息を吐いて、少し下を見ながら横目で睨んできた。

「ご、ゴメンナサイ」

「いいから早く食べて」

沈黙。

上手く会話が弾まない。このまま朝食を終えたら追い出されるだろうし、なんとかならないものか。

今までこんな大きな兄妹喧嘩なんかした事ないし、どうすればいいのか分からない。

っていうか、よく考えてみるとどうしてここまで怒られてるのか分からない。確かに俺が蓮華置いている理由は分からない。だが、置いてようと何してようと叶には一切損することなんてないだろう。むしろ家事とかしてもらえて得な分の方が多いと思う。蓮華達が周りに居るから喋れないてなんなんだ？いつも俺を馬鹿にしたり年上に対する言葉遣いやそんなものなんて無いくせに何だ。

色々考えていると俺がイライラしてきたぞ。理不尽に叶が怒っているだけじゃないのか？俺が謝る筋合いも何もない気がするのだが……でもやっぱり叶とは仲直りしたい。ダメだ、俺の事すらやっぱり訳分からん。

なんなんだこの気持ちは、凄くイライラする。

こんな空気になるんなら学校に行けばよかったか……。

俺は急いでパンとベーコンエッグを頬張って可能な限り牛乳を口に含んだ。そして数回だけ嚙んで無理やり飲み込んで更に牛乳で流し込む。

「悪かった。皿とか部屋の前に置いてたら後で取りに来るから」

謝罪とご馳走様の意味で手を合わせ、食器をトレーに乗せて立ち上がった。

「うん……」

「……」

俯く叶を数秒見て、部屋を出た。

「はあ……」

溜め息を吐きながら数歩歩いて自分の部屋へ戻る。

本当に少し話せたからといって舞い上がりすぎた自分がアホみただ。っていうかアホだ。

ズボンについていたパンくずをゴミ箱の前で抜い、昨日と同じように制服のままベッドへダイブした。

寝不足だし少し寝ようか。格ゲー三昧で眠れてないしそれが理由で脳もほとんど仕事してくれていない。全く本当に馬鹿なことした、深夜テンションでやるもんじゃないな。二度としないね。

「家事は昼から使用かな。おかゆも一応作ってやらんと」

ぼつんと独り言を呟き、手を伸ばすと届く距離にある目覚ましを十二時にセットし、布団を被り目を瞑る。

蓮華達は今頃学校に向かっている頃か……いやあ、本当にサボりみたいになってしまった。だが後悔はしていない。

そんな事を考えながら数分、俺の意識はまどろみの中へ溶けてい

つ
た

。

四季の学園創立者祭（15）

ピピピピッ。

十二時丁度、正午といわれる時間に目覚まし時計が鳴り響く。少ししか寝てない気がするのに……これだから徹夜はするもんじやない。

布団に入ったまま腕を伸ばして目覚ましを強い平手で止めた。そして、後五分後に起きると決意しながら体の前にある暖かいものを抱きしめた。

「ふあつ……おにいつたら大胆……」

な、何だこの不快感。

若干寝ぼけながら、俺は半分目を開けて抱きしめているものを撫で回した。全身柔らかいもので、甘い石鹸のような香りが鼻をくすぐる。

「ちよつ、おにい……まだ心の準備が……」

聞きなれた声が聞こえて、抱きしめてるものの温度がどんどん上がる。そこで俺の意識と防衛機能が反応して目を覚ました。

バツと起き上がり急いで布団を捲り上げた。そこには満面の笑みをした小さな制服姿の幼馴染の姿。

「はい、私はもう準備いいから、」

「馬鹿か！ 貴様なに不法侵入してやがる！」

「あはは、おにいも高校生になつて盛んになつたんだね」

「話を聞け、脱ぐな。何故お前は俺の家に居て俺の部屋で一緒に寝ている！」

湊の頭を鷲掴みして無理やり上半身だけ起き上がらせた。

「先生におにいが四十度熱出して倒れたって聞いたから慌てて四時限目終了とともに相対したんだよ」

「蓮華達に聞かなかったか？ 俺は叶の看病の為に仮病使ってたよ」

頭を抑えながら溜め息を吐いて訊いた。

「蓮華っち達授業中爆睡してたから何も聞いてないよ?」

なるほど、蓮華はともかく何故琴美と音羽まで……。

「それと玄関前の植木鉢の下に家の鍵あるのは知ってるし入るのは容易かったよっ」

人差し指を左右に振りながら憎たらしい笑みを浮かべた。

こいつは俺の家に監視カメラでも付けてるのか? 何故合鍵の場所がバレた。

「次はこっちが質問ね」

そう言って湊は俺の膝の上に乗っかり、額同士をぶつけてジト目で俺を見た。そして数秒後に訊いてきた。

「何で叶ちゃんの看病しているおにいが寝てるの?」

「そ、それは……色々と」

相変わらず痛いところを突いてくる。それが本当のことを知ってるかのごとく……。

「か、叶のおかゆ作らないと、」

「もう私が作って持っていった。お薬も飲ませた! 質問から逃げない!」

「……」

額を更に強く押し付け、凄く威圧感のある声で逃亡を阻止された。そして悟った、湊は多分全部知っているんじゃないかと。

それなら別に逃げる必要はない。むしろ叶から訊けなかったことを訊くいい機会ではないか?

「分かった。正直に話す」

そう言って湊を真横に下ろし、ベッドから足を下ろした。

「あははっ。よろしいっ」

ニコツと歯を見せて笑い、俺と同じようにベッドから足を下ろして座った。

「まあ俺が寝てる理由か……朝まではちゃんと看病しようとしてたんだ。だけど昨日の喧嘩の事もあって追い出された」

「それでおにいは機嫌を悪くして不貞寝したんだね」

「ごもつともであります。」

「……んー、実は私さっき叶ちゃんの話聞いてきたんだよね。蓮華ちゃん達のこと……」

湊は少し寂しそうな声で途切れ途切れそう言った。

「やっぱり聞いていたか……いかん、顔を合わせる事が出来ん。」

「なんて言うんだろ、そりゃ私もちよつとショックだったよ？でも叶ちゃんは過剰に反応してるみたいだね」

「だ、だよなあ？理由がどうであれあいつがあんなに怒る理由、」

俺が言い切る前に、湊はまたジト目を近づけて来た……。

「何で叶ちゃんが怒っているのか分かってる？」

「わ、分からないッス……」

小さい体に比例して威圧感満載の瞳がまた俺を睨んで近付いてくる。

「本当に鈍いなおにいは……。そんなんじゃ一生仲直りできません」

言い返す言葉がなかった。確かに周りからたまに鈍いと言われるが俺には全くそんな気はしないわけで……。

「はあ……どうしたもんかね」

溜め息を吐く俺を見てか、湊が言った。

「ヒントあげる。これで分からなかったらおにいはもう救いようのないアホだよ？」

「こ、心して聞きます」

湊はひよいとベッドから降り、俺の前に立った。

「例えば、おにいに凄く仲のいい好きな人が居ます」

多めに相槌を打ちながら話を進めて貰う。

「それでその人がおにい以外の誰かの赤ちゃんを身籠っちゃったら、おにいはどう思う？」

つまり、俺の好きな人が誰かとそういう行為をして妊娠すると……

…考えられん。多分ショックで寝込んだ上に引き籠もりになりそう
だ。

「堪んないな」

だがそれでも例え話。俺は苦笑を浮かべて質問に答えた。

「でも、おにいはその逆の立場なんだよ？ 今のおにいにその気が
なくても、いつ蓮華ちゃん達とそういうことするか分からないで
しょ？」

湊はピシッと人差し指を俺の鼻頭に当てて言った。

逆の立場……俺が、蓮華達の子供を作ったら、悲しむ人が居る？
そういうことじゃないだろうか。

数十秒考えた結果、真っ先に叶の顔が脳裏に浮かんだ。

「なるほどな……まさかこんな形で妹の気持ちがかかるとは」

あまりの予想外の展開に失笑してしまった。叶が怒るはずだな…
…蓮華達を置いてる理由も伝えられなかったし。

「もちろん、私もショックを受けたひとりなんだけどな」

「……冗談にしてはその真顔はなんだ」

俺がそう言うと、湊はジト目を向けて俺の足の甲を踏んだ。どう
やら本気だそうだ……。

まさかこんな形で幼馴染の、もういい、とりあえず理由は分
かったんだ。これからどうすればいいか考えないと。

四季の学園創立者祭（16）

考えた結果、家事をしながら考える。

妹の気持ちを知った。それでどうすればいい？その気持ちに応えればいいのか？いやいや俺と叶は血は繋がっていないが兄妹だ。親と世間が許してくれるはずがない。

頭を叩いてアイデアを絞りながら、庭に出て脱水の終わった洗濯物を干す。だが何ひとついい考え浮かばない。むしろ今までずっと一緒に居た妹と幼馴染の気持ちを知ってしまったって混乱してるぐらいだ。

「おにい、いい考え浮かんだ？」

敷居に座って足を下ろして日向ぼっこをしている幼馴染が訊く。

お前のおかげで悪化してるかもしれない状況でえらい他人事だな。まあ訊いたのは俺だし兄妹喧嘩なんだがね。

「浮かぶわけないだろ。てかお前は……俺のこと、」

「小学生の頃から好き好き言ってるのに全然見向きもしてくれなかったんだもんね」

「あ、あれは全部冗談とばかり……。それは置いといて、何で俺と叶の仲裁なんかするんだよ？　これがきっかけでもし叶と俺がだな

……」

そう言って、洗濯物の半分を干し終えて湊の横に座る。

「おにいが幸せになれるのならそれでいい」

「はっ？」

湊は満面の笑みで答えた。しかしどこか寂しそうな声をしていた。俺は幼馴染を凄く誤解をしていたのかもしれない。いつも鬱陶しい料理が上手いお節介なだけかと思っていたが本当は凄く優しい、

「まあ、そのときは全力でおにいを奪いに掛るけどねっ」

「人の幸せ壊してんじゃねえか！　アホか？　それともお前を少し

でもいい奴だと思つた俺がアホか？」

満面の笑みの湊を鷺掴みにして中指と親指でこめかみを押さえた。
「いたたたた……私がいい人だと気付かないおにいがアホだよ！」
自分で言うか。

湊は鷺掴みを両手で引き剥がして睨みつけた。

「しかしどうすればいいかねえ……どうやって仲直りすればいいのか全く分らん」

溜め息を吐いて両肘を太股につけて前かがみに頭を抱えた。

「創立者祭に誘ってみたら？」

幼馴染は軽いノリでパチンと指を鳴らしてアイデアを出した。そんな事が出来るならこんなに悩んでない。

「何だかんだでさ、叶ちゃんはおにいのこと好きなんだから誘ったらホイホイついてくるんじゃないかな？」

「ホイホイってなんだよ。でも確かに誘ったら案外……でも断られたら更に気まづくなりそうなんだが」

「その辺は私にまっかせなさい！」

湊は誇らしげにポンと胸を叩いてニコツと笑った。しかしそれは不安を更に煽る物でしかないというのは言うまでもない。信用していないわけではないが結構深刻な喧嘩なんだが、何故か湊のノリが異様に軽い。

俺は口で息をして大きく鼻で溜め息を吐いた。そして立ち上がり黙々と洗濯物に手を伸ばす。ネットに入った蓮華の真つ黒なシルクのブラウスを取り出してハンガーを入れて棒に引っ掛けた。

それを見て湊が、

「おにいはいいお婿さんになるね」

ニヘニヘと笑いながら言った。

「うるさいよ。結婚するなら家事をほとんどしてくれる優しい嫁さんがいいね。バストは八十五くらいあれば問題ないか」

「うつ……後者が当てはまらない」

やっぱりこいつに任せるのは怖い……。だが今は藁にでもすがり

たい状況なんだがな。

そしてあつという間に午後三時半を過ぎる。結局俺と妹の喧嘩は終止符を打つことはなく延々と続いている。喧嘩というより相手が一方的に怒っている気もするが、そこは流せ。

しかし意味の無いサボリではなかった。幼馴染のおかげで何故叶が異常に怒ったか分かったし、何より昨日出来なかった家事をゆっくりにすることが出来た。なによりつてのはおかしいと思うがどうやら俺は一日一回洗い物をしないと落ち着かない性分らしい。

「あーっ、学校行かないと一日が早く感じるな」

テレビの真ん前のソファから立ち上がり、体を出来る限り伸ばした。

「あははっ。ずっとドラマの再放送みてたくせによく言うよ」

「お前も早退した分際でどれだけ人の家に居座ってんだよ。もうすぐ蓮華達帰って来るぞ？」

ソファに座りなおすと、湊は首をかしげて、

「それがどうしたの？」

子犬が知らない人を見るような可愛らしい表情で訊き返してきた。

「別にどうもしないけど……」

どうもしない……というのは嘘だが、蓮華達の目的を知った今、湊は今まで通り普通に接してあげれるだろうか？これが心配なだけだ。幼馴染を信頼していないわけではないが叶があ現状じゃな……。

「大丈夫っ。私は蓮華っち達の友達のままだし、あれくらいの目的

じゃ見方を変えたりなんてしないよっ」

「あれ？ 今声に出てた？」

「そんな顔してたよ？」

左頬を人差し指でツンツン突かれる。

ていうかお前はどれだけ鋭いんだ！……とにかく、湊は心配なさそうだ。

しかしあれくらいとはよく言ってくれるな。俺の遺伝子が世界を跳び越して魔界に行くんだぞ？

「まあそれならよかったよ。仲のいい奴に嫌われたら、いくら悪魔だからって傷つくだろうからさ」

そう言って突かれてる指を払い、苦笑を浮かべた。

「おにいは優しいね」

「うるさい。気配りさんなだけだよ」

「その気配りさんがいたいけな義妹と幼馴染を勘違いさせて行く行くは蓮華っち達も……」

「お前の口をまつり縫いしてやるのか？ 俺は善意でやってるわけで、全くそういうつもりはだな、」

しかし実際叶と湊はそうなってるんだよね……。そういえば綾那の様子がおかしいって言ったけど……まさかな？ 嫌な予感がしてきた。

「おにいもしかして思い当たる節が？」

「な、ないないないない！ 今日の晩飯に誓ってそれはない！」

ジト目をして迫ってくる幼馴染を跳ね除けて全面否定した。

「ふーん？ それならいいけど？」

「その目を向けないで。痛いから、凄く痛いから」

しかし何故か本当に嫌な気がする。まさか、まさかな……？

四季の学園創立者祭（17）

「ただいまっ！」

元気な声が玄関から響いて来た。恐らく、いや、絶対音羽だ。

声の主はパタパタと床を走る足音を鳴らせて近付いてきた。そして無駄に勢いよくリビングと玄関の間のドアが開く。

「おにいちゃんっ！」

「ふんごおっ!？」

ドアが開いた瞬間僅か二、三秒、ソファでドラマの再放送をぼんやり見ている俺の頭に小さな物体が俺を呼んで突っ込んで来た。完全に油断していた。油断というかこんな事されるとは思ってもしなかった。

膨らみのないまな板の胸で俺の顔をスリスリと押し当ててくる。

しかし何故か全く嬉しくない。

「おかえり、そして離れる。ドラマ見てんの！」

「だって8時間おにいちゃんの顔見てなかったから……」

「頭抱きしめてたら見れないでしょうが」

音羽を俺と湊に置いて頭を二回軽く叩いた。音羽は二へつと笑って足をパタパタしながらテレビ集中し始めた。

「ただいまー。ってあんた何でテレビ見てんのよ。看病は？ 叶はどうしたのよ？」

ぞろぞろと帰ってくる悪魔達。蓮華は少し疲れた顔をして、ソファのL型の丁度曲がっている所にふわり座り、嫌味たらしく言った。
「おにい是不貞寝してたのでゼーんぶ私がやりましたよ。あははっ」

「うるさい不法侵入者め。俺がやる予定だったのにお前が仕事を奪ったんだろうがっ！」

音羽を超えてケラケラ笑う湊にデコピンをお見舞いした。

「いたた、でも私が居なかったら事は一向に進まなかったんじゃない

いの？」

「それもそうだが、都合のいい時だけ自分の株を上げるな」

額を撫でる後ろからライカンスロープがスローペースでソファをピョンと飛び越えて蓮華の横に腰を掛けた。もっと普通に座ることは出来ないのだろうか？

「ただいま……財布……」

「おかえり。学校ご苦労さんっ」

琴美は大きく頷いてポケットから俺の財布を出して、体を伸ばして両手で渡してきた。そして流れるようにテレビの前のテーブルの真ん中に置いてあるお菓子皿を漁って焼肉味のスナック菓子を取って、両手で俺に渡した。

「ははは……」

変なところは不器用なのか、お菓子の包装などを開けることは出来ないらしい。俺は苦笑を浮かべて袋を開けて琴美に渡した。

「ありがと……」

琴美は少し頭を下げると、定位置に戻りお尻に潰されてる尻尾の先を振りながらスナック菓子を幸せそうに食べた。

何だか一気にリビングが明るくなった。本来ならもうひとり……

ここに居るはずなんだけどね。まあ病気なんだが。

「お、お邪魔するわ」

な、なんか違うのが来た……？

玄関との間のドアの方へ目をやると、敷居の上に真っ白な物体が紅潮して立っていた。普段透き通るような白い肌をしているからすぐ分かる。

「なんか急に来たいとか言い出したから連れて来てやったのよ。仕方無しによ？」

腕と足を組んで蓮華が言った。そしてドラマはいいタイミングでコマーシャルに。

「そ、そんな所に突っ立ってないでこっち座れよ」

「そうさせてもらっわ」

紅潮してる綾那を見て俺の脳裏に湊の言葉が過ぎる。「行く行くは蓮華っち達も」……あの紅潮面はそうじゃないか？昨日の屋上の出来事の事もあるし……。やばい、顔の左半分が引きつってき
た！

「初めに言っておくけど、私は別に貴方が四十度熱を出して来たわけではないのよ？ 蓮華達の生態と貴方のベッドの下を調べるために来たわけであって……」

どんどん赤くなる綾那は、表情を一切変えずカチコチとロボットのような動きをして、俺の横のソファの肘掛に座った。

「待て、まあ熱のことは仮病なんだが……後者がおかしい。何故ベツドの下を調べに来た」

「に、人間の癖に細かいこと気にしないで欲しいものね」

俺はみんなにひとつ詰めるように手だけで合図した。するとみんなはサツと横にずれて、俺の座っていたところに綾那を座らせた。

L型のソファなのだが、こういっぱいになるなんて思いもしなかった。まあなんせ六人も座っているんだからな。あとギリギリもうひとり座れるくらいか。親父に頼んでコの字型に いかんいかん、親には蓮華達のこと話してないんだった。

「お気遣いありがとう。悪魔の癖に」

「一言余計よ。天使の癖に」

お前なとつつこみたくなるような会話だ。前ほどではないが早く仲良くなつて貰いたいものだな。昨日の蓮華の思いやりで大分二人の距離は縮まったと思うけど。

「あははっ。なんだかお鍋でもしたくなるねっ」

湊は音羽の頭の上に顎を置いて満面の笑みを俺に向けた。

「なんでこの少し暑い季節に鍋なんかするんだよ。確かに人多いと鍋がいいと思うけど」

「私を数に入れるんじゃないわよ。私は血だけでいいんだから」

それでも多いわ。ってか鍋なんかしない！

「音羽も今日はお鍋がいいな？」

「野菜はいっぱいあるけど……叶がまた元気なときにな」

上目遣いで頼んでくる音羽の後頭部を撫でて適当に流した。生憎このソファの前にあるテーブルじゃ大勢で鍋は突けない。独断だがまた安くて大きいテーブルでも買おう。

変な決意をしてコマーシャルを終えたテレビへ視線を戻す。

「このドラマって今回最終回だっけ？　ちゃんと家で録画してたかな？」

「湊ってこんなドロドロした恋愛ドラマなんか好きなの？　吐き気がするわ……」

「……泣ける」

「音羽全く分らない」

くそう、悪魔達が帰ってきてからうるさくてドラマに集中出来ない。しかもつと酷い理由があると思う。

俺は横目で綾那の方を見た。綾那は凄く熱い眼差しを俺に向けている。まさかとは思うが本当に俺のこと……いや、そんなはずはない！天使様ともあるうものがこんな下種な夜な夜なエロ本を読んでいる俺なんか恋するはずがない！

汗ばむ手をズボンで拭いて、ドラマへ視線を戻した。

「おにいちゃん？　何だか汗出てるよ？」

「だ、大丈夫だ。問題ない」

いかにいかに、ドラマに集中しないと。最初から見続けていたドラマを最終回だけロクに見れないなんて、これほど哀しいものはない。

「じー……」

「……」

集中出来ない……。視線に効果音まで付けて来やがった。

「お、お茶でも入れるかなー！」

ドラマを断念して棒読みでそう言って、サッと立ち上がって綾那の前を通り過ぎた。

「私も頂きたいわ。だから手伝いましょう」

通り過ぎた瞬間に綾那も立ち上がり、呟くように言っ
て俺の後ろを付いて来た。因みにまだ紅潮したまま。

とうとう本格的にやばくなってきたのではないだろうか？
こんなに可愛い子に好きになってもらうのは大変嬉しいことではある。
だが何故今？何故叶と喧嘩してギスギスしている時に来た？

キッチンに入り、食器棚から急須取り出して流し台に乗り出す。

「お茶いる奴いるかー？」

ドラマ組にそう訊くと、蓮華以外綺麗にまっすぐ手を上げた。

五人分用意か。

俺は数回頷いて、ポットのお湯を急須に入れた。そして乾燥機から乾いた湯飲みを適当に五つ取り出して、食器棚から茶葉を取り出して適量ぶち込んだ。

「案外器用なのね」

「まあお茶を入れてるだけだけどな。妹の世話焼いてるとこれくらい」

全く関係ない力瘤を見せ付けて笑みを向けた。

「私が淹れるわ」

「い、淹れたことあるのか？」

「お茶を淹れるくらいなら大丈夫よ。それに、付いて来た意味がなくなるもの」

綾那は控えめに微笑んで、そつと急須に手を伸ばした。そしてよく見るといつの間にか紅潮は収まっていた。俺は人外の成長でも見るかのような気持ちになっ
ていて、綾那に淹れるのを任せていた。

琴美や蓮華、音羽もだがこうして成長をしているのを見ると少し楽しくなる。

もしかして、いつの日かそれぞれの世界が繋がって共存している世界なんてものが来るのではないだろうか？

俺がその架け橋に　　ってそんなわけないか。何考えているんだか……。

四季の学園創立者祭（18）

「それでは、また明日会いましょう」

「おにい、しつかりね」

午後六時。あれから特に何もなく、若干空が暗くなってきたのでここで解散。綾那と湊を玄関まで見送る。

「うむ。また明日な。湊も色々ありがとう」

小さいのでつい湊の頭に手を置いてしまう。本人は喜んでいるみたいだが……。

「あははっ。また何かお礼してよねっ？」

「んー……まあ考えとくよ。それより、最後に訊くけど仲裁の件本当にお前がなんとかしてくれるんだろうな？」

頭に乗せたままそう訊くと、湊はニコツと満面の笑みで親指を立てて、

「大丈夫大丈夫！ 全部私の計画通りにするからっ。その代わりおにいもちゃんと私の指示に従ってよっ？」

俺も親指を立てて、頭を縦に一回振って了解した。

そして湊の横にいる綾那が話についていけないのか、教えるといわんばかりの視線を俺に向ける。しかし話すと長いから訊くな。帰り道湊にでも訊いてくれ。

「あ、そういえば弁当箱、」

言い切る前に湊が学校鞆をポンポンと叩いた。

「持った持ったっ。ちゃんと洗ってるなんてえらいえらいっ！」

「当たり前前の事したまでだよ（音羽が）」

「明日は学食で済ましてね？ 多分家におかずないし、今から買い物行く気にもねっ……」

頭に手を置かれたまま湊は苦笑を浮かべて人差し指で頬を掻いた。

「了解。久々にハンバーグ丼の為に走るかねっ」

「あははっ。また売り切れにならないといいけど」

嫌なことを思い出させるな。そういえばあの日から日常が崩壊したんだっけな……。あの金券売り切れは何かのよくない事が起こるフラグだったのかもしれない。

「それで……おにい？ 私を帰したくないからって頭に手を置くのは……」

「う、うるさい。そんなわけないだろうが！ さつさと帰れ！」

俺は慌てて手を離し、湊はケラケラ笑ってスツと靴に足を入れてつま先でトントンと地面を叩いた。

「それじゃ、綾那っち行こうか」

「ええ。それじゃお邪魔しましたわ」

湊に続き綾那も俺に一礼して、綺麗に180度回って綺麗に並べられた靴を履いた。

「最後におにい、叶ちゃんに余計なこと言わないでよ？ 計画が狂うかもしれないからね？」

左手でドアノブを握りながら、鞆を持った右手でビシツと人差し指で俺を差して言った。つまり創立者祭まで仲直りするなと……。まあもう全て幼馴染に任せるつもりだから言う通りにする。

「それじゃ、今度こそバイバイっ。また明日ねっ」

湊は指差ししていた手を左右に振って、満面の笑みで家を飛び出していった。綾那もドアが閉る前にひょいと外に飛び出した。

「ふう……疲れた疲れた」

振り返っていた手を下ろし、肩をガクツと落とした。

少しの時間だったが、賑やかな時間が終わったと思うと無性に寂しくなる。綾那が来たのは少々予想外で戸惑った時間も一部あったが、案外面白かった。また呼ぼうかな。いかんいかん。この行為が勘違いさせてしまうんだ。少しは自重しないと……。大きく溜め息を吐いて、少し恋愛の知識が増えた俺はだらだらとリビングへ戻るのであった。

創立者祭、開始

季節は少し梅雨と呼ばれる季節に突入した。そう、六月だ。しかし六月一日午前七時。四季の島は雲ひとつない青空が広がっていた。一見涼しそうに見えるこの四季の島。創立者祭を楽しむだけの者ならそう思えるだろう。だが、この季節に分厚いマントとブラウス、風通しの悪い真つ黒なズボンを履いている俺は朝にも関わらず、額に汗を滲ませて涼しい窓際に座っていた。

我がクラス、情報科一年B組は約一時間前ほどから悪魔&天使喫茶の準備をしていた。準備とはまあ衣装に着替えるのと、電気ケトルに水を入れたりと、様々なことをしている。因みに俺は今ヴァンパイアの格好をしている。姿はさつき説明した通り、それと蓮華にもらったよく構造の分からない二セモノの八重歯。とりあえず昼過ぎまで俺は店で働いて、その後湊と店を出て叶と合流……そういう展開に引く張るそうだ。

教室を見渡す限り、ただのコスプレ集団の部屋にしか見えない。男はゾンビやらミイラ男やら……。女はヴァンパイア、エンプーサ、天使。ほとんど五対五の割合で悪魔と天使と綺麗に別れている。

しかし改めてみるとクラスの女子は中々いい体をしているではないか。低予算自作コスプレということもあって色々露出が多いものも中々。不健全などの理由で生徒会に潰されなければいいが。

「川越川越」

「んお？」

頭に猫耳をつけて、ガムテープで貼り付けたふわふわの尻尾をつけたひとりの男子生徒が近付いてくる。附属生の頃からの村田むらた陸斗。友達……というか悪友だ。最近は絡んでなかったから存在に気付かなかった。てか気にもしなかったね。

「なんだよ。狼男かそれは？」

「ご名答。それにしても、僕が考えた悪魔喫茶がこう天国になるな

んてなあ。これも蓮華ちゃん達が人外であるのとずば抜けた可愛さのおかげなんだな」

村田ははにかむようにケラケラ笑って俺の方をポンポン叩いた。

「お前がこの悪夢の原因か。全く、蓮華達は見せ物じゃないんだぞ。もう遅いけど」

「そう言うなって。僕が思うに……附属二年A組と美術科A組、そして我が情報化B組は学園一位を争うことになるだろうね」

何を言ってるんだこいつは。でもトップ争いとなると……ん？二年A組は確か叶のクラスか。

「その二年はなにをしてるんだ？」そう訊くと、

「確か確か……」

村田はワイシャツの胸ポケットからペン付きのメモ帳を取り出した。

何だこいつは。もしかしてメモを取ってるのか？スパイ活動でもしているのか？もうそんな小さいことにはツツコミを入れないけどな。

「いや、こつちじゃないな」

村田はズボンの後ろのポケットからメモ帳を取り出した。

「何で二つもメモ帳がいるんだよ！」

予想外の展開に思わず大声で突っ込んでしまった。どうやら小さなことでもつつこんでしまう性質らしい。

「附属のときに生徒会に女子のスリーサイズリストを没収されてな……。取られてもいい方をいつも持ち歩いてるのさ！」

「そんな誇らしげな顔されてもな。てかスリーサイズリストって何だ？ いやいや、そんな事はどうでもいい！ 何をしてるんだ？」

村田は鼻で大きく息を少し吐いて、メモ帳をパラパラと捲りだした。少し除いたが気持ち悪いくらい小さなメモ帳にビッシリと黒い字が書かれているページが沢山あった。

「あったあった。えっと、模擬店だ」

何で漢字三文字だけなのにメモ帳を開く必要があったんだよ。ア

ホなのか？

だがそれだけなら何でトップ争いしそうになるんだ？

「何でもお前の妹が風紀委員で校門で、お前が寝てる間の学生集会でも色々宣伝してたみたいだ。あの子も附属のガキにしては凄く可愛いよなあ」

あいつ結構元気にしてるんだな……。まあそうか。二週間もうじうじしてるわけにもな。

「フン、でもそれだけならこっちの方がコスプレ喫茶みたいなんだし結構来るんじゃないのか？」

「まあそうだね」

俺と村田は周りの女子生徒を見てうんうんと二回頷いた。

「おにい？」

「おっと、退散退散……。じゃあ僕は昼過ぎからだから午前中頑張れよ」

悪魔&天使喫茶の元凶は、湊の声を聞いた途端小走りで俺の横から去っていった。結局あいつは何しに来たんだ？よく分からんな。

村田が去った数秒後、生徒の中からツインテールの小さい天使の格好をした幼馴染が出てきた。

「おにい、さっきみんなをいやらしい目で見てたんじゃない？」

天使とは思えない顔で俺をジト目で俺を睨みつけてきた。

「う、うるさいよ。健全な男子ならこれくらい見るわ」

「おにい本当に叶ちゃんとか仲直りする気あるの？ 鼻の下伸ばしてだらしないよ？」

創立者祭でも口うるさい幼馴染だ。仲直りする気はあるがやはり俺も男なのだよ。

「それにしても蓮華っち達なんだか楽しそうだね」

湊は他の生徒達の輪の中にいる蓮華達を指差した。蓮華達はニコニコ笑って仲良くおしゃべり、とでも言うのだろうか。とにかく楽しそうに談笑している。

「まあ、楽しそうだなによりだね」

「あれゝ？ 妬いてるのゝ？」

「なんでそうなる。しかし暇だな。八時開始だけどまだ一時間もあ
るじゃないか」

そう言つてポケットからハンカチを取り出して額の汗を吸い取つ
た。

「でも三十分前に集会あるんだよ？」

じゃあ何故衣装を着た。そうツツコミを入れたくなる。ミイラ男
や高度な衣装をしている奴がいるところを見ると、どうやらこのま
ま行く空気が流れている。勘弁してくれと言わんばかりに俺は盛大
な溜め息を吐いて前に屈みながら頭を抱えた。

「ねえ、ヒロキ」

「よく呼ばれる朝だな。どした」

友達の談笑の輪から抜け出してきた本物のヴァンパイアが俺の目
の前に立つた。

「うんうん。よく似合ってるわ。見たことないけど男のヴァンパイ
アみたいよ」

目を瞑つて満足そうに数回頷いた。まあそりゃヴァンパイアの格
好してるんだからヴァンパイアに見えるだろうよ。

「しかしこの八重歯取れないのか？ 違和感ある上に唇にたまに刺
さつて痛いのだが」

「特殊な粘液で引っ付けといたからそのうち取れるわよ。でも血は
吸えないけどそのままでもいいでしょ？ いいチャームポイントじ
やない」

「何で作り物の歯がチャームポイントなんだよ」

溜め息を吐いて中指で歯に触れた。触った感じ、本物に近いよう
な歯だ。しかし何も持っていないのにどうやって作ったんだろう。

「学園生活始めてのイベント事だから楽しい思い出作らないとなあ

……」

蓮華は翼を伸ばして窓から身を乗り出し呟いた。こいつら本当に
目的終えて帰る気あるのか。願わくば帰って欲しくはないが、最近

は目的のことより学園生活を楽しんでるように見える。

「程ほどにな」

楽しそうな蓮華の横顔を見てか、俺の頬は緩んで何故か微笑んでいた。

創立者祭、開始（２）

そんなこんなで始まった創立者祭。我がクラスの悪魔＆天使喫茶にはまだ誰も着ていない。窓際の涼しい所で体育館でもらった無駄に凝っているフルカラーのパンフレットで顔を仰ぎながら校門の方を見ると沢山の人で溢れていた。老若男女問わず色んな人達がいる。この多さを考えると恐らく島外からの人達もいるのだろう。特に珍しいこともないのに文化祭でもえらい人が来る学園だ、多いのは予想はしてたが、二週間前に突如決まったのに、よくもこう島外にも知れ渡ったな。

「おにいちゃん暇〜」

ひとりで留守番している子供のような表情を浮かべたエンブーサがふわりふわりと宙浮いて、俺の頭を太股で挟んで強制肩車をしてきた。

「マント汚すなよ。ていうか一般人がいつぱい来るんだから飛ぶな」
そんなに重くないので全く動じずに、俺は音羽にも届くように少し上を仰ぎ始めた。だが腕に少し負担が掛る。疲れたらやめよう。

「おにいちゃん時間あったら音羽と回ろう？」

右手でバランスを取りながら左手で俺の頭をペシペシ叩きながら訊いてきた。

「ごめんだけど無理だ。ちょっと叶と約束があるからな。まあその代わりなんだが二学期の文化祭のとき一緒に回ってやるよ」

うつすら窓に映る音羽の顔を見ながら謝った。適当に約束をして逃れようとしたが完全にノープランな言い訳。もし音羽が文化祭まで覚えていたらめんどくさいことになりそうだ……。

音羽は嬉しそうな顔と不満そうな顔を足して二で割った顔をして納得したのか、コクコクと頭を縦に振った。

「それにしても人が多い割には暇ね〜。五階から見ると人がゴミのようね」

もうひとり真っ赤の普段着を着た暇そうな本物ヴァンパイアが少し飛びながら俺に近寄ってきた。

「どこの大佐だお前は。ていうか飛ぶなってお前等！ お年寄りが見てビックリしてえらい目に遭ったらどうすんだ！」

「うるさいわねー。パンフレットにも本物の悪魔がいるかもって書いてるでしょ？」

「そういう問題じゃねえ。人間界に馴染んでくれるのは大いに結構だがな、自分からいろんな人に正体を晒すのはやめてくれ。島外に知れ渡って面倒ことになるのはごめんだ」

少し顔を上げて目の前に立つ蓮華を細い下目使いで睨んで言った。しかし悪魔にそんなのも通用するはずもなく、

「大丈夫大丈夫っ。根拠はないけどね」

テンションが高いのか、素なのかは分からないが俺の言うことを笑顔で流し、飛ぶなという要望は一切聞いてくれそうにない。

「そ、そんなことより！ あ、あんた……午後から空いてる？」

そして何の前触れもなく、蓮華は目線を逸らして少し言葉を詰まらせながら訊いてきた。

またか、またデートのお誘いか！ 断るほうも少し悪い気がするんだぞ。こうなるなら事前に言うべきだったか……。この調子なら琴美も来そうだ。

俺は音羽を降ろし、二拍子ほど遅れて、

「すまん。叶とちよっちな……デートなら悪いけど琴美か音羽としてくれ」

目の前で手を合わせて謝り、お誘いを断った。すると蓮華は苦笑を浮かべて言った。

「あ、ああ、あの件ね。それなら仕方ないわね」

苦笑ではあるものの残念そうな顔を向けられると少し罪悪感を覚える。叶と喧嘩さえしていなければ特に回る奴もいないし一緒に回るのだが。

「っていうか！ だ、誰がデートって言った！？ あんたを振り向

かせる為に誘ったわけであって別にデートとかそんな、」

「わかったわかった。そういうことにしておこう」

「なっ！ち、血吸い尽くすわよっ！」

適当にあしらって否定しまくる蓮華をなだめる。しかし蓮華の扱いにも慣れてきた。やはり素直じゃないところに可愛げがある。

「まあ失敗したら、後夜祭にでもいいから慰めてくれ」

「あ、あんたが弱気でどうすんのよ。土下座して地面に頭百回打ち付けてでも許してもらってきなさいよ？暗いところは好きでも、同じ家に住んでる人がいつまでも暗いのは嫌だからね」

よく分らん理由で蓮華から頼まれた。俺は「おう」と一言言つて苦笑を浮かべて親指を立てて頷いた。

しかし土下座までして謝れと言われたら気が引ける。いくら仲直りしたいからといって妹に土下座までしなきゃいけないなんて兄としての威厳が……あ、冗談か。

だが蓮華も俺と叶の心配してくれるなんて思いもしなかった。まあ根はいい奴なのは知っていたが。

「まあもし、シスコンが振られたときはちゃんと慰めてあげるわよっ」

いいと思ったときに台無しにするな。大体振られるとはなんだ？告白するみたいになってるぞ。っていうか俺はシスコンじゃねえ！心の中で思い切りつつこんだが完全否定出来ないため口に出すことが出来ない。

「ヒロキ……」

そして丁度会話が弾み終わった後に制服姿のライカンスロープがやってくる。モテ期か？生涯三回あると言われるモテ期なのか？日常茶飯事な光景なのだがこういったイベント事で誘われると思ういたくもなる。

「どした。デートのお誘いですか？」

パンフレットで仰ぎながら訊くと、琴美は尻尾をパタパタ振ってコクンと大きく頷いた。

「……だめ？」

無表情ながらも黄色い瞳の奥で可愛く訴えてくる。これは蓮華を断ったときより罪悪感が生まれそうだった。

琴美のお誘いを断ってから数分、我がクラスがある五階もがやがやと人の声が聞こえてきた。未だ客無しの悪魔&天使喫茶は廊下から聞こえる声を聞いて誰もがそわそわしている。しかし二セモノヴァンパイアの俺は至って冷静。何故なら客がひとりふたり来ようが俺が接客する必要はなさそうだからだ。もちろん人が多くなつてきたら働くがそれまでは窓際で涼んでおこう。

そんな甘い考えが浮かんだ瞬間、初のお客様が分厚いカーテンの暖簾をくぐって入ってきた。

四季の学園高等部生徒のセーラー服を身にまとった二人組。初のお客様ということもあってか、ウェ이터、ウェイトレスの全員の視線が一齐にその二人に集まった。気まずかるう……可哀想に。今なら間に合う。逃げていいぞ？

俺が彼女等に同情していると、真横に立っていた蓮華が俺の手首を握って、

「ほら、女性の客は男が行くのよ！」

「うわっ！ 聞いてねえよ！」

たった今聞かされた理不尽なルール言われ、前に突き出すように俺の手首を投げた。

投げられた俺はバランスを取ってるうちに前に前に進み、しっかりとバランスを立て直したときには二人の生徒の前に立っていた。どうしてこうなった……。

怯えているお客様二名、それを見て戸惑う二セモノヴァンパイア。接客なんてしたことなんてないし、練習なんかもしてない。よってどうすればいいかさっぱり分からん。

周囲から寄せられるプレッシャーで泣きそうになる。誰か助けろ、いや助けてください！

「いらつしやいませお客様」

戸惑っている俺の後ろから包まれるような優しい声がした。振り向くと、俺のすぐ左後ろに優しい微笑みと、「おふたりですか？」と癒しボイスを放つ綾那の姿。今の状況といい微笑みといい、今やつと本物の天使に見えた。

綾那は笑顔を絶やす事無くお客を席へ案内し、テキパキと注文を取りはじめた。

「ふう……」

たった数秒でどつと疲れるなんて思いもしなかった。俺は安堵の息を漏らして本物ヴァンパイアを睨みつけ、急ぎ足で一歩手前まで近付いた。

「馬鹿かお前は！ 彼女達にトラウマ埋め付けてどうするんだよ！」

「あははっ、ごめんごめん。ひとりだけ涼しい顔してたからカツとなって……後悔はしていないわ」

蓮華はヘラヘラ笑いながら俺の方を強く叩いた。明らかに確信犯だ。

「いらつしやいませーっ！」

「おっ？」

蓮華を睨んでいるうちに新たなお客が暖簾をくぐってきた。男女カップル。綾那に続き音羽が笑顔で接客を始めた。

「ほら、次はお前が行けよ」

「なっ……あんたもしなさいよね！」

お互い数秒睨み合って接客準備に入る。蓮華は紅茶やお菓子などを運ぶスタンバイをした。俺は……廊下に出て客寄せでもしよう。それからもどんどんお客が来た。中は満席、イベント事のときに

はいつも敷かれる、一般客へ配慮された透明のラバーシートが広がる廊下には結構な列が出来ていた。列を管理しながら周りを見ると、五階にもずいぶん人が来ている。高い階のせいか主に若者が多い。

それと生徒の保護者と思われる中年の女性達。なんで普通の喫茶店にしなかったのかとつくづく思う。列の方へ視線を戻すと、普通の客はもちろんいるのだが、少しオタクっぽい男女が主だ。まあコスプレ喫茶とほとんど変わりないし、大体こうなると思っていた。

「川越くん、三人分席開いたよ」

カーテンからひよこつと黄色いケミカルライトのわっかを頭の上にぶら下げた天使役の女の子が顔を出した。なんてシュールな絵だろう。思わず噴出しそうになった。

「はい、それじゃお客様男性二名入ります」

作り笑顔を野郎に向けてカーテンを広げ、広げた隙間から男二人が入っていった。そして次は三人組の女の子達が前に詰めてきた。

「いらつしやいませーつ。こちらへどうぞ」

どうやら蓮華が接客しているようだ。まさか飛んでないよな？失敗してないよな？色々心配だ。

気になって少しカーテンを持ち上げて悪魔&天使喫茶の様子を見る。

特に心配していることは起こっていないようだ。……まあ俺の心配しすぎか。だが凄く微笑ましい絵が見れた。蓮華も音羽も純粋に楽しんでるように接客している。完全に我が喫茶店のムードメーカーだ。琴美も無表情だが楽しそうにやっている。もちろん綾那や湊もだ。くそう、俺も中で接客にすればよかったか……。あんなに楽しそうだったのにこっちは。

「あの」

次のお客三人のひとりが俺を軽く叩いて呼んだ。

「はいっ？」

「一緒に写真撮ってもらっていいですか!？」

……くそう、こっちも全然楽しいじゃないか。

創立者祭、開始（3）

時間は午前十一時を少し過ぎた頃。悪魔&天使喫茶は大繁盛で列がもう俺ですら最後尾がどこにあるか分からないところにある。通販で買った格安の冷凍ケーキと飲み物しかないっていうのに、たった一日しかない創立者祭を無駄に過ごしていいのかとつくづく思う。まあこのクラスの俺は一向に構わないのだが。

「川越ー四人いけるよー」

教室から男子の声が耳に入ってきた。俺はその声に返事する事無く、どうぞと一言と全力の作り笑顔で前にいる二人のグループを二組教室へ誘導した。そして教室に入った後手で作り笑顔を元に戻す。作り笑顔もしすぎると頬の筋肉が痛くなつて辛くなるものなのだ。ていうか他の奴等はどうしたんだ？何で俺が廊下で立ちっぱなしなんだ。もう俺の脚は小鹿みたいになつてるぞ。決して口に出さず不満を心に吐いてあごと頬の筋肉をマッサージする。

「おにい、何ひとりで変顔してるの？」

見計らったかのタイミングで湊が入り口から出てきて俺の顔を見て苦笑を浮かべる。

「う、うるさい！ちょっとお前変わりやがれ！」

手を顔から湊の頭の上に置いて店から引きずり出した。

「私も出るけどおにいもちよつとそのまま残つててよ？」

「何だよ。もう三時間は立ちっぱなしなんだぞ」

「これも私の計画のうちなんだけど？」

そう言つて湊は俺の横に並んでジト目で俺を見た。

計画といわれたら逆らえないのが現状。俺は大きな溜め息を吐いてその場にしゃがんだ。しかしここに突っ立ってるだけが計画って一体何をする気なんだか。

「すっごい列だね。蓮華っち達のおかげかな」

「どうだろうね。確かにあいつ等は可愛いけどこんな列が出来るまでなあ……。俺が客側ならいくらスタイルよくて可愛い子がいても並ばないね」

「あはは……。働く側がそんなこと言ったら元も子もないよ」

フンと鼻で笑い、作り物の八重歯を摘んで前後に揺らした。何故か取れそうにない。

しかし計画ってことは叶絡みのことなんだろう。計画とだけしか聞かされていないんだが俺はなにをすればいいんだ。もし今あっても心の準備が出来てなくて口パクパクするぐらいしか出来ないと思うのだが。

「あ、来た来た」

その一言で一瞬で綺麗な姿勢で立ち上がった。

湊の指差す方角を恐る恐る覗くと、腕に生徒会と書かれた腕章をつけて堂々と歩く集団が見えた。ふしだらな俺の天敵のひとつである生徒会の奴等だ。

生徒会とはそのまんまの意味でこの学園の風紀委員やその類の委員入ってる者のことを言う。ただ腕章をつけている奴等はその各委員の長だ。どうせ不埒な出し物を潰しに回ってるんだろう。うちの出し物が危険だ。

「……ん？」

よく見るとその中に叶の姿があった。叶が風紀委員なのは知ってるが腕章をつけるまで偉い奴じゃなかったような気がするが……。生徒会の集団は我がクラスの前で立ち止まり、生徒会で一番偉いとされるメガネを掛けた生徒会長が一歩歩いて俺と湊の前に出た。だがそんなことはどうでもいい。俺はすぐ目の前いる妹が気になっただけで仕方ない。一切こっちは見てくれないが……。

「情報技術化一年B組、悪魔&天使喫茶……ジャンルは模擬店」

村田と同じようなメモ帳を胸ポケットから取り出し、めがねをクイツと持ち上げて睨むように俺を見た。

確かに少しぐらい風紀を乱してると思うけど俺ってそんなに嫌わ

れてるのか？少しイラッとしたぞこのがり勉メガネめ。

俺は高らかに鼻で笑い暖簾を上げて、

「どうぞどうぞ生徒会様。さっさとご覧に、」

皮肉っぽく言おうと思ったが、最後まで言い切る前に湊のかか
が俺の脛に直撃した。

「あははっ。やっほーっ」

「お、お前何しやが おうふっ……」

再びかかと蹴りが蹲っている俺の顔に直撃する。つまり余計なこと
とは言うなと……それなりのサインで気付くのになんでこんな荒々
しくした。

俺は鼻を抑えながら黙って立ち上がった。

「は、英さん！？」

湊を見た途端に裏返った声が響いて生徒会長の体が静止画のご
とく固まる。そしてどんどん紅潮していくのが分かった。

もしかして生徒会長ともあろうものがこんなミニマム幼女に恋し
てるのか？このロリコンめ！お前みたいな頭が硬い奴なんかに幼馴
染は渡さんぞ。

「わかつてるよね？」

「も、もちろん……」

結構自然な感じで湊と生徒会長のコソコソ話が始まった。もし
かして計画とやらの為にこいつを利用しているのだろうか？けしから
ん、もつとやれ。

そして数秒で話が終わったと思うと生徒会長と湊は悪魔&天使喫
茶の中へ入っていった。多分これは生徒会の仕事なんだろう。

取り残された俺は腕を組んでチラッと他の三人の生徒会員の中
にいる叶を見た。まだそっぽを向いているようだ。……話そうと思っ
たが湊に言われた以上、支持があるまで余計なことは話さないほう
がいいか。

しかし気まずいよこの空気。カムバック湊！早く、早く戻って来
てくれ！

俺の願いが通じたのか出口の方から湊と生徒会長が出てきてこちらへ戻ってきた。……会長が真っ赤な顔して。

「も、問題なし……。それでは一同解散。川越さんは残って……」生徒会長は拳をふるふる震わせながら言った。

一体中で何があったんだ？まあ大方の想像はつく。どうせ普段は硬派な雰囲気をもっと出してると会長もコスプレ喫茶の前では男が出たんだろう。だが恥じることはないぞ、会長。俺よりひとつ上だがそうやって男は大人の会談を登っていくのだから。

そして叶以外解散していく生徒会の奴等達。叶は少々不安げな顔を浮かべて会長の前に出て訊いた。

「あの……私は何で残されたのですか？」

そりゃ訊くわな。でもどうやら大方理解したぞ。この機に一緒に叶と回るんだな。

「いやどうせならお兄さんと一緒に回ってはどうかだい？」

会長は棒読みで質問に答えた。そしてカチコチと大まかなパラパラ漫画みたいな動きでこの場を去っていった。

「そうそうっ。おにいもそうしたらどう？」

湊はニコツと笑って俺に見えるようにさり気なく親指を立てて叶をクイクイと差した。

どうやらここからは俺がやれっということらしい。

「そうだな。こういうのも悪くない。回るか？」

「は、はあ？ ふざけないでよ。何で兄貴なんかと回らないといけないのよ……」

叶は小さな声でそういつて目を細めて俺を睨んだ。

しかしここで折れたら湊の計画が台無しになる！どうにかして誘わないと！

「そんなこと言わず、あふん……」

またセリフの途中に鳩尾に湊の肘撃ちが直撃した……。

「もう無いと完全に油断していたのに……」

「あ、あははっ。まあそんな事言わないでさ！一緒に回ってきな

よ。ねっ？」

湊のその一言で、叶は腑に落ちない顔をして渋々頷いた。

「じゃあ私はおにい抜けたことみんなに言うから、そのまま行っ
たらっしやい！」

「ちょ、ちょっと待て！ 流石にこの格好じゃちと恥ずかしいんだ
が……」

俺のいうことも聞かずニセモノ天使は教室へ戻っていった。

……だが、どうやら湊の計画とやらは成功したようだ。これでや
っと、後は俺がどうにかしないといけない段階までいったのだらう。

「悪い、ちと着替えてくるわ。待っててくれ」

「う、うん……」

創立者祭、開始（４）

学ランに着替え終えて俺と叶はとにかく校舎内を歩く。俺と叶の間は人ひとり入れそうな間が開いていた。

周りに凄く迷惑な歩き方だが近寄ろうにも近寄れないし、きつかけなんかもない、ましてや話すネタもあるわけない。お互いに気まずい空気だけが辺りに漂っていた……。

このままじゃ二週間もかけて作戦を練ってくれた湊に合わせる顔が無い。そして叶と仲直り出来る機会がなくなってしまう気がして仕方ない。

「どこか行きたい所あるか？」
「ない」

即答。ちよつとお兄ちゃん傷ついたぞ。クエスチョンマークが出てくる少し前に答えたぞ！

「な、なにかないかなー？」

頬を引きつらせながらズボンの右後ろポケットからパンフレットを取り出した。

しかし叶は何の反応もせず、可愛い小さな顔を仏頂面にしてただただ前を見て歩く。その姿は全く風紀委員には見えない。普段の綺麗な叶しか知らない奴は腰を抜かすだろうね。

苦笑を浮かべてパンフレットに目をやった。

どこもかしこも無駄に凝ったのばかりだ。うちのクラスもそうなんだが、たった一日しかないって言うのにどれだけ頑張るんだか。軽音楽部や吹奏楽部は公演する機会が増えて嬉しいとかいっていたが……。五十年間もしてこなかった行事を何で今更するかも謎だ。

まあ文句は言うものの、こういうのを見ていると楽しくなるもので、全部を回ってみたいなんて馬鹿な思いも少し出てくる。だが叶がこの状況じゃ最悪ひとつも回れない……。かも、いかんいかん。こんな弱気になっててどうするんだ俺は。それに全部回る必要なん

が無い。とにかく、ひとつでもこいつが好きそうな場所とかに誘ってご機嫌をとって仲直りだ！

とりあえず闇雲にでも何か誘わないと……。

「な、なあ、昼飯食べたか？」

「……食べてない」

食いついた！

こういうイベントだと食べ歩きはほとんど不可能。つまり話すきっかけが出来るかもしれない……これはチャンス！

「ど、どっかで食べるか？ 昨日金下ろしてきたから今日はなんでも奢ってやるぞ」

小銭と紙幣を溜め込んでいつもより少しだけ分厚い財布の入ったポケットをポンポンと自慢げに叩くと、叶は少し俺の表情を見て、

「じゃあ、クレープ食べたい。高等部普通科の二年の……」

決して目を合わす事は無かったが、少し照れくさそうな表情をして答えてくれた。

まさか断らずに頼んでくれるとは思いもしなかった。この後俺が「遠慮するな」なんていう展開になるものかとばかり思っていたんだが……。まあ、仲直りしたいのか腹が減ってるのかは知らないが「クレープね……久し振りに聞いた。俺も買おうかな。美味しいもんな、あれ」

「うん。生クリームいっぱい」

「お前は昔から甘いもの好きだったよな。俺が誕生日のときも親父達が誕生日のときもケーキひたすら食ってたし」

そのくせスタイルはいい。なんて不公平な体しているんだか。

「昔って程じゃないよ。……でもあんまり考えたこと無かったけど、兄貴と兄妹になってもう五年も経つんだね」

叶は少し笑みを浮かべながら言った。……会話が弾んだ？

「ま、まあ確かに昔じゃないか。だが考えてみる。まだ五年しか経ってないんだぞ？ 俺とお前は血は繋がってなくても兄妹なんだ……

…これから先もずっと、」

「兄貴」

「話を聞け。だから俺達はだな」

「もう普通科の所なんだけど」

妹が指差す先は普通科

「完全にミスったなあ」

歩いてる間に言えなかった俺の馬鹿さ加減に失笑と溜め息が出る。とりあえず財布をポケットから出し、短い列に並んだ。

「バナナにイチゴ、りんごとカスタード……」

すりガラスの窓にビッシリと貼られたメニューとにらめっこする妹。

……なんだろう。こんな風景結構前に見たような気もする。デジヤブか？

それにしても、選んでいる姿がなんだか小さい子が悩んでいるように幼くて微笑ましい。思わず笑みが毀れた。

「なっ！ 何ニヤニヤしてるのよ気持ち悪い！」

俺の視線に気付いた叶が顔を真っ赤にして歯を食いしばって睨んできた。しかしどんな顔をされても今は可愛いとしか思えないぞ妹よ。

「なんでもないさ。んで、決まったのか？」

「イチゴとりんごで決まらない。どれも美味しそうだし」

顎に手を当て、頭を少し傾けて更に悩み始めた。

たかが素人が作るお菓子なんてどれも変わらないと思うのに、どうしてそこまで悩めるのか。それにりんごとイチゴって、どっちも甘酸っぱくて、両方ほとんど変わらない気がするのだが。

「お客様どうぞ」

三角巾とシンプルなエプロンをつけた女子生徒がドアの敷居に置いてる机に乗り出し、顔を覗かせて俺達を見る。

「どうするんだよ」

ふたり、女子生徒の前に立って叶の肩を軽く叩く。

「んーっ！ イチゴ！」

ようやく決心が付いたようだ。それなら俺はもちろん、

「じゃあ俺はりんごのをひとつ」

「かしこまりました。りんごとイチゴをひとつずつ」

女子生徒は営業スマイルと指でハサミをつくり教室で調理班と思われる人達にオーダーを伝えた。

「じゃあ料金の方なのですが、四百円のところをカップルなので二百円です」

ニコニコ笑いながら両手をチヨキチヨキして再び俺達の方を見た。
「なっ!？」

俺と叶が口を開けて固まる。

なるほど、そういうシステムか。まあここはカップルではないが値引きしてくれるならそういうことに、

「力、カップルじゃないです! 兄貴です兄貴っ!」

こうなることは分かっていた。分かっていたがな妹よ、全力否定とせつかくの値引きを台無しにするのはやめてくれないか。安いのだが半額って結構でかいぞ?

「あらら? 兄妹でデート中? まあそれでも二百円二百円」

女子生徒は少し不思議そうな顔を浮かべてチヨキチヨキを止めると、二秒後にまた喧嘩を売ってるかのようにまた顔の横で指をチヨキチヨキしてクレープ代を継げる。

「だからデートじゃないんですって! 兄貴に無理やり、」

否定し続ける叶を無視して俺は百円硬貨を二枚女子生徒に渡した。女子生徒は俺の顔を見て「大変だね」と言わんばかりの苦笑を浮かべた。大体苦笑の意味が通じた俺も頬をかいて苦笑を浮かべた。

「あ、兄貴も何とか言いなさいよっ!」

「うるさい。値引きして貰ってんだからいいじゃないか。今だけカップルってのも」

「な、なによそれ……」

叶は赤面して睨みつけ、背中を俺に向けて腕組みをした。

これはまた怒らせてしまったのだろうか……?

「はい、お兄さんイチゴとりんごですね」

三角錐の紙の入れ物に入ったクレープをふたつ受け取り小さく頭を下げた。

「ほらどっか落ち着ける場所行くぞ」

まだそっぽを向いている妹の背中を肘で軽く突いて、普通科クラスを通り過ぎ階段の方を目指す。

「ちょ、待ってよ！ 落ち着ける場所ってどこなのよ」

小走りで俺の横まで来た妹にイチゴのクレープを渡し、質問に答える。

「屋上だよ」

「は、はあっ？」

創立者祭、開始（5）

最近よく来るようになった屋上へやってくる。誰かを連れてくるのは初めてだが、やはりバレる事無く来る事が出来た。

「よつこらせ」

金網にもたれて腰を下ろした。

「いいの？　こんな場所来て」

「ああ。俺は常連だが一度もバレたことが無い」

そう言つて、少し冷たくなったりんごのクレープをかじる。味の無い生地から甘さ控えめの生クリーム、その中にりんごの酸味がある。ただ、美味しいかどうかと聞かれたら普通と答える……。やはりたかが学生が作った物だ。ぶつちゃけるとうちのクラスのケーキも紅茶も微妙だ。だが、それがいいんだろう。それを好んで食べるものも多いと思う。

「ふうん。風紀委員の私がこんなとこ見られたらどうなることやら」溜め息をつきながら俺の左に腰をかけた。

「その時は俺が無理やり連れてきたとでも言え。お前は助かるし、俺は特別指導で停学で少し休めるし一石二鳥だ」

「あ、兄貴どんだけ学校嫌いなものよ……」

「学校が好きな奴なんてそういないね」

叶は苦笑を浮かべながら、両手でクレープを持ってかぶりついた。豪快な食べ方で両頬と鼻先にちよこんと生クリームが付いたのだが、本人は全く気付いてなさそうだ。

しかしあんまりガキっぱい食べ方するなよな。お兄ちゃんは恥ずかしいぞ。

「お前、後夜祭どうするんだ？」

「どうだろう。生徒会で少し集まらないといけないと思う　って、なんでそんな事聞くの？」

「な、なんとなくだよ。最近お前と口聞いてなかったしいいんじゃない」

ないかい？」

「ふーん？」

ストレートすぎただろうか。凄くジト目でこっちを見てきやがる。生クリームを付けた面で凄く見てる。いかん、噴出しそうだな。

「それよりだな、お前の生クリームどうにかしろ」

「ちよつ……！」

親指で強く叶の鼻を拭くと、少し涙目になって片手で鼻を押さえた。数秒前はジト目は眉間にシワを寄せて睨んできた。

「それと両頬だ。クリームべったり付いてる」

「さ、最初から口で言つてよ。なんでそんなベタなバカップルがしてそうなの、あ！ その指舐めないでよ！？」

叫んだからからなのか知らないが、俺のクリームを付けている親指を指差して見る見るうちに叶の顔が赤面していく。

もちろん舐め取る気なんてさらさら無かった。だがどうすればいい？ その辺に擦り付けるか？

そんな事を考えてる間にも、叶は両頬に付いたクリームを人差し指で綺麗に取って上品に舐め取った。いや、頬に付けている時点で上品とは言えないか……。

「その辺に付けるぞ？」

「それは生クリームに失礼よ！」

「お前は生クリームのなんなんだ。それならこの生クリーム様はどうするんだよ」

「か、貸して」

叶は片手で俺の手首を握ると、チラチラ俺を見ながら顔を近づけた。大体予想は付いたのだが、急展開過ぎる。今まで毛嫌いされているかのように拒絶されていたのだが……、一応俺達喧嘩中……だよな？

吐息が微かに手に触れる距離まで近付く。叶が少し口を開けると生暖かい息が掛り背筋がゾクツと震えた。その反応に驚いたのか叶もビクツと肩を竦めて動きを止める。そして無言のまま俺を睨んで、

また親指に目を向けた。今度こそしつかり舌の先で親指の生クリームを舐め取った。

俺の心臓は今にも口から飛び出しそうなくらい脈を打っている。妹に親指を舐められただけで何でこんな興奮してるんだ？

「こ、これでいい……」

「おおおおお、おう……」

そして沈黙。お互い赤面した顔を涼しい風が撫でる。

親指にまだ叶の舌の感触が残っている。そして鼓動が全然元の速さに戻らない……。とにかく何か話せ、この気まずい空気を流すしかない！

「と、とりあえずだな……ほら」

決して顔を合わせることなくりんごのクレープをかじった周辺をちぎって叶に渡した。

「兄貴のでしょ？」

「お前これとそのイチゴの奴と悩んでたからやるよ。食ったところは切ったし文句なければもらってくれ」

そしてあんまり美味しくないからとは言えない。しかし買う前に叶が悩んでいたからこれを選んだわけで、元々あげるつもりでりんごのやつを買ったんだがね。

「……ない」

叶は俺からクレープをもらうと、クンクンとクレープの匂いを嗅いでまた豪快にかぶりついた。今度は俺が結構切ったからか、生クリームが頬などに付くことは無かった。

「美味しいか？ それ……」

質問にニコニコ笑みを浮かべながらコクコクと二回大きく頷いた。そして数回噛んで、静かに飲み込んで、

「おいっしい！」

目をキラキラさせてはあっと明るい笑顔を俺に向けた。

久々に見た妹の笑顔に早くなっていた鼓動が更にスピードを上げて脈打ち出す。前までこんな事なんてあんまりなかったのに。叶は

確かに可愛いが、たまに笑顔を見てドキッとしたこともあったが……こんな胸が締め付けられるような、心躍るような感じは初めてだ。まさかこの俺が妹に……いやいや、そんな事は無い。

俺は目頭を強めに抑えて、叶に再び目をやった。

「ありがとね、兄貴っ」

「そんな事あるっ！」

自分の左頬を叩いて右に倒れた。

それは何故か？

俺が妹に恋をしているんじゃないかと自分に疑惑が出てきたからだ。そんな馬鹿なことは考えてはいけない。俺と叶は兄妹だろう。

だがもし俺のこの疑惑が本当のものならば俺は叶は相思相愛？

やばい、そう考えたらなんだか嬉しくなってきたぞ。これはまさか本当に叶の事が……？

……なら俺は妹に。

なんてこつたい。妹との距離を戻そうとしてたはずが、まさかこんなにくつつく寸前まで事が進むなんて。

だが俺はこの気持ちを言うべきか？

でももし、断られたらどうしよう。大恥かくかもしれないし、せっかく戻ったと思われる距離がまた離れてしまいそうだ。

叶も俺と同じ気持ちだったのだろうか？

断られたら心配だとか。今俺と同じくらい いや、俺の何倍も不安な気持ちを抱えたまま今までずっと。

創立者祭、開始（6）

時間は正午を過ぎた頃、クレープを食べ終えた俺たちは再び校舎の中へと戻って、とにかく当てもなく歩きまわっていた。

結局あれから俺の方が気まずくなつて、はち切れそうなのこの胸の衝動に耐えるのに精一杯で会話が出来なかった。つくづくヘタレなわけでありまして、自分の想いに気が付いたらまともに叶と目を合わせることもすらまならない。

「ねえ兄貴、次どこいこうか？」

パンフレットを小さく広げながら俺を上目遣いして訊いてきた。

「ど、どこでも……」

だが妹の方はそんなに気まずいとか、話しづらいとかいうのもなく、さつきまで喧嘩していたのもどっかに行つてしまったかのように話しかけてくる。心なしに喧嘩していた前よりべったりしてくるようになってる気がする。

次は兄がこんなにも悩んでいるのにお気楽な奴め。もう俺も吹っ切れて腕組んだりとかそんな　出来るか、馬鹿か！

「あ、兄貴。こんな所に射的なんかあるよ！」

高等部校舎二階の真ん中辺り、叶は俺の制服の袖をクイクイと引っ張り普通科三年の教室を指差して立ち止まった。

「ああ、射的ねえ……」

「ねー！　入ろうよ？　初詣依頼してないし。あ、もちろん兄貴の奢りでね」

駄々っ子みたく体重を掛けて更に袖を引っ張りあげやがる。そして図々しい。

「分かった！　分かったから引っ張るな」

腕を開放させて大きく溜め息を吐き、叶を先頭に射的を催している教室へ半強制的に入らされた。

教室の中は机を台の替わりに一列に並べた以外の物しか置いてい

ないから何だか殺風景な雰囲気で、景品が並べられている台にはスパーで買い揃えたような、長方形の箱に入っているラムネやグミ。それと少し大きめ筒に入ったポテトチップス等。そんな落ちるかどうかも分からない明らかに安物のお菓子を狙うために二百円を退屈そうな受付けの男子生徒に払い、三人の列に並んだ。

商品から見て完全にボツタクリな射的。まあ大体そういうもんだとは分かってはいたがこうも人が少ないとは。そりゃ受付けの人も暇だろうな。

「何かちゃっちいね」

「そういうもんだろ。言わないであげるのが優しさだぞ」

俺のその一言が教室に響いたのか、店番の人達が俺に苦笑を向ける。

おい、何故俺を見る。ちゃっちいって言ったのは妹のほうだぞ。こっち見るな。心が痛い！

苦笑を向けられている間に二人がラムネを片手に教室を出て行った。二百円の代償が十円程度のラムネと……。可哀想に、だが俺もああなるのは目に見えてるが。

「お次の方どうぞー」と台の横に立つ女子生徒が俺達の前にいる三人を台の前に呼んだ。静かな所為か三人のテンションは微妙で、無理に会話をしながらコルクの弾をもらってプラスチックのコルク銃に詰めた。

後数分で俺達の番かな。

「ていうか兄貴、さっきまでは自分からうざいくらいに話しかけてきたのに、何にも言わなくなったね」

「そ、そうか？」

「そうだよ。うざいくらい喋ってたのに、私が話しかけたら何か焦ってるみたいだし？」

「う、うるさい！」

話せないのと同じ焦ってしまうのはお前の所為だと叫びたい。…いや、俺が変に意識してしまってる所為か。

こういう場合、早く言った方が楽になるのだろうか？ いやいやいやいや、馬鹿か。どこの世界に妹に告白する兄がいる？ 良い兄でありたいなら妹のためにもこの気持ちを抑えるんだ！

心の中でそう言い聞かせ、なるべく楽しいことを考えることにしてキリツと眉間にしわを寄せ、なるべく叶の顔を見ないように前を向いた。

それから特に会話もなく一分くらいが経つ。本当は三分くらい経ったんじゃないかと思うほど、気まずい空間で時が進むのは遅かった。前の三人がテンションを下げて渋々長方形のグミ等の箱を持って出て行くのを見送り、とうとう俺達の晩が来る。

店番の女子生徒に銃とコルクの弾を四発手渡しされて台の前に立った。

何事もないように終わってさっさとこの静かな射的場から出たい。そう思っているところ、ふと隣を見ると妹がとんでもない行動に乗り出した。

弾を装填し終わって、台にえびぞりでバランスを取りながら乗出し腕をめいっばい伸ばして出来るだけ至近距離で撃とうとしているのであった。

「お、おい叶さん！？ やめろ恥ずかしい、馬鹿か！」

真剣な顔をしているが、これはツツコミを入れずにはいられない状況で、ただでさえ近い距離だって言うのに景品を僅か五センチ程の距離で小さいラムネの箱を狙い落とそうとしているのだ。

「これ射的の基本だから！ 例えお遊びでもここは戦場なのよ！」

「遊びって言うてんじゃねえか！ やめろ！ 一応廊下からでもお前のそのえびぞり姿見えるから！」

大声のツツコミか、叶のえびぞりを見てか店番の人達が今にも噴出しそうな顔をして笑いに耐えているのが分かる。

俺はただただ恥ずかしい。でさえ可愛いのと風紀委員なとで結構有名な叶のこんな姿が教室の店番の人達もいれば廊下から叶のえびぞりを晒しているようなものだ。

早いところ俺も撃つてこの場所からさっさと出よう。このえびぞりが何人に見られるか分かん。

「ラムネでいいか……。この手のお菓子はあんまり好きじゃないけど落とさせてもらうかな」

ボソボソ呟きながらコルクの弾を銃の先に軽く差して装填する。そして体を横に向け片手で銃をラムネの箱に向けた。そして片目を瞑り狙いを定めて腕がぶれないように引き金を引いた。

コルクの弾は真っ直ぐに飛んでゆき、箱の上部分を……綺麗に右に逸れて当たる事無く後ろの壁に衝突して地面に転がった。

「……あ、あれー？」

「ぷっ、ははは！ 散々カッコつけてて外したよ！ だっさー」

「う、うるさい！ てかお前はどうかんだ、」

爆笑する妹をチラツと睨むように見ると、手にはそれぞれ違う種類ののお菓子が四つ。渡された弾は四発、つまりパーフェクトと。まああの殆どゼロ距離なら当然なんだろうけども……。

教室にいた店番の人まで我慢していた笑いを一気に噴出して教室が少人数の笑いが響いた。

くそ、もつと恥ずかしくなった！

「こなくそっ！」

俺は赤面しながら闇雲に残り残弾全て、ラムネの箱だけを狙い続けた。

その結果、まるでN極N極とS極とS極が拒否反応を出しているかのごとく弾はラムネの箱に一発も当たる事無く地面に転がる結果になった。同情でもらったラムネを片手に、後ろで爆笑しまくる妹に若干苛立ちを覚えながら普通科三年の教室から廊下に出た。

「さて、次はどこに行こうか？」

「射的以外だな」

「何拗ねてるのよ……。そりゃ上手い下手くらいあるよ」
「フォローになってない。」

「まあさ、次どこ行きたい？」

叶は苦笑を浮かべて窓際の壁にもたれてパンフレットを広げた。

「どこでもいいよ」

「それが一番困るの。どっちかが面白くないところ行ってもそんなの嫌じゃん」

小生意気な。さっきの射的は半強制的に行かされたんだけどな！

「それでもどこでもいいって言うなら、手芸部が自作のぬいぐるみ販売してるからそこに行きたいかな」

「はあ。じゃあそこでいいんじゃないか。今日はお前にとことん付き合ってやるよ」

「えへへっ。ありがと兄貴っ」

完全に油断したところに叶の満面の笑みが目の前に現れた。

……それは反則だぞ妹よ。

創立者祭、開始（7）

連れて来られるままに同階の端にある手芸部の部室前に到着。しかしいい歳した高校生が妹を連れてこんな所に入るのはとても気まぐずいわけで、俺の足は止まってしまった……。それと何だか体が行くなと命令してる。

「どしたの兄貴？」

急に足を止めた所為かきよとした顔で俺の顔を見上げた。

「いや、拒否反応がだな……」

「何言ってるんだか。それはさっきのコルクの弾でしょ？」

「う、うるさい。とにかくだな、出来れば後でに、」

俺がそう言つて振り返つた途端だった。目の前に少し見上げるくらいの長身の白い物体が目の前に立ちふさがった。

「……偶然？」

後ろからかあッ！

出来れば今会いたくない四人のうちのひとりに出会ってしまった。

「こ、琴美さんどうしていらっしやるのかな……」

「もう私は……遊んできていいって言われたから」

尻尾をぴこぴこ振って答えた。

そついえばもう昼は過ぎていたんだ、前半の班は終わってるんだ。くそ、もう少し警戒していれば！

「琴美さんもぬいぐるみ？」

案外普通の反応の叶が琴美に訊く。その質問に琴美は二回頷いて答え、尻尾を更にぴこぴこ振り出した。

琴美にこんな少女趣味があつただなんて思わなかった。

「一応小遣い渡したけど大事に使えよ？俺は今日叶の奢り役だからもう渡せないぞ」

「大丈夫……湊が色々くれたから」

ポケットに裸のまま入れられた数枚の千円札と何やら券みたいな

のが出てきた。

券のことも気になるんだがこいつ等にも財布くらい買ってやらな
いといけないかな……。

「模擬店の割引券と……輪投げ無料券……たこ焼き半額券」

「湊の奴そんなものどこから仕入れたんだか。アレか、あの生徒会
長か」

しかしそんな事はどうでもいい。さっきの体の拒否反応はなんだ
ったのか気になる。勘だがあれは手芸部の方から放たれていたとい
うか、絶対琴美ではないというか。

「もー兄貴！ さつさと入る！」

「ちょ、押すな！ こ、琴美まで……」

かかとでブレーキを掛けるも二人掛りでは意味もなく、完全に負
けたと確信した俺は大きく溜め息を吐き自らドアを開けた。

教室の中はなんとメルヘンチックな世界が出来上がっていて二
週間しかなかったというのに、様々な種類で割りとな数のぬいぐる
みが机にブラツと売り物として並べられていた。それと客らしき人
は何人が居るが、当然男なんて俺以外ひとりもいなかったりする。

その客の中に俺が拒否反応を発していた理由の人物が。

「あら、奇遇ね。ヒロキと琴美がぬいぐるみを買いに来るなんて」

俺に気付いた真っ白な翼を生やした天使が声を掛けて来た。こい
つも今出会いたくなかったひとりだ。

「俺がそんな趣味あると思うか。俺は叶の付き添いというかな……」

……

「ああ、喧嘩中の妹さんのね」

一言余計だ、と言いたい所だが俺達の喧嘩はもう終止符を打って
いる。多分！

そんな会話をしていると俺の背中を押していた叶が横からひよこ
つと顔を出した。

「あ、天使の……」

「こうしてお話するのは始めてかしらね。綾那よ」

綾那は俺達の前まで歩いてきて、ニコツとまさに天使の微笑みを叶に向けて一礼した。それを見て叶も慌てて腰を折ってお辞儀した。「綾那もぬいぐるみねえ……。ていうか気になってたんだがお前家とか金どうしてるんだ？ 野宿？」

「失礼ね。天界からお金は毎日来てるの。貴方よりいい生活はしてるつもりよ」

何気に俺より失礼なことを言ってるんじゃないかと思うことを言い捨てて、後ろの机に並べられているぬいぐるみを手に持って見始めた。

叶と琴美もその後について行き、なにやら楽しそうにぬいぐるみを眺めだした。

ひとり取り残された俺は凄く気まずいぞ。おい待て、進むの速いぞ。置いてくな。

嫌々ながらも三人の背中を眺めながら後について行く。しかし琴美も綾那もやっぱり普通の女の子と変わらないみたいだ。尻尾とか翼はアレだが、叶と一緒に見ていると人間の女の子にしか見えない。元のレベルが高いからこういう一面を見ると可愛いな、うん。

「兄貴、コレ！」

そう言っただけで突きつけてきたのはどこかで見たことあるようなダルメシアンっぽい犬の結構大きめのぬいぐるみ。本当にどこかで見た。「いくらだよ。金渡すから、」

「三千円」

「高え！？」

学校行事で売る金額かこれは……。俺は犬のぬいぐるみをまじまじ見て値段を疑った。だが結構細かく作られてるし……。そんなもんか。しかしこの値段のぬいぐるみ買ったら琴美の金が殆ど無くなるんじゃないか？

琴美の方を見ると、グレー一色の犬のぬいぐるみを持って震えている琴美の姿。くそ、見てられんぞ……。

溜め息を吐いて財布の中身を確認する。

万札が一枚と五千札一枚。琴美のも買っていたら六千円……。俺の貯金していた金が少しずつ削られていく。

「おい琴美。そのぬいぐるみ貸せ、」

「くっ……何故……！」

ふと琴美の方を見るとその奥で震えている天使がひとり。

お前もかいッ！何故じゃねえよ、天界から毎日お金もらってるって言っただじゃねえかオイ！

改めて財布の中を確認……するまでもない。

妹と仲直りするための計画でこんな……いや、別に俺が払わなくてもいいんだよ。ただなんていうかほっとしてはいけないというのだろうか。自分でも分からないが、人外の保護者的な感じというのか、買っただけじゃないといけない空気なんだ。

「全くこの人外どもめ……おい、お前等の分も俺が払うから震えんな」

叶のぬいぐるみも含めてぬいぐるみを全て腕から奪い取り会計らしき人がいる所へ向かう。

「兄貴……」

「どした。別のに変えるか？」

ぬいぐるみを抱えながらまた叶達の方へ戻る。

「うっん。なんでもない。兄貴のこと色々わかったよ」

心なしか少し哀しそうに笑みを浮かべて言った。その言葉の意味はよく分からなかったが……何か俺間違ったことでもしたのだろうか？

とにかくさつさと会計済ませようと、ぬいぐるみ三つに持ち金の半分以上使ってしまった。結構嫌々ながら買ったんだが、買ってあげた時のこいつ等の笑顔はプライスレスで、これを見ただけでも九千円払ってよかったなと思う。ただ金が減るのは結構痛いわけ……。

……帰りにもやしを大量に買って帰ろうか。

創立者祭、開始（８）

手芸部の部室を出てどれだけ時が過ぎたか。琴美と綾那と別れて、とにかく叶と色んな催し物を楽しんで回った。

話すことすらままならなかったのも、叶と一緒にいるだけで楽しくて、そんな気まずい感覚なんてものは消えていた。とにかく楽しくて、楽しすぎてこのまま時が止まって欲しいだなんて思いだす女々しい自分がいた。

「ねえ兄貴」

「ん？ どうした」

附属校舎二階。ぬいぐるみを抱え持つてる妹が急に足を止めた。

「私そろそろ生徒会の集まりとかクラスの事とかで行かなきゃいけないんだけど……」

「もうそんな時間か……」

ポケットから携帯を取り出して時間を確認した。時刻は目を疑うくらい早く過ぎていて、既に四時半を回っていた。ふと窓の方を見ると空も茜色に染まりかけている……。

本当に早いな。どれだけ遊んでたんだ俺達は。

「それなら仕方ない。頑張ってこいよ」

そう言っ葉の頭にポンと手を置いた。手を置くと小さく頷いて少し照れくさそうに苦笑を浮かべて抱きかかえているぬいぐるみをグツと強く抱きしめた。

可愛いじゃないかこのやろ。思わず俺も笑みが出そうだ。

「じゃあ行ってくるね」

「待て。もう少しだけ待て」

背を向ける妹の肩を掴んでこちらへ向ける。

「この喧嘩の原因だ……その、俺が蓮華達を何で置いてるかっ理由だが」

ここまで言うと、叶は何も言わず下を向いて哀しそうな表情を浮

かべる。

「さっきのぬいぐるみの件といい、前から若干自分で薄々気付いてたんだ。最初は目的を知らなくて、家事手伝いのために蓮華達の居候を許可した。目的を知った後はまあ……正直迷ったんだが、俺はあいつ等の成長を楽しんでいるんだと思う。だから今も居候させてる。最初は何もしなかった蓮華や音羽が家事してくれたり、琴美がどんどん料理上手くなっていったり、綾那が天使なのに悪魔の蓮華達と仲良くなっていたり……。ヒトじゃないのに普通にただの人間の女の子みたいに見えてだな。とにかくなんていうのかな……」

「親？」

「そうそれだ」

自信満々で長い間悩んでいた答えを出した。この答えで納得して貰えなくても、俺は正直に答えたから後悔なんかしない。

「……ふふつ。兄貴らしいよ。大丈夫だよ、もう何も気にしてないから。でもちゃんとあの時の答え言ってくれてちょっと嬉しかったかも……」

叶はクスクス笑って哀しそうな顔を笑顔に変えた。

「お、俺らしいってなんだよ」

「気にしないで。じゃあそろそろ本当に行かないと」

「おっとすまん。それと、ぬいぐるみはどうすんだよ。持って行くのか？」

ぬいぐるみを指差して訊くと腕に抱えられた犬のぬいぐるみをグツと抱きしめて答えた。

「うん。別に恥ずかしくないし」

中学二年にもなって生徒会の集まりにぬいぐるみを持っていくのが恥ずかしくないと。図太い神経してやがる。まあこういうイベント事があるからおかしくないとは思っけど。

「よし、じゃあ行ってこい」

「うん……」

叶はニコツと微笑み、そのまま廊下を小走りで進みだした。

振り向かない妹に手を振り、背中消えるまで手を振った後大きく溜め息を吐く。

これで兄妹の仲直りデート計画は完全に成功に終わったと……。しかし結局、後夜祭には誘えなかった。いや、誘わない方がよかったのだろう。あれ以上居たら本当に自分の気持ちをセーブできていたかわからん。自分に嘘を吐くのは嫌だが兄としてちゃんと正しい選択をしたはずだ……。これでよかったんだ。

きつとあんなのは一瞬の気の迷いで、あんな指を舐められたりなんかしたから変に舞い上がったんだと自分に言い聞かせ、込み上げてくる色んな感情を抑えて俺は叶と反対方向へ歩き出した。

そして三歩歩いたところか、目の前に悪魔三人が生暖かい目でこちらを見ている姿が視界に入った。

「なんだよ三人揃って。なっ、ちょ、やめて！ 三人揃ってその生暖かい目やめて！」

生暖かい目を止める事無く、ヴァンパイアが口を開いた。

「だーれが親よ。悪寒が走ったわ！」

「う、うるさい！ 俺は素直な気持ちで答えたただけだ！ むしろ感謝しやがれこの居候がッ！」

「頬赤らめんな！ 本当に鳥肌どころか蕁麻疹が出るわ……」

ヴァンパイアなのによく人間の症状とか知ってやがる。

「それより、あんたが昼に、それも丁度お腹が空いた時に出て行ったから凄く空腹なんですけど。叶と回るのは分かってたけどさ、急に出て行くなんて思わなかったから昼ご飯は嫌々無塩のケチャップ吸ってたわ」

「悪かったな。俺もあのタイミングで出て行くなんて思いもしなかったさ」

苦笑で適当に誤魔化し、三人の間に入り、俺より高い琴美の肩に手を置いた。

「この前教えてくれって言われた答え、まああのままの意味だから」
琴美は何も言わずコクンと大きく頷いた。

「それで、お前等はどこに行こうとしてたんだ？」

「ん〜……いや、綾那がどこにも見当たらないのよ。べ、別にどうでもいいのよあの天使なんか？ ただなんとなく、あいつが帰る前に後夜祭一緒にどうかなくて……」

何で素直に言えないんだか。まあ心配してるとかそんなんじゃないかなさそうだ。こいつ等もどうせ絡むなら人外以外とかそんなのがあるのだろうか？

「そうかい。そいじゃ、一緒に探すか。どうせ暇だし」

「な、なんであんたが付いてくるのよ！」

「うるさい。どっかで血吸わせてやるから」

「OK！ 行きましょ」

蓮華はオヤツを目の当たりにしている犬のように目を輝かせて俺の腕に抱きついた。

いやあ、扱いやすいね。

「やったあ！ やつとおにいちゃんと一緒に回れるね〜」

ニヤニヤ笑うエンブーサがパサパサと羽ばたき、太股で俺の頭を挟んで頭をしっかり掴んで肩車の体勢に入った。

「おい、人前で飛ぶんじゃありません」

しかし抵抗はしない。

「空気……読む……？」

続いて琴美が蓮華と反対の方向の脇に前腕を突っ込んで寄り添った。

いったい何の空気を読んだかは知らないが、いきなり凄い状況になった。主に突き刺さるようないくつもの視線が俺を貫いてゆく……。

本当になんで人前でこんな……最高のハーレムを築けるなんて！ そうだ、本来の俺はこうだ。一時的な心情で妹に現を抜かしてウジウジしているような人間じゃない。ベッドの下に本を隠したりパソコンであらゆる美少女とハッピーになったりと、煩惱に満ち溢れた自称主夫の平凡な高校生なんだ！

「何か色々吹っ切れた。ほら、さつさと綾那探しに行くぞ」
両手どころか頭にまで花を持って俺は廊下を歩き出した。

創立者祭、開始（９）

綾那を探しながら催し物のある程度周り、再び屋上へやってくる。時刻はもう六時半を過ぎていた。今日に限って日が落ちるのも早く、もう辺りは結構暗くなり空には少し赤い満月が低い位置に上がっていた。

金網を掴みながら校庭を見下ろすと、大きな舞台が校庭の端に設置されており、軽音楽部がなにやら楽器を持って舞台上に立っている。まあ立っているからには何か演奏でもするのだろう。俺は全く興味ないが。

「結局綾那は見つからず、後夜祭が始まったと」

「ったく！ あのアホ天使はどこにいるのかしら本当に……。もう足が痛い。探さない！」

眉間にシワを寄せるヴァンパイアが歯を食いしばって悔しそうな仕草をして金網にもたれた。

「おにいちゃんお腹空いた。喉渴いた」

「もう六時半だしな。後でその辺で何か買ってくるか」

俺の肩で駄々をこねる音羽を降ろして、金網にもたれる。

「そういえば湊も見てねえな。いつもは何かと俺の近くに居て神出鬼没な癖して」

「湊は……。あっち」

「ん？」

琴美が舞台の方向を指差す。

目を細めて遠くの舞台を見る……。すると先頭に立つボーカルだろうか、なにやら小さいツンテールがギリギリ見える。いや、まさか……ん？

『聴いてるかい四季の島ーッ！ 英 湊が軽音楽部と本日限りのコラボレーション！』

学園の彼方此方に設置されているスピーカーから湊の声が響き渡

る。そして校庭から凄い声援……。

「何やってんだアイツ!？」

「なんか知らないけど生徒会長の弱みを握ってるらしくて、一日好き放題してるらしいわよ。まあ軽音の人等も楽しそうな顔してるからいいんじゃない?」

「そんなもんかね……湊の場合自由過ぎると思うのだが」

「っていうか、よく表情まで分かるな。さすが夜行性だから……なのか、悪魔だからなのか。別にどちらでもいいがやはり人間より視力も優れていやがる。」

「あれだけ楽しかったのにもうすぐ終わりか」

「そうだな。これが終われば次は二学期にある体育祭だ。まあ少なくとも四ヶ月は先だ」

そう言うつと蓮華は大きく溜め息を吐いてへなへなと崩れ落ちた。

崩れたいののは俺の方だ。お前らは毎日楽しそうだけど俺は勉強ばかりの毎日が戻ってくると思うと泣きたくなるね。

同じように溜め息を吐くと、横に置いたエンプーサが目を潤ませ指を銜えて学ランの袖をクイクイと二回引っ張った。さっさと何か買って来いということなんだろう。

更に溜め息を吐く。そして携帯を取り出してメモ帳のアプリケーションを開いた。

「おい、何か買ってくるから言え」

携帯を両手で持って高速で文字を打つ準備をする。蓮華はまあ俺の血を吸うと考えて、琴美と音羽の声に集中すればいい。

「えっと、ホルモン焼きとシーチキンのクレープと麦茶が欲しい」

琴美が尻尾を優雅に躍らせて早口で両手を広げて右手の親指から三本を指を折って俺に注文する。

「あ、あれ? こ、琴美さんそんなに早く喋れるの?」

「一応満月だから……かな? 自分じゃ分からない。それでも別にいつもの私と変わらない。常にお腹は空いているしお肉の匂いを嗅ぐと、」

「ストップ！ わかった。なんだろうお前がペラペラ喋る姿はなんだが見たくなかった……。まあいい、音羽は？」

喋り足りないのか少し尻尾を逆立てる琴美に頼まれたものをカチカチと数字キーで文字を出して全て平仮名だけでメモし、改行した。「音羽はたこ焼きとホットドック食べたいっ！」

「はいはい……。飲み物は？」

「コーラ！」

随分馴染んでらっしゃる。もう少し悩んだりしないものか。

「蓮華は後で俺の血を飲む、でいいよな？」

「うん。さつさと戻ってきてよね」

「パシらせといてよく言うぜ……。それじゃ行ってくる」

適当にメモを残し、携帯を元のポケットに仕舞う。そして再び溜め息を吐いてドアへ五歩でたどり着く。

重い扉を引き、昼でさえ薄暗いのに夜になって更に暗く気味の悪い踊り場へ出る。

やっぱりひとり怖い……。思わず鳥肌が立ちそうだ。ていうか立ってる。下は灯りが付いているようだから問題ないがここは普段立ち入り禁止で電気なんか付いている訳がない。さつさとここを抜けよう……。

校舎内でもまだやっている催し物はあるが、とりあえず琴美の注文のホルモン焼きは校庭にあるので先に校庭へ向かう。

混み合う人達のせいで中々外には出れないのだが……。

何故こんなに混んでいるのかというと、もちろんライブだろう。あのちっこいのが歌うライブ。

「裏から出るか……」

少し遠回りになるが仕方がない。さつさと買って持って行って上から見物させてもらうことにしよう。

人混みのルートを外れて、小走りで廊下を走る。

……しかしこつち側の廊下には何故か全く人がいないような気がする。さっきの屋上前の踊り場といい気味の悪いものが続いている。後心なしか空気がどんどん重くなっている気がする。

あんなに混んでいるならこつちの出口使ったほうが絶対に早いと思うのだが。

「のうわっ！」

足元を見てなかったからか、何かを踏んづけて滑り派手に尻餅をついた。

「ラバーシートの上で滑るとは……何か食べ物的なもの踏んだか……」

恐る恐る踏んづけた感触がある足を上げる。そこには真っ白い一枚の羽。

「これは綾那の？」

手にとって始めて分かる作り物じゃない質感。ふわふわなのに強靱、これは多分綾那のだ。

普通こんな所に落ちていたら踏まれると思うのだが、真っ白の羽には砂色の俺の足跡しか付いていない。ということはまだ新しいという可能性がある。

この先に居るかもしれないし、あったら連行していくか。

小走りより少しスピードを上げて廊下を進む。

そして突き当たりを校庭と反対方向に曲がって裏口の前に出る。

しかし、そこには目を疑うものがあつた。

裏口の丁度前に無数の羽。相当な量が目の前に落ちている……。血らしきものが付いている真っ赤な羽もある。いや、むしろ血の付いた羽の方が多いくらいだ。

「綾那……！？」

妙な胸騒ぎ。そして恐怖。この先に綾那が居るかもしれないのに

足が竦んで動かない。

肝心なときにどうした俺！　こんな展開はゲームで何度も遭遇しているじゃないか……そして進んでも案外敵は居ないオチだったり……。そうだ！　さっさと動け！　右足！　左足！　そしてドアノブを握って捻れ俺の右手！

ギリギリと進み、手を伸ばしてドアノブに手が届く。ここまで来たら引き返すことなんか出切るわけがない。俺は大きく息を吸ってピタッと止め、勢いよくドアを押した。

ガタンッ！　大きな音を立ててドアが開き薄暗い校舎裏に出る。

「あら……」

「ヒロキ……！」

ドアの向こうには、銃を持った真っ白な翼を生やした女の子が二人。ひとりには綾那……左翼、右腕から血を流して膝をついている。もうひとり是谁だ？　わからない。だが綾那の怪我の原因はこの……

…天使だろう。

ていうか敵居たよ！　ああもうとにかく！

「綾那！」

目の前の光景が衝撃的過ぎて足の竦みがなくなった。そして気が付けば綾那の前まで走り、目の前の天使の前に立ちはだかった。

「これは好都合。貴方の方から出てきてくれるなんて！」

真っ赤な目と真っ青目……オッドアイの天使が俺に真っ黒な銃を向ける。

状況が全く分からない。なんで俺は天使に銃を向けられているんだ？　おい、誰かこの状況を説明しろ！

「ヒロキ……逃げて！」

「ふざつ、ふざけんな……。よく分からない展開だが、おおお俺が女を残して逃げるような男に見えるか？」

かつこついているのだが目の前に銃がある恐怖で声が震えて足もまた竦みやがってきた。

「ふふっ！　あははは！　最高に面白いですわ貴方。でも残念。こ

こで死んじやうなんて。でも仕方ないのですわ。これも任務なので……。ねえ？　そうでしょデュランダル」

高笑いを響かせて一歩、また一歩と近付いてくる。

デュランダル……？　綾那の本名か？　いや、今は別にどうでもいい。この状況をどう切り抜けるか考えろ！　そうだ！　叫べば屋上に居る蓮華達が、

「言っておきますが、いくら貴方が叫ぼうと、この周辺はちょっとした仕掛けをしてありまして、あちからかも此方もお互い見えないし、物音ひとつ聞こえない」

俺の脳内作戦バレたよ！　まあなるほど……よく分からんが、騒がしかった学園も不気味なぐらい静かになっているし、廊下に人がひとりも見えなかったのはその所為か。

「ていうかお前は誰だよ。なんで綾那を！」

「ひとつ目の答えは天使。もう少し詳しく言えばデュランダルの妹。名前は教えませんわ。ふたつ目、任務を忘れて下等な悪魔と仲良くして日々を過ごしていた姉を撃つただけですわ。ふふっ、こんなぬいぐるみなんか持ち歩いて」

天使の手の中には俺が買ってあげた犬のぬいぐるみ。彼方此方から綿や糸が飛び出して殆ど原型がない。でも大体わかる。

「そして次は貴方が撃たれる番ですわ。魔界と天界の生まれ変わりさんっ」

「おい綾那……お前より天使らしくない奴が目の前に居るぞ。お前の妹なのにギャップ萌えの欠片もないぞオイ」

「冗談を言っている暇なんかない……！」

ゆっくりと俺の後ろで綾那が立ち上がる。その手には一度だけ取り上げたことのある銀色の銃が握られていた。

「貴方がヒロキを殺そうとするならば私はそれを全力で止める……」

！　この命に代えても！」

フラフラ歩き俺の前に立った。そして右腕から血を流しながら怪我をしていない左腕で銃口を前の天使に向けた。

しかし余程ダメージを受けているのか銃口が震えている……。

「そんな状態で守れると思ってますの？ 大人しくその生まれ変わりを差し出せばデュランダルだけでも殺さないであげようと思っただのに……」

「うるさい！」

パンツ！ 大きな銃声を響かせて綾那の銃から弾が飛び出した。

しかし殆ど至近距離だというのに天使は体を少し退けるだけで銃弾をいとも簡単に避けてニヤリと右頬を上げて不敵な笑みを浮かべて銃口を綾那の頭に向ける。

早く何か考えろ！ 早くしないと綾那が……。何か、何かないのか！？

辺りを見回して何か役に立ちそうなものを探す。が、ここは校舎裏。そんな武器になりそうな物なんてあるわけがない。逃げようにも綾那を背負って銃を持つ相手なんかから逃げ切れるわけがない。ならばどうする……。

いやいやもう考えている暇なんてない！ 綾那を助けないと！

「くっそ！ もうどうにでもなれっ！」

「なっ……！？」

綾那の左に倒し勢いよく斜め前に飛び上がる。完全にノープラン……。空中で身動き取れるわけがないのになんでジャンプしたんだ俺は！ 馬鹿か！

とにかくあの銃を蹴って落としてからまた考えろ！

銃にめがけて足を伸ばしたその時だった。天使は銃口を俺に向けて眉を寄せて引き金を引く。

パンツ！ 再び銃声が響き、銃弾が俺の耳を掠めて飛んでいった。天使は弾が外れたと分かった瞬間に大きく後ろに飛び下がる。

「なんて強運なんでしょう。でも次は外さないですわ」

綾那と初めて出会った時と同じ事を言ってやがる。やっぱり姉妹なのか。

だがもう同じ手は通用しないだろう。

「……ここまでか」

「潔いんですね。じゃあ……死んでもらいますわ!」

カチャツと弾がリロードされて銃口が俺の胸に向けられる。

「ちよつと待った! 俺を殺したら綾那は!？」

「自分の命よりデュランダルを心配しますの? 本当に馬鹿ですのね人間って。それとも貴方だけ？」

「知るか! 質問に答えろ!」

「そんなに望むなら助けてあげてもいいですわ。階級は下でも私の姉ですしね。でも、悪魔と仲良くしてただなんて分かったら、天界に戻っても一生日陰者でしょうけどね」

それでも綾那の命は助かる……それならよかった。元々は俺がなんか偉い奴の生まれ変わりだとかそんなことでこんな事になったんだ。こんな事で綾那が命を落とす必要なんてない。

「ダメ……! そんな……私なんてどうなってもいい!」

「うるさい。少しだったけど非日常、相当楽しかったぞ。もし俺がまた何かに生まれ変わったらその時はまたよろしく頼む」

「待って! イヤ……いやあああつ!」

綾那の悲鳴がすぐ横で聞こえ、耳の中にしつこく響く。顔なんて見られない。顔を見たらきつと殺されるのをためらってしまうと思う。だから見ない。

「ほら、さつさと殺せ。その代わり絶対綾那には手を出すなよ?」

自分自らから向けられた銃口に近付き、僅か数センチまでに近づく。

「ええ。約束しましょう」

またあの不敵な笑みを浮かべる。全く綾那には似ても似つかないというか……綾那の方がよっぽど可愛げがあるね。

しかし俺の人生も十五年で終了か……。ものの十分前くらいまでは楽しい学園ライフを送っていたというのに死はこうも突然に現れるのか。それも天使に殺されるなんて。

ああ、走馬灯が色々流れてきたぞ。湊や叶と出会った日はつき

りと脳裏に浮かんできた。今日見た叶の懐かしい姿、あれは過去に一緒に出かけたときのものだったのか。なるほどな……結構前から俺は叶を意識してたのか。気付くのが遅すぎたな。

死ぬ前にもっとやりたいこといっぱいあったのになあ……誰とも付き合ったことないし、キスもない。それにチェリーでこの世からおさらばか。

ちよつと待てよ？ チェリーで終わりだと？ それはなんかイヤだなぞオイ。

そうだ！ 少し前に通販でゲーム買ったんだ！ あれも初回限定版で銀行でもう振り込みしまったのにプレイなしで終わるのか？ ああ！ 後明後日は好きなグラドルの写真集が発売される！

このまま死んでたまるかってんだ！

「ふんっ！」

俺は勢いよく天使の銃を持った方の手首を手刀で叩いた。

「なっ……！」

銃は一発大きな音を出し、空に弾を打ち上げて地面に転がり落ちた。

そのまま俺は叩いた方の腕を両手で握り締めた。

「な、何をしますの！ わ、私の銃はどこ！？ は、放しなさい変態！」

銃を落とした瞬間急に相手が弱く感じた。それに……腕力はそんなにない？

「ああ！ 変態だとも！ だからこそ、童貞のまま人生終わるのは死んでも死に切れるわけないだろがアッ！」

俺は握り締めた腕を自分の後ろの地面に叩きつけた。

「くっ……！ 油断……した」

天使の体ももちろん地面に勢いよく叩きつけられる……。そして、オッドアイの瞳で少し俺を睨んだ後、ぐたつと首を倒しゆっくり目を閉じ気を失った。

「……あれ？ 弱くね？ いかんいかん、そんな事はどうでもいい。

綾那、今のうち逃げるぞ！」

「え……ええ」

頬からほろりほろりと涙の粒を流す流す綾那を抱きかかえ、お姫様抱っこという体制なのだろうか、その体制でとにかく校舎の中に入り、裏口のドアを閉めた。そしてそのまま来た道を戻っていく。

「全く貴方は……！ 馬鹿、馬鹿よ貴方は……！」

熱い涙が腕に零れ落ちる。だがそんなことに一々動じる必要なんかない。

「うるさい。結果オーライだからいいだろ。それよりお前、今日から俺の家に来い。怪我の治療もあるし、あんな危険な目にもう遭わせたくない」

「だ、ダメよそんな。気持ちがある……」

「命の恩人の命令ひとつぐらい聞け！ とにかくこのまま屋上まで行くぞ」

綾那は真っ白な頬を黙って頷いた。

数メートル走ったところ、仕掛けというのを抜けたのかやっとな賑やかな歓声と湊の歌声が校舎の中に響いてきた。

創立者祭、開始（10）

「蓮華！」

綾那を抱きかかえたまま賑やかな学園の屋上に戻る。

そして一目散にこの中で一番頼りになりそうな蓮華の元へと急いだ。

「遅いじゃない　って綾那！？　どうしたのよ！」

「下に行ったとき偶然見つけたんだ……。天使同士で撃ち合ってた！
絶え絶えの息を整えながら、ゆっくり綾那を地面に置いた。

「綾那！　しっかりして！」

「大丈夫意識はあるわ……。でも……。目がなんだか翳んできた」
「全然大丈夫じゃないわよ！　撃たれた場所は？」

蓮華はキツと睨むように俺に訊いた。

事件の一部始終を見ていた訳じゃないから分からないが……。

「多分左翼と右腕」

そう言うつと蓮華は一回頷いて綾那の上半身を起こして左翼と右腕に触れた。

「翼は貫通してるわね……。私の血をそんなに影響ない程度に入れたも再生はしないかもしれない……。右腕は何かかなりそう。とりあえず止血するわ」

綾那の右腕に顔を持っていく。そして少し息を吸って大きく吐いて、丁度怪我をした辺りに二本の牙を腕に差し込んだ。

恐らくあれで止血しているんだろう。俺が初めて蓮華と会った日、俺が首から大量の血を流してピタッと止めた謎がやっと分かった。恐らく、俺を吸血しているときも同じなんだろうか。

つてか、こんな真面目な蓮華初めてみたぞ。

確かに友人の危機だからなんだろうけど、なんか普段悪そうなやつがいい事したような感のオーラを出している。輝いてる！

「ねえヒロキ……。その天使はどこにいるの？」

「えっとそれがだな　って琴美、腕が獣になってるぞ」

白銀の腕を輝かせて俺の肩を掴む。掴まれたところに肉球が当たって気持ちいい　なんて言ってる場合じゃねえ。

「綾那をあんな目に遭わせた奴絶対に許さない。今夜は満月……悪魔の力はフルに発揮できる」

「大丈夫だ。そんな事はしないでいい。俺がぶん投げたら伸びて気絶しちまったよ。まあ油断は出来ないだろうけどさ」

怒る琴美の肩と頭を撫でる。それだけで琴美は腕を元のヒトみたいに戻し、逆立てた尻尾もご機嫌にフリフリしだした。

もう完全に手なずけたか。

そんな事している間にも右腕の止血が終わった。血の跡はついてるものの傷口は綺麗になくなっていた。だが問題は翼だ。翼なら牙を刺すわけにもいかないだろうし、どうするんだ？

俺の考えていたことを察してか、蓮華がチラツとこっちを見て、「とにかく今はここまでしか出来ない。魔界に行けば翼を治すことも出来るだろうけど……天使はねえ……」

そう言っただけ溜め息を吐く。

「そういえば、こいつを襲った奴が言ってたんだがな、お前等悪魔が天使と仲良くしていたらどうなるんだ？　世間の目とかそういうのは」

「知らないわよそんな事。前例がないもの。でも……やっぱり戦争で陰悪の仲だし、魔界に連れて行くのは難しいわね」

「せ、戦争？」

初耳なのだがそんな事。

「あのね、音羽達がちょうど生まれたときに天使と悪魔の戦争が始まったの。それで音羽達のパパもママもみんな死んじゃったの。戦争は今が終わってるけどね」

なるほど、それでお前たちが最後の種族って訳なのか……。まあつまりだ、終戦しても天使をよく思わない奴が殆どの魔界に行くなんて正直自殺行為ってことなんだろう。

「貴方達は……天使が憎くないの？」

少し落ち着いた表情をして、綾那が蓮華達に訊く。

「まあ私達の親を殺したわけだから憎くないなんて言ったら嘘になるけど、あんたは別よ。大人達が起こした戦争なんだし、知ったことじゃないっていうのはあれだけど……。とつ、とにかく、わ、私はあんたとなら別に友達で居てあげていいというかその……」

『上に同じ』

デレモードに入った蓮華の言葉に、二人声を揃えて同意した。

「蓮華達は綾那を気に入ってるんだよ。だから友達を憎んだりなんて真似はしないってことだろうさ」

「そ、そう……」

綾那まで頬を真っ赤に染めてデレモード突入。まあ別にツンデレじゃないのだが、ってか何だこの空気？ 気持ち悪いっ！ 暖かいけどレズな空気がする！

「あ、後、今日から綾那は俺の家に置く。もう危険な目には遭わせたくないし、もし綾那を襲った奴がまた来てもお前達なら対処できると思うんだ」

「あーあ、また叶怒らせる」

悪魔三人はニヤニヤ若いながら俺を見た。不吉なことを言いやがる。だがもう叶もひとり増えたくらいだし許してくれるだろう。

「とりあえず今日はもう帰ろう。いつ奴がまた来るか分からない」

「そうね。家に帰ったらまた少し応急手当してあげるわ」

蓮華は綾那の腕を首に回し、一緒に立ち上がった。

「ありがとう……蓮華」

「れ、礼言われる程じゃないわよ……」

ベタ過ぎる。だがそれでこそ友情というものじゃあないだろうか。いい絵じゃないか。

とにかく、今日またひとり川越家に居候が出来た。

魔法使い

「はあ……兄貴？ 天使や悪魔は猫じゃないの。そんな拾ってきたのな感じに家に居候させるって……。いや、別にいいんだけどさ、蓮華さんは食費とかそんな掛らないけどただでさえ二人分の仕送りしかもらってないのにどうするの？」

創立者祭と同日。午後八時。

綾那を連れて帰ってきたのはいいものの、リビングで妹に怒られる。多少怒られるのは覚悟していたが、今回はなんで居候させてるかというより、家計費のことで怒っている様子で……。

「それは俺の小遣いをケチってだな……」

「蓮華さん達にもあげてるのに生活費にまで回してたら兄貴の小遣いがなくなるでしょうが……」

まるで見下したかのような目付きで俺を見上げる。

「そ、そういえば綾那は毎日天界からお金入ってるとか、」

「それは無理ね。妹……名前はバルムンクって名前んだけど、あの子と騒動を起こした以上、天界からお金なんか入ってくるわけがないわ。あ、お茶もらっていいかしら？」

上の階から飲み物を求めにキッチンへ来た天使が言った。

「家のものは勝手に使ってくれていいよ。ていうか金は入ってこないか……。やはり俺の小遣いケチるしか方法はないか」

大きく溜め息を吐いて今日の出費の額を後悔する。まさかこんな事になるなんて思いもしなかったしな。

そんな俺の姿を見てか叶は少し顎を押さえながら数秒黙り込み、頭を抑えながら仕方なさそうに言った。

「はあ、もう！ 私のお小遣いも少し回すよ。その代わり家事とかしないからね」

「おお、本当か！ もちろん綾那にも居候させるからには家事は手伝えるからその分お前は　ってお前家事してないだろうが！」

「……チッ」

「おい、なんで舌打ちした妹？」

「なんでもない。まあ困ったときは言つてよね？ 少しはお金貸せるようにしとくから。それじゃ明日代休だけど、私は生徒会関係で片付けとかしないといけないから学校あるの。早いからもうお風呂はいつて寝るね」

叶は苦笑を浮かべて俺の肩をポンと叩き、リビングを出て行った。やっぱりぐーたらだけじゃなくて優しいところあるじゃないか。

俺に似て優しいところある。惚れてしまうぞ妹よ！

「あ、綾那。俺の分も淹れてくれ」

そう言いつつわざわざキッチンに入った。

綾那は叶がバスルームに入っていくのを確認して、

「ねえ……やっぱり私迷惑なんじゃない……？ 出て行ったほうが

、

最後のセリフを言い切る前に綾那の額に横並行チョップをお見舞いし、そのまま頭の上に手を置いた。

「うるさい。俺が勝手な性格なのは知ってるだろ。 お前はここに

居候させる。もう危険な目に遭わせたくないからな」

「な、なに言ってるのよ……もう」

真っ白な頬がどんどん紅潮していくのが分かる。

ハッ！ そういえばコイツ俺のことが、

左の頬を引きつらせながら綾那を見る。すると何故かさっきの距離感は消えていてピツタリとくっ付いてきやがる……。

「はい、お茶」

俺がキッチンに入る前から握られていたコップに八分目ぐらい麦茶を注ぎ、両手でささげるように俺に渡した。

「それお前が使おうとしてたんじゃないのか？」

「ううん。いいのよ。あ、その代わりさっさと飲みなさい」

「なんでだよ……」

「いいから！」

何故かお茶を飲むことをやたらと強制してきやがる。

綾那も綾那の妹のバルムンクって奴見てたら正直天使ってみんなこうなのかと思うね。敬語だけ使ってたらいんじゃないぞ！使っていないけども。

言われた通り、凝視されながらもその場で一気に飲み干してコップを流しに置いた。

しかし綾那はそのコップを持ち出し、お茶をまた八分目くらいにまで注いだ。そしてコップの上辺りを見ながら少し飲み口の位置を変え、

「確かこの辺で飲んだかしら……」

そう言って綾那も一気にお茶を飲み干す。

「何やってんだお前は。確かに洗う手間は省けるけど新しいコップ出せよ」

「恋愛バイブル第34章。さり気なく彼が口を付けた物を使う……。これじゃないと間接キスっていうの出来ないのでしょうか？」

「んなつ！ ば、馬鹿か！ 小学生かお前は！」

そんな事言っている俺もこっばずかしくて顔を逸らす。しかしこいつが愛読している恋愛バイブルとやらが気になる。34章までいってて間接キスカよオイ。

「人間って難しい生き物なのね……。本に書いている通りにしても上手くいかない」

「お前が言うからだよ！ 黙っていれば俺も気付かなかったよ！ 全くどいつもこいつもアホぼつかりだ……」

少しずつ熱くなっていく頬を叩きキッチンを出て、そのままリビングも出て俺の部屋へ向かう。綾那もお茶を飲み終えたからか俺の後ろを付いて歩いてくる。

そして何も言わないまま俺の部屋に入ると 綾那も俺の部屋に入ってきた。

「お前は突っ込まれたいのか？ それとも素なのか？」

頭をがちり掴んでその場に止まる。返事次第では頭突きに入れ

る体勢だ。

「突っ込むなんて卑猥な事言わないでもらえる？ 私にそんな事したら墮天使に、」

「うるせえ！ お前はなにを言ってるんだ、話の流れで大体どういう意味で言ってるか分かりやがれ！ 馬鹿か、いや馬鹿だろお前！」
大いに突っ込んでそのまますっかり固定した頭に俺の頭突きをお見舞いした。しかし壁に頭突きをしたような、そんな痛みが俺の方に伝わってきた……。

「痛いわね」

「俺がな！」

くそ、なんでこうなった。多分綾那は素で俺の部屋に来たに違いない。狭くなるが蓮華達と同じ部屋で寝るといったのだが……。まあいい、適当な時間になったら追い出そう。

溜め息を吐いてベッドに飛び乗り、右手で杖を作って頭を持ち上げて綾那を見る。

「翼、大丈夫なのか？」

包帯でグルグル巻きにされている左翼を指差して訊く。

応急処置と入ったものの、家庭では血を吹きとって消毒をして包帯を巻いてやる程度しか出来ない。蓮華がそのうちしっかり処置をするといったが、恐らくそれまで空も飛べないだろう。

「ええ。少しは痛いけどもう大分落ち着いたわ」

ふわっとベッドの端に飛び乗りニコツと控えめに微笑んだ。

「全く酷い目に遭ったな。助かったからいいが、お前俺が死ぬって言ったら叫びだしたもんな」

「あ、当たり前じゃない……。私をかばって死ぬみたいなこと言い出すし……愛しい貴方を目の前で失いたくなかった」

少し照れくさそうに笑みを浮かべながら言い返す。

「ははは……全く今思うと自分でも馬鹿だったかなとつくづく思うね。まあ俺が死んでお前が助かるなら俺は喜んで命を捨ててたけどな、って何だそのジト目は」

「はあ、本当に鈍感なのね貴方は」

何故か盛大な溜め息をついてジト目で俺を睨む……。何か失礼なことでも言ったのだろうか？

コンコンツ。

「入るわよー」

丁度会話が止まった後、ドアの向こうから二回大きくドアをノックし廊下から声が聞こえた。恐らく蓮華だ。しかし「どうぞ」と一声掛ける前にドアが開かれ、蓮華が我が物顔で俺の部屋に入ってきた。

「あら？ お取り込み中？」

「ちげえよ。お前はなんだ？ 血ならさっき飲んだだろ」

「それもあるけど、もう少し重要な話よ」

どうやら血液補充と何か話に来た蓮華は綾那の横に足を組んで座り、両腕を組んで偉そうに話を進める。

「明日休みでしょ？」

「うん。代休だからな」

「そうよね。じゃあ、明後日と明々後日学校休むわよ」

「はあ？ 何をいきなり……お前テスト前だって言うのに何てこといいやがる。登校拒否にはまだ早いぞ」

「いやいやそんなじゃないわよ。綾那の翼、何とか治せそうな気がするの。確か私も一度だけ飛び回ってて翼怪我したことあった気がするのよね」

蓮華は綾那の翼を優しく撫でて、何が分かったのかしたのかうんうんと頷いた。

「それで、ちよっと今から魔界に戻るわ。出来れば早めに帰ってくるけど結構掛るかもしれないからさ。もう少し待ってなさいよ、あなたの翼私が治してあげるから！」

「え、ええ……その……」

満面の笑みで綾那を慰める蓮華に、綾那は頬を真っ赤にしながら困ったような視線を俺に向けた。

どうやら、優しくされるのは慣れていないんだろう。天界でもいじめられていたとかどうとか言ってたし、こういうときどんな顔をすればいいんだとか分かってないんだろ。それも、友達とはいえ悪魔が相手となっちゃ余計にか。

「この前みたいに素直にありがとうでいいんだよ」

そう言つと、この前の創立者祭前の時とは少し違い蓮華を少し上目遣いで見ながら照れくさそうに、

「あ、ありがとう……蓮華」

少し頭を下げて礼を言つた。蓮華はまたニコツと笑い、綾那の頭をわしわし撫でた。

「それにしても今からって急すぎないか？」

「夜の方が速く飛べるし、それに今日は満月でしょ？ さーっと行けるときに行つてくるわ。でも、やっぱり長旅になるからさっさと血をよこしなさい。三リットルくらい」

「馬鹿か！ 失血死するからな！ ただでさえお前に血吸われてるんだから俺は」

差し出しそうになった首筋を思わず両手で隠した。蓮華が言う三リットルは本当なのか冗談なのか正直分からない。この前も一リットルくらい飲まれて貧血起こしそうになったつて言うのに。

「少しにしるよな全く。大体お前よこせつて頼む態度じゃないだろ」
渋々服を引つ張り、隠していた首筋を差し出した。

「うるさいわね」

いつもの場所にかぶり二本牙を刺す。そのまま血をぐいぐい吸い上げて、吸い上げて、吸い上げて……。

そこで俺の意識が一時途絶えた ……。

魔法使い（2）

目覚ましが耳元でデジタル音声の目覚ましがつさと止めると俺を呼ぶ。

いつもならチョップをお見舞いしているのだが……何故か体が言うことを聞かない。

それなら起きるだろう？ そう思うだろうけど、目を開けたくないくらい丁度いい心地よい暖かさと、両手いっぱいふわふわしたこの感触……。

起きたくない！

いつまでもこの感じで居たい。その為ならこのうるさい目覚ましくらい我慢して、

「んゝもつうるさいわね……。これどう止めるのかしら？」

「あはは。綾っち貸して。目覚まし時計はね、この上の出っ張りを押せば止まるんだよ」

「なるほど……画期的ね」

「……おい」

二つの声に俺の目が一気に覚める。一度ならず二度までも幼馴染……そして天使が俺の布団に潜入しているようだ。

「あらやつと目が覚めたのね。全く貴方は、蓮華に血を吸われすぎて気絶して大変だったのよ？」

俺の頭のすぐ右で声が聞こえる。こんな展開は二度目だから全く動じないぞ。

「それで同じ血液型の私が呼ばれて、蓮華っちを通じておにい輸血したんだよ」

左から声。これは幼馴染だ。コイツに至っては二回目だ。また不法侵入しやがったのか、もう許さんぞ。お盛んな男子の部屋に入ったことを後悔するがいい！

「今おにいには私の熱い血液がつ！ 私のブラッドが駆け巡ってる

んだよ！」

「うるせえ気色悪い！ お前等腕を離せ。そしてなんでこの部屋にいるか十六文字以内に答えろ！」

「えっと、おにいが寒そうに寝ていたから。マルも含めて十六文字っ！」

「昨日は貴方と一緒に寝たかったから。マル無しで十六文字」

「うるせえ！ 冗談でいったんのに本気で答えんな馬鹿が！」

腕を振り払い上半身を起き上がらせる。そして不思議そうに寝ながら俺を見上げる二人を見て首を曲げてパキパキと音を鳴らせ、

「さて、どうしてやろうか？」

「あはは。おにいにそんな度胸あるわけないないっ」

ごもつとも。

大きく溜め息をついてベッドの端っこに座る。しかし俺もベッドに2人入られてよく気付かないな。いや気付かなかった俺に罪なんてないと思うのだが。

「そついえば蓮華は魔界に戻ったのか……。何日か血を吸われないと思うと少し気が楽なのだが、居なかったら居なかったでなんか寂しいな。そついや魔界ってどんなところなんだろうな」

「あれ？ おにいがデレてすぐ話を逸らした」

「うるさい。ってか、輸血してくれたのはありがとうんだけどな

……何故居る？」

定位置をベッドからパソコンの前に変えて尋ねる。答えは2秒もしない間に返ってきた。

「バイトと学校が休みだからっ！」

ニツと笑いながら答えを返し、さっきまで俺が座っていたベッドの端まで転がって、ひょいと上半身を起こして座った。

「お前も暇だなあ……そついえば昨日帰ったら結構早く気絶して家事なんもしてねえ。洗い物は少ないとはいえ洗濯物は何回しても足りんわ……」

本日2度目の溜め息をついて部屋を出た。2人もまたカルガモの

雛のように俺の後ろを付いてくる。その光景が少し微笑ましいと思
ったが顔にも言葉にも出さない。

とりあえず洗濯物は後でするとして、階段を下りてリビングへ。
すると毎度ながらライカンスロープがキッチンでお料理している。

「おはよう」

キッチンを通り過ぎて目の前のテーブルの前の椅子に3人腰を掛
ける。

「おはよう……。雨……降ってる」

琴美は窓の外を指差して言った。顔だけ窓の方へ向けると、空は
グレー色に染まって小雨が降っている。

「ああー本当だなあ。もう梅雨だし仕方ないっちゃ仕方ないんだろ
うけど嫌な季節だ。蒸し暑いしじめじめするしで……」

「でも家事しなくていいじゃないの？ 面倒なだけじゃない？」

「なんか家のことしないと落ちつかねえんだよ。後、お前も覚えて
貰うからな」

そう言うつと綾那は唇を尖らせてそっぽを向き、キッチンにいる琴
美から渡されたパンと目玉焼きを貰って食べ始めた。

琴美は次々とパンと目玉焼き、牛乳をキッチンからひょいとテー
ブルに乗せて行く。すると、丁度いいタイミングに音羽が歩いてリ
ビングに下りてきた。

「おふあゝ……」

欠伸をしながら朝の挨拶。そしてのそのそと眠たそうに俺の前の
椅子に座った。

「おはようさん。音羽が歩くなんて珍しいな。家じゃいつも浮い
てるのに」

「昨日は満月だったから寝不足。琴ちゃんが寝かせてくれなかつ
た……」

音羽は眠そうに頭をフラフラさせて、目の前の牛乳を両手で支え
て一気に飲み干した。

別に休みなんだから無理しなくてもいいだろうに……。それにし

ても昨日の琴美さんはマシニングトクだったな。あんなのと一晚中過ごせた音羽、少し尊敬するぞ。

「次は……控えめにする……」

キッチンから出てきた琴美が少し申し訳なさそうに尻尾を丸めながら言い、音羽の横に座った。

魔界に帰った蓮華と生徒会の仕事とやらで出て行っている叶を除いた全員とその他1名を含めて朝食を頂く。やっぱり、蓮華が居ないだけでこれだけ静かになるとは。

雑談はいつもながらとはいえ、血を吸うからさつさと食えだのなんだのと文句が一切ない。なんだかラッキーなような物足りないよな。不思議な気持ちだ。

左首筋のうつすら牙の刺され続けた痕を少し撫でて、その手でパンを手にとりかじろうとした瞬間、

「うゝん……そいつ！」

「いだだだだだ！　なにすんじゃ！」

何を思ったのか左隣に座る湊が割り箸を逆さにして2本で俺の首を刺した。

「あはは、なんだか物足りなさそうな空気してたからかな？」

「人間の男ってこんなことで喜ぶの？　そんなこと恋愛バイブルには載って、」

「どこの世界でも割り箸首に刺されて喜ぶ奴なんていねえよ！　馬鹿だろお前等　はっ……」

今思ったらロクに話せるのがそんなにいねえ。いや、元々変な奴等ばかりだったけどマトモなのは俺ぐらいじゃないかこれ。

でもなんだろう。割り箸を刺されたところが少し蓮華に牙を刺された時の感触に似ていた気もする。もしこいつがそれっぽく刺したのなら……俺の物足りないって考えがわかったのだろうか。しかしもしそうならまた人の心を勝手に読みやがって。本当に超能力者かその類なんじゃないかと最近思う。

話は変わるがとりあえず、蓮華と叶が帰って来るまでめんどくさ

い絡みに耐えねばならなそうだ。この幼馴染がいつまでいるかわからんが。

「おにいちゃん今日は何するの？」

「なんもしない。どうせ雨で洗濯物は干せないし、雨の日の1日や2日くらい寝て過ごすのも悪くないだろ」

パンを軽く牛乳で流し込みながら、テーブルに置いてるリモコンで後ろにあるテレビの電源をつける。丁度、朝のワイドショーの終盤にある天気予報が放映されていた。

『今週はずっと四季の島全体に雨の恐れが、』

1日2日とか、そんなレベルじゃなかった。

「恵みの雨もこう降られたら拷問じゃ。買い溜めした食パン冷凍しないとな」

「なるほど……パンは凍らせる……」

「梅雨のときだけでいいと思うけどな」

ひとつ微妙な知識が増えた琴美はコクコクと頷いて、ベーコンで敷き詰められたパンをかじった。

何故お前のだけベーコンが乗ってるんだオイ。こちらら目玉焼きにも乗ってないのになんでだ　とツツコミを入れる所なんだろうが、つつこんだらつつこんだで湊に「おにい……小さいね」とかとそんなこと言われるのがオチだから何も言わん。

ただでさえもう1人外が増えて節約しなきゃって時にベーコン大量に使いやがって……。いや別に安いからいいけどさ。

「おにい……ちっさ」

「え？　な、なにが！？」

聞き返すと、盛大にスルーして鼻歌を歌いながら目玉焼きをパンに乗せてもさもさと食べ始めた。

「んで、おにいには雨上がって欲しいの？」

「何だよ唐突に。そりゃ上がってくれるなら上がって欲しいけど、四季の島の天気予報はよく当たるからなあ……まあ1週間降るだろう」

残ったパンと目玉焼きを一気に口に放り込んで、少し噛んでから牛乳で流し込む。手に付いたパンくずを掃って、真後ろにあるソファに背面ダイブした。

「ちゃんと噛みなよ」。それで、おにいには雨より晴れがいいと？」

「だからそうだって言っただろ。まあ俺が望んだ所で雨は止みはしないし、寝る！ 起こすなよ。絶対起こすなよ」

ソファの頭の真下にあるクッションを折り畳んで枕にして背もたれに顔を向けて目を瞑る。

「じゃあ明日はきつと晴れだね」。私が保証するよっ！」

「わかったから邪魔するな。昼まで寝る」

これで後数分、何の邪魔も入らなければぐっすり眠れるだろう。たまの代休だしこういうのも悪くないのじゃなかるうか。自称主夫にも休みは必要なのだ。雨降って喜んでる草木にあやかっただろうじゃないか。

雨音が眠気を誘う。雨は嫌いだが、雨音は心地いい……まるで子守唄のようで、本当に一瞬で 眠りに落ちた。

魔法使い（3）

結局1日中雨で、眠ったり音羽達とゲームして、眠ったりくらいで特に何にもする事無く代休が幕を閉じる。

流石に寝すぎたのではないかと少し反省しながら次の日の朝を向かえ、鳴り響く目覚ましを止めて制服に着替えてリビングへ。そして窓際まで歩いて、太陽の日差しを浴びて背を伸ばしながらパキパキと体中の骨を鳴らす。

「んーっ！ 晴天だ って！ 何で雨止んでるんだ……？」

外は呆れるほどいい天気だった。昨日、殆ど外れることのない天気予報で今週ずっと雨だって言ってたのだが……少なくとも、夜俺が寝るまでは雨が割りと凄いい勢いで降っていた。だが清々しいくらい、雲ひとつない青空が広がっていた。

「これまたどうしてなんだろうなあ。お洗濯日和だぞオイ」

窓をスライドさせて開け、サンダルを履いて濡れた大地に下りた。やっぱり雨は降っていたみたいだ。それもついさっきまで降っていた様な……。雲ひとつないのにどうしてだ？

「おにいちゃんおはようっ！」

「おは うおぼっ！」

上を見上げていると、後ろからエンブーサが頭部に向かって飛んできた。ほぼ振り向いた瞬間に飛びついてきたので音羽を顔だけで受け止めてしまう……。

音羽自体そんなに重くはないのだが、制服のスカート履いて前かがつちり顔に向かって飛んでくるのはいかなものか。

「晴れてるねー？ ずっと雨じゃなかったの？」

音羽の位置を変えて肩車の体勢にもっていき、敷居に腰を掛ける。「不思議なこともあるもんだな。俺も1週間は雨降って洗濯物部屋干し覚悟してたのに、まさか1日で止むなんて」

「魔法みたいだね？」

「そんな非現実的なもの信じたくはないが、家に非現実的な生物が4人居候してるし、今肩に乗ってるしな……案外ありえるかもな」

しかし空を晴れにするだけって、小さい魔法だな。まあ俺には凄く助かるわけですが。

「おはよう……」

「おはよー」

音羽に続き、琴美もリビングに降りてきた。琴美はすぐさまキッチンに入って卵を5個取り出した。俺も家に戻り、窓を閉めて音羽を下ろし、キッチンへ。

「晴れてる……」

「そうだな。学校から帰ったら即行洗濯だ」

そう言つと、琴美は尻尾をふりふりしながらフライパンの上で卵を丁寧に割り始めた。その後ろで俺は食パンをトースターに突っ込んでタイマーをセットする。

「おはよう。貴方達早いよね……」

「おはようさん」

「おはようみんな。ついでに兄貴も」

「ついでってなんだよ。そしておはよう」

残り2人もリビングに降りてきて、そのままキッチン前のテーブルに座つた。

「ああ休み明けだるい。気だるい。校門前立ちたくない！ めんどくさい！」

「うるさい。お前が好き好んでやってるんだろぅが」

「休み明けじゃなかったらまだマシなんだけどさ、こういう代休明けとか月曜日とか本当に勘弁して欲しいのよもう……」

叶は大きな溜め息を吐きながら、キッチンに入ってきて牛乳とコップを持って元の場所に戻って、コップに並々と注ぎだした。

結構前に聞いたのだが成績が少し良くなるからとかそんな理由で風紀委員をしているらしいが、めんどくさいなら辞めればいいのではなかるつか。俺なら1学期でやめてやるね。

「そういえば綾那、迂闊に外に出ていいのか？　一昨日のなんだ、バルムンクつてのが襲ってきたりとか……」

「そうね……」

キッチンの向こう側で、綾那は少し眉を眉間に寄せて考え出した。「流石のあの子でも、通学路とか人前では襲わないんじゃないかしら。根拠は、この前の貴方が来た空間。あれがなくてもバルムンクは私も貴方も殺すことは可能だった。だけど、恐らく魔界の最強種族のヴァンパイア、ライカンスロープ、エンプーサに恐れてそれが不可能だった。そうじゃなかったとしても、人前で殺すのはあの子の主義じゃないのかもしれないし……。まあ、琴美と音羽と別に行動しない限り大体大丈夫だと思うわ」

「なるほどねえ……同じクラスでよかったな。とりあえず俺も気をつけないな。アイツ俺の殺しに来たんだろ？」

「え、ええ……まあ」

少し声が裏返りながら綾那は答えた。

でも待てよ？　よく考えてみると、綾那は俺を守るために人間界に来たっていうのに……バルムンクは何故俺を殺そうと？　なんかおかしいと思うが……深く考えないで置こう。

大丈夫。そう言われたものの、妹天使を警戒しながら綾那を中心に囲むように学校へ向かう。傍から見れば凄いわい変な人達と思われるているだろうが、念には念をとというじゃない。そう、もちろん俺の提案だ。

「あ、兄貴なんか恥ずかしいんだけどこれ……」

綾那のすぐ前を歩く叶が拳を振るわせながら言った。

「そういうな。明日のいつかは知らんが蓮華が帰ってきてきつと翼を治してくれるはずだから。それまでの辛抱だ！」

確かにいかにも取り囲んでる感じで少し恥ずかしいが、これも綾那のため。

「なっ！ 2日もする気！？ 勘弁してよもう……」

「ふふつ。くるしゅうないですわ」

「綾那さんがまんざらじゃなさそうな顔してるのが更にやる気を削ぐんだけど……」

本来なら一番恥ずかしいのは恐らく綾那なのだろうが、やはりそこは天使だからなのか、恥ずかしいというより誇らしげな顔をして歩いている。っていうか、恥ずかしそうに歩いているのは叶だけだったりする……。

「大体、意識するから変な動きして逆に目立つんだ。琴美と音羽見てる。普通に歩いてるぞ。見習うべきじゃなかるうか！」

「あ、アホばかりだ……」

俺達ご一行は、四季の学園の生徒に変な目で見られながらもいつも通り通学路を歩き、桜並木を抜け、校門の前に辿り着く。特に変わることはない、いつも通りの通学だったが……。妹は風紀委員の役割とかで腕章をつけて校門に立ち挨拶当番。

1人欠けた俺達は、綾那を中心に三角を作り高等部校舎を目指す。結局何も無かったわね」

登校中ずつと防衛されてた天使は両手を広げ、首を竦めて言った。「まあそれだなによりなんだが、この前襲われたのは学校だし、逆に普通の道より学校の方が警戒すべきだと思うんだがな」

それに、いどこであの誰も居ない空間に入るかもわからない。まあそのときはすぐに逃げればいいと思うが。

ザッザッザッ……。

後ろから地を駆ける音が聞こえる。……まさか、本当にまさかこのタイミングで来るのか！？

俺は歯を食いしばり、ファイティングポーズをとって音のなる方向へ振り向いた。

「おにいー！」

「えっ！　ちょま　！」

顎にツインテールの小娘が突き刺さる……。俺の体はそのまま後ろに倒れ、ツインテールは俺のマウントポジションを陣取った。

「もうおにいには学習能力ないの？　私はおんぶして欲しかっただけなのに！」

「うるさい。歯あ食いしばってなかったら口の中どこかしら切ってたからなオイ。そして退きやがれ！」

起き上がると同時にツインテール、湊をマウントポジションから落とした。

割りと乱暴に落としてみたのだが、しっかり着地するところがまた忌々しい。頭も良ければ運動神経も中々な幼馴染なのだ。

これで身長とスタイルがよければなあ。主に胸、胸が大きければ俺は絶対服従してやるね。

そんな事を思いながら鼻で溜め息を吐くと、何を思ったのか幼馴染はムツと眉間にシワを寄せて、脛を軽く蹴り上げた。

「な、なんだよ痛いな」

「私の心の方が十分傷付きました！　ほら、さっさと行くよ！」

頬を膨らませながら俺の手をグイグイ引っ張り引っ張り、綾那防衛のフォーメーションを崩しやがり、昇降口へ向かいだした。

「あ、そういうば今日やつぱり晴れたでしょ？」

「そ……そうだな。お前確か俺が二度寝する前に晴れるだのなんだの言ってたな。まさか当たるなんて思いもしなかったが」

「ふふっ。私に不可能はないのだ」

湊は二カツと歯を見せて笑い、俺を引いてる逆の手でピースサインした。

「なんかお前が晴れにさせたみたいない振りだな」

「ち、違うよそんなの！　私は祈っただけだしそんな　、」

「冗談冗談！ マジに受け取るな恥ずかしい」

まさか冗談でこんなにも動揺するなんて……なんか変に怪しんでしまう。

でも怪しんでも無理ないのではないかと思う。何故かこいつは人並みは慣れたことをよくする。俺の考えてることがわかるかのような行動も割りとある。附属生のとき、こいつは1年間体育や副科目を含めて成績トップになったりなんかもあった。ただ単に運動神経が良いとか、勉強出来るとか、そういうレベルじゃない。部活を毎日頑張ってる奴をもダントツで差をつけるほどの能力を一度見せたこともある。塾や家庭教師漬けている奴等とも凄い差をつけたことも……。湊自体は部活も塾も何ひとつしていないのだが。

叶と喧嘩したときもそうだ。こいつが一番最初に気付いて真っ先に俺と仲直りする方法を考えたりとか。

……今回の晴れの天気ももしかして？

いや、何の変哲もない幼馴染がそんな超能力みたいなのあるわけがない。あつてたまるか。湊は俺と同じ人間。ただの人間だ。

魔法使い（４）

結局、蓮華がいなくてだけで学園生活には何にも変わりがない。まるで少し前に戻ったように周りは静かで……いや、琴美や音羽、綾那もいるけどやはり物足りない感があるわけでして……。

１時間目の自習の時間、俺はいつもと変わりなく！ 体操着姿の女子を目で追いながら休み時間を今か今かと待っている。

「おいっす」

「んー」

憎たらしい笑みを浮かべ、村田が俺の机にどっしりと腰を掛ける。

「自習だぞ。勉強しやがれ」

「そういうな川越。ちょいと面白い情報を掴んだんだぞ」

こいつの面白いの基準がわからない。附属生の頃にこいつが延々とUFOの話を楽しそうにしていたが全く面白くなかった。オカルトか何か、そういう類の何かが好きなんだろうが、高等部になった今でも全くもって興味ない。だから村田の面白い話は出来るだけスルーしたいのだが……。

「言ってみろ」

ただ女子を見るのに飽きたただけだ。興味なんてないが退屈凌ぎに聞いてやる。

「この前僕が言ってた、創立者祭のトップの件だが……」

「ああ、言ってたな」

「結局、附属２年Ａ組と美術科１年Ａと我がクラスが全く同じ稼いだっただけで、１位が３クラス出来たんだ」

村田はパラパラとメモ帳を捲って、真ん中のページ辺りを開いて俺に突きつけてきた。そこにはクラスごとの売れ行きと客の数とその他諸々……。

生徒会でもないのになにやってんだこいつは。

「んで、それがどうかしたのかい？」

「実は、聞いて驚くなよ？ 僕も聞いたただけなんだが…… 1位のクラスはなんと学食Bランチ3ヶ月無料券！」

「オウ！ 微妙だなオイ！」

Bランチ…… 我が学園ではBランチは魚系のおかずにご飯と味噌汁等々……。割りどこにでもありそうな定食が300円程で安く販売しているのだが……。

殆ど売れているところをみたことがない。蓮華達が来る前初めて売り切れになってるところ見たくらいだ。

「どうせならお肉メインのA定食にして欲しかったかな」

隣で黙々とノートと睨めっこしていた湊が話を聞いていたのか話に入ってきた。

「確かに俺もどうせなら肉がいい。魚はな…… たまに食っただけいい」

「だが無料だぞ？ 無料でクラス全員分提供されるんだぞ？」

村田は手帳を俺から奪い取ると、「無料提供」と書かれた所を指差してグイグイ押し付けてくる。もう近すぎて読めないくらいまで押し付けてきやがる。

「しかし魚か……」

「貴方どれだけ魚嫌いなよ。でも、私も家に居候することになったし、昼食無料というのは大きいじゃない？ それが魚だろうと、食べ辛い魚だろうと、貴方の小遣い少しは減らさなくて済むかもしれないじゃない」

そう言いながら綾那は俺の後ろで窓際の壁にもたれる。そして会話に参加した。

「か、川越も綾那さんも魚デイスってんじゃないよ……。それはさて置き、1位が2クラス出たというわけなんだが」

村田は苦笑を浮かべながらまた手帳をパラパラして……。また俺に手帳を渡す。今度は俺の左右から湊と綾那がぬつと顔を出して手帳を除いてきた。

真っ白なページに1行だけ文字が書いてある。

「第2次食券戦争？ どうした村田。お前がこんな曖昧な情報しかないなんてどうしたんだ……村田」

「2回言うな。僕が生徒会会議室で張り込んでたら川越の妹にばれて追い駆け回されたんだよ。とりあえずここまでは記録したのだからどうやら食券を賭けてなにかするみたいだ。何をするか思い付かないけどね」

また俺から手帳を奪い取ると、胸ポケットに仕舞い腕を組んでなにやら悩み始めた。

「戦争……するの……？」

戦争という単語を聞いてか、琴美が尻尾をフリフリしながら俺の椅子の後ろに立ち、俺の頭に顎を置いた。

「でも学園で……それも3クラスだけでしょ？」

「恐らくそうだと思うけど、僕にもよくわからない。でもやっぱりなにかしら争うんだろうね」

戦争か……創立記念をを学園祭みたいにする校長だ。またしょうもないこと言い出すんじゃないか？

「ねえ、貴方達の世界で戦争ってどんなものの？ 天界と魔界じゃ恐らく殺し合いにしかないわ」

琴美と綾那、いつの間にか琴美の上に乗っかってる音羽がコクコクと頷いた。

村田と湊は俺に視線を向ける。どうやら、俺が答ええないといけない空気になっているのだが……。仕方ない。俺のイメージで答えてやろう。

「お、お前そりやアレだよ。軍隊同士が独立の為に人型のロボットに乗って、ビームなんたらとか使って宇宙やら地球でやらで戦うんだよ……」

「あ、あはは……おにいそれアニメでしょ。普通に天界と魔界とそんなに変わらないとイメージでいいと思うよ。どうせお遊びだろうから水鉄砲とかそんなだと思うけど」

俺の説明に呆れたのか湊が変わりに人外3人に説明した。3人は

納得したのかまたコクコク頷いた。

「でもそれはいつどこでやるんだよ？」

「場所はわからないけど、近いうちにあると思うよそりゃ。テストがあるし、恐らくその後かな？」

テスト後か……それなら蓮華も余裕で帰宅しているな。たかが水鉄砲の戦争だろうと、うちのクラスには人外が4人もいるんだ。圧倒的な戦力差で食券を手にすることは可能なんじゃないだろうか。

これで俺の小遣いが少し浮いたぞ。

「おにい、何事もフェアが一番楽しいからね？」

またこいつは人の心を勝手に読みやがる……。勝てばいいじゃないか勝てば。

「さて、面白いこと聞いたし！ 私はテスト勉強に戻ろうかな？」

「僕も、これだけ言いたかっただけだし勉強しようかな」

優等生どもめ。自習にテスト勉強する馬鹿がどこにいる。少なくとも自習は先生がくれた一時の休息の時間なんだぞ。

「おにいちゃんも勉強したほうがいいんじゃないのー？」

「うるさい。俺はテスト数分前に教科書見るだけで平均点取ってるんだ。数学と英語以外……。ていうかお前等も勉強しやがれ！」

「音羽達は魔界から来る前にいっぱい勉強したから大丈夫だもん」

「ヒロキより成績はいいと思う……？」

「音羽もー！」

本人達はそんな気は全くないのだろうが、悪魔2人はまるで人を見下げるかのごとく言った……。

……世の中不公平だと思うね。

今日も特に何もなかった。何も無さ過ぎて暇で暇で。ただ変わったことがあるというと、下校時間に天使が増えたくらいだ。

一応、下校にも気をつけてはいたがいつも通り、なんら変わりのない下校になった。

綾那曰く、バルムンクは1度天界に帰った可能性があるとかどうか……。

まあそれなら全然いいわけだが。正直出てこられると、銃とか向けられるだろうし、いざとゆうときに足が震えて動けんだろうし心底ホッとしていたりする。実際に銃を向けられたことないとわからない怖さなんだぞ、重要だからなここ！

学校から長い平行なハイキングコースをゆっくりゆっくり、少し溜まった洗濯物のことを考えて歩いていると、気がつくと家のすぐ近くまで来ていた。すると家の前にいつの日か見たことのあるアルミバントラックが1台……。

「あ、おにいちゃんあれー！」

俺の肩の上で音羽がトラックを指差して叫んだ。

「あれだな。蓮華が帰って来たか」

「何でわかるの？ ただのトラックじゃない」

綾那は首を傾げて尋ねてきた。

そういえば綾那はどうやってこの世界に来たのだろうか……まあ細かいことは気にしないとして、

「蓮華が始めて俺の家に来たとき、あのトラックでダンボールに包まれて来たんだ。蓮華が居なくなってもう2日だし、予定より少し早いけど帰って来たんじゃないか？」

「ふうん……。それより貴方、なんだか嬉しそうね」

少し嫌味っぽく言って軽く横目で睨んできた。

「そ、そんなことない！ こ、これからまた血を吸われると思ったらやってられんからな！」

「ふふっ。冗談ですわ。……ただ、私は貴方が」
「いてっ！」

そんなわかり易い評定していたのだろうか、俺は顔を隠して軽くぺしっと綾那に見えないように平手を割と強く頬にぶつけた。

そしたら何故か綾那が凄くしかめっ面を浮かべてそっぽをむき出した……。

そんなことを話していたらもう家の前に到着した。少し通り過ぎてトラックの運転席を覗くと、ロングヘアの女の運転手さんがまた眠っていた。

ドアを3回ノックして1歩離れる。数秒後に凄く眠たそうな顔をした女の人自動窓を開いて顔を出した。

「川越様ですよ。遅いですよもう」

「学校があつたんだから仕方ないでしょうに……」

女の人は大きな欠伸を浮かべながら車を降りて、寝ぼけ眼を擦りトラックの後ろに回った。

「離れててくださいね」

前回とは違い、少し慣れた手付きでサイドゲートを下ろし、素早くこの前と同じくらいの巨大ダンボールを地面に降ろす……。その作業時間僅か20秒。サイドゲートを使ったのと、2回目だというのにサクサク進んでくれてなにより。

「それでは、前と同じくここにサインお願いします」

女の人は胸ポケットからペンを出して俺に渡し、また大きな欠伸を浮かべた。

「はいはいと……」

お世辞でも綺麗とはいえない字でフルネームを書いて、配達員にペンを返した。

配達員は名前を書いた伝票をベリツと素早く剥がしてぺこりと頭を下げる……。何故か態度まで少し良くなっている。そして、少し真剣な顔つきで、

「そ、それではこれにて失礼します……。あ、あのこのダンボー

ル開けるときに刃物は使わないでくださいね？」

「はい　　って、あれ？　中身知ってるのか？」

そう尋ねると、配達員は苦笑して答えた。

「い、一応私も悪魔の端くれでして……」

「この人は……　イフリータという上級の悪魔……。蓮華のパシリ……」

「み、自らやってるのでパシリなんかじゃないですよ！」

へえーといいながら、まじまじとイフリータを見てしまう。悪魔というものはこんな人型が多いものなのだろうか。まあ人型以外も想像つかんが。

「とにかく、これにて私は失礼しますね。絶対に手で開けてくださいよ！？」

イフリータは俺にビシツと指を差して言って、トラックの運転席に戻ってアクセル全開で住宅街を駆け抜けていった。

まあ流石に蓮華が入っていると知ってたら刃物は使わないけど、前回は言わなかったのに今更どうして？

「それじゃ、ダンボール処理してから入るから荷物頼む」

「わかった……」

琴美に荷物を預け、指先を伸ばして開ける準備をする。

約2メートルもある上、割りと頑丈な作りしてるから開けるのに結構な力が必要となるわけで……。

一番近かったダンボールの角の近くを軽く叩いて蓮華が居ないことを確認する。音の軽さで恐らく子の中には居ないだろうとわかると俺は右手でダンボールの角に張り付いてるテープを上手く剥がし、めいっばい力を込めて引っ張り、一角のテープを剥がし終わると隙間が出来たところに手を突っ込んで強引に開けて、携帯のライトをつけて中に入る。

ダンボールの中だというのに外より涼しいとはどういうことだ。魔界か？　また魔界流ダンボールってやつか？

「蓮華ー……　いたいた　　っ！？」

寝息を立ててる蓮華の姿を見つけ、辺り一面を照らしてみると蓮華の肩にもたれてるもうひとりの女の子が……。

真っ黒なワンピースを着て、透き通るような色白な肌、金色の髪に長い耳……。凄く大人っぽい綺麗な顔立ち……。誰だこの人は？ 悪魔なのは間違いなさそうだが。

「ん……」

少し驚いて大きな声が出てしまった所為か、蓮華が目を覚ました。

「お、おかえり」

「んーっ！ ただいまっ！」

蓮華はグツと背を伸ばして、紅の瞳に俺の姿を映すとニツと笑みを浮かべて飛びついてきた。

「なんだよオイ。寂しかったか？ 寂しかったのなら俺が小1時間位抱きしめて」

「ちっ、違う！ 血よ血！ あんたの血が約2日間飲めなかったからその……。とにかく血をよこしなさい！」

強引に俺のワイシャツを引っ張り、首の左側に噛み付く。牙が首に刺さり、血がどんどん吸い上げられていく……。

やっぱり、血を吸われるのは凄く気持ち悪い。でも、不思議と抵抗しない自分が居る。毎日吸われ続けてたからか、案外これを快感だと思い込んでるのかもしれない。

血をたっぷり飲んだ後、蓮華はゆっくり牙を抜いた。

「はあ……やっぱりこれが1番ね！」

「お粗末様。っていうか蓮華さんよ、そこに居るのは誰だ？」

首を摩りながら尋ねると、蓮華はニヤツと笑って、

「ここにいるのは魔界ので最強の王妃様よ！」

耳を一瞬疑った。魔界の王妃？ 王妃ってことは魔界のトップってことだろうし……。なんでそんなお偉い人が人間界に？

「綾那の翼を治せる能力を持つてるらしいから、連れてきたの。あんなの姿も1回は見とく必要があるとかも言ってたしね」

そう言って、蓮華は王妃様とやらをゆさゆさと揺さぶった。

「な、なるほど……。蓮華、一応聞いとくが……。その王妃様俺の家に居候とかしないよな？」

「なんでそんなこと聞くのよ？ ……まあいいけど、その可能性は一切ないわ。魔界の一番偉いのが魔界を空けるわけにはいかないだろうしね」

その言葉を聞いてホツとした。これ以上増えられたら流石に家が崩壊する。

しかし、この王妃様どんな性格してるのだろうか。蓮華達がこれじゃ、そんないい性格を期待できそうにないのだが……。最悪、蓮華以上に我が儘で暴力的だったらと思うと悪寒が走る。

蓮華が揺さぶり続け、王妃様がやっと目を覚ます……。

「んゝ。もう着いたの？ まだ10時間位しか寝てないのに……」
凄く優しそうな声を出して目を擦り起き上がる。

「王妃様すっかり……。ほら、目の前のが創造者の生まれ変わり」
俺を指で差すと、王妃様は俺に気付いてニコツと微笑んだ。凄く美しいです。

「どうも蓮華達がお世話になっておりますゝ。えっと……魔界の王妃のルシファアと申し、」

「お、王妃様！ 偽名使ってー！」

「あらゝ。なんでしたっけ？」

「いや、俺に訊かれても……」

蓮華は大きく溜め息を吐いて王妃様をダンボールの隙間から出した。

どうも天然くさいが……。調子が狂いそうなお方だ。

魔法使い（5）

「ただいまっ！」

家に入ると蓮華は王妃様をほったらかしにして、真っ先にリビングに飛び出していった。

「あいつはもう……。あ、どうぞお先に」

脱ぎ散らかしていた靴を隅に寄せて、王妃様を先に家に上げた。
「どうも。お邪魔しますね」

王妃様はニコツと微笑んで一礼してサンダルのような靴を脱ぎ、トントンと小さく足音を立ててリビングへ入っていった。

魔界の1番上の者が……。いや、1番上だからこそ礼儀は正しいのだろつか？ 思ってた悪魔のイメージが一気に変わった。蓮華達も見習って欲しいもんだ。

王妃様の靴を中央で並べ、俺も家に上がりそのままリビングへ向かった。

蓮華と王妃様はL字ソファの両端に座っていた。俺は2人の話を聞きながらリビングに入り、王妃様のお茶の準備をする。

会話はいたって普通だった。学園での話、ここでの生活の話だったりと……。まるで親子のような雰囲気をもし出している。

そして、紅茶を入れ終えた俺は少し緊張して王妃様と俺の分を淹れてテーブルに出し、蓮華の横に腰を掛けた。

王妃様はお礼を言ってニコツと笑みを絶やす事無く紅茶を一口飲んで言った。

「改めて、創造者様、蓮華達がお世話になっております」

「い、いやいやこちらこそ　って創造者様ってのはちょっと恥ずかしいのですが……」

苦笑を浮かべながらヘコヘコ頭を下げる……。

お偉い人が我が家に来るなんてなかったから、どんな態度が相應しいのかわからん。とりあえず頭を下げておこうとした結果がこれ

だ。

「んじゃ、私は綾那呼んで来るわ」

「おい、ちよつと待て！」

蓮華が立ち上がった瞬間に腕を掴んだ。

少し痛かったのか、蓮華はキツと睨みつけながら、

「何よ？」

「しょ、初対面の人と2人は気まずい……。俺が呼んで来る！」

耳元でそう言うのと蓮華は大きく溜め息を吐いて、頭を抑えながら俺の腕を振り払ってこう言った。

「我慢なさい」

「ちよ、お前久し振りに帰ってきたんだからゆっくり……」

問答無用に俺の言うことを無視し、ヴァンパイアはマイペースでリビングを出て行った。蓮華が歩いていたりリビングの向こうを数秒眺め続けた後に腹を括る……。

「本当に我が儘な子でごめんなさいね」

「いえいえ。もう慣れましたよ」

嗚呼気まずい。もうどうにでもなれ。どうせ1、2分で蓮華も戻ってくるだろ。それくらいの沈黙くらい大丈夫だ。

濃い目の紅茶を飲み、大きく息を吐く。

なんで自分の家なのにこんな緊張して礼儀正しくせにやいかんだ……。

「それで、えつと……ヒロキ様でよろしいでしょうか？」

「あ、はい。呼び捨てでも何でも」

沈黙の時間なんてものはなかった。気を利かせてなのか、王妃様が話しかけてきた。

「では、先程のようにお呼びしますね。それで子作りの方は順調ですか？」

「ぶふっ！？」

ニコツと素敵な笑顔でとんでもない事を訊いてきた。思わず口に含まんだ紅茶を盛大に噴出してしまい、慌てて近くの布巾で噴出した

紅茶を拭いた。

「な、なんてこと訊くんですか……」

王妃様はクスクス微笑むように笑って、「どうなんですか」と再び訊いてきた。

どうなんですか。と訊かれてもどう答えていいのやら。俺達の関係のことを訊いているのだろうか？ 少し前、蓮華は俺を落とせばとか言ってたが、努力している素振りは見せないし……。俺自体、蓮華を好きになっていくかもわからない。数日前まで妹が好きだったんだ。正直に答えるのはいいが……返答次第では俺か蓮華達のどっちかが怒られるかもしれない。

「お、お互いに努力してますよ。きつと……」

「それはよかったです」。早くヴァンパイア達を繁殖させないと、血が途絶えてしまいますからね」

分かつてはいたけど、どれだけ重大な役目を背負ってるんだ俺は……。しかし、こんな夢の様な展開だけど気が引けてしまうのが現実で。

「ってか俺思うんですけど」

「はい？」

「俺がもしその、魔界と天界を創った者の生まれ変わりだとしても、やっぱり普通の人間じゃないですか……。他の人と変わりなんてないと思うんですけど」

顔色を窺いながら控えめに訊くと、王妃様は少し困った顔をして答えた。

「それもそうですけど……まあ気の持ちようですよ。それに1度引き受けたのなら頑張りましょう？」

「は、はあ……」

居候はさせているが、1回も引き受けたなんて言ったことない……。まあ努力してるって言ったからそんなこと言えん。

凄く気まずい状況の中、2階からドアを開け閉めする音と階段を下りてくる音が聞こえた。やっと蓮華が戻ってきてくれた……。話

は続いたがやはり気まずいのは確かだったぞ。

「お待たせー」

蓮華がリビングに戻ってきて、その後ろから琴美と音羽、少し距離を置いて綾那が少し俯きながらゆっくり入ってきた。

「お母さーんっ！」

音羽はリビングに入るなり王妃様に飛びついて膝に頭を置いて寝転がった。

「えーっと……あ、音羽。相変わらず小さいわね」

久し振りの会話がなんてセリフから始まるんだ。

「お母さん……」

琴美も王妃様の横に座って尻尾を盛大にフリフリしながら抱きついた。

「琴美久し振りだね。それにしても大きいわね」

しかし、やけに仲がいいな。って、

「あれ？ 2人とも今お母さんって言わなかったか？」

「それはあれよ。私達は戦争で親を亡くした孤児だから、王妃様に保護して貰ってたから母親同然なのよ。まあお母さんなんて呼ぶのは音羽と琴美だけけど」

そう言って、蓮華はさつきとは反対側の俺の右隣に座って、綾那を俺の左隣、ソファの端に座らせた。

「蓮華も私のことお母さんって呼んでいいのよ」

「よ、呼ぶわけないじゃない！ こ、子供じゃあるまいしそんな……」

王妃様に対してもこれかこいつは……。どれだけ尖がってるんだが。

「それは置いといて、本題なんだけど」

蓮華は誤魔化すように話の流れを変え、親指で綾那をピツと指差した。

「ああ、やっぱりその子が例の」

「……どうも」

綾那は王妃様に一瞬だけ顔を上げて頭を下げると、そのまま俯いた。心なしか、少し怯えているような気もする。

まあ天使が魔界の王妃を前にしちゃ無理ないのかもしれないが。

「ほら、いけよ」

「な、なんですか？」

「なんですのって、お前が近くに行かないと治るもんも治らんだろう。多分」

そう言っても、綾那は下を向いて動こうとしない。

「……」

「だあもう！ 埒が明かん」

俯く綾那の腕を引き、寝転がる音羽を退けて強引に王妃様の横に座らせ、俺も綾那の横に座る。綾那は驚いて俺と王妃様の顔を交互に見上げ、肩を狭くして縮こまった。

そんな綾那を見て王妃様はクスクス笑って、

「どうも。デュランダルさん」

綾那の本名を口にした。

俺も少し驚いたが、1番驚いているのはもちろん本人であって、当然ながら理由を尋ねた。

「どうして私の名前を……？」

「あら？ 覚えてないかしら？ 元天使長ルシフェル。今はルシファーって名乗ってるけど、元は私も天使だったのよ？」

笑みを絶やすことのない悪魔の王妃様は背中を鈍く光らせ、一瞬のうちに、綾那と羽や形は同じだが正反対の色をしている真っ黒な翼を広げた。

「ル、ルシフェル……。確か15年前の戦争で神に逆らって墮天した天使長……！？」

「あなたはまだ生まれてそんなに間がなかったかしら？ それにしても、私あっちじゃ活躍して色々有名になったと思っただけ…… やっぱり墮天した天使はみんな忘れ去られていくのね」

悲しそうな事をさらりと笑いながら言った。

っていうか、元天使が今じゃ魔界の王妃？　もう何でもアリなのが魔界は。

「まあ墮天使してしまったけど、魔力は墮天使になっても変わらないまま。デュランダルさんの翼を治すくらい容易いことよ。じゃあ早速治したいから翼を出して？」

「は、はい。お願いしますわ……」

おっとりした割には結構なお喋りな王妃様。会話のペースを完全にものにし、自然な流れで少し戸惑いを見せていた綾那に翼を出させることに成功する。

背中を王妃様に向けているということは、前は俺の方に向いている訳でありまして。少し不安なのか、俺の手の甲に手を置いた。

「きつと大丈夫だよ。王妃様も容易いつて言ってただろ？」

その手の上に俺のもう片方の手を乗せて、両手で包んだ。

綾那はコクンと深く頷き、覚悟が出来たのか少し眉を寄せながら目を閉じた。

その数秒後に、王妃様は笑顔から少し真剣な顔つきに変えて、綾那の翼に巻かれていた包帯を優しく取ると傷口を数回撫でた。

「つつ……！」

綾那の手の力が強くなる。掌に爪が食い込む。だがそれも綾那の翼の痛みに比べたらどうってことないだろう。俺はそれを受け止めて少し強めに綾那の手を包んだ。

「大丈夫。力を抜いて」

「はい……」

悪魔とは到底思えない優しい声。耳に響いては心を落ち着かせる。それは綾那も同じなようで、手の力は次第と抜けていった。

王妃様の手をじっと見てみると、ほのかに光っていることがわかる。あれが癒す効果なのかは知らないが、魔法なんて本当に実在するなんて思いもしなんだ。まあ、人外だから出来るような技だろう。「なあ、蓮華もああい魔法とか使えるのか？」

移動して左隣になった蓮華に尋ねる。すると蓮華は首を傾げて答

えた。

「あれ？ 見せなかった？ 私が出した大鎌も魔法の一種なんだけど」

「え？ あの鎌そうなのか？ てつきり隠し持ってただけかと思ってた」

「ま、人間じゃ仕方ないわね。あれは私の血液をそのまま大鎌の形に変えたただけなんだけど、その気になれば一振りで家の1つや2つ真つ二つにスパツと斬るなんて簡単よっ」

「ほ、ほう……凄いな」

さらつとんでもない事を笑顔の上に自慢げに言いやがる……。
やはりこいつを怒らせたら死あるのみなのか。

それじゃあ、この前チエーンを切った琴美の爪も魔法と考えていいのだろうか？ まあこれ以上訊くとややこしくなるだけだから必要があるときに訊こう。恐らくそんなときは来ないだろうが。

王妃様の手を眺めて数分が立つ。ぼんやり眺めていたら王妃様の手から光が消え、撫でる動作も止まった。

「ふう……。さあ、治りましたよ」

そう言つて王妃様は一息つき、真剣な顔つきから笑みに変えて、翼を撫でていた手でぽんぽんと綾那の頭を軽く叩いた。

綾那の翼を見ると、傷は全て無くなっていて、気のせいか元に戻ったというより前より綺麗になったような気がする。いつも以上に純白というのか……とにかく、素直に綺麗だと思える。

「……ありがとう。王妃様、蓮華も」

綾那は少し照れて頬を紅潮させて礼を言つた。そして少し隠れるように俺に寄り添ってくる。そんな綾那の姿も素直に可愛く思えた。

魔法使い（6）

綾那の翼も治った所で、妹も帰宅してまた「悪魔は猫じゃない」

だなんだと説教される。しかし、そんな事言ってるが何気に王妃様と意気投合して話が弾んでらっしゃる。気が付けばガールズトークになって知らないうちに俺がはぶられていたのでダイニングテーブルで紅茶を飲みながら拗ねていた。

そして時計の短い針が6の字を過ぎた辺りだった。

「うおっ」

ポケットの中で携帯のバイブレーション、そして着信音が鳴り響いた。みんなの視線を感じながら携帯を引き出すと、平面ディスプレイには湊と1文字だけ映っていた。

弁当の話かそれともテストの勉強をしるか……どちらにせよいいことではなさそうな気もするが、携帯を開いて受話器ボタンを押し耳に当てる。

「やつほー。おにい？」

「どうした。テスト勉強ならしないぞ」

「しなよーもう。まあ電話したのはおにいが暇じゃないかなーと思っ
って掛けたのでありますっ」

「な、なんでわかったオイ……」

こいつは近くにいなくても俺の行動がわかるのか？ 少し背筋にゾクツと寒気が走り、つい窓際、テーブルの下等、どこかに監視カメラでも仕掛けられているんじゃないかと思っ
て探したが、もちろんそんなものある訳無い。そして元の位置に戻ったところで幼馴染が言った。

『ところで、今からおにいの家に行ってもいい？』

「馬鹿か。もう6時過ぎだろうが。飯時だぞ飯時、俺は今から献立考えるのにだな、」

『いついのかな？ 断っても』

湊は少し脅しているかのような口振りで言った。

『ちようどスーパ－の特売で合いびき肉をたくさん買えたからおにいの家でおにいの大好きなハンバーグでもと思ったのに、帰って冷凍しようかな？』

「なん……だと!？」

俺の頭の中で天秤が現れる。右側に自分+琴美の作った料理。左側に幼馴染のハンバーグ。左側が重過ぎて右の重さなんてどこかへ吹っ飛んでいった。

琴美の料理が不味い訳じゃない。むしろ美味しい。だが、幼馴染の方が何歩も先に行ってるのだ。ここはハンバーグが食べたいという欲望に正直になって湊に作ってもらおうか。

「……ハンバーグ井はありますか？」

『ふふっ。もっちゃん! じゃあそっち行くけど大丈夫?』

「おう」

『じゃあお会計済ませたらすぐそっち行くから』

「迎えに行こうか? 買った肉だけじゃないだろうし自転車でパ―ッとそっち行くぞ」

『んにゅう……。じゃあお願いしようかな?』

「おう。任せろ」

『それじゃ、後でねっ』

……。

携帯をポケットに仕舞い、夕食のことを考えて少しにやけてしまう。そして携帯をポケットに入れふと後ろの女連中に目をやると何故か視線が俺に集まっていた。

「なににやけてんのあんた……キモいわね」

「うるさい。まあなんか知らんが、湊が晩飯作りに来てくれるってさ。ハンバーグだぞハンバーグ!」

少し浮かれてキッチンに入り、炊飯器の中を確認する。中は綺麗にすっからかんだ。

「琴美か綾那、6合くらい炊いといてくれ。ちよつと湊迎えに行っ

て来る」

「私が炊きますわ　　って、湊を迎えに行くって大丈夫なの？　　い
つバウムンクが来るかわからないのに……」

綾那が立ち上がり、ふわりとひと飛びでキッチンまで飛んできた。
そして少し心配そうな顔をして尋ねる。

確かに、あいつの狙いは綾那だが俺も一応任務だかなんだかで殺
されそうになったが……。

「まあ、自転車乗ってくし大丈夫だろ。四季の島は坂が少ないから
案外逃げ切れる気がするし……あ、後本屋にも寄らんといいかん。」

グラドルの写真集のことをすっかり忘れていた。

「そう……じゃあご飯は琴美に炊いてもらって私も一緒に　　」

「いや！　大丈夫！　俺逃げ足だけは速いから大丈夫だ！」

来られたら色々めんどくさい。綾那は特に俺のことが好きなわけ
であってだな……余計にめんどくさいことになる。

「何でそんなにひとりで行きたいのよ？　　なんか怪しいわね」

「うるさい。さっきからなんだ吸血鬼！」

「な、何ってあんたが一々変なんですよ！　　いいからさっさと行き
なさいよ！」

貶したり怒ったりと忙しい奴だ。どんだけ俺のこと見てるんだよ。
「とりあえず行って来るわ。米頼んだぞ」

目の前にいる綾那の頭をぼんぼんと叩いて玄関へ向かう。そして
靴を履きながら、靴箱の上で少し埃を被ってる自転車の鍵を持って
家を出て駐車場へ。

「久し振りだなあ」

最近は無沙汰だった自転車。サドルを少し手で掃って後輪部分
にある鍵を開けて跨る。後で空気を入れてやらないと思いつながらペ
ダルを漕いで先に本屋へ向かった。

「ありがとうございましたー」

お目当ての商品を手に入れて、ほくほくしながら商店街の片隅にある本屋を出た。

マイナーなグラビアアイドルの写真集だが、童顔で巨乳、そして痩せ型ときた。俺のストライクゾーンど真ん中だ。

「帰ってじっくり観賞しよう」

「やっぱりおにいには巨乳派なんだね」

「はっ……！」

後ろを振り向くとツインテールの頭がひとつ。幼馴染がジトツとした目で俺を見ていた。

「お前いつの間にいたんだよオイ。つかなんで俺の買ったものがわかった！」

「そんなことより幼馴染よりグラビアが優先」？

「ほ、本屋の方が近かったからであって……もういいだろ。さっさと行くぞ」

これ以上言い訳しても口でこいつに勝てる気はしないから逃げる。買った本と湊の買い物袋をもらって自転車の籠に入れた。

「よっし。後ろ乗れよ」

「あははっ2人乗りか、久し振りだね」

自転車に跨ると、湊は荷台に腰を掛けて右に両足を垂らした。

警察に見つかる少し厄介なのだが、ラッキーなことに四季の島は治安が良かったためか警察があんまり働かない。働かないというのはおかしいのだが、生まれてこの方、警官を見たのは学校のイベント行事で1回程で、パトカーのサイレンなんか1度くらいしか聞いたことない。いつ聞いたかは思い出せないのだが……。

「……おにい、レッツゴー！ 早くハンバーグ作るよっ」

「おう。ちゃんとつかまってるよ」

軽い湊が乗っても差ほど変わらないが、体重のバランスを取りながら細心の注意を払って商店街から出た。

「おにいがちゃんと注意しながら走ってくれてる。嬉しいな」

「うるさい。女の子乗せて走ってんだから当たり前だ」

そのまま黙々と家へ走った。いつもはうるさいくらいな湊がだんまりしてるのは気になったが、ただひたすらペダルを漕いだ。そして数分漕いだところか。また、あの違和感に襲われる。

人が周りに1人もいない。

やはり綾那の忠告を聞くべきだったかと内心思っている。だがもう遅かった。

「あら？ 今日は彼女さん連れてお買い物ですか？」

「そうだ。だから見逃してくれ」

「そういう訳にはいきませんわね……お仕事なので。にこっ」

住宅街の真ん中、家と商店街のちょうど間くらい、綾那の妹、バウムルクが羽を中に舞わせながら目の前に降りてきた。

「にこっって言っても笑ってねえじゃねえか！ ちょっと今日だけは見逃してくれ」

「だから、無理ですわ。今のうち貴方を殺さないと、厄介な悪魔や愚かな姉達が邪魔するんですもの」

溜息を吐きながら、生足に付けてるレッグホルダーから銃を取り出す。

「だから、今度こそ、」

「やめておいた方がいいよーっと！」

「はい？」

ぴょんと自転車の荷台から降りる湊。少し笑みを浮かべながら自転車の横に立った。

「おい馬鹿か！ あいつが持つてるも見ろ！」

慌てて自転車から降り、湊の前に立ち警戒する。すると湊はまた

俺の前に立つて、何も言わずニコツと笑みを向けた。

「誰ですの貴方は？ 私はこの男だけ殺せばいいんですの。余計な被害は出たくありませんわ」

そう言つてバルムンクは冷たい笑みを浮かべて銃を湊に向けた。

「あははっ。余裕だね。私ね、1度死んでるから、それも天使に殺されてね。だから全然怖くないよ」

「えっ？」

俺とバルムンクの声が重なった。

少し予想外なことを言われたのかバルムンクは動揺している。俺も動揺している。ハツタリだろう？ でも湊は嘘を吐くような奴か？

「そ、それじゃ逆にトラウマになるんじゃないのですの？」

「うっん。だつて私がその天使を殺したから。どうやって殺したか聞きたい？」

湊はニヤリと笑みを浮かべて右手を胸ぐらいの高さまで上げて少し広げる。するとそこから小さな火が現れ、一瞬で大きくなった。

離れていても肌が焼けそうに熱い。相当な火力がある。

「よく覚えてないんだけどね、私が死んだとき、いや、死ぬ寸前に魔女が現れたの。そして蘇らせてくれた。私の幸せを引き換えにね。その代わり、魔界で数少ない魔女の力を手に入れた。それで殺した」

「……湊」

「でも、後悔なんかしてないよ。私の大切な人を守ること出来たし、色々便利な能力もあるからね」

湊はこちらを見てニコツと笑った。でもその笑顔はどこか悲しげだった。

なるほど。湊が魔女っていうのも納得が出来そうだ。人の心を読んだりとかよくしていたし、この前の天気が変わったのも湊が何かしらしたのかもしれない。

でも何故、天使に殺されたんだ？ 大切な人を守ることが出来た？ 天使に係しているから俺のことか？ まったく覚えがない。

「ま、そゆことだから天使さん。君も死にたくないならもうおにい

の前に出てこないで。もう私に誰も殺させないでほしいんだ」

「な、なんですよさつきから！　まるで私が弱いみたいな言い振りして……！」

ぎりつと歯を食いしばって引き金に伸ばしている人差し指に力を入れた。

「言っておくけど、銀の銃弾なんか効くなんて思わないでね？　それに、この業火じゃ銃弾なんて一瞬で溶けちゃうから」

湊は余裕な笑みで炎をバルムンクに向けた。その一言でとうとう怒りが頂点に達したのか、バルムンクは引き金を引いてしまった。

しかし銃弾は湊の業火の前で溶け、蒸発してしまう。

「ちっ！　これでも！」

もう片方の足に付けているレッグホルダーから同じ銃を取り出して2丁同時に発砲し、連射する。

しかしそれも全て一瞬で蒸発する。現状まったくついていけない俺でもわかる。バルムンクに勝ち目はない。湊の力が圧倒的に上過ぎる。

「言うこと聞いてくれないんだね……。忠告はしたよ。でも聞いてくれないならもう殺すしかないね」

「ひっ……！」

湊の目が鋭く、冷酷に光る。炎も更に燃え上がった。

それに怯えてバルムンクは銃を落とし座り込んでしまった。これでもうバルムンクは、

「って！　待て待て待て！」

慌てて湊の前に出て湊の攻撃を止める。すると湊は今まで俺の目の前で見たことのない目付きで俺を睨んで言った。

「退いて。ここで逃したらまた来る」

「ああ、俺はそれでも構わない！　何も殺す必要はないだろう！？」

綾那の妹なんだぞ！？」

「それでも綾那ちゃんを傷付けたよね？　余計に許せないよ」

「でも俺はこんなこと望んでなんかない！　綾那だって妹が殺され

て喜ぶと思うか!？」

これほど幼馴染が怖いなんて思ったことがない。それでも止めないとバルムンクが殺される。俺はこいつが死ぬところを見たくなければ、幼馴染が手を汚すところも見たくない!

「……ふう。仕方ないなあ。おにいがそこまで庇うなら見逃してあげよ。命拾いしたね」

炎がゆっくり消える。そして湊の顔もいつもの笑顔が似合う優しい顔に戻っていた。

「はあ。びっくりさせんなよもう」

「あはは……。黙っててごめんね。一応私も人間なんだけど、見てもらったとおり魔女の力があるんだ」

そいつはわかった。蓮華達の存在のおかげで結構早く理解することが出来たが……。こいつはまだ隠してるということがいくつかありそうだ。どうも俺関係みたいだし、いつか聞き出さないと。

「ごめんね。そればかりは教えるわけにはいかないんだ。おにいの事だからきつと……」

「言えないなら無理に言う必要なんてない。ってか、やっぱり心が読めるんだな」

「ごめんね。もうこの能力使わないほうがいいかな……?」

「謝ってばっかだなオイ。むしろその能力は存分に使え。今までしてきた気遣いとかなかったら俺は留年してしまう」

なんだかんだですつとこの力に守られていたのかもしれない。本当に附属の時、勉強を強制されなかったら進級は危うかった。だから、これからもありがたくその力を有効に使ってもらおう。

「甘やかしたりなんかしないからね」

「うるさい。さっさと帰るぞ」

また自転車に2人乗りの体勢に戻る。

「おい……。俺達はもう行くからな」

バルムンクに一声掛けると、座ったまま悔しそうに歯を食いしばって頷いた。

当分は襲ってこないだろう。そんなことを思いながら俺は家へ向けてペダルを漕いだ。

魔法使い（7）

家に着き、自転車の鍵を部屋に置いて、買ってきた写真集をベッドの空きスペースに収納してみんながいるリビングへ。

「ただいま」

「おかえりー」

そして女の子達に迎えられる。

「遅かったですわね。なにかあったの？」

「ああ、色々とな。遅くなつて悪い。すぐにご飯の用意するから」
妹がまた襲つてきただなんて言えんわな。それに、湊が殺そうとしただなんて。

「んじゃ、用意するねっ」

湊はキッチンに入ってエプロンを着けた。俺用のエプロンだから大きさが脛くらいまである……。そしてキッチンの高さが高いためか作業台まで用意している。

「どれだけ小さいんだか……」

「おにいー？ 失礼じゃないかな？」

「す、すみません……。んじゃ、やるか。俺は」

調理台の横に掛けてある琴美のエプロンを手に取ろうとしたところだった。取る寸前にするつとエプロンをいつの間にか来ていた琴美に取られる。

「私がする……。お母さんに食べて欲しいから……」

「ああ、そうか？ じゃあ俺も何かないかな」

「おにい邪魔だから本でも読んできてていいよ？ 今日買った童顔で巨乳の奴！」

大声で叫びやがった。あれは今夜のお楽しみなんだよ。ていうか大きい声で言うな。俺の印象がなんか凄く悪くなりそうだ。

やる事ないのなら俺はもう知らん。邪魔なら尚更だ。拗ねてやる。俺はソファの端っこ、蓮華の隣に腰を掛けた。そして若干拗ねな

がらテレビに目をやる。

「あー、疲れた」

「自転車で少し走ってきただけでしょ？ 普段から運動してないから疲れるのよ」

「うるさい。一般的な人間の体力は持つてるつもりだ」

悪魔と人間を同じにするなといった。見かけはそんなに変わらなくても力は天と地の差がある。今思えば、湊の運動神経や体力も悪魔の力なんだろうか。

「ヒロキ様、体力付けておかないといざと言うときに持ちませんよ？ 今のうちに絶倫になってもらわないと……」

また王妃様が変な事をすらすらと言いやがる。本当にやめて欲しい。ほら、また妹が睨んでくる。とにかく話の内容を適当に変えないと……。

「そつえば、テスト明けに何かイベントあるってさ。戦争だかなんだか」

「あ、もう兄貴のところに伝わったの？ 生徒会の極秘だったんだけどなあ。どうせ村田君がそこそ嗅ぎ回ってたんだろうけど……」

知ってるのは俺達ぐらいなもんだろう。村田の奴生徒会に何の恨みがあるのかずっとスパイみたいなことをしている。その度に俺に報告してくるのだが、正直死ぬほどどうでもいいわけで。

「へえ？ 戦争って何するの？」

蓮華が少し興味有り気に訊くと、叶は苦笑を浮かべながら小さい声で答えた。

「……ドッジボール」

「……はあ！？ なんだそれ。球技大会でやれよそんなの。戦争まったく関係ねえ！」

むしろ球技大会でもあるかどうかかわからない種目だ。っていうかドッジボールって単語を久々に聞いた。

「ねえおにいちゃん、ドッジボールってなーに？」

「敵味方2つのコートに分かれて、ボールを相手にぶつけて全滅さ

せるゲームだ」

至ってシンプルに説明した。

「そ、それで戦争って……私達の弱点の銀のボールでも使う気なの……！？」

「ねえから。そんな鈍器でドッジボールしたら人間死ぬから！ 本当に戦争になっちまうから！」

蓮華はホッと胸を撫で下ろした。どこまでマジに考えているのか。でも、ドッジボールってなんか白けたな。水鉄砲でも何でも、四季の島全体でそういうのやると思ったのにさ」

「生徒会もそれを考えたんだけど、やっぱり迷惑掛かるし、水鉄砲を全員分用意するとなると予算もね……」

まあ学校のイベントクオリティなんてそんなものか。むしろドッジボールで勝つだけで食券もらうと考えたらいいもんなのかね。

「……あの、ヒロキ様？ テストって終わるのいつ頃ですか？」

「えーっと……多分来週の今頃には終わってますよ。テスト明後日からだし」

王妃様の質問に答えると、うんうんとなにやら悪巧みをしているかのような可愛い笑みを浮かべる。この王妃様、初対面で言うのもあれだがどうせロクでもないこと考えてそうだ……。

「んじゃ来週もう1度訪問しましょうか。少し面白い事を思いついたわ」

「お、王妃様。あんた魔界の頂点なんだからしょっちゅう人間界に来ちゃ駄目なんじゃないの？」

的確な突込みが出る。しかし王妃様は首を左右に振って答える。

「だって暇だもん。というか、王妃だからこそ！ 娘が心配で心配で」

「自由な世界だなオイ……。でも、俺の家ならいつでも来ていいですよ。まあ食費の都合上お泊りは厳しいですけどね」

「それは大丈夫。魔界と人間界って案外容易く行き来出来ますからね」

そんな行き来出来るなら夏休みあたりに行ってみたいもんだ。若干怖いイメージしかないけど。

そんなこんなでべっっていると、午後7時半を過ぎる。そしてちょうど過ぎた辺り、キッチンからフライ返しを持って湊と琴美が顔を出した。

「ハンバーグできたよーっ！」

「お母さんも……こっち来て……」

みんなソファから立ち上がり、ダイニングテーブルに移動する。

「よし、音羽、ご飯みんなに持っていつてくれ」

俺はキッチンに入って器にご飯を盛る。それを音羽がすすい飛んでみんなの前に手際よく置いていった。そして配り終えた後、人数の事を忘れてた事に気付く。

若干2人座れない。6人用ダイニングテーブルが埋まるためソファに2名行かないといけないのだが……。

蓮華はご飯食べないとしても、どうせなら王妃様の近くにいた方

がいただろうし、俺がソファに行くとしてだ、

「おにい、一緒に食べよ？」

「悪いな。客なのに」

また氣遣ってもらった。やっぱり湊の心を読んでもらう能力はなくてはならないのかもしれない。

「大丈夫大丈夫っ。それに、ハンバーグ丼でしょ？ 今卵焼くから待っててね！」

「お、おう。サンキュー」

湊はまたキッチンに戻って冷蔵庫から卵を取り出して焼き始めた。何もしないのはどうも落ち着かないのだが、今日は甘えさせてもらおう。

楽しそうな声を背に、待つ事数分、丼にご飯とハンバーグが2つ、半熟の目玉焼きの上にデミグラスソースが掛かったものが目の前に2つ並んだ。

「ハンバーグ丼お待ちっ！」

箸を2膳持った湊が俺の横に座ってニコツと笑う。

「おーっ。待ってました！」

「ふふん。今日のは自信作だよ」

箸を受け取り、ハンバーグを切って1口。程よく口の中で解れて肉汁が口の中で広がり、デミグラスソースが美味しさを引き上げる。純粹に美味い！

「あははっ。ありがとうね」。琴美ちゃんと頑張って作った甲斐があったよ。幸せ幸せっ」

「……そういやさ、お前さっき言ってたよな。幸せを代償に魔女になったって。それってどういうことなんだ？ やっぱり身の回りで不幸な事とかあるのか？」

デミグラスソースの掛かったご飯をがつつ頬張りながら尋ねる。「んー……。元々私幸運だったからね。小さいころよく500円拾ってネコババしたっ！ なんていうか、その幸運なのがなくなっただのかな？ だから普通になったって感じ。良くも悪くもなく」

ネコババのことは突っ込まない。つまり、魔女になる前はただの運のいい女の子だったけどその運がどうかいったってことでいいのか。

それにしても、やはりこいつが魔女になったきっかけが気になる。どうも人事じゃないみたいだし……。

「それとさ、俺以外の奴はお前が魔女だって知ってるのか？ まあ誰にも言うつもりはないけど」

「んー。誰にも言っていないけど、蓮華っち達はみんな気が付いてるんじゃないかな？ あの王妃様も恐らく気付いてる。だって私の体から魔力ずつと出てるしねっ。普通の人間にはわからないだろうけど」

少し誇らしげな顔をして手に小さな火を一瞬出して引っ込める。

「やっぱり教えてくれないのか？ お前が魔女になった事とかさ、その時の状況とか」

「ダメだよ……」

湊の笑みが苦笑に変わる。でもここで折れない鬱陶しさを持つのが俺の自慢。

「どうしても？」

「どうしても。そんな事よりハンバーグ丼冷めちゃうよ？ 早く食べて食べて！」

やっぱり結構重大な事を隠してるか。聞き出すのは不可能かもしれないが、俺関係でそんな重大な事を隠されたら何か気が悪い。気になってきつと夜も眠れん。

そこから湊は何も言わず、黙々とちまちまご飯を食べていた。

少し聞くタイミングを間違えたかと反省。だが俺は諦めない。いつも湊には世話になってるし、叶との喧嘩の件だって湊が仲裁してくれたみたいなものだ。今度はあいつが溜め込んでいるものを俺が解き放つてやらないと。

とりあえず明後日からのテスト……それが終わったらのんびり考

えよう。

魔法使い（8）

日は飛んで6月中旬、雲の間から燦々と降り注ぐ太陽の下、俺は英語のテストを回収しながら開放感に満ち溢れていた。

「はい、これで中間テスト終了だ。お疲れさんー」

テスト監督の先生が気だるそうに出て行き、夏休みまでの関門を1つ突破した。

「終わったー。あーだるかったわー」

ヴァンパイアも気だるそうにのそのそこちらへ歩いて来て俺の机にどしっと腰を掛けた。

「お疲れさん。お前には人間界の問題は難しかったんじゃないか？」

「フン、そうでもないわよ。むしろ余裕過ぎてだるかったのよ」

大きく欠伸を浮かべて余裕な表情を見せる。そういえばこいつら悪魔集団は魔界で勉強してきたとかで頭はよかったんだ。忌々しい。実に忌々しい！

「あんたはどうだったのよ？」

ニヤリと笑みを浮かべながら尋ねてきた。

「へ、平均点より少し下かなー……？」

「まあそりゃ寝てばつかじや頭に入んないわよね。湊がちよいちよいノート見せてくれてるんだしもう少しくらい取りなさいよ？」

「うるさい。どうせ社会に出て役に立たん！俺は日本で働くからある程度英語できてりゃいいんだよ！」

「おにい？それは頭悪い人の古典的な言い訳だよ？」

嗚呼、忌々しい。頭いいやつが忌々しいねまったく。

小さく舌打ちし、頬杖付いて誰も居ない校庭を眺めていると、なにやら血相を変えて村田がすっ飛んできた。

「川越！今すげえ美人見た！」

「今はそんな事より開放感に浸ろうぜ。終わったんだ村田……やつとピリピリした状態の授業が終わって普通の授業に戻るんだ……」

こんな嬉しい事はないだろう」

大体真上に浮かんでいる太陽を指差して村田の肩を叩く。しかし村田は俺のボケをシカトして話を進める。

「待て。本当に凄いいんだって。真っ黒なワンピース着ておっとりと優しそうな顔で金髪！ 本当に可愛いというより美しいというか……」

「……へえ？ 外国人か？」

黒いワンピースに金髪……。何か引つかる。少し前にそれと同じ格好した人が居た気がする。

記憶を辿って答えを探そうとしていると、黒板の真上にある四角いスピーカーから小さくサーツと音が聞こえ出した。放送室で何かを放送するのだろうか。

『ぴんぽんぽんぽん！』

「はあ！？ なんて放送の通知音が人の声なんだよ……」

「あ、お母さんだ！」

音羽が瞳を輝かせ嬉しそうに叫んで机から飛び上がる。

そうだ。黒いワンピース着て金髪！ そしておっとりした顔立ち！ 王妃様だった。テストでいっぱい忘れてた。

『四季の学園生徒会で』す。附属2年A組と美術科1年A組、1年情報科B組の皆さんは帰らずに速やかに体育館へお越しください。来なければ人生の9割損しますよ』

残り1割は何だ。生きててよかったでやっと1割かオイ。

「村田。お前の言ってた美人は蓮華達の母だ。義理のな」

「なんだと……。つまり人妻か……。残念ながら僕にはそういった趣味はないかな」

安心しろ。その気があったとしても、手を出す前に蓮華達が全力でお前を潰しに行くから。……冗談じゃなく本当ばいからなんか怖くなってきた。

「そつえば王妃様今日来るって言ってたわね。何で来たのかしら？」

「どうせロクでもないことに決まってるわよ。あんた達知らないだろうけど、あの人暇があつたら変なイベント考え出すからね。結構前に魔界全土でかくれんぼ大会なんてあつたわ。終了があつたのかすら知らないけど」

相当大規模なイベントだな。魔界全土っていつまで隠れてたらいんだよ。

とにかく突っ込みどころ満載な王妃様だ。俺もロクでもないことするんじゃないかと思ってる。

「でもあれじゃないか？ この前僕が言ってた戦争。もしかしてその王妃様が凄いイベントにしようとしてるんじゃない？ あれから調べたら戦争とやらは球技だそうだし、つまらないのよりいいんじゃないかな？」

村田が顎を支えながら言った。

「まあなあ……。四季の島全土でとかやめろよな」

溜息を吐きながら席を立つ。そして人外メンバーと村田を後ろに、体育館へ向かった。

体育館の中は既に呼ばれたクラス殆ど全員、そして野次馬が沢山。みんな声の主が気になったのだろうか、凄く集まってる。気のせいか毎週月曜にある朝礼より集まってる気がする。

「おい、川越ファミリーこっちだぞー」

担任の中年の先生が手を大きく振って俺達を呼ぶ。

どうやら集まるところが決まってるらしい。

人ごみを掻い潜り、先生の近くで胡坐をかいて座った。

「なんか凄い事になってるっすね。先生はあの放送の主知ってるん

ですか？」

そう訊くと、先生は大きく2回頷いて答えた。

「ああ。少し前に職員会議してたら理事長兼校長が連れて来て……
なんか創立者祭の優勝組決定イベントを大掛かりにするとかなんとか」

あの人相当暇なんだな……。魔界と人間界結構頻繁に行き来して
そうだ。

「まあ大掛かりだと何だろうと、食費が削減できるからには全力で
勝ちに行くからな。俺の小遣いと叶の小遣いも減らさずに済む様に
！」

この前のグラビアで結構やばいところまでいってしまったからな
んとしても勝たないといけない。

「そんな状況でよく買っね。おにい欲望に忠実？」

「うるさい。人間、欲望には正直に生きるのが一番なんだ」

俺が喋っている途中だった。ステージの上に小さく足音をトント
ンと立てて黒いワンピースの女性が立つ。そして真ん中にあるマイ
クを手を取った瞬間……。

「おおおおおおおおおっ！」

周りの男子生徒達が叫びだした。主に外野と村田。

「コンサートかオイ」

「ったく恥ずかしい……」

蓮華が溜息を吐いて顔を赤らめる。

少し気持ちはわからんでもない。さながら小学生の頃授業参観で
親が来ちゃったみたいな感じな複雑な気持ちなんだろう。

『はい、どうも。魔界の王妃様ですよ』

王妃様は小さく手を振ってくるつと半周回る。

『今回集まったのは、四季の学園創立50年記念、創立者祭でトッ
プだったクラス3組で行う楽しいイベントの説明をするためです
』

知らないクラスが殆どなのか、少しざわざわし始める。

俺達のクラスは村田の情報のお陰でそうでもない。普段寝てばかり居るやつが少し驚いてるくらいだ。

『それでは、私が説明してたら遅くなっちゃうので、代わりに、附属生徒の生徒会風紀委員の川越叶さんが説明してくれます』

なんで生徒会長じゃないのかと誰もが思っただろう。まあ一応、王妃様とは面識あるだろうけど何で風紀委員が？

心の中で色々突っ込んでいると、髪を揺らしながら、学園だけでは凛々しい妹が王妃様に代わりステージに立ちマイクを受け取った。『皆さんこんにちは。王妃様が言ったとおり、明日のイベントの説明をします。1度しか言わないのでしっかり聞いて下さい』

ハキハキとした声が多数のスピーカーから体育館に響いた。

「明日か。えらい急だな。普通に授業あるだろ明日」

「まあいいんじゃない？ おにいても授業よりこっちの方がいいですよ？」

「ごもつとも。2度頷いて返事した。」

視線を叶のほうへ戻すと何故か目が合った。そしてクイクイと手招きして、

『えつと……兄貴、ちょっと来て』

「はあ？」

あちこちから視線が集まる。これは早く行かないと気まずい……。軽く舌打ちして小走りでステージに向かい、叶の横1メートルくらいに立った。

『イベントは、全クラス対抗の銃を使ったサバイバルゲーム。四季の島全土を使って行います』

体育館全体が更にざわめく。俺だってそのひとりに入りたかった。だがステージの上でひとりで目立った行動は出来ない。

そんなことより、本当に四季の島全土を使う大規模なイベントになっってしまったのか。それもサバイバルゲーム……。

『説明が続けます。ルールは、スタート地点は学校で、スタートの後5分間は発砲出来ません。まあその間にどこかへ走るなりなんな

りと……』

その間に作戦会議等色々出来ると……。ただ5分で逃げれるところなんてしているだろう。

『制限時間は特に無し。両敵組を全滅、自分の組の全滅で終了になります。因みに、個人が1度戦闘不能になったら復帰できなくなります。後フレンドリーファイアはありますので』

「なんだその怖そうな名前」

『フレンドリーファイアってのは、味方の弾が被弾すること。だからチームの流れ弾で戦闘不能もあるってこと』

何故かやけに詳しい。王妃様の入れ知恵か？

でも味方に被弾とは……。別行動したほうが身のためだろうか。

『武器は始めに各自ハンドガン。ベレッタって小型の銃ですね。因みに、安全確認のために撃ってみますっ』

叶がマイクをスタンドに掛けてそのベレッタとやらの銃口を俺に向ける。そして少しぶるぶる震えながら硬めを瞑って狙いを定めて引き金に指を掛ける。

最近この光景をよく見る気がするのだが……。デジャヴ？

「お、おい？」

「大丈夫。さつき安全なの確認したから」

自身有り気に囁いた。もう試射したのだろうか。それなら安心だがどうも恐怖しか……。

パンッ！

実銃の様な銃声が体育館に響いて静まり返る。しかし痛くもなんともない。弾が飛んできたのも確認できたのに、少し強い風がピンポイントに当たったような、そんな感じしかなかった。

「うおおおおお！ 馬鹿か！ 撃つとき言えよ！ ビックリするだろが！」

『ご覧の通り、一応弾は入ってますし、しっかり飛びます。でも特殊な弾なので全然無害です。なので家に発砲しても何をしてても安心です』

聞けよオイ。

静まり返っていた体育館が再び騒がしくなる……。

『でもサバイバルゲームってくらいなので他にも武器は沢山あります。それは、四季の島のありとあらゆる場所に隠しています。因みに武器は開始と同時に置くのでフライングは不可能です。頑張つて探してみてください』

「なんだよその運任せな……」

「知らないわよ王妃様が決めたんだし……！」

叶はマイクを手で隠して睨んで言った。

まあこいつも参加するわけだし、知ってたら色々有利だわな。

『体力やダメージ、その他は明日詳しく説明します。時間は午前9時までに学校集合。戦争開始は10時になります。それでは附属2年A組、美術科1年A組、1年情報科B組の皆さんは明日に備えてゆつくりお休みください』

叶は一礼してベレッタを王妃様に手渡し、俺の手を引いてステージを降り、少し離れたところに座った。

「お前とは敵同士か……。俺狙うなよ」

胡坐をかきながら言うと、叶はにやつと笑って、

「やるからには本気でするわよ。兄貴だつて見つけたら全力で追いかけるからね！」

どうやら手抜きはしないらしい。でも楽しそうだし、よしとしよう。その代わり俺も見つけたらフルバーストしてやる。

ステージを見ると再び王妃様がマイクの前に立つ。

『叶ちゃん説明ありがとうね。それでは、優勝した組には総額約200万円の賞品があるので、頑張ってくださいね。どうか私を楽しませてください』

総額200万、それが食券とわかってたら喜ばうにも喜べない。

何も知らないで奇声をあげて喜んでいる奴は幸せだ。

そつえば、湊のずっと抱えている問題……このイベントを使っ

て何とかならないものか？

魔法使い（9）

帰り道、あのまま体育館で解散し、まだ昼食も食べないまま湊を連れふたりで四季のが丘まで歩いてきた。

「いい天気だなあ」

「……」

「こう天気いい日はだな、秘密も何もかも曝け出して、」

「用無いなら私帰るよ」？ …… まあ、帰してくれないんだろっけど？」

湊は大きく溜息を吐いて陸の端にあるベンチに座る。俺も隣に座り肩より低い位置にある湊の頭をぼんぼんと叩いた。

「まああれだな……。お前も俺がなんでここに誘ったか分かってるんだろ？ それを承知で付いて来たんじゃないのか？」

「まあね。でもね、おにいつてしつこいし黙ってたら鬱陶しいし……考えてあげてもいいよ」

色々侮辱された気がするが気にしない。そんな事より話してくれるかもしれない。

「考えたんだが、明日もし俺が最後まで生き延びてクラス優勝させたら過去の事を話して欲しい」

簡単なようかもしれないがそうでもない。何も運動もしてないから体力は無いしサバイバルゲームなんてやった事も無い。それに学園では色々敵が多いから真っ先に狙ってくる輩も多々いるだろう。

難易度は相当高いと思う。

「蓮華っち達の力を借りるのは無しだよ？ それに、おにいが負けたら私にメリットはあるの？」

「おう。もちろんあいつら人外の力を借りるつもりは無い。俺が負けたら二度とその事については触れないのと、なんでも1つ言う事聞いてやる。なんでもだ」

胸を叩いて誓う。男に二言は多分無い。

「そう……じゃあ、そのなんでもの約束、今のうち言ってプレッシャー掛けようかな？」

クスツと笑みを浮かべて立ち上がる。

「……ベッドの下のエロ本全部燃やすねっ！」

「オイ！ それだけは！ それだけはやめて！」

「あははっ。おにいが頑張れば阻止できるじゃん？ ま、明日頑張ろうね」

そういい残して、湊は跳ねるようにツインテールを揺らしながら四季のが丘を全力で下っていった。

でも、エロ本を燃やすか……あいつは本当にそれが言いたかったのだろうか？ もっと何か言いたげな顔をしていたのだが、気のせいだろうか？

「……さて、俺も明日に備えるか。生き残る作戦でも考えよう」

魔法使い（10）

そして、その日がやってくる。

天気は相変わらずの晴天。もうすぐ7月だから結構な気温だ。そんな日照りの中、俺のクラス、情報技術科B組は緑のゼッケンを付けて戦争開始を今か今かと待っていた。

体力の事を含め、ルールをおさらいしておこうか。

四季の島全土を舞台に、特殊な弾を使ったサバイバルゲーム。両敵組を全滅させる事で勝利。初期武器はベレッタとそのマガジンを5本所持。その他武器や弾薬を含むアイテムはその辺に隠してる。体力については、被弾してダメージを受ける事でゼッケンの色が白く変わっていくらしい。真っ白になったら戦闘不能。発砲が出来なくなるらしい。

そのダメージは味方の流れ弾や誤射でも食らうので要注意。

因みに銃弾が当たる場所によってダメージも変わる。足と腕はダメージが低く、胴が普通。頭が大ダメージ。即戦闘不能の可能性もある。

そして、優勝すれば食券が手に入る。だが俺はそんな事はどうでもいい。今回は生存を優先して湊の抱えている問題を吐かせる……。「それにしても、この武器やゼッケンの仕組みはどうなっているんだろう」

村田がベレッタを舐めるようにじまじま見る。

「どうせなんでもアリな魔界クオリティだ。おそらく、ゼッケンと銃弾とかに何かしら魔力があって、銃弾に当たると魔力が反応してゼッケンの色が落ちるんじゃないか。すべて推測だが」

「当たってる……」

琴美がボソツと呟く。

俺の勘は割りと凄いのかもしれない。

「ヒロキ……一緒に動く……？」

「お前が居たら心強いけど、今回ばかりはちょっと訳アリで単独行動させてもらう。まあその代わり、村田を引き連れていくつもりだが」

せつかくのお誘いだ、今回は条件があるから、居たら役に立つかもしれない村田を同行させる。蓮華達の力は借りてないから問題ないはずだ。

チラッと湊の方を見ると、心を読んだのか人差し指と親指でOKサインを出した。どうやら村田は別にいいらしい。

「ま、僕も川越と一緒に動くつもりだったからいいよ。お前の背中が僕が守ってあげるよ」

「おお、立派な盾だな」

「何でだよ！ ノリでもなんでも背中中は任せたとか何かしら言えよ！」

「冗談だよ。任せた」

いざとなれば村田を犠牲にしても生き残らねばならない。それほど負けない戦いなのだ。

「あんた今凄い悪役面だったわよ……。村田君を完全に盾としか思っていないわね」

「う、うるさい！ 恐らく大事な戦友だ」

腕時計を確認するともうすぐ10時を過ぎようとしていた。

数分まで穏やかだった空気は殺伐とした空気になってきた。総額200万円の賞品が掛かってるからだろうか、楽しそうな空気を感じられない……。

「それで川越。何か策はあるのかい？」

ベレッタを片手に、村田がこそつと訊いて来た。

一応、素人ながら色々考えては来た。サバイバルやそういうのは初めてなのだが、やはり連携と戦略が大事だと思う。

「とりあえず最初はアイテム探しながら海まで逃げるつもりだ。5分以上掛かると思うけど、みんなが行きそうにないところに行かないと。まずは敵同士で潰し合わせて弱ったところを狙う……それく

らいなんだが」

「もし敵の大群とかに出くわしたら？」

「ばれたら建物を利用して逃げるしばれてないなら隠れる。とにかく単体でない限り攻撃には出ないつもりだ」

「なるほど。まあ僕は川越の指示通りに動くよ。正直、エアガンすら撃った事ないんだけどね」

それでも居ないよりはマシだ。微妙に期待してるぞ、村田。

『10時になりました』。第1回四季の島サバイバルゲーム開始です！』

朝礼台に立つ王妃様が空砲を鳴らして戦争開始を告げた。空砲と共に参加生徒達は全力で校門へ走り出す。

今から5分間は攻撃できない。だからみんな、遠くへ逃げるか、誰よりも早くアイテムを取るかでひたすらあらゆる方向に走り出した。

俺と村田は無駄な体力の消費を避けるために小走りで西にある少し遠い海水浴場である海の方へ向かう。周りを見ると、海へはそんなに人が来ていないみたいだ。

それでもやつぱり10人くらい居るわけで。このまま誰も消えなかったら5分後に撃ち合いになる。皆がそう考えたのか、交差点でどんどん遠回りして人が少なくなっていた。

俺はそのまま、交差点を尻目に真っ直ぐ走る。最短ルートで行くのがいいに決まっている。

そうして走る事5分、まだ海には着いていないが、ベレッタのセーフティが小さく音を立てて解除される。どうやら時限性に解除されるようになっていたようだ。そしてそれが戦いの始まりの合図である。

「川越。ここからは歩こう。足音で気付かれる事もある。クリアリングもじっくりして慎重に行こう」

村田がベレッタを顔の横に身構えて囁く。こいつもやけに詳しい……こいつの事だろうから色々調べてきたんだろう。

「あ、ああ……。了解だが、そのクリアリングって何だ。歯磨きかなんかか？」

「敵が隠れてそんな場所をしつかり確認してから進むんだよ。むやみに走って海に着くまでにダメージもらったら困るだろう？」

なんだか急に頼もしくなった。

とにかく、村田の言うとおり足音を極力立てずにそのクリアリングというものもしっかりして、

どこからともなくヘリコプターの音が聞こえる。それも相当近い。上を見上げると、そこには……

『ヒロキ様頑張ってる！』

ヘリに乗った王妃様がマイクを片手に手を振っていた。

その横を見ると、カメラを持ったトラックの運転手、イフリータ。何これ？　どういう状況だ？

『ちなみに色々なところを回って中継してるので、戦闘不能になっても楽しめますよー！』

えらく金の掛かっているイベントだ。そのヘリや中継カメラはどつした。そんなイベントに金使う余裕あるなら少しは蓮華達に仕送りとかしてやれ！　馬鹿か！

『それでは実況しますので頑張ってくださいね』

王妃様とイフリータを乗せたヘリは暴風と共に去っていった。

……もしかしてこれだけを伝える為に来たのだろうか？

「いかにいかに。集中しないと」

再び慎重に進み、周りに注意を払いながら、交差点でクリアリングしていると、近くの電柱の裏にわざとらしく置いてある宝箱を発見する……。

「村田。アイテムあったかもしれんぞ」

宝箱のへ小走りで向かい、宝箱を開ける。そこにはハンドガンより少し大きい銃と双眼鏡。そしてなにやら紙がある。

紙を拾い上げると、銃の名称、そして説明が書いてある。

M P 7 A 1

サブマシンガン 重量は2キロ以下と軽量で

中々の威力。予備マガジン2本付

折りたたみ双眼鏡 よく見えます

「双眼鏡の説明はいらんだろう……」

苦笑を浮かべながら、両方手に取りM P 7を持った。説明通り軽量だ。

「アイテムはこんな風に置いてるのか。隠してるって程でもないね」
「そのお陰でさっそく武器が手に入った。ほら、双眼鏡やるよ」

村田に折りたたみ双眼鏡を投げ渡す。村田はそれを受け取ると、双眼鏡を使用してぐるっと1周回って双眼鏡をポケットに仕舞った。

「しかし、このサブマシンガンを手に入れたらなんでも出来そうな気がしてきた！ 5人くらい来られても大丈夫じゃないか？」

「馬鹿だな川越。数の暴力には敵わないよ。それに、武器がその辺にあるならもう僕達のほかにいっぱい持つてる人らいるだろうし」

「そうか……調子に乗ったらいかな。どうしても今回は負けられねえ。慎重に行かないとな」

すぐ元の道に戻り、またゆっくり海を目指して歩き出した。

「なんか今回はえらく熱心だな。理由聞いてもいいかい？」

村田が茶化すように尋ねてきた。別に言う必要なんてない。でも、気がどうかしていたのか答えてしまった。

「湊がな、とあることをずっとひとりで抱え込んで教えてくれない。あいつには色々世話になってもらったから、少しでも楽になってもらおうと思っただけ……」

「英さんがねえ。信じられないな、いつもあれだけ笑顔なのに」

あいつは顔で笑って心で泣くタイプなんだ。幼馴染の俺がよく分かっているつもりだ。

「それで昨日交渉した。俺が最後まで生き残ったらその話を聞かせ

てもらうつてな」

クリアリングしてまた交差点を過ぎる。もう少しで海に着く。

「おせっかいだなあ、川越は。本人が言いたくない事を無理に訊こうとするかい普通？」

「うるさい。悪いかよ。生まれ持ったの性格なんて中々直らねえんだよ」

「でも、そういう所も含めて、英さんはお前の事が好きなんだろうな」

一瞬鼓動が高鳴った。俺が最近知った事を何でこいつが知ってるんだ？ そんな表情を浮かべ下唇を噛みながら村田のほうを見ると、「とつくにクラスの全員知ってると思うよ。英さんお前にべったりじゃないか？」

「……そうだったのか」

確かにべったりだったけど、そんなべったりしてるだなんて意識した事なかった。幼馴染だからかね……慣れっつてのは怖い。

それでもあいつは、叶と喧嘩している最中にどさくさに紛れて告白してきたけど、その割りには蓮華や綾那達が周りに居るのに嫉妬もしない。一緒に住んでる事にも何も言わなかった。

……よくわからん。

若干潮の香りがしてきた。もう海は目の前だ。

誰も来ないって言ったのは誰だったか……あ、俺だ。
海水浴場は既に激戦だった。

お互い、大きく積み上げられた砂浜の砂で身を隠しては飛び出して敵側に発砲の繰り返しをしている。

「おい、どうするんだ川越！」

「逃げようにも逃げれないし……俺達の来た道も美術科の奴らが居るし……。緑のゼッケン居ないから俺達に味方はいねえ」

この歳になつて溝の中に入って身を潜めるだなんて思いもしなかった。

「くそ、移動すればれるけど逃げ道がない。ここにずっと居てもばれるだろうし、本当に動きようがないなオイ」

必死で作戦を練るが何も浮かばない。MP7だけじゃ激戦の中突っ込むのはどうか。全滅できても体力は大きく削られるだろう。どうしたものか。

「附属生徒が6人、美術科が7人……。全員武器はバレッタ以外持っていないみたいだね」

村田が双眼鏡で敵組の装備を確認する。

「大分多いな。2人だけ……。それに村田はバレッタしかないからな」
「……ん？」

村田が双眼鏡を目に当てたまま少し顔を前に出した。

「なるほど、敵が何で戦つてるか分かったかもしれない」

そんなの敵を見つけたら戦闘に入るものじゃないのだろうか？

そう考えていると村田は俺に双眼鏡を手渡し、砂浜の方を指差す。

とりあえず、双眼鏡で指の指す先を見ると、そこには宝箱が1つ、若干附属生側にぼつんと置いてあった。

「なるほど。お互いにあれを狙つてるわけだな」

「そう。それでいい事思いついた。川越の腕と僕の運の良さがあるけどね」

「……まあ聞いてやろう」

今回のイベントに関してやけに頼りがいがある。不本意ながら作戦を聞いてやることにした。

「まず川越が附属組の裏にこっそり回る。マガジンが1本尽きる前

に確実に相手の頭に弾を入れて、全滅させる。その間に僕が宝箱の中身を後退しつつ持つてくるから、後は全力で逃げる」

「大分俺が重要な……でも、それで逃げれるならいいか」

「勉強も運動も微妙な川越だけど、いざというときにはやってくれると信じてるよ。じゃあ、作戦通りに」

お互いに頷き、俺だけ溝から飛び出す。そして背を猫背にしながら走り、少し離れた所から砂浜に入り、附属生の裏を取った。

村田も少し離れた所から砂浜に入り、大回りをしながら宝箱へ近付く。

「うわ！ 川越の兄だ！」

「やつべ、くそ！」

砂浜だからか、足音がする上に思い通りに走れない。そしてその結果ばれた。少し距離は開いているが、相手はバレッタ、こっちはサブマシンガンだ。何とかなる！

その場にしゃがみ、引き金を引いて複数人の頭を狙う。敵のゼッケンを見る見る白くなっていき、一気に5人のゼッケンが真っ白になった。そして、弾が切れる。

「うわあああつ！」

残った附属生が全力で宝箱の方へ逃げ出した。

「待てオイッ！」

慌ててバレッタを取り出すが、距離がある所為か威力が低く仕留め切れない。

宝箱の付近には村田がいる。俺が仕留めきれないと最悪村田が

「おうっ……！」

残った1人を追いかけようとした瞬間、逃げた生徒の頭に銃弾が1発。そしてゼッケンは真っ白に染まった。その生徒の前を見ると、宝箱の前で大きな銃を構える村田の姿。

「グッジョブ川越！ 逃げるぞ！」

「お、おう！」

附属生徒達を倒し、敵のベレッタの弾幕を潜り抜け、俺達は海を後にした。

魔法使い（11）

早くも中盤、サバイバルゲーム。サブマシンガンと村田のスナイパーライフルを装備して、隠れるところの多い住宅街をメインに徘徊してちよいちよい同じ組の連中と合流しては、倒した数を聞く。そして分かっている限り、もう20人は倒しているようだ。

大規模とはいえ、30数人のクラスが3つだけだと、たったの約90人。人が減るのはあつという間だった。

「この調子だと、僕達の勝利は目の前って感じだね。さすが情報技術科。動けなくても頭は使えるらしい」

「俺はどっちかというの特攻したい感じなんだけど……。ぶっちゃけ、情報技術科なんて入って後悔してる。普通科でよかった」

「まあ僕もどっちでもよかったんだけどね。川越と一緒にだと退屈しないんだ。だから僕は川越の居るところを選んだ」

ぞわつと鳥肌が立った。

「お前……俺はいたってノーマルだからな？ そっち系じゃないかなー！」

「ぼ、僕だつてそうだよ！ 早とちりするな！ 早歩きで距離開けないで ストップ！」

村田が真剣な顔をして溝に飛び込んだ。

「なんでまたそんな所に……」

俺もいやいや中に入り身を隠す。そして周りを見てみると、数十メートルくらい離れたところに数人敵の姿が確認できた。

「美術科か？ お前のスナイパーライフルで全員倒せないのか？」
そう訊くと村田は首を1回ひねって答えた。

「出来なくもないけど……あれは音が大きいからばれるかも知れない。それに、持ってる武器がベレッタ以外とは限らないし……ん？ あれ生徒会長とその他面々じゃないか」

「生徒会長といえば、創立者祭の時に湊に弱み握られたか惚れたか

知らんが、やたら湊見て焦ってたな」

「ほう。それは興味あるなあ……英さんに直接聞くか探るかしない
と、僕も学園で好きに動けない」

まあ別に動かなくても問題はないけどな。

「……ん！？　おい、川越あの中に英さんが居る……」

「何！？」

村田から双眼鏡を奪うように取り、敵陣を見る。そこにはまずがり
勉メガネ。創立者祭で見た生徒会の連中数名、その中に1人、ゼ
ツケンの色が違うちびっ子ポニーテール……。

「なんでだよオイ……捕虜か？」

「どうか。川越に他のクラスに投降してでも勝たせないつもりか
もよ」

「くそっ……！」

思いたくは無いが、恐らくそれが正解だ。どうしても教えたくな
いか。

「さて、どうしたものか。このまま溝から出て逃げてもいいけど、
相手が遠距離武器を持っていたら確実に僕達はやられる。だからと
いってこのまま隠れてても絶対にばれる」

「逃げるのに決まってるだろ。隠れてるよりよっぽど生き残れる可
能性がある！」

「だと思っただよ！」

2人いつせいに溝から飛び出した。すると、「いたぞ！」「撃て
！」等の声が後ろから聞こえて銃声が

響き、魔力で出来た弾丸が俺達を襲う。

「くっ！」

俺も村田もゼツケンの色がじわりじわりと減っていくのが分かる。
しかし奴らも流石に走っては撃つて来れないようだ。体力は3分
の1程度削られたが、すぐに逃げ切る事は出来た。

湊が敵に回った。生存出来る望みが一気に無くなった……。人外
相手にどう戦う？　元は普通の人間だとしても、魔女の力で恐らく

蓮華達みたく超人的な能力があるんだろう。

それに生徒会の連中、頭がキレル奴もいるだろうし数も負けている。

「蓮華ちゃん達と合流しよう、川越」

「いいや、それは出来ない。俺は蓮華達の力は借りないって約束したんだ……。でもこのままじゃ勝てない……！」

もし負けたら二度と訊かないと約束した。負ける訳にはいかにないのに……。方法が無い。

「……いや、数で負けてるなら数でいけばいいじゃないか。その辺に居る味方を引き集めて一斉射撃。蓮華ちゃん達の力は借りてないんだし、なんとかなるんじゃないか？」

「いいかもしれないけども……四季の島全土に居る数十人の人間をどうやって集めるんだよ！」

どうしようも無い状況について村田に当たってしまふ。だが、村田は嫌な顔ひとつせず答えた。

「落ち着け。こんな事もあるつかと、四季のが丘でスナイパーライフルを3発打てば集合しろと、すれ違った奴ら全員に言っておいた」

村田はニツと笑みを浮かべると、遠くに見える四季のが丘を親指で指した。

「お、おお……すまん、その」

「気にするな。川越の熱くなってるどころ久々に見て僕も勝ちたくなっただけだよ」

今まで村田を変な奴とか悪友とか思ってたけどそうでもない。すげえいい奴じゃねえか。

「ま、一番は、生き残って女子に褒められたいだけなんだけどな」
そうでもなかった。

四季のが丘に着いたと同時に、村田が上空に3回発砲した。思いのほか銃声は響いたそうで、10分ほどで男女混合、総勢10名の部隊が出来た。

「集まってもらったのは他でもないっ！　ここで生徒会連中を潰して一気に戦争を終わらせる！」

なんだろう、村田が熱い。

「あの憎き生徒会を！　僕の手帳を奪った生徒会を今潰す時が来たのだ！」

「……………」

そういえばこの前スリーサイズリストがどうか言ってたな。つか誰も共感してねえ。俺も生徒会が好きではないが憎んでるのは村田くらいだ。

「さあ行くぞ皆の者！　食券を我が手に！」

「おおおおッ！」

部隊の全員が手を上げて叫んだ。どうやら相当食券が欲しいみたいだ。まあ、俺も食費削減のために欲しいのだが。メインではない。そんなこんなで、俺と村田が最前線に、四季のが丘を降り始めるとりあえず、俺達が四季のが丘に向かう時に歩いて来た道を引き返す事に。恐らくそれが一番出会いやすいだろうと考え。

流石にまだその辺をうろちろしている訳ないだろう。そう思っていたのだが……ゲームのラスボスの如くさつきと全く同じ場所、住宅街の中で生徒会連中と湊は突っ立っていた。

「みんな、英さんは敵だ！　川越と僕は裏を取る！」

俺と村田以外のみんなは真正面から撃ちあいに、俺と村田は気付かれずに曲がり角で曲がり、相手の裏を取って挟み撃ちに。

「おい川越、相手は交差点だから4方向に逃げれる。もし英さんがひとりで逃げたら全力で追いかけるんだ」

「おう！」

50メートル程走り、相手の後ろを取ることが出来た。村田は後

方で銃を構える。俺は突っ込む。

「もらったっ！」

「後ろからっ!?!」

敵にばれるも、時すでに遅し。前後両方からの攻撃に生徒会連中はほぼ壊滅。残り少ない体力で戦う生徒会連中の中、体力が半分以上残っている湊がひとり、味方を置いて逃げ出した。

「後は俺達でも大丈夫! 行け川越！」

村田の声を背に、湊の逃げていった方向に走り、湊の後を追いかけた。

魔法使い（12）

情けない事に、湊を追いかけても全く追いつけず。やっぱり人間と人外の差か。

夢中になつて走っていたらまた海まで走っていた。そこで湊の足が止まる……。

「しつこいなあもう……しつこい男は嫌われるよ？」

「う……うるせえ。それが川越ヒロキだ」

息を切らしながら、湊の近くまで寄る。

「どうしてそこまでして教えたくないんだよ。蓮華や綾那たちが居るんだ。いまさらどんな事言われても驚きなんかしねえのに」

「その事も含めて、生き残つて訊けばよかったのに……わざわざなんでやられるのわかつて追いかけて来たの？」

「どちらにしろ、終わりの方になつたら倒しに来るだろ」

「あははっ、まあね」

「それにな……俺は負けん！」

M P 7の銃口を湊に向けた。

「その自信はどこから来るのかなあ」

「気持ちで負けてたら終わりだ。それに、お前の対策も考えてきたんでな」

「へえ」。でもそれ、通用するかな？」

湊はにやりと冷たい笑みを浮かべてベレッタを持った。

「じゃ、行くよ！」

「！？」

そして大きく飛び上がる。

いまさら驚かないなんて言っておきながら今相当驚いてる。しかし、過去に同じ過ちをした自分を思い出す。飛び上がったら空中では身動きが取れない。軌道が見える以上、ただの的だ！

引き金を引いて湊に向けて発砲する。すると、くると空中でも

う1度ジャンプ。華麗に弾を避けて俺の目の前に着地し、目の前でベレッタでMP7を撃った。

「うわっ!？」

俺の持ってた武器は回転しながら後ろに転がっていった。

「お、おい……重力無視すんなよ」

「ふふっ。まあ魔女だからね。魔法で常識なんて容易く覆せるよ」
「けっ!」

ベレッタを構えながら後ろ向きでMP7を取りに向かう。しかし、湊はそれを見てまた冷たく笑みを浮かべる。

「取らせないよ」

銃弾が顔の横を通りMP7に当たる。そしてまた転がり、距離が開く……。

「魔力が少しでもある物質になら当たるみたいだから、取りに行こうとしても無駄だよ」

「そうかい。ならこっちもベレッタで行くまでだ!」

両手でベレッタを構えて、考えた作戦に出る。

(後退しながら撃つ!)

心の中でそう叫び、俺は前に走った。

相手が心を読むなら心と逆の事をすればなんとかなるんじゃないかという戦法だ。この場合だと、湊が前に出てくれればいいのだが……湊はまったく動こうとしない。

あ、あれ？

「その作戦は私も考えてたよ。そんな幼稚な手に私は引つかからない!」

「うおわっ!」

ブレーキしてももう遅い。湊は引き金を引き、その銃弾は俺の頭に直撃した。

「いてて……くそっ!」

ゼッケンの色が半分以下にまで落ちた。ベレッタでもあんな近距離で撃たれたらこんなダメージもらうのか……迂闊に近寄れん。

耐えて後2発が限界か。このままだと本当に負けてしまう……！

「弱気になってきてない？」

「う、うるさい！ 俺は勝つ！」

でもどうすればいい？ 考えてきた作戦も終わってしまった。ていうか俺なんぞ対策が1つだけしか浮かばなかったんだよ！ いまさら遅いけどなんでもう少し考えてこなかった！？ 馬鹿か！

とにかくベレッタを闇雲に撃った。避けられても下手すりゃ当たる。そんな考えで撃ち続けていたら最後のマガジンの弾も撃ち切ってしまった。

「ふう……。そろそろ終わらせたいと思うけど、最後に確認ね……」

これに負けたら本当に私が魔女になった理由を聞かない。いいね？」

「俺が負けたらな！」

「本当に頑固だね。でも、それだけじゃ、なーんにも出来ないんだよ。力が全てなんだから」

湊が1歩、また1歩と歩いて寄って来る。

まったくその通りだ。いくら俺が強情に負けないと言い張っても何も出来ない。1発も当てる事も出来なかった。幼馴染が苦しめるのに、たったの悩み1つ聞いてやることもできないのか？

「私は全然苦しんでないよ。おにいが元気で笑ってくれたら……それだけ私は幸せだしね。うん、悩みなんて吹っ飛んじゃうよ」

湊は悲しそうに笑みを浮かべて俺の前に立った。

「……そうかい。じゃあさっさと終わらせてくれ……」

所詮、俺の力なんてこんなものか。身体能力でもこんなちびっ子のに負けて……。しかし、なんでこんなに必死になってんだ？ これで負けたらもう色々訊けなくなるし、エロ本は全部燃やされるし……。

なんなんだろうな、どうも説明のしようがない気持ちだ。

でも、もしも湊の悩みを訊けないと思うとなんだか……凄く悲しくなってきた。

でもなんでこんなにも悲しい？

「……湊」

「お、おにい？」

何故か分からない。分からないけど、俺は湊を抱き締めた。

「ごめん、やっぱり頼む。勝たせてくれ」

「……ごめんだけど、」

「頼む！ お前のことをもつと知りたい！ お前が悩んでるなら力になりたい！ お前が好きだ！ その……めちやくちな事言ってるのはわかってるけど……多分、俺はお前が好きなんだ」

湊が目をパツチり開いて驚いた顔をする。

「このイベントが始まってからもう薄々気付いてたのかもしれない。なんか変に一生懸命になって……気が付いたらずっとお前の事ばかり考えてて……お前が悲しそうに笑ってるところ見てると胸が痛くて……とにかく！ 俺はお前が好きなんだ！ 頼む！ 勝たせてくれ！」

「ずるいよそんなの……もしここで私が嫌だっていったら告白まで断ってるみたい……」

湊がもじもじしながら迷い始めた。流石に告白は予想外だったのだろうか。

でも俺の言葉に偽りは無い。俺は湊が好きだ。魔女になった理由も含めて。本当にもっと湊の事が知りたい。だから意地でも勝つてやる！

俺は湊が悩んでいる隙にこっそり後ろに下がり、ある程度下がった後に走り、後ろに飛ばされたMP7を拾った。

そして、

「もらったあ！」

「あわわっ！」

湊の残り体力を削りきった。

「ひ、卑怯だよおにい！」

「はっはっはっ！ どうとでも言え。勝つ為なら手段は選ばん。それに、俺は嘘なんか言ってるない」

「そ、それは心読んでたから分かるけど……ズルイ！ 卑怯！ 変態！」

照れてるのか怒ってるのか顔を赤くして叩いてきた。

「どうとでも家といったけどなんで今変態呼ばわりした？ オイ、今何もやましいことなんて考えて」

ヒュー
パンツ。

上空で花火の音が複数聞こえた。そして学園方面にヘリが1機。

『四季の島サバイバルゲーム、午後0時丁度に終了！ あっさり勝負が決まりましたけど、優勝は情報科B組！』

王妃様の声がここまで響いてきた。どうやら、最後まで生存も出来た。完全に俺の勝ちだ。

「んにゅう……まさか本当に負けるだなんて……」

湊は大きく溜息を吐きながらがつくり肩を落とした。

「約束は約束だからな。……いつでもいいから、気持ちの整理が出来てからでもいいから教えてくれ。とりあえず、帰るぞ」

「うん……でもその前に1つ……」

俺のゼッケンを引っ張りながらつぶやいた。

「しゃがんでしゃがんで！」

「なんだよもう　っ!？」

しゃがんだ瞬間、頭をぎゅっと抱き締められ、唇に柔らかくて暖かい感触……目を開けると、湊が唇を重ねていた。

そして数秒後に離れる……。

「な、なにしゃがるんだオイ……」

「あははっ。おにいも私もファーストキス！ 顔真っ赤だよ？」

湊はお腹を抱えてケラツケラ笑いながら学校方面へ走っていった。
「待てよオイ！ 告白したけどムードってのがあろうが！」

今までなら忌々しい、なんて思っていただろうけど、今は心の底から愛おしいと思えた。

そして俺の戦いは幕を閉じた。

魔法使い（13）

軽く急いで、湊と一緒に学園に到着。肯定まで走ると何故だろう、周りの空気が凄く居心地の悪い、生暖かい空気になっていた。

「な、なんだよオイ……」

思わず1歩後退してしまった。すると、しかめっ面で蓮華が前に出る。

「ゼーんぶ生中継で放送されてたわよ。湊が好きだー、もっと知りたいーってさ」

「なんだと……！？ 王妃様その辺に居なかったじゃねえか。ヘリの音もまったく聞こえなかったし……いつ撮影してたんだよ」

チラツと朝礼台を見ると、カメラを担いで黒い翼を羽ばたかせる王妃様の姿が。

なるほど、そういうわけか。そりゃ気付かないだろうが恥ずかしいものを撮るな。明らかに悪意があるからな！

「まあまあ……そういうわけだ。嫉妬すんなよ」

「だつ、誰が嫉妬なんてするのよ！ 私はあくまで目的を遂行するためにあんたと居るだけで別に恋愛とかそんな……」

空気が更に重くなった。

「ていうか、お前らはどうだったんだ？ 何人倒した？」

まともに話してくれそうな琴美に尋ねる。

「始まってすぐにみんなと校舎の裏に行つて……蓮華が凄い武器拾つて試射したら……銃口が逆でみんな終わった……」

「……早いなオイ」

「あ、あれはドジっただけよ！ それに人間界の武器なんて悪魔の私が使えないし仕方ないでしょっ！？」

恥ずかしそうに琴美の腕を持って揺らす。人外チームはどうやらこのイベントでは何の活躍もしていないみたいだ。

「音羽なんにもしてないー！」

「ま、まあ次の何かしらのイベントで頑張れ。体育祭とか色々あるからさ」

少し頬を膨らませて不機嫌な音羽の頭を撫でて宥める。まあ自分の意思じゃなく速攻で終了したら怒るわな……蓮華を恨め。

「川越、おつかれさんっ！」

横から村田が手を上げてこっちへ来た。

「おう、村田も生き残ったのか。色々ありがとうな」

その手にハイタッチして答えると、村田は親指を立てて笑った。

「まさか、こんな形になるうなんてね。僕も流石に予想外だったよ」
「俺も予想外だったさ。でもまあ、やっぱり一番長い付き合いだからな……中々気付けなかったのかもしれない」

「……まあ傷ついてる者も少々」

ふと、蓮華達の方角を見る。確かにそうなのかもしれない。綾那は特にだ。一応あいつの気持ちは知っていたつもりだが……。

「……ま、そのうち元気も取り戻すだろあいつなら」

「罪だねえ川越。これからはおせっかいも優しさも程ほどにしとかないとね」

うるさい。と言いたい所だが……ごもつともだ。俺が色々綾那におせっかいな事したから気に入られて、勘違いさせていたのかもしれない。これからは控えめにしていきたいが……こんなもの直るのだろうか？

「兄貴……」

附属生から叶が来た。しかし、叶も何故か若干暗めだ。

「お、おう。残念ながら俺達が勝ったぞ」

「中継見てたからわかるよそんなこと……。おめでと、湊さんも」
苦笑を浮かべながらも、祝福してくれた。でも何故だろう。ちっとも嬉しくない。むしろ胸が締め付けられるように痛む。なんでこんなにみんなの悲しい顔を見ないといけない？

「お、おにい……」

何も言っな。俺はお前のことが本当に好きで告白したんだ。後悔

なんかしてない。

心の中で言うと、湊は何かを言いかけていたが、言うのをやめて少し俯いた。

「そ、それよりだ！ 整理してからでいいって言ったけど早めに頼むからな」

「んにゅう……やっぱり？」

「当たり前だ」

頭に軽くチョップをしてみると、少し苦笑を浮かべて俺の手を握る。

「表彰式抜け出して、私の家行こっか？」

「お、おう」

湊に引っ張られ、表彰式をこっそり抜け出して、早くも学園を後にした。

学園を歩いて十数分。凄く久々に湊の家に来た。

「久しぶりだなあ。小さい頃はよく遊びに来てたけど、なんだか急

に来なくなつたんだよな」

家の門の前で懐かしさに浸る。しかし、幼馴染は別にそんな事はどうでもいいようだ。

「ささ、いいから上がって上がって！」

グイグイ手を引っ張られながら、湊の家に入った。

「お邪魔しまーす」

もう10年近く来ていなかったからか、何もかもが懐かしい。

「私の部屋覚えてる？ 2階の廊下真っ直ぐ行った所」

「もちろん。あっちだろ」

親指を立てて湊の部屋を指差した。

湊はニコツと笑みを浮かべて頷いて言った。

「それじゃ、お茶とお菓子とか持つてくるから先行つててっ」

パタパタと足音を立ててリビングへ走っていった。その光景もなんだか懐かしい。

俺は2階へ向かい、湊の部屋にお邪魔する。

そういえば、小学生以来女の子の家に来るのは初めてだぞ……。

叶の部屋は除くとして……そう思ったらなんか緊張してきた。

クッションの上に正座して湊が来るのを今か今かと待つ……。

「ん……？」

ちらちら周りを見てみると、机の上にある写真立が目に入る。

「これまた懐かしい。まだ立ててあったのか」

立ち上がって、昔からずっと立ててある写真立を持って眺める。

湊の両親、その間に幼い頃の……いや、今とそんなに変わっていないか。

そういえば、湊の両親はいつも家の中で仕事だったはずだ。小さい頃、正直親よりお世話になってたからわかる。まあ今は居ないみたいだが……。

「なんか久し振りだし、挨拶くらいしたいな」

「それは無理だよ」

「おわっ！？ びっくりした！」

いきなりの登場に思わず首をすくめてしまった。

「てか、無理ってどういうことだ？」

「……もう何年も前に亡くなったよ。交通事故でね」

「えっ！？ 嘘だろオイ……」

「ままつ、飲んで飲んで」

コップ一杯に注がれた麦茶を差し出してきた。

「……おう」

喉が渴いていたため、一気に飲み干した。

「おかわり？」

「いや、いいよ別に。それより、早速本題に入りたいんだけどな」

「あははっ。せっかちだねえおにい」

湊は麦茶をゆっくり飲み干してから少し黙り込む……が、中々口を開かない。

「やつぱり、整理してからでいいんじゃないか？ 話し辛いならまたの機会でもいいからさ」

今回は諦めようと思ったとき、やっと口が開いた。

「うっん。どうせそのうち話すことだしね、今全部教えてあげるよ」

「そうか……頼む」

苦笑を浮かべながらコクンと1回頷き、なにやらベッドの中に潜り込んだ。そして誘つかのように手招きしてベッドをばんぼんと叩いた。

「オイ、なんでベッド？」

「この方法でいいのっ！ 早く早くっ」

若干嬉しいながらも、それを隠すために溜息を吐いて布団の中にお邪魔した。

しかしシングルベッドだから若干狭い……。

「ぎゅーっ」

「お、おお？」

察してくれたのか、俺を抱きしめて少しでも楽な体勢にもっていいこうしてくれる。

照れくさいが、俺も便乗して軽く抱きしめた。

「このまま一緒に寝たら大丈夫……おにいは全部思い出すから」
湊の暖かい温もりを抱いて、俺の意識はまどろみの中へ溶けていった。

魔法使い（14）

頭の中に映像が流れ始めた。

寝ているのにもかかわらず、なるほど、これは夢なんだなと悠長なことを考える。

「ヒロ君待つてー」

夢の中の視点が自転車を追っている。

「待つてよー！」

少女の必死な声で自転車が止まる。視点の主が自転車に追いつくと、自転車に乗っていた子が凄く嫌そうな顔を向ける。

「……なんてたまたま会った湊のペースに合わせないといけないんだよ」

この憎たらしいほどめんどくさそうな顔をしてるガキは誰だ？

ヒロ君？ まさか俺か！？

じゃあこれは湊視点の夢か？

……なんか昔の自分を見る夢なんてなんか変な感じだ。

「自転車あるなら2人乗りしようよ」

「面倒だなあオイ。乗れよ」

幼き日の俺は片足でペダルを踏んで、荷台を叩く。

「えへへ。ありがとー」

「う、うるさい。女子にこんな事してたらみんなに笑われるぜ全く小さい頃の謎の概念。女子に優しくするとなんだか色々変な目で見られる。小学生の頃は色々謎のルールがあつたもんだ。」

「どこまで行くんだよ」

「私の家！一緒に遊ぼうよ」

「仕方ないな」

ああ、憎たらしい。昔の俺を殴りたいね。もう少し素直になりやがれ！

俺は自転車をゆっくり漕ぎ出し、大きくUターンして住宅街を走

り出した。2人無言のままずっと漕いでいると、

「ヒロ君、上見て上！」

「ん？」

2人揃って上を見る。そこにはふわりふわりと白い翼を羽ばたかせ、冷たい表情を向ける天使が居た。

「あの人羽が生えてる！」

「すげえー天使だ！ 本物？」

無邪気にも俺達は天使が悪いものとは思えなかった。しかし……

「創造者の生まれ変わり……まだこんな子供じゃないか」

天使は少し不服そうな顔を浮かべて、銃を取り出した。

……俺はこの頃から命を狙われていたのか？ でも何故だ……そんなの記憶のどこにもないぞ。綾那が始めて会った天使じゃないのか？

「ヒロ君いこ？ なんかこの人変だよ……」

「何で？ 天使だぞ？ 悪いわけない」

湊の言う事を無視して、俺は目をキラキラ輝かせながら自転車を降りてしまった。

「すまない少年……」

どこか苦しそうな顔をして天使は俺に銃を向け、引き金に指を掛ける。

「それエアガンだろ？ 俺も同じようなの、」

「ヒロ君！」

大きな銃声が響いた。そして湊の視点は真っ暗になる……。

そう、天使が引き金を引くと同時に、湊が俺を押しつけて庇ったのだ。

湊が1回死んだ。このことか……俺の所為じゃないか……。俺が創設者なんての生まれ変わりなばかりに湊が死んだんじゃないか！ 真っ暗な夢のシーンがまた動き始める。

真っ暗な世界に1人、ぽつんと立つ女性が1人。真っ暗なのにその人だけが見える。その人だけが照らされている……、いやその人

自身が光っているかのようだ。

「ごめんね…… 本当は私達が創設者様を守らないといけないのに……」

女性がこちらを向いて話しかけてくる。

「そこで、軽く罪滅ぼし！ 生き返らせてあげるよ。おまけに私の魔女っ子パワーをそのままプレゼント」

湊が言っていた魔女。この人が湊の幸せを引き換えに生き返らせてくれたのか。

「でも、魔女ってのはつくづく運が悪いもんで…… 全部幸せが逃げていってしまうの。自分の大切な人も全部。男運も悪いし、おまけに金運までそんなによくないの」

魔女は肩をすくめて溜息を吐いた。

「ま、それでも私はダイスケと結ばれたけどね」

ダイスケ？ 俺の親父と同じ名前だが…… たまたまだよな。

「それにそれに、お得な機能も満載！ 人に意識を集中させるとその人が考えている事が分かる！ 箒で飛ぶことが出来る！ 更に魔法も撃ち放題！」

陽気な魔女だ。不運だったのに能力を楽しそうに語る。

「もし君が本当に生きたいなら、生きたい！ って強く思えばいいよ。ただ、本当に不幸な人生になるからね。それでもいいなら、」

皆まで言わずとも、湊の答えはYESだったみたいだ。視界はパツと変わり、天使と俺が映った。

そして真っ先に聞こえたのは俺の心の中の声だった。ただただ混乱して、目の前で湊が死んだ悲しい気持ちと恐怖と様々な気持ちが伝わってくる。

「ヒロ君に……」

「なっ!？」

湊が起き上がると、天使は目を大きく開いて驚いた。

「ヒロ君に手を出すなああっ!」

叫び声と共に、天使を炎が襲う。そしてなにひとつ行動するまもなく一瞬で燃え尽きる……。

湊はへたつと崩れるようにその場に座り込んだ。

そして俺はというと、いつの間にか気絶している。だらしない。湊がこうして俺の命を救ってくれたというのに……いくら小さいからって自分で自分に腹を立ててしまう。

「送らないと……」

小さな体で、ふらつきながらも俺の肩を担いで歩き始めた。

そして訪れたのは俺の家。インターホンを押すと、タンクトップ一枚とジャージ姿の親父がドアを開けた。

「おう。湊ちゃんか。あいつならチャリで　！？」

親父が慌てて家の門を飛び越えて湊の前に立った。

「どうしたんだそんな血まみれで……！　んでこのガキはなんでぐったりしてるんだ？」

「天使が来てヒロ君が撃たれるのを私が庇ったの……ヒロ君は気絶してるだけ」

湊は落ち着いて説明して、親父に俺を渡した。

「……天使を見たのか？」

親父は俺を壁に寝かせ、湊の肩を掴んだ。

ん？　引つかかるぞ。なんで親父が天使を知ってる？　色々訳が

分からなくなってきた。

「殺しちゃったけど……。魔女に助けてもらった」

「もしかして、なんか変なテンションで話しかけてくる奴か？」

コクンと1回頷いた。すると親父は溜息を吐いて髪をくしゃくしゃして、

「取り返しのつかない事になったな……。巻き込んでしまつて本当にすまない……。謝つて済む問題じゃねえけど……。本当にごめん」

親父は10歳にも満たない小さな子に深く深く頭を下げて謝つた。「魔女は幸運を寄せ付けない……。俺の知ってる限り、大事な人が消えたりとか、結構エグいことが起こったりする、」

「でも、ヒロ君は守れたよ」

そう言つと、親父は黙り込んでまた頭を下げた。

「おじさん……ヒロ君つて……」

「もう隠す必要なんてないか。こいつはな、ただの人間じゃねえ。地球とは別の世界を創つた奴の……。何て言つたらいいのか。あー、生まれ変わりでいいか」

ずいぶん歯切れの悪い答方をする。どうやら親父も俺の事を知っているみたいだ。俺だつて最近知つたのに……。なんで親父が？

「地球なら大丈夫だと思つたが……。まあそれでもよく持つたもんか」

「天使は？」

「あいつらは訳あつてこいつを殺そうとしている。多分こいつが死んだときは……。世界の終わりがかもしれない」

俺の体が重大すぎる事に今気付いた。世界が終わる？　どういうことだ？

「湊ちゃん、親代わりである俺が頼むのもあれなんだが……。もしものことがあつたら今日みたいに守つてやつてくれ。今のこいつには何の力もないただの人間なんだ」

「……う、うん！」

湊は2回大きく頷いた。それを見て親父はニコツと笑つて湊の頭を撫でる。

「とりあえず、その血まみれの服じゃ帰れないだろ……。ヒロキのやるから、それで帰るな」

ここから夢は一部一部が流れるように過ぎて行った。

湊の両親は病気で両方亡くなり、何度も俺を殺しに来る天使を迎え撃っていた。それなのに俺はあの時の記憶は無いみたいで、のうのとだらしないう人生を送ってた。

湊が魔女になったのは俺の所為……。

湊の両親が亡くなったのも不幸が原因……それも全て俺がこんな生まれ変わりなばかりに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6229p/>

My Sisters

2011年10月6日02時33分発行